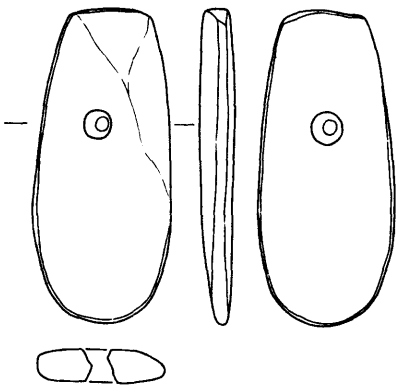
三重県埋蔵文化財調査報告　123—2

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅱ

上ノ垣外遺跡



1996・3

三重県埋蔵文化財センター

遺跡遠景（南から）

第２次調査（中地区）全景(東から)

ＳＸ３（東から）

大珠

序

櫛田川が中流から下流域へと、その景観を変えようとする多気町一帯には、古くは旧石器時代から、営々とした人間の営みがありました。それらは、土地に埋もれた遺跡として今に残り、住居の跡や彼らが使った土器などの多数の遺物が、遠い昔のひとびとの暮らしぶりを思いおこさせてくれます。

いうまでもなく、これらの遺跡・遺物（埋蔵文化財）は、地域固有の歴史遺産として私たち祖先の生活の一端を知る唯一の手掛かりとなるもので、一度破壊してしまうと二度と復元できなくなってしまうかけがえのないものです。

三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と道路建設などの各種開発との調和をはかるべく努力しておりますが、工事などによってどうしても保存ができないものについては、当埋蔵文化財センターで発掘調査を行い、記録を保存することにしております。

ここに報告いたします上ノ垣外遺跡は、国道42号松阪・多気バイパスの建設に伴って、平成５・６年度に発掘調査を実施した遺跡で、松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書の第２分冊にあたります。

詳しくは報告書本文にゆずりますが、古くは縄文時代の土器や石器をはじめとして、弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町と、ほとんど絶え間なく人々が生活を営んだ場であったことがわかりました。この発掘調査の成果が、歴史研究のみならず地域文化の理解と向上の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、事業の推進にあたっては建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所、社団法人中部建設協会、松阪市教育委員会、多気町教育委員会をはじめとする関係機関各位や地元の方々などから、ひとかたならぬご理解とご協力をいただきましたことに対しまして厚くお礼申し上げます。

平成８年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　川　村　政　敬

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成６・７年度に整理・報告書作成業務を実施した、上ノ垣外遺跡の発掘調査報告書である。

なお、発掘調査時点では巣護遺跡としていた一部分についても、遺構のつながりから上ノ垣外遺跡に含めて扱った。

2．現地発掘調査および整理・報告書作成にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．本書に掲載した各遺跡の概要については、すでに当センター発行の『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅳ・Ⅴおよび『国道42号バイパス　松阪・多気　発掘調査だより』№９・11で紹介しているが、本書の記述をもって最終報告とする。

4．巻頭図版および写真図版に使用した航空写真の一部は、建設省紀勢国道工事事務所より提供を受けたものである。

5．本書に使用した地図は、建設省紀勢国道工事事務所作成の松阪・多気バイパス平面図（１：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（１：25,000)、多気町作成の都市計画図（１：2,500）を使用した。

6．現地調査は第１次調査と、巣護遺跡として調査した部分を西村修久が、第２次調査を東良樹と下平康弘が担当した。

7．本書執筆の分担については、目次に示したほか文末にも記した。編集・校正を田村が行い、伊藤克幸が全体を校閲した。本書に掲載した遺構写真は東、西村、下平が、遺物写真は田村、西村が撮影した。

8．本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターが保管している。

9．発掘調査および報告書作成にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する。なお、所属と敬称は省略させていただいた。

赤塚次郎　石井　寛　泉　択良　磯部　克　一瀬和夫　伊藤正人　岩瀬彰利　岩野見司
大下　明　岡田　登　奥　義次　加納　実　河瀬信幸　久保勝正　菅谷通保　秋田かな子
鈴木徳男　千葉　豊　富井　真　外山秀一　成瀬正和　西田泰民　野口哲也　服部信博
藤澤良祐　家根祥多　矢野健一

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

凡　　例

1．調査区の位置は、国土座標第Ⅵ系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。
　なお、真北は座標北のＮ０°18′44″Ｗ、磁北は座標北のＮ６°48′44″Ｗである。

2．発掘調査および整理作業は、『埋蔵文化財の調査・整理・保管に関する基本マニュアル』（三重県埋蔵文化財センター　1993）に基づき実施した。本報告書で使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。

ＳＨ　竪穴住居	ＳＢ　掘立柱建物	ＳＡ　柵	ＳＸ　墓
ＳＺ　性格不明遺構	ＳＤ　溝	ＳＥ　井戸	ＳＫ　土坑
Pit　ピット			

3．本報告書に掲載した実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。当該箇所のキャプションに記した。

1）地形図　1:50,000、1:25,000
　遺跡地形図　1:5,000
　調査区位置図　1:2,000
2）遺構実測図
　遺構平面図　1:200
　遺構実測図　1:20、1:50、1:100
3）遺物実測図
　土器　原則として1:4　ただし拓影は1:3
　石器　原則として2:3

4．本報告書では、土層および遺物の色調を、小山・竹原編『新版標準土色帖』（９版1989）を使用した。

5．本報告書に掲載した遺物写真の縮尺は概ね１：３もしくは１：２である。

6．本報告書では、用語の漢字表記を次のように統一した。
　どこう……その性格が墓と認められるものについては「土」「墓」とし、それ以外のものは「土坑」とした。
　わん……「碗」「埦」「椀」があるが、「椀」を用いた。
　つき……「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。
　なべ……「堝」「鍋」があるが、「鍋」を用いた。

7．山茶椀の時期については、瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏の直接の御教示や氏の論考（「穴田南窯址群発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』瀬戸市歴史民俗資料館 1983、「山茶椀と中世集落」『尾呂』瀬戸市教育委員会1990、「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター1994等）を参考にし、氏の編年観の何型式の時期にあてはまるかという意味で、「藤澤編年○型式」という表記を用いた。

目　　次

Ⅰ．前　　言
　1．調査の経過……（田村陽一）……1

Ⅱ．上ノ垣外遺跡
　1．位置と環境……（　〃　）……6
　2．層序……（　〃　）……11
　3．遺構と遺物
　　(1) 遺構の分布概要……（　〃　）……11
　　(2) 縄文時代の遺構と遺物……（田村陽一・西村修久）……11
　　(3) 弥生～古墳時代の遺構と遺物……（　〃　）……18
　　(4) 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物……（　〃　）……24
　　(5) 平安～鎌倉時代の遺構と遺物……（　〃　）……29
　　(6) 鎌倉末期～室町時代の遺構と遺物……（　〃　）……51
　　(7) ピット出土の遺物……（田村陽一）……54
　　(8) 遺物包含層出土の遺物……（　〃　）……56
　4．自然科学分析……（パリノ・サーベイ）……70

Ⅲ．結　　語……（田村陽一・西村修久）……74

遺構番号対照表……77
写真図版……78
遺物観察表……137
報告書抄録……165

◆　表紙カット　　大珠（上ノ垣外遺跡出土）

図 版 目 次

PL１．昭和23年極東米軍撮影空中写真 ……78
PL２．遺跡遠景（西上空から）
調査前全景（北から）……79
PL３．調査後全景（北上空から）
調査後全景（南上空から）……80
PL４．第１次調査（北地区、西上空から）
第１次調査（北地区、北から）……81
PL５．第２次調査（中地区、西上空から）
第２次調査（中地区、北から）……82
PL６．巣護遺跡区（南地区、西上空から）
巣護遺跡区（南地区）調査風景 ……83
PL７．ＳＫ１（北から）
ＳＫ１縄文土器出土状況（東から）……84
PL８．ＳＸ２検出状況（南から）
ＳＸ２埋設状況（東から）……85
PL９．ＳＸ３（東から）
ＳＸ３（北から）……86
PL10．ＳＸ３南周溝遺物出土状況（東から）
ＳＸ３南周溝遺物出土状況（西から）……87
PL11．ＳＸ３北周溝遺物出土状況（東から）
ＳＸ３西周溝・ＳＤ９断面（南から）……88
PL12．ＳＸ４（東から）
第２次調査（中地区）調査風景 ……89
PL13．ＳＨ10（南から）
ＳＨ11・12（北から）……90
PL14．ＳＸ13（南西から）
Pit.66　遺物出土状況 ……91
PL15．ＳＺ16（南から）
ＳＺ17（北西から）……92
PL16．Pit.67　検出状況
Pit.67　遺物出土状況 ……93
PL17．ＳＫ48遺物出土状況（北から）
ＳＤ８発掘区東壁断面（南西から）……94
PL18．ＳＥ42上部遺物出土状況（北から）
ＳＥ42下部遺物出土状況（南から）……95
PL19．ＳＥ42下部遺物出土状況（南から）
ＳＥ44曲物出土状況（南から）……96
PL20．Pit.68（南から）
Pit.71（西から）……97
PL21．ＳＢ20・21・22ほか（南から）
ＳＢ23・24・25・26ほか（東から）……98
PL22．ＳＢ33・34・35・36ほか（南から）
ＳＢ23・24・ＳＡ38ほか（南から）……99
PL23．ＳＢ23・24・ＳＡ38ほか（東から）
ＳＢ20・21ほか（東から）……100
PL24．第１次調査（北地区）主要遺構（西から）
ＳＸ53（西から）……101
PL25．ＳＺ54（西から）
ＳＺ54（北から）……102
PL26．ＳＺ55（南から）
ＳＤ56（西から）……103
PL27．ＳＺ69（西から）
第１次調査（北地区）調査風景 ……104
PL28．縄文土器（479)出土状況
縄文土器（489)出土状況 ……105
PL29．出土遺物 ……106
PL30．出土遺物 ……107
PL31．出土遺物 ……108
PL32．出土遺物 ……109
PL33．出土遺物 ……110
PL34．出土遺物 ……111
PL35．出土遺物 ……112
PL36．出土遺物 ……113
PL37．出土遺物 ……114
PL38．出土遺物 ……115
PL39．出土遺物 ……116
PL40．出土遺物 ……117
PL41．出土遺物 ……118
PL42．出土遺物 ……119
PL43．出土遺物 ……120
PL44．出土遺物 ……121
PL45．出土遺物 ……122
PL46．出土遺物 ……123
PL47．出土遺物 ……124
PL48．出土遺物 ……125
PL49．出土遺物 ……126
PL50．出土遺物 ……127
PL51．出土遺物 ……128
PL52．出土遺物 ……129
PL53．出土遺物 ……130
PL54．出土遺物 ……131
PL55．出土遺物 ……132
PL56．出土遺物 ……133
PL57．出土遺物 ……134
PL58．出土遺物 ……135
PL59．出土遺物 ……136

挿図目次

第１図　路線・工区・遺跡位置図（1:50,000）　…２
第２図　遺跡地形図（1:5,000）……６
第３図　明治期の遺跡周辺地形図（1:20,000）　…８
第４図　遺跡位置図（1:25,000）　……９
第５図　調査区位置図（1:2,000）……10
第６図　地区割図（1:800）……10
第７図　発掘区東壁土層断面図(1:40)……12
第８図　遺構平面図（1:400）……13・14
第９図　SK１実測図（1:50）……15
第10図　SK１出土遺物実測図（1:4)拓影(1:3)　…16
第11図　SX２実測図（1:10),遺物実測図(1:4)　…17
第12図　SK50実測図（1:50),遺物拓影(1:3)　……17
第13図　SX３実測図(1:200),計測図(1:400)　……19
第14図　SX３周溝断面図(1:40)……20
第15図　SX３周溝遺物出土状況図(1:40)……21
第16図　SX３出土遺物実測図(1:4)　……22
第17図　SX４実測図(1:100),遺物拓影(1:3)　……23
第18図　Pit.64, Pit.65出土遺物実測図(1:4)　……24
第19図　SH10実測図(1:50), 出土遺物実測図(1:4)　…25
第20図　SH11・12実測図(1:50), 出土遺物実測図(1:4)　…26
第21図　SX13実測図(1:50), 出土遺物実測図(1:4)　…27
第22図　SD７・８出土遺物実測図(1:4)　……28
第23図　Pit.66, Pit.67出土遺物実測図(1:4)　……29
第24図　SD14出土遺物実測図(1:4)　……30
第25図　SD14出土縄文土器拓影(1:3)　……31
第26図　SD15出土遺物実測図(1:4) 拓影(1:3)　…32
第27図　SZ16実測図(1:50)……32
第28図　SZ17実測図(1:20), 出土遺物実測図・拓影(1:4)　…33
第29図　SB18・19・20・21・22実測図(1:100)　…35
第30図　SB23・24・25・26実測図(1:100)　……36
第31図　SB27・28・29・30実測図(1:100)　……38
第32図　SB33・34・35・36実測図(1:100)　……39
第33図　SB31・32・37実測図(1:100)　……40
第34図　掘立柱建物出土遺物実測図(1:4)　……41
第35図　SD40出土遺物実測図(1:4)　……41
第36図　Pit.68実測図(1:20), 出土遺物実測図(1:4)　…42
第37図　SE42遺物出土状況実測図(1:20)……43
第38図　SE42出土遺物実測図(1:4ほか)　……44
第39図　SE46実測図(1:40), 出土遺物実測図(1:4)　…46
第40図　SD41,SE43,SE47,SK49 出土遺物実測図(1:4)　……48
第41図　SK48実測図(1:50), 出土遺物実測図(1:4)　…50
第42図　SX53実測図(1:20), 出土遺物実測図(1:4)　…51
第43図　SZ54実測図(1:50), 出土遺物実測図(1:4)　…53
第44図　SZ55出土遺物実測図(1:4)　……54
第45図　SD56・57・58出土遺物実測図(1:4)　……55
第46図　ピット出土遺物実測図(1:4)　……57
第47図　包含層出土縄文土器拓影(1:3)　……58
第48図　包含層出土縄文土器拓影(1:3)　……59
第49図　包含層出土縄文土器拓影(1:3)　……60
第50図　包含層出土縄文土器拓影(1:3)　……61
第51図　包含層出土縄文土器拓影(1:3)　……62
第52図　包含層出土縄文土器拓影(1:3)　……63
第53図　包含層出土縄文土器実測図(1:4)　……63
第54図　包含層出土縄文土器拓影(1:3)　……64
第55図　包含層出土縄文土器拓影(1:3)　……65
第56図　包含層出土縄文土器実測図,拓影(1:3)　…65
第57図　包含層出土遺物実測図(1:4)　……66
第58図　大珠実測図(1:1)　……67
第59図　打製石斧実測図(1:4)　……67
第60図　石器実測図(2:3)　……68
第61図　石器実測図(1:2)　……69

表目次

第１表　遺跡概況……３
第２表　調査経過および予定……４
第３表　発掘調査遺跡一覧……５
第４表　掘立柱建物・柵列一覧……42
第５表　石器一覧……67
第６表　SX3,SE42土壌分析試料……73
第７表　SX3,SE42リン・カルシウム分析結果……73
第８表　SZ54リン・カルシウム分析結果……73
第９表　遺構番号対照表……77
第10表　遺物観察表(1)　……137
第11表　遺物観察表(2)　……138
第12表　遺物観察表(3)　……139
第13表　遺物観察表(4)　……140
第14表　遺物観察表(5)　……141
第15表　遺物観察表(6)　……142
第16表　遺物観察表(7)　……143
第17表　遺物観察表(8)　……144
第18表　遺物観察表(9)　……145
第19表　遺物観察表(10)　……146
第20表　遺物観察表(11)　……147
第21表　遺物観察表(12)　……148
第22表　遺物観察表(13)　……149
第23表　遺物観察表(14)　……150
第24表　遺物観察表(15)　……151
第25表　遺物観察表(16)　……152
第26表　遺物観察表(17)　……153
第27表　遺物観察表(18)　……154
第28表　遺物観察表(19)　……155
第29表　遺物観察表(20)　……156
第30表　遺物観察表(21)　……157
第31表　遺物観察表(22)　……158
第32表　遺物観察表(23)　……159
第33表　遺物観察表(24)　……160
第34表　遺物観察表(25)　……161
第35表　遺物観察表(26)　……162
第36表　遺物観察表(27)　……163
第37表　遺物観察表(28)　……164

Ⅰ．前　　言

1．調査の経過

当事業の全体についての調査にいたる経過等については、第1分冊に詳述しているので省略する。

上ノ垣外遺跡の現地発掘調査については、平成2年度に一部を除き試掘調査を実施し、本調査面積(5,000㎡）を確定した。平成4年度にも残った一部分について試掘調査を行い、平成5年度に1,950㎡を、同6年度に3,050㎡の本調査を行った。

また平成7年度には県道とのループ部分の試掘調査を行った。

第1次調査は、平成5（1993）年8月23日～平成6年（1994）年1月27日まで行った。調査面積は1,950㎡であったが、一部下層の縄文時代遺物包含層の確認のために、試掘調査をおこなったが、包含層および遺構・遺物は確認できなかった。この調査で検出した遺構は中世後期を主体とするものであったが、住居跡は確認されず、遺跡の縁辺部にあたることが判明した。また、上ノ垣外遺跡と平行して調査が行われていた巣護遺跡では、上ノ垣外遺跡に南接し、字上ノ垣外に属するところから古墳時代初頭の前方後方型周溝墓が検出された。

当初、この地は地形的にみて上ノ垣外遺跡とは明確に区別されたため、巣護遺跡として調査を行ってきたが、検出される遺構は上ノ垣外遺跡の延長の色彩が濃くなったため、字上ノ垣外に属する部分については、上ノ垣外遺跡に組み込んで報告をすることにした。

空中写真測量を平成5年12月3日に実施し、翌日の12月4日に現地説明会を実施し、約140名の熱心な一般市民の参加を得た。

平成6年度は、第2次調査として第1次調査区に続く南半分の3,050㎡を調査した。平成6（1994）年4月18日から調査に入った。

第2次調査で検出した主な遺構は、奈良時代の竪穴住居跡をはじめ、平安～鎌倉時代の掘立柱建物などである。このほか、縄文時代後期の土坑や埋設土器、方形周溝墓などがある。また、遺物では縄文後期の土器の量が多くみられた。

現地説明会は7月31日に、北に隣説して調査していた新徳寺遺跡とともに実施し、摂氏40数度という酷暑の中、約120名の参加者を得て盛会裏に終了した。また、空中写真測量を8月11日に実施し、その後下層の縄文時代遺物包含層の有無などの確認調査を実施し、酷暑にあえいだ夏がようやく去ろうとする8月31日に終了することができた。

第2次調査と平行して第1次調査の遺物整理を行い、7年度に第2次調査の遺物整理とともに、報告書作成を実施した。平成6年度までの調査および整理の体制等については、既刊の第1分冊に示したので省略し、ここでは平成7年度の体制を以下に記しておく。

【平成7年度】

所長	川村政敬
次長	田中　守
次長	山澤義貴
主幹兼	
調査第二課長	伊藤克幸
主査兼第二係長	田村陽一
主事	下平康弘
主事	松本美先
主事	小林　秀
主事	西村修久（多気町より派遣）
主事	小浜　学（松阪市より派遣）
調査補助員	瀬野弥知世（皇學館大学生）
	塚田幸子（皇學館大学生）
	松井理栄子（橘女子大学生）
総務課長	中西勝之
総務課主査	中川カツミ
総務課主事	伊藤直樹、橋川　功

第１図　路線・工区・遺跡位置図（１：50,000）

番号	遺跡名	所在地	確認面積㎡	現状	種類	時代	概要	工区
1	朋気窯跡群	多気町相可字明気	2,000	山林	散布地 窯跡	古墳	平成４～５年度調査。須恵器窯５基、竪穴住居等を確認。	9工区
2	朋気古墳群	多気町相可字明気	900	山林	古墳	古墳	平成３年度多気町教委試掘で７号墳確認。協議の結果、多気町教委が調査を実施。	
3	甘糟遺跡	多気町荒蒔字甘糟	2,650	畑	散布地 水田	中世	平成３年度試掘調査。後世の開墾等で削平され本調査除外地となる。	
4	巣護遺跡	多気町荒蒔字巣護	7,500	水田	散布地 条理	古墳～中世	平成５年度調査。旧称【多気郡条里遺構】。明確な条里遺構は確認できず。	
5	上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔字上ノ垣外	6,000	畑 水田	散布地 集落跡	縄文 古墳～中世	平成５～６年度調査。縄文～中世の遺構・遺物を検出	
6	新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	2,400	畑 水田	散布地	縄文・中世	平成６年度第１次調査。縄文時代後期前葉の竪穴住居や土坑を多数確認。同時代の遺物多量に出土。	
7	鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	11,200	水田 宅地	集落跡	縄文 古墳～中世	平成２～６年度調査。縄文時代早期、弥生、古墳、奈良～平安時代の集落跡、墓跡等を確認。	
8	朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	5,200	水田	集落跡	縄文 古墳～中世	平成３年度調査。奈良～平安時代の集落跡確認。	
9	朱中古墳	松阪市射和町字朱中	400	山林	古墳	古墳	平成２年度試掘調査。後世の開墾等により墳形等不明。須恵器樽形瓶、壺片、円筒埴輪片が出土。	
10	中野前遺跡	松阪市上川町字中野前八王子	4,200	水田	散布地	中世	平成６年度試掘調査。遺構はなく、遺物は客土からのため、本調査に至らず。旧称石津遺跡。	11工区
11	廿チ遺跡	松阪市上川町字廿チほか	3,700	水田	散布地	中世	平成７年度調査。ピット・溝などを検出。ほ場整備事業時にかなり削平か。旧称東牛込遺跡。	
12	堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町・平田・斎宮	9,200	水田	散布地	弥生～中世	平成６・７年度調査。弥生～室町時代の遺構を多数確認。銅鐸形土製品などの遺物が出土。	12工区
13	御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	8,100	水田	散布地	奈良～中世	平成４年度試掘調査。遺構・遺物ともに確認できず、本調査除外地となる。	
14	山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	4,100	水田	散布地	中世	平成７年度調査。遺構密度が薄く、遺跡の縁辺部か。	
15	大日山古墳群	多気町荒蒔字大日山	600	山林	古墳	古墳	平成５年度工事中発見。直径約20m、高さ約２mの円墳。主体部なし。他に丘陵斜面に主体部２基。	9工区

第１表　遺跡概況

以上のほか室内整理員として、各種調査記録類の整理や出土遺物の整理、実測などで以下の方々の補助を得た。

谷久保美知代　白石みよ子　山分孝子
中里輝子　中村敬子　広瀬則代
山路艶子　廣田洋子　服部美奈子
脇葉輝美　北川ゆき

現地説明会風景

工区	No.	遺跡名	調査対象面積(㎡) 確認面積	5.4.1協定	7.3.31現在	調査面積(㎡) 2	3	4	5	6	7	8	9	10	備考
9工区	1	明気窯跡群	2,000	2,900	2,900			範 1,500	1,400	報Ⅰ					
	2	明気古墳群	900	0	0										平成4年度多気町教委調査
	3	甘糟遺跡	2,650	0	0		範			報Ⅰ					試掘調査のみ
	4	巣護遺跡	7,500	2,300	2,300		範		2,300	報Ⅰ					旧称多気郡条里遺構
	5	上ノ垣外遺跡	6,000	5,000	5,000	範		範	1,950 ※112	3,050 ※64	範 報Ⅱ				
	6	新徳寺遺跡	2,400	(2,400)	1,600				範	1,100 ※333	範	500 報Ⅲ			
	7	鴻ノ木遺跡	11,200	13,800	12,560	範1,500 ※ 850	460	3,500 ※2,321	5,800 ※2,200	1,300			報Ⅳ		遺構・遺物多数のため整理に3カ年
	8	朱中遺跡	5,200	5,200	5,200	範	4,800 ※ 900			400	報Ⅴ				
	9	朱中古墳	400	0	0	範					報Ⅴ				試掘調査のみ
	15	大日山2号墳	600	—	600					600 報Ⅰ					平成5年度工事中新発見
11工区	10	中野前遺跡	4,200	4,200	0					範			報Ⅵ		試掘調査のみ 旧称石津遺跡
	11	廿チ遺跡	3,700	3,700	1,600					範	1,600		報Ⅵ		旧称東牛込遺跡
12工区	12	堀町遺跡	9,200	9,200	9,700				範	3,000	3,100	3,600	報Ⅶ		
	13	御堂山遺跡	8,100	0	0			範					報Ⅵ		試掘調査のみ
	14	山ノ花遺跡	4,100	4,100	1,300					範	1,300		報Ⅵ		
調査面積合計		範囲確認調査				622	1,052	850	452	496	96	—			
		本調査				1,500 ※ 850	5,260 ※ 900	5,000 ※2,321	11,450 ※2,312	9,450 ※ 397	6,000 —	4,100			
		合計	68,150	52,800	42,760	2,122 ※ 850	6,312 ※ 900	5,850 ※2,321	11,902 ※2,312	9,946 ※ 397	6,096 —	4,100			※は下層㎡数
調査担当職員数		現地調査 整理調査 合計				2 0 2	2 0 2	2 0 2	4 1 5	3 2 5	2 3 5	2 3 5			

第2表　調査経過および予定（平成8年1月現在、範…範囲確認調査　報…報告書作成　※は下層調査面積）

番号		遺跡名	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	担当者
1	9工区	明気窯跡群	多気町相可字明気	平成4（1992）年8月28日～9月30日〈試掘〉 〃　10月18日～平成5（1993）年2月28日 平成5（1993）年4月19日～10月29日 ＊平成4年6月17日～6月25日予備調査（磁気探査）	530 1,500 1,400 計 3,430	宇河雅之・田村陽一 宇河雅之・田村陽一 宇河雅之・西村修久
2		明気古墳群	多気町相可字明気			多気町教育委員会 西村修久・中里　守
3		甘精遺跡	多気町荒蒔字甘精	平成3（1991）年8月26日～10月11日〈試掘〉	144 計 144	田中喜久雄・野原宏司
4		巣護遺跡	多気町荒蒔字巣護	平成3（1991）年8月26日～10月11日〈試掘〉 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年1月27日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【多気郡条里遺構】	908 2,300 計 3,208	田中喜久雄・野原宏司 西村修久・東　良樹
5		上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔字上ノ垣外ほか	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成5（1993）年1月28日～2月1日〈試掘〉 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年1月27日 平成6（1994）年4月18日～8月31日	68 96 1,950　＊112 3,050　＊64 計 5,164　＊176	河瀬信幸 宇河雅之・田村陽一 西村修久 東　良樹・下平康弘
6		新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	平成5（1993）年7月9日～7月12日〈試掘〉 平成6（1994）年5月23日～8月24日 ＊平成8年度第2次調査予定	96 1,100　＊333 計 1,196　＊333	宇河雅之 小浜　学・西村修久
7		鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成2（1990）年10月11日～平成3（1991）年3月19日 平成3（1991）年4月23日～5月31日 平成4（1992）年5月11日～8月31日 平成5（1993）年4月19日～8月29日 平成5（1993）年8月23日～平成6（1994）年3月31日 平成6（1994）年8月23日～平成7（1995）年1月25日	272 1,500　＊850 460 3,500　＊2,321 3,600　＊400 2,200　＊1,800 1,300 計12,832　＊5,371	河瀬信幸 河瀬信幸・小林　秀 田中喜久雄・野原宏司 宇河雅之・田村陽一 東　良樹・小浜　学 小浜　学・田村陽一 下平康弘・田村陽一
8		朱中遺跡	松阪市射和町字朱	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成3（1991）年6月1日～8月24日 平成3（1991）年10月14日～平成4（1992）年3月13日 平成6（1994）年9月5日～9月22日	184 2,300 2,500　＊900 400 計 5,384　＊900	河瀬信幸 田中喜久雄・野原宏司 田中喜久雄・野原宏司 東　良樹
9		朱中古墳	松阪市射和町字朱中	平成2（1990）年7月23日～9月12日〈試掘〉 平成5（1993）年6月25日～8月20日	98 (1,000) 計(1,098)	河瀬信幸 西村修久
10	11工区	中野前遺跡	松阪市上川町字中野前・八王子	平成6（1994）年9月26日～10月5日〈試掘〉 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【石津遺跡】	176	東　良樹
11		廿チ遺跡	松阪市上川町字廿チほか	平成6（1994）年10月6日～10月14日〈試掘〉 平成7（1995）年6月7日～7月19日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【東牛込遺跡】	144 1,600 計 1,744	東　良樹 下平康弘・小林　秀
12	12工区	掘町遺跡	松阪市朝田町字堀町・斎宮ほか	平成5（1993）年7月19日～7月23日〈試掘〉 平成6（1994）年8月26日～平成7（1995）年2月20日 平成7（1995）年8月7日～平成8（1996）年1月24日 平成8年度第3次調査予定	356 3,000 3,100 計 6,456	宇河雅之 小浜　学・東　良樹 小浜　学・松本美先
13		御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	平成5（1993）年1月26日～1月27日〈試掘〉	224	宇河雅之
14		山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	平成6（1994）年10月17日～10月20日〈試掘〉 平成7（1995）年5月10日～5月26日	176 1,300 計 1,476	東　良樹 松本美先・西村修久
15	9	大日山古墳群	多気町荒蒔字大日山	平成6（1994）年4月7日～6月10日	600	西村修久・小浜学

第3表　発掘調査遺跡一覧　（調査面積欄の＊印は下層調査面積）

Ⅱ．上ノ垣外遺跡

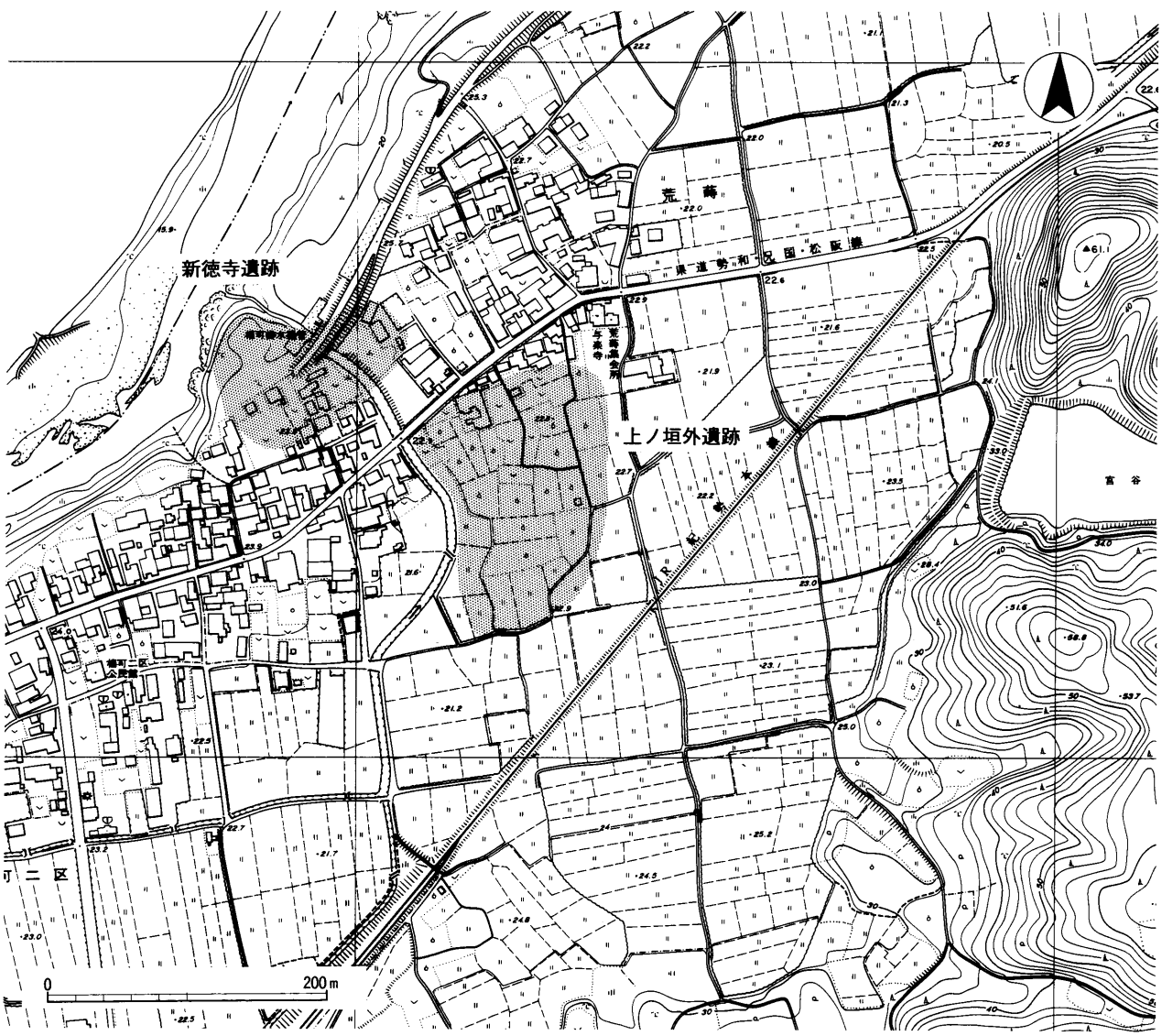
1．位置と環境

三重県松阪市は南北に細長い伊勢平野の中南部に位置し、人口約11万人を擁する近世城下町を母体とする都市である。近年、中南勢地方の中核都市として目ざましい発展を遂げつつあり、高速道路の開通や工業団地、住宅団地の造成など、各種の開発が盛んに行われている。

古くは都と伊勢神宮を結ぶ伊勢街道と、熊野街道の交差する交通の要所として重要な位置を占め、現在でも三重県南部の東紀州地域や南勢地域への幹線道路の交点に位置することに変わりはない。

松阪市の南を限る櫛田川は、台高山脈の高見山（1,248m）付近に源を発し、流域に2ないし3段の河岸段丘を発達させ、幾多の蛇行を繰り返しながら東流し伊勢湾に注いでいる。

一方、多気郡多気町は櫛田川を挟んで松阪市の南に位置している。櫛田川が最後の大きな蛇行を終え



第2図　遺跡地形図（1：5,000）

た多気町牧付近から下流部の三疋田・四疋田地区には、比較的まとまった低位段丘面が展開しており、条里型地割りも広く残っている。

相可の集落を過ぎると、川幅も広くなり下流の様相を呈し始める。上ノ垣外遺跡（１）は相可の集落の東はずれに位置し、南側から櫛田川に注ぎ込む支流の相可川が形成した自然堤防上に立地する遺跡である。標高は23m前後で、後背低地の水田面との比高はおよそ60cmほどである。

位置と歴史的環境については、第１分冊において詳しく記述しているのでそれを参照されたい。ここでは、簡単に周辺の遺跡についてふれておくにとどめる。

縄文時代の遺跡としては、最近発掘調査で確認された草創期の遺跡として、高皿遺跡①（２）がある。

ほ場整備に伴う排水路だけの調査であったため、詳しいことはわからないが、有茎尖頭器や木葉形尖頭器、掻器、削器、神子柴系石斧などが多量に出土した。これらに伴って、調整剥片が多出していることから、石器製作跡と考えられる遺跡である。ただし、これらの石器群に伴う土器については、ごく微量の爪形文土器（類例のほとんどないもの）、表裏縄文土器が認められる程度で、他は山形の押型文土器や撚糸文土器が少量と、中・後期のものである。西方約１kmの中位段丘端に立地する牟山遺跡②（３）との関連が考えられる。

早期になると、対岸に大川式の古段階の竪穴住居や煙道付き炉穴などが検出された鴻ノ木遺跡③（４）をはじめとして、鐘突遺跡④（５）、上寺遺跡⑤（６）や射原垣内遺跡⑥（７）、右岸側でも牟山遺跡（３）、坂倉遺跡⑦（８）など、押型文土器を出土する遺跡が密集している。各遺跡間の土器型式の消長などから、半径約５kmほどの領域内での集落の変遷が追える好地域である。

当遺跡に隣接する新徳寺遺跡⑧（９）では、中期の土器が少々と後期前葉の遺構・遺物が多数出土している。この時期の遺跡としては、約５km下流の右岸に金剛坂遺跡⑨、対岸やや下流に射原垣内遺跡（７）、東隣の佐奈川水系の田中廻り遺跡⑩（10）などがあるほか、後・晩期の遺跡として森荘川裏遺跡⑪がある。

弥生時代の遺跡としては、対岸に前期・中期の上寺遺跡（６）、中期の鴻ノ木遺跡（４）、約５km上流右岸に中期前半の遺構・遺物が発掘された花ノ木遺跡⑫があるほか、後期の遺跡として相可高校グランド遺跡⑬（11）が知られている。

古墳時代ではまとまった集落は今のところ知られていないが、鴻ノ木遺跡（４）で、前期の溝や中期の竪穴住居が２棟検出されているほか、当遺跡の南に隣接する巣護遺跡⑭（12）でも、若干の遺物が出土している。

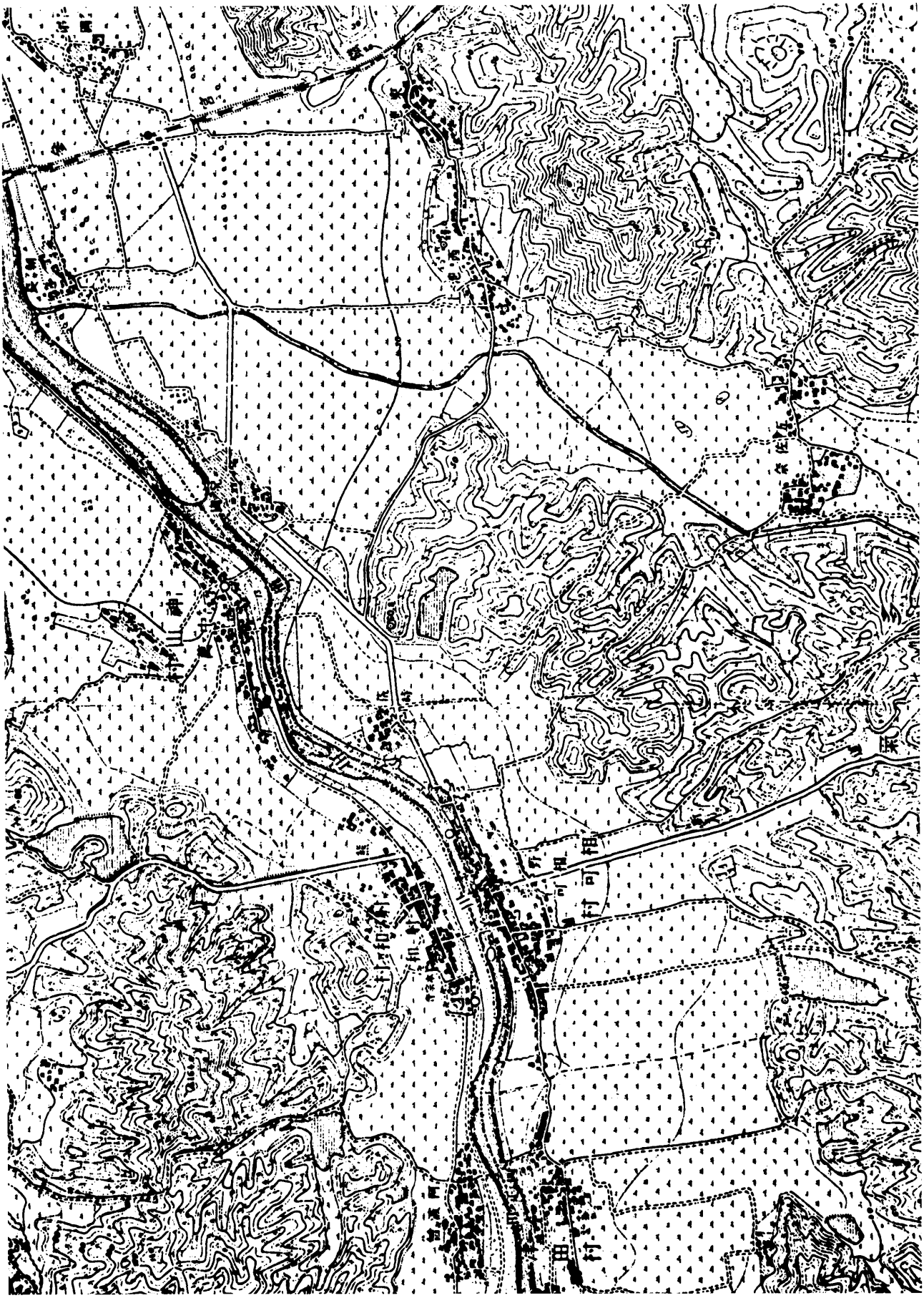
一方、古墳は周辺の低丘陵に多くの古墳群が分布しているが、そのほとんどは六世紀代以降の後期のもので、前期古墳は確認されていない。

多気町側の主な古墳群をあげると、当遺跡の南方丘陵に立岡山古墳群（13）、大日山古墳群⑮（14）、明気古墳群（15）、黒田山古墳群（16）などがある。約４km北東には河田古墳群⑯（17）もある。

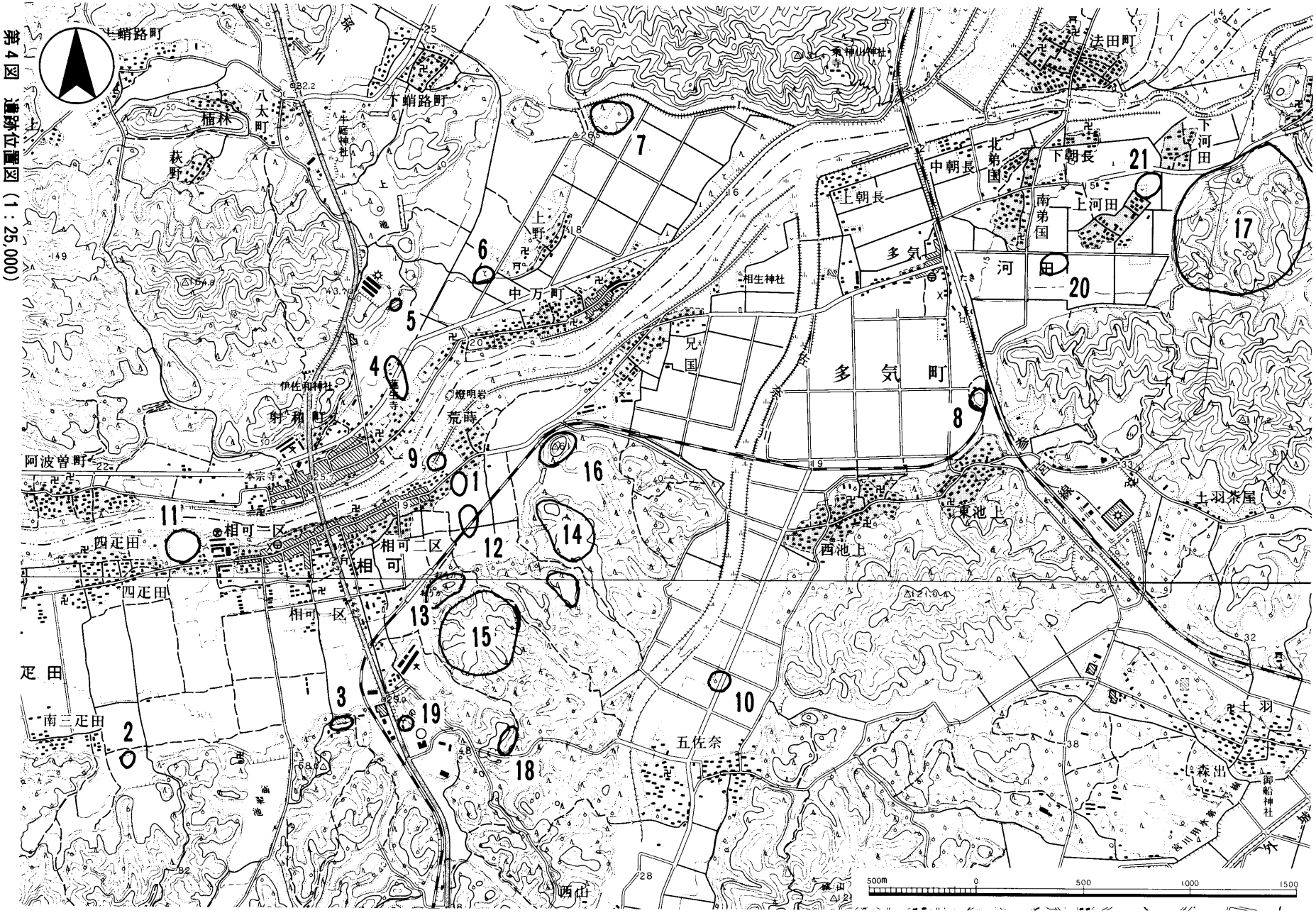
またそれらの古墳群や当遺跡などに須恵器を焼成し、供給したことが知られる明気窯跡群⑰（18）や、同時期の中尾窯跡⑱（19）がある。

歴史時代では、当遺跡周辺は平安時代に東寺領の荘園となったことが特筆されよう。カウジデン遺跡⑲（20）はその時代の代表的遺跡で、発掘調査によって四面庇のつく大型の掘立柱建物が検出され、『中万』と書かれた墨書土器が多数出土している。その他、東裏遺跡⑳（21）も注目される。９間×５間で庇のつく掘立柱建物、『中臣』銘墨書土器、緑釉陶器や硯などが発見されている。また、当遺跡でも今回の調査地の隣接地で、ほ場整備事業に伴って発掘調査が行われおり、やはり平安時代の遺構・遺物が出土しているし、巣護遺跡（12）でも石帯や緑釉陶器といった特殊遺物が出土している。これらの事実は、前述の東寺領川合・大国荘の施設などに関連する遺跡の可能性を想起させられるのである。

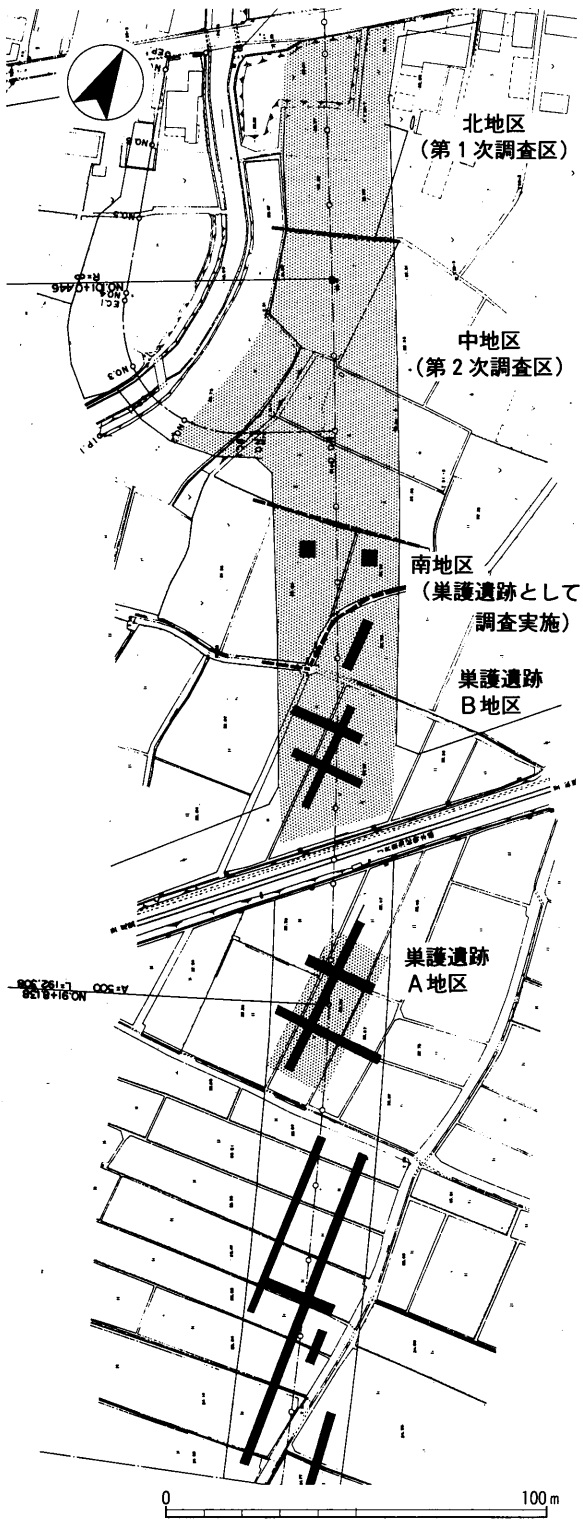
遺跡の北を東西に走るのは、大和南部と伊勢とを結んだ旧伊勢本街道。宿場町相可の集落でこの街道に直交し、南北に走るのが熊野街道。相可の対向集落として発展し、伊勢商人を生むのが射和の集落。中世以降も、この地は古代から育んできた歴史的特性を持続させ続けるのである。　　（田　村）



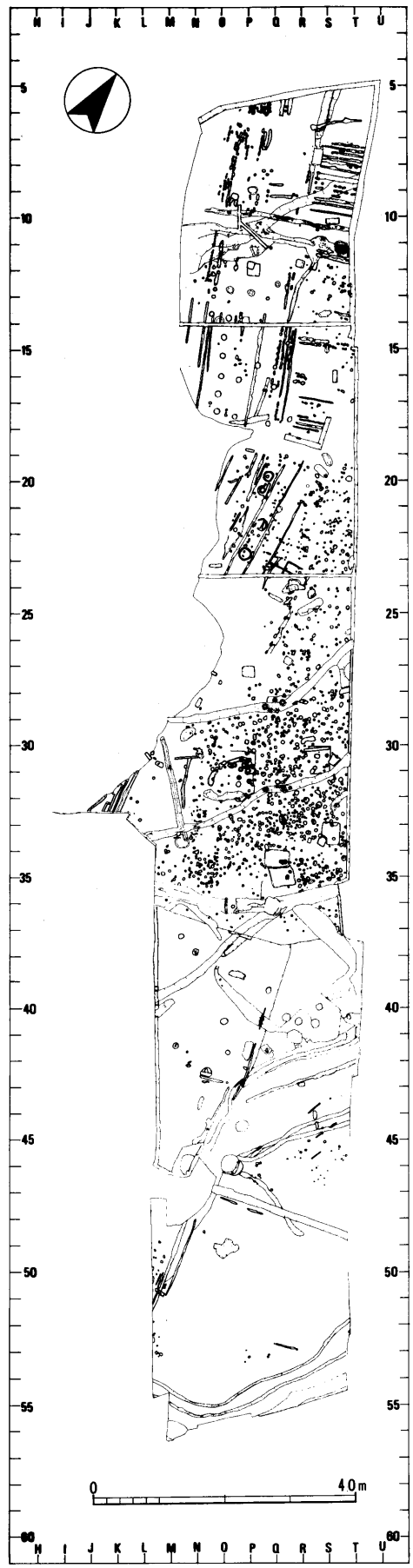
第３図　明治期の遺跡周辺地形図（１：20,000）



第4図　遺跡位置図（1：25,000）



第５図　調査区位置図（1：2,000）



第６図　地区割図（1：800）

2．層　　序

本遺跡は、櫛田川に注ぐ小河川の相可川が形成した自然堤防上に立地する遺跡である。昭和34年、当地方にも未曾有の被害をもたらした伊勢湾台風の時には、当遺跡周辺もすべて冠水するほどの状態であったという。

すなわち、人間の営みが始まって以来、この地が幾度となく洪水にみまわれ、侵食と堆積を繰り返してきたであろうことが、容易に推測できるのである。

このような自然条件を反映してか、堆積土層も複雑であった。また、長らく畑地として利用されてきたため、耕作による攪乱も認められるが、耕作の及ばない深さにおいても土層は単純ではなかった。

層序については、第７図に第２次調査区（中区）の東壁面の断面図を示した。

基本的な層序は、表土（暗褐色土）が厚さ10～20cm、第２層（暗褐色土に黒褐色土の混じった土）が10～30cm、第３層（褐色土ないし黒褐色土）となる。

しかし、実際には攪乱などのため複雑な様相を呈している。第１次調査区である北地区では、表土の下の第２層の下に、黒褐色土は認められず、第２次調査区近いところで若干認められる程度であるが、第２次調査区の中地区では、上から第３番目の層に厚さが20～30cmほどの黒褐色土の堆積が見られる。また、その下部に黄褐色土が一部に見られたりする。

遺物は表土および第２層に含まれている。遺構の検出は、第３層である褐色土（北地区・南地区）および黒褐色土（中地区）の上面でおこなった。検出面は地表から浅い所で20cm、深い所で60cmほどであった。縄文時代以降の遺構は、すべてこの検出面において検出したものであり、層位的な所見は得られなかった。　　（田　村）

3．遺構と遺物

１．遺構の分布概要

調査区はバイパス路線幅という制約を受け、幅約30m、長さ約150mと南北に細長い。そのため、調査区を便宜上北地区・中地区・南地区と３区分して記述する。なお、この北地区は第１次調査区に、中地区は第２次調査区に、南地区は巣護遺跡Ｂ地区として調査した一部に相当する。

今回の調査区は自然堤防の西端付近にあたる。そのため、上ノ垣外遺跡の中心部は、今回の調査区よりもさらに東にあると思われるが、縄文時代から室町時代にかけての遺構を検出し、多数の遺物が出土した。

縄文時代の遺構は、中地区および南地区で土坑、埋設土器が検出され、遺物もこの中地区で多数の出土があった。しかし、住居跡は検出されなかった。

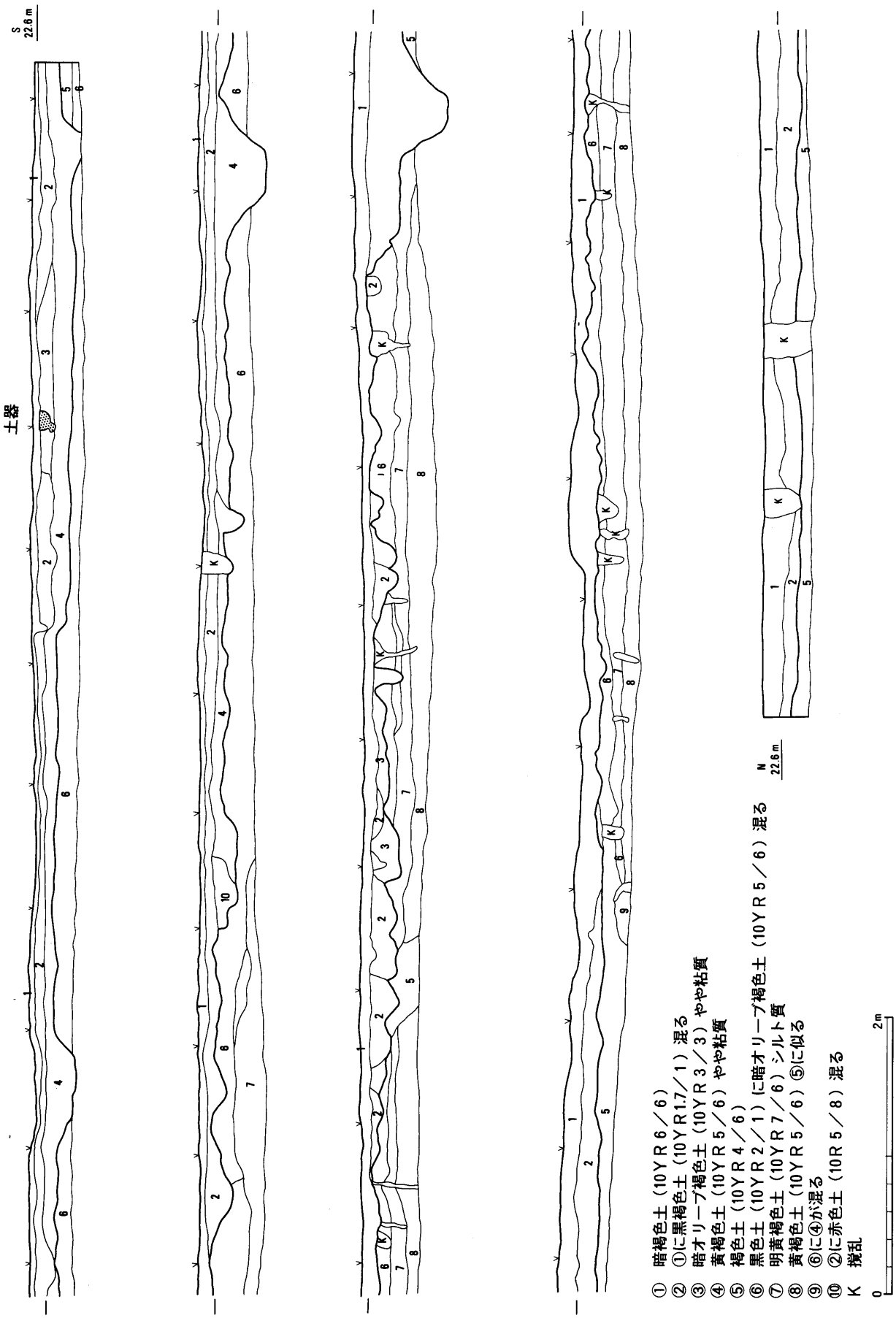
古墳時代前期の遺構としては、中地区および南地区において方形周溝墓からなる墓域の広がりを確認したが、居住域については、今回の調査区では確認できなかった。奈良・平安時代の遺構には竪穴・掘立柱の住居跡のほか、溝などが中地区に集中して検出された。続く鎌倉時代の遺構としては、掘立柱建物や集石遺構が中地区に、井戸や土坑、溝などが南地区で集中的に検出された。一方、室町時代以降の遺構については北地区に多く、中地区では僅少、南地区においては全く検出されず、地区により遺構の分布にかなりの違いが見られる。

２．縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、わずかに土坑２基と埋設土器が１基検出されたにすぎない。土器などの出土遺物量からすると、少なすぎる感があるが、これは後世の遺構が構築された時などに破壊されていることも原因の一つと考えられる。

ＳＫ１

調査区のほぼ中央に位置し、長辺4.1m、短辺1.3m、深さ60～70cmの隅丸長方形状の土坑である。主軸方



第7図　発掘区東壁土層断面図（1：40）

第８図　遺構平面図（１：400）

向はN28°Eである。西側の壁は直線的で急傾斜であるが、東側はゆるやかな傾斜で段状となる。底面はほぼ平坦であるが、北側がわずかに深い。他の時期の遺構とは異なり、黒褐色土が埋まっていた。中央やや北寄りの西壁際、底面より約30cmほど浮いた状態で、3個体ほどの縄文土器が出土した。縁帯文成立前の後期前葉ころと考えられる。

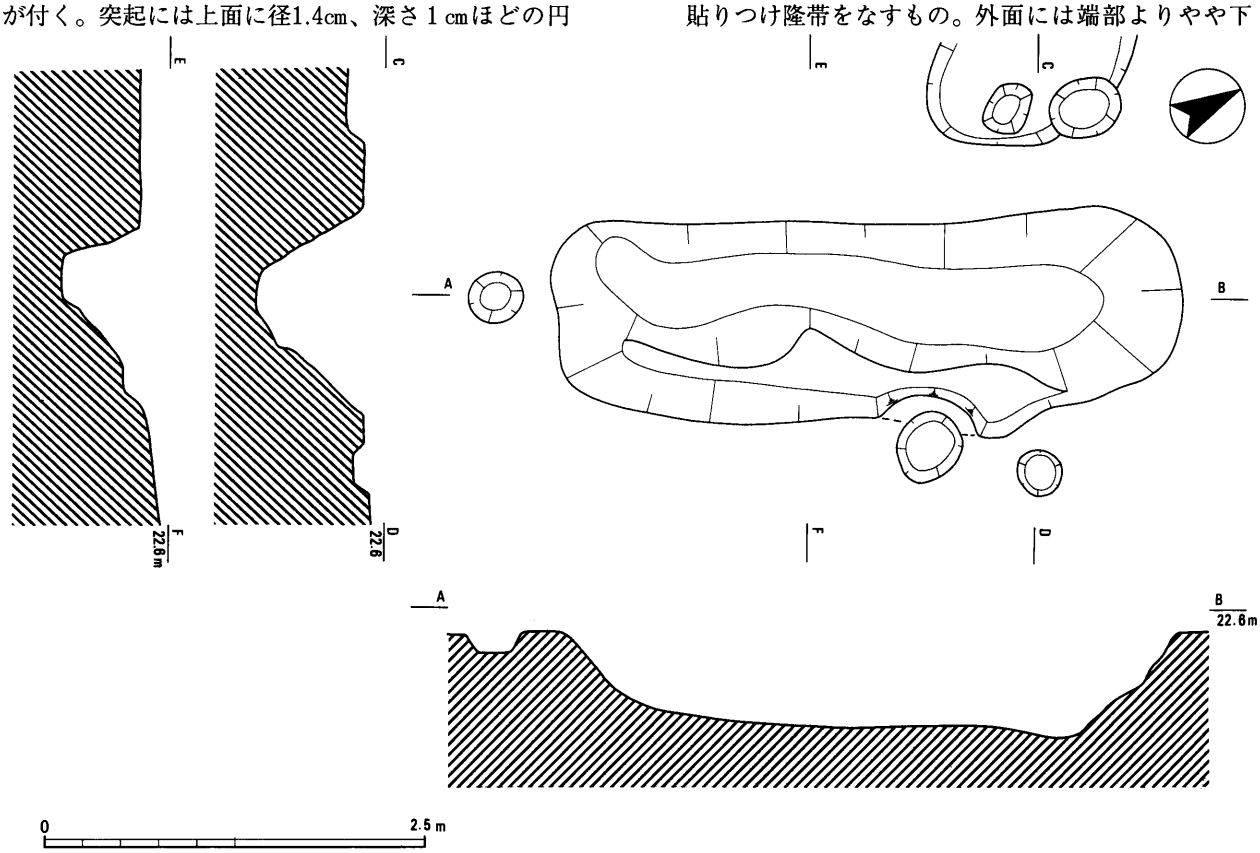
出土遺物

1～3がまとまって出土した大きな破片。1は推定口径22cmの精製深鉢。外反気味に頸部から立ち上がった口縁部は上端で内折し、外面は外削ぎ状となり面をもつ。頸部に横位に平行沈線がめぐり、全周で6カ所と思われる部分で口縁部まで棒状にのびる。この棒状にのびる部分のつけ根には凹点が刺突により施文される。胎土は精、若干の砂粒を含み、内外面ともに丁寧なミガキ。外面にはスス付着。内面には煮焦げの炭化物が少し付着している。

2は無文の深鉢。推定口径は31cm。頸部のくびれはさほど強くはなさそうで、そのくびれ部から直線的に立ち上がる口縁部は、内削ぎ状に内面に面をもつ。平口縁の1カ所に右上がりで左右非対称の突起が付く。突起には上面に径1.4cm、深さ1cmほどの円孔が施される。内外面とも巻貝の条痕調整、頸部以上の口縁部外面にはその後にナデ調整が施される。突起および口縁端面もナデ仕上げ。胎土は並であるが砂粒を多く含む。焼成は良だがもろい。

3は薄手の無文土器。推定口径27cm。頸部でゆるくくびれた後、やや外反気味に立ち上がる。口縁端部はやや丸みのある面をもつ。内外面とも巻貝の条痕調整。口縁部付近は内外面ともミガキ。胎土は精、砂粒を含み焼成は良、褐色を呈する。

4～20はすべて小片で、埋土からの出土である。4～8は沈線間に縄文または条線を充填する中津式の体部片。9はやや新しい堀之内式の体部片か。10は中津式と思われる体部の小片であるが、外面に朱彩が施される。11は薄手の口縁部片、二条の浅い沈線が口縁に沿って引かれている。12は端部に面をもち、浅い沈線がT字状に引かれる。13は沈線間に刺突が施されるもの。14は口縁端部が内側にL字状に拡張し、端面と外面に沈線が一条ずつ引かれる。15は波状口縁の波頂部の小片。外面には縦位の平行沈線が、肥厚した端面には一条の沈線が引かれる。16は口縁部内面の端部からやや下がった位置に粘土を貼りつけ隆帯をなすもの。外面には端部よりやや下



第9図　ＳＫ１実測図（1：50）

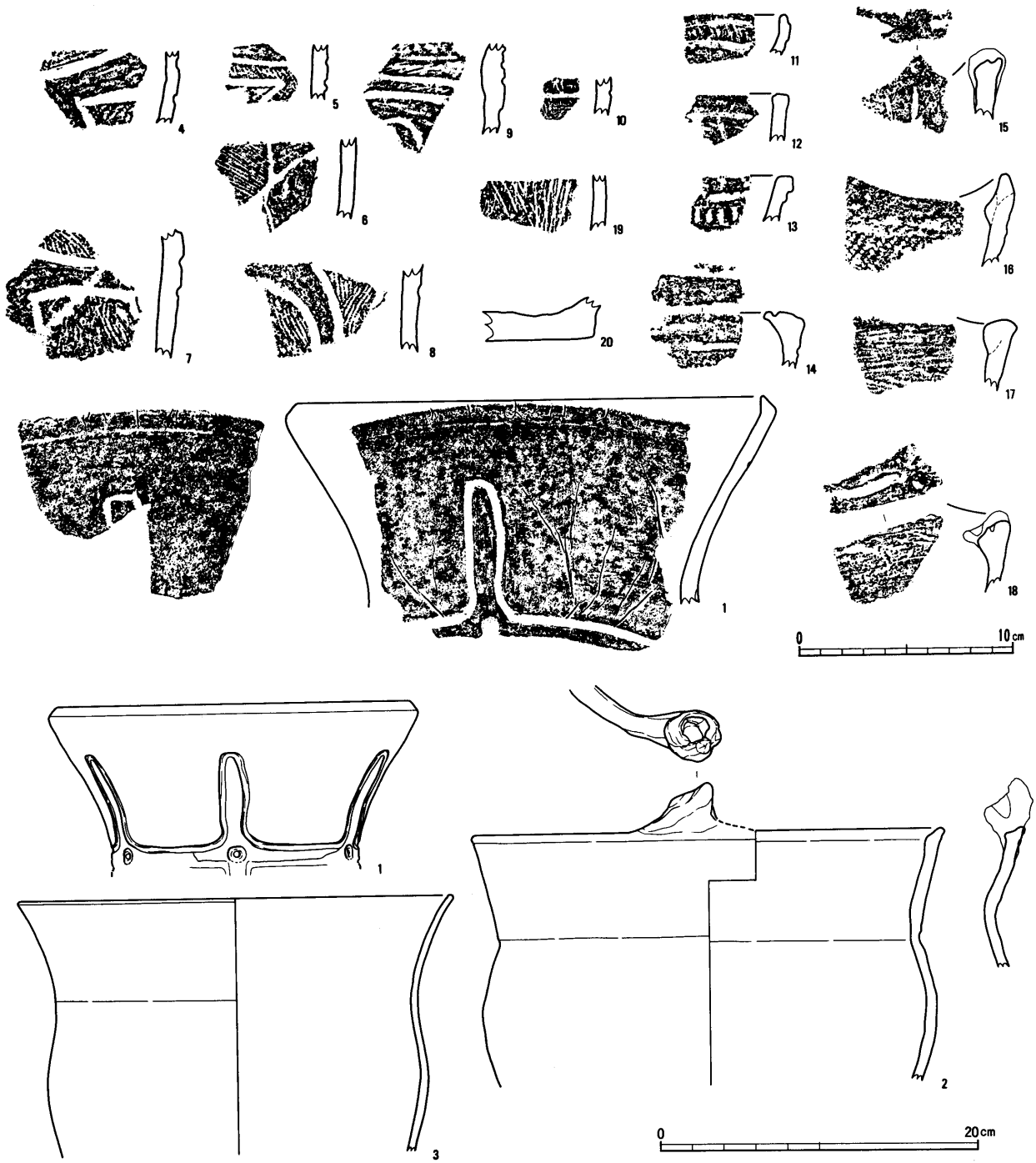
がった位置に単節のＬＲ縄文を施す。17は２と同一個体の可能性があるもの。18は拡張した口縁端面に沈線と刺突を施す。19は混入と考えられる中期船元式の撚糸文土器片。20は底部片である。

ＳＸ２

調査区中央部やや北寄り（中地区北端付近）で検出した埋設土器である。ＳＫ１の北西約18ｍに位置する。堀形ははっきりしないが、土器の大きさとほぼ同じ程度のものであった。底部に穿孔された粗製の深鉢が正立状態で埋置されていた。体部上半は削平のため欠損し、下半が残る。縄文時代後期初頭から前葉ころと考えられる。

出土遺物

底径10.4㎝、やや低い立ち上がりをもつ粗製の深鉢である。底部から体部下半にかけて残存しており、外面にはススが付着している。底部には直径5.2㎝の穿孔が施されている。胎土はやや粗、砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。　　（田　村）



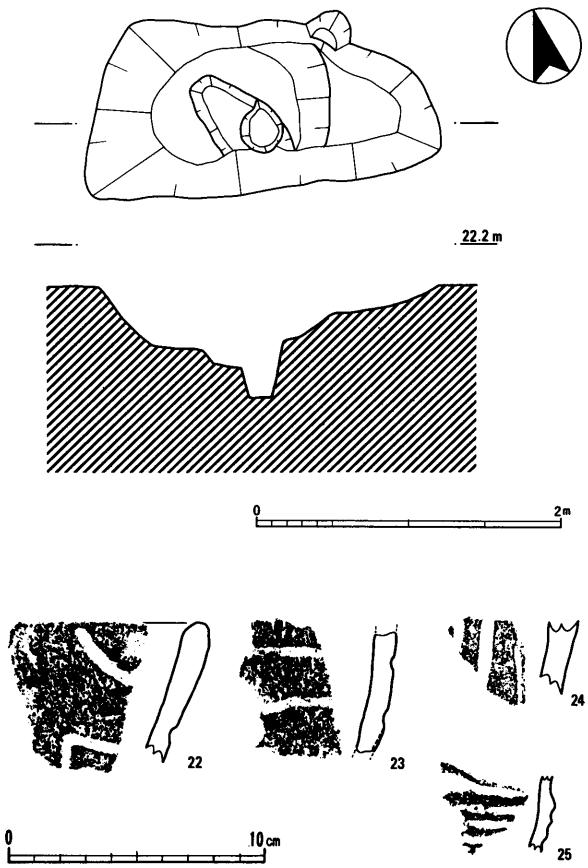
第10図　ＳＫ１出土遺物実測図（1：4）拓影（1：3）

ＳＫ50

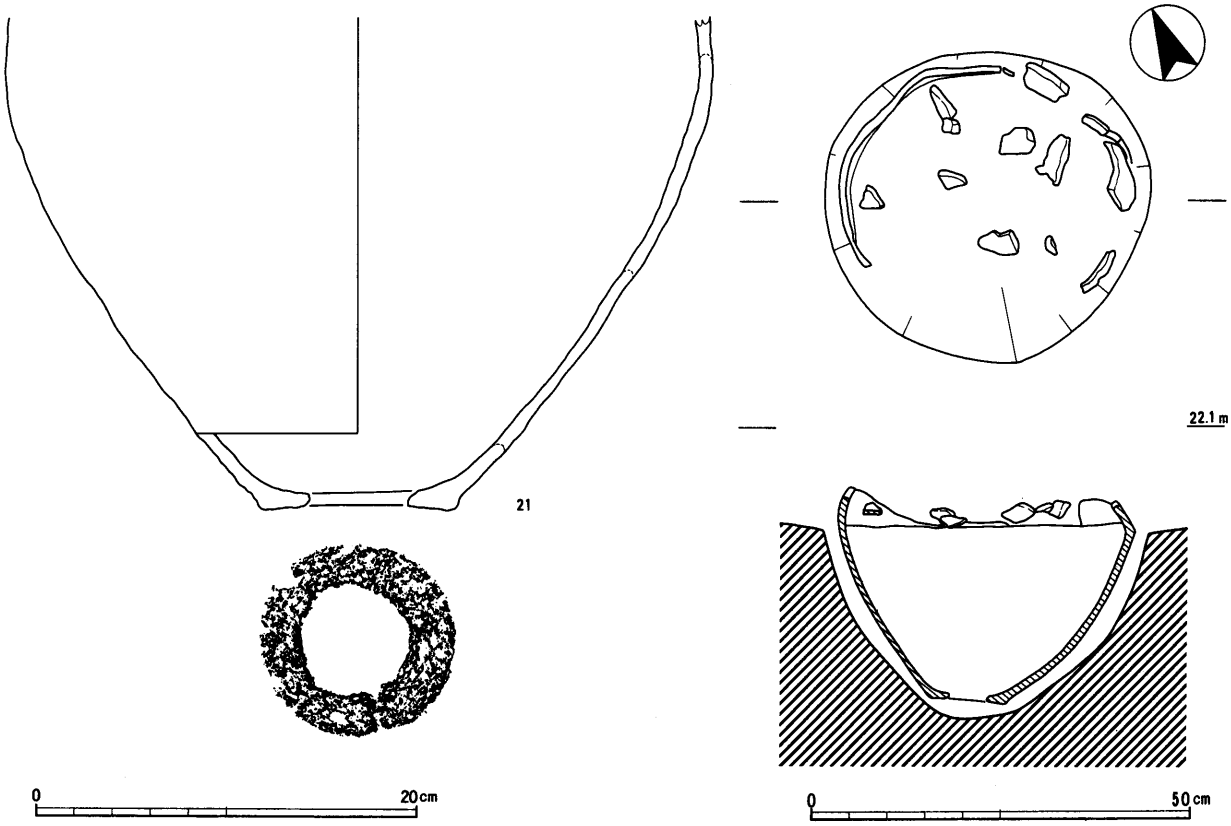
南地区の南端付近に位置する。東西に細長い、丸みを帯びた三角形の平面形である。東１／３と西２／３は深さ等に違いがみられ、二つの土坑が重なっているのかもしれないが、埋土の違いは見分けられず、一つの土坑として掘削した。西側２／３の部分には、底部にさらに深い穴があり、その最深部は検出面から72cmある。埋土は、黄褐色のかなり粘性のある土に褐色土と黒ボクが混じったものであった。埋土中から縄文土器片（22～25）のほか数片が出土した。所属時期は後期初頭と考えられる。（西　村）

出土遺物

22は口縁部の小片。太い沈線が口縁部からハ字状に引かれ、その下にはカギ状の沈線が見える。沈線間には縄文などが施されない無文のものである。23は22と同一個体。平行する沈線が見られる。24は別個体の破片。縦方向に太い沈線が３条見られる。これらは、後期初頭の中津式と考えられる。25は混入品で中期と思われる破片で器壁が薄く、沈線の感じも他の３片と相当異なる。多重沈線の上には渦巻文が配置されるものかもしれない。　（田　村）



第12図　SK50実測図（1：50）、遺物拓影（1：3）



第11図　ＳＸ２実測図（1：10）、遺物実測図（1：4）

3．弥生～古墳時代の遺構と遺物

ＳＸ３

・検出の様子

調査区は、地区割りの36・37区内の東西ラインを境に、南が水田として、北が畑として利用されていた。水田部は、畑より60cmほど低くなっており、明らかに、開墾により削り取られた所である。

そんな水田部の耕作土を除去すると、黒ボクの地山に黄褐色土の埋土をもつ溝状のライン（南辺溝にあたる）が鮮やかに走り遺構が確認された。当初、設定した調査範囲の都合上（調査区の東辺は、地元小学校の通学路や農道の確保という点で、ひとまず３ｍほど掘削を控えた。）、溝が方形に巡るということにはすぐさま気づかず、また、それまでの調査では平安末～鎌倉時代の遺構・遺物がほとんどであったため、単なる中膨らみの溝として掘削を始めてしまった。そして、溝から壺（26）が出土して初めて周溝の存在に気がついたしだいである。

早急に、北方向、すなわち一段高くなった畑地に調査区を広げたところ、淡褐色の埋土の北辺溝が検出された。また東方向も、建設予定地ほぼぎりぎりのところまで調査区を拡張し、遺構のほぼ全容を現した。

・調査結果

幅１～３ｍほどの溝が、ほぼ東西と南北の方向に方形に巡る。東辺の溝は、辺の中央からやや南に片寄って3.5mほどの幅を掘らずに残す。従って、東辺は溝というよりも方形の土坑のような感もある。結果的に、東辺溝は北側と南側に二分される。さて、掘り残された部分であるが、その平面形はほんの少しバチ形に開く様相を示す。しかし、端部を区切る溝は検出されず、現状では周溝は一周しない。問題は残ろうが、ここでは、この掘り残し部分を前方部、太い溝で囲まれた広い方形部分を後方部とし、この遺構を平面の形態から「前方後方型周溝墓」と呼ぶことにする。

北辺と西辺がぶつかるコーナー（北西コーナー）付近から、西辺の溝に沿って、ＳＤ９が走り、周溝墓としての遺構はかなり壊されている。しかし、西辺溝の内側ラインはかなりの部分残っており、遺構の平面的な形状・規模は看取できる。

平面規模のデータや軸の角度等は第13図下の模式図の通りである。

平面形の特徴や周溝の掘り方等については次のようなことがいえる。

・　後方部は正方形に近いが、各コーナーの内角は90°より７～８°プラスマイナスする。また、東西方向の辺より南北方向の辺の方が1.5mほど長い（計測箇所は第13図参照）。

・　前方部は、後方部東辺に対して直角よりも10°北に振ってとりつく。

・　溝の内側ラインは直線的だが、外側ラインは辺の中央付近を膨らませた曲線である。現状（検出面）での溝幅は、各コーナーで0.8～１mほどであるが、北辺溝の広い所では３ｍを越える。

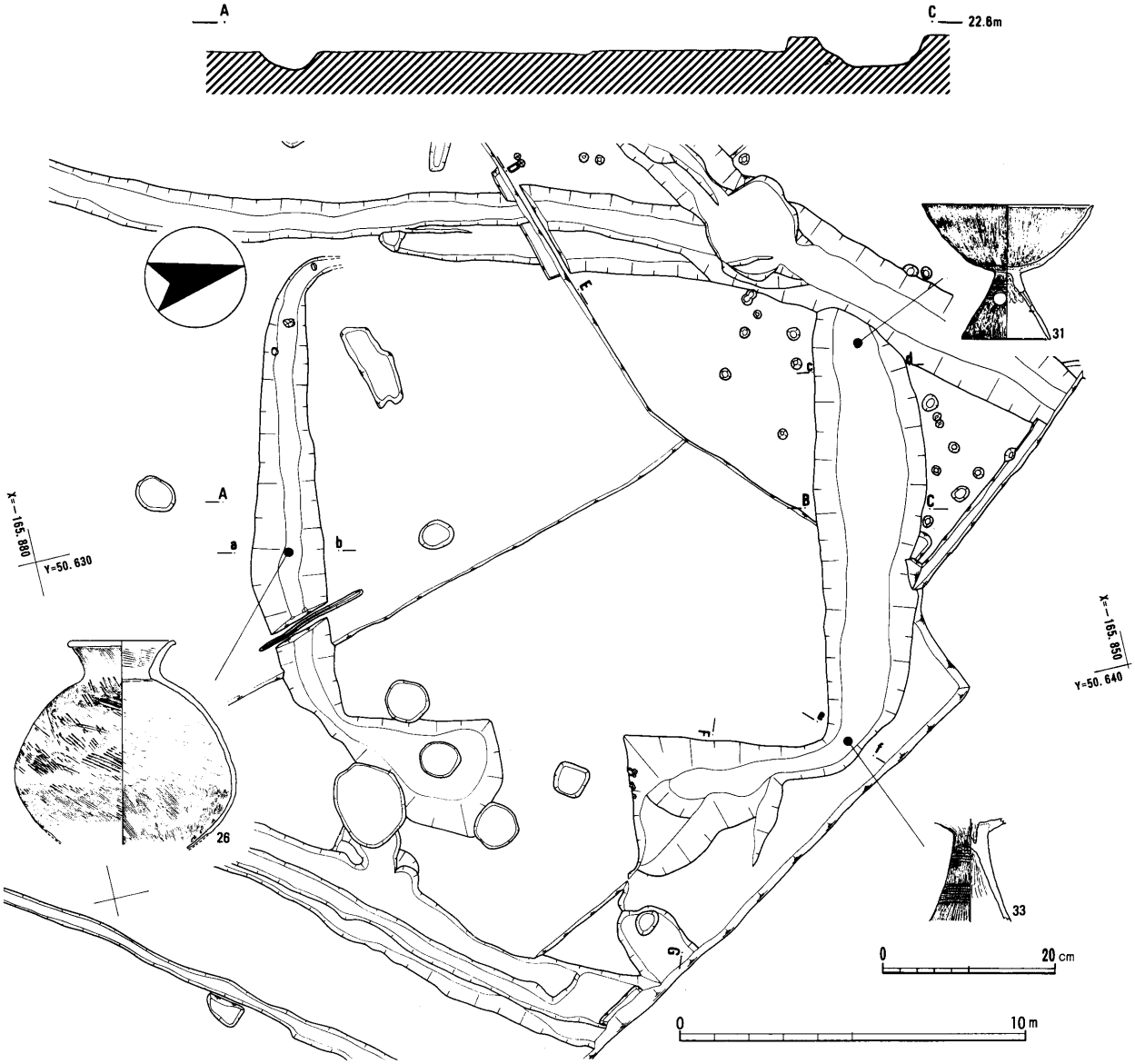
・　検出面の絶対高が一様ではなく、西辺溝は幅が明かではないので一概には比較できないが、それにしても北辺溝は南辺や西辺溝に比べて広く掘られている。

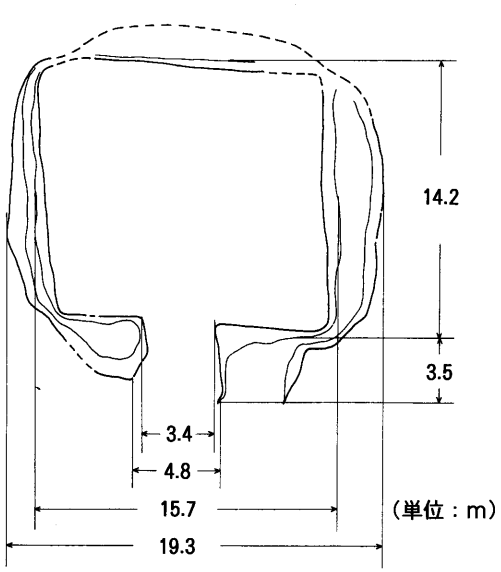
・　溝の深さは、各コーナー部分で浅くなる。南東コーナーでは、東辺溝の最深部より30cm浅く、南辺溝の最深部より50cm浅い。北東コーナーでは、東辺溝の最深部より30cm浅く、北辺溝の最深部より45cm浅い。南西コーナーでは、溝がとぎれた状態で検出されているが、それは、もともと周溝が浅かったところに水田開発のための削平が深く行われたためとも考えられ、本来、溝はつながっていたのではないだろうか。

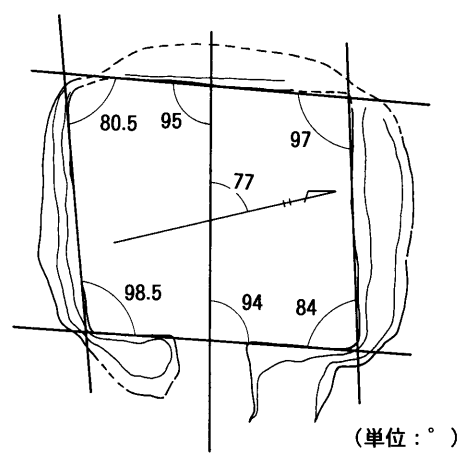
・　前方部の北側でも南側でも、東辺溝の外側のラインはかなり曖昧で、溝の底から緩やかな斜面が周溝の外に続いて行く。それに比して内側のラインははっきりしている。特に前方部の北側については、後方部の東辺ラインから前方部の北辺ラインにかけて直線的でシャープであり、造営した人達の意識的な掘削を感じる。

さて、埋葬施設であるが、後方部の大部分がすでに地山まで削平されているということもあり、検出はできなかった。

前方部北辺には、その直線的なライン上に20cmほどの山石が４個並んで検出され、周溝墓構築に絡んだ石材とも考えられる。また、前方部のちょうど中心部あたりに、方形の窪みが検出された。深さは10

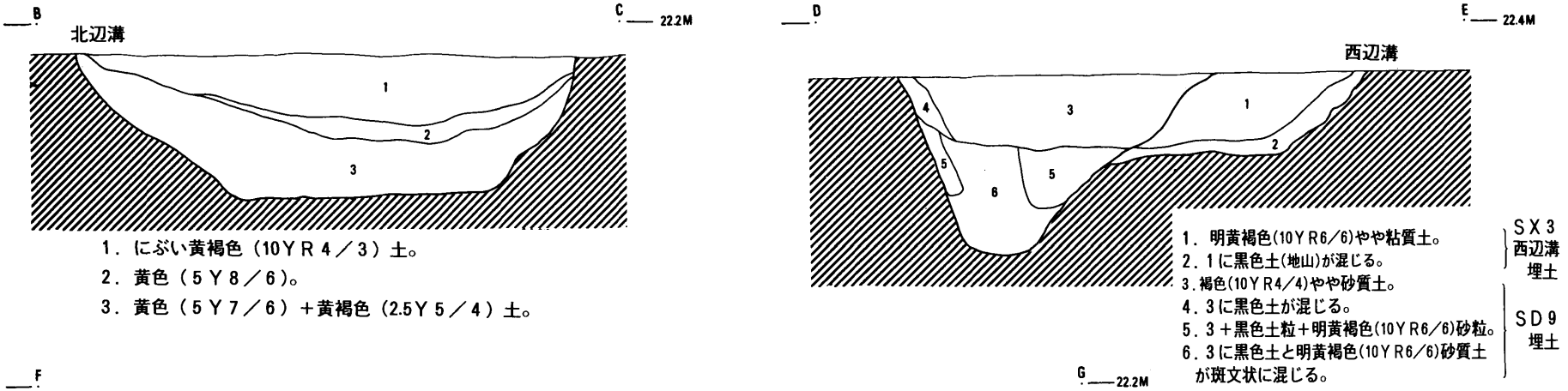






第13図　ＳＸ３実測図（1：200）、計測図（1：400）

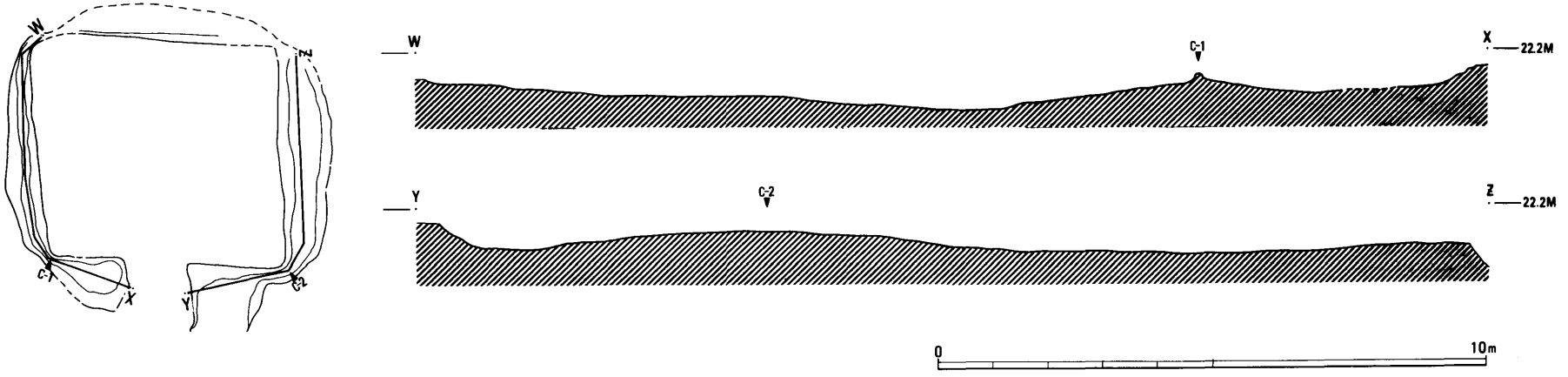
第14図　ＳＸ３周溝断面図（１：40）

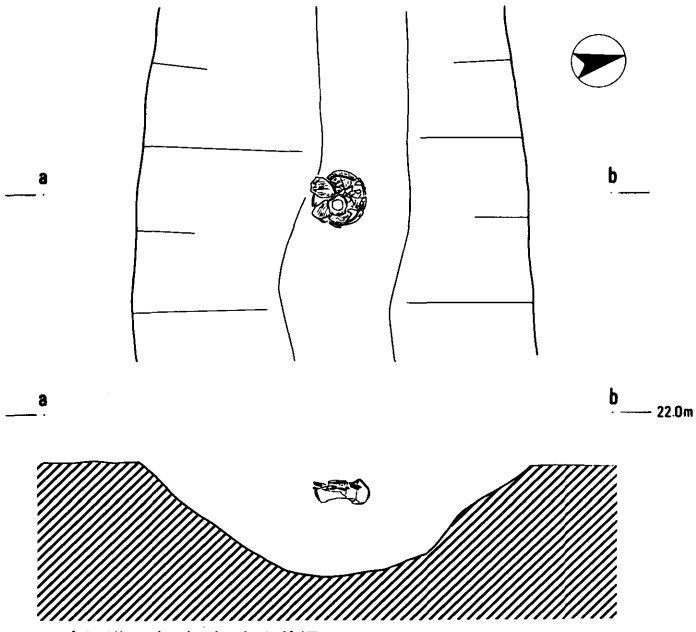


1．明黄褐色(10ＹＲ6／6)やや粘質土。
2．1に黒色土(地山)が混じる。
3．褐色(10ＹＲ4／4)やや砂質土。
4．3に黒色土が混じる。
5．3＋黒色土粒＋明黄褐色(10ＹＲ6／6)砂粒。
6．3に黒色土と明黄褐色(10ＹＲ6／6)砂質土が斑文状に混じる。

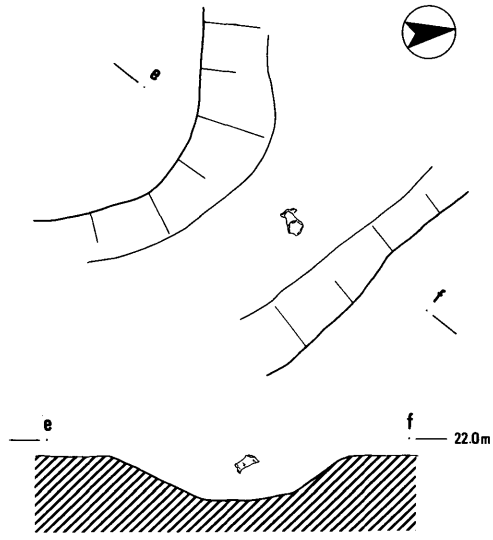
ＳＸ３西辺溝埋土
ＳＤ９埋土

1．黄色（2.5Ｙ７／８）土。　2．にぶい黄色（2.5Ｙ６／４）に褐色（10ＹＲ４／４）土の斑点。
3．にぶい黄色（2.5Ｙ６／４）に黒色土粒（地山）の斑点。

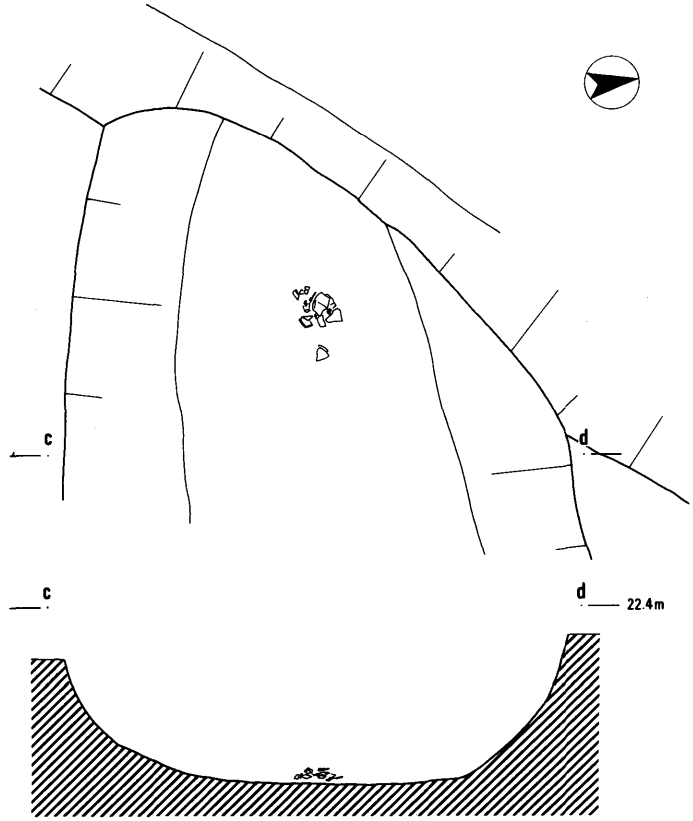




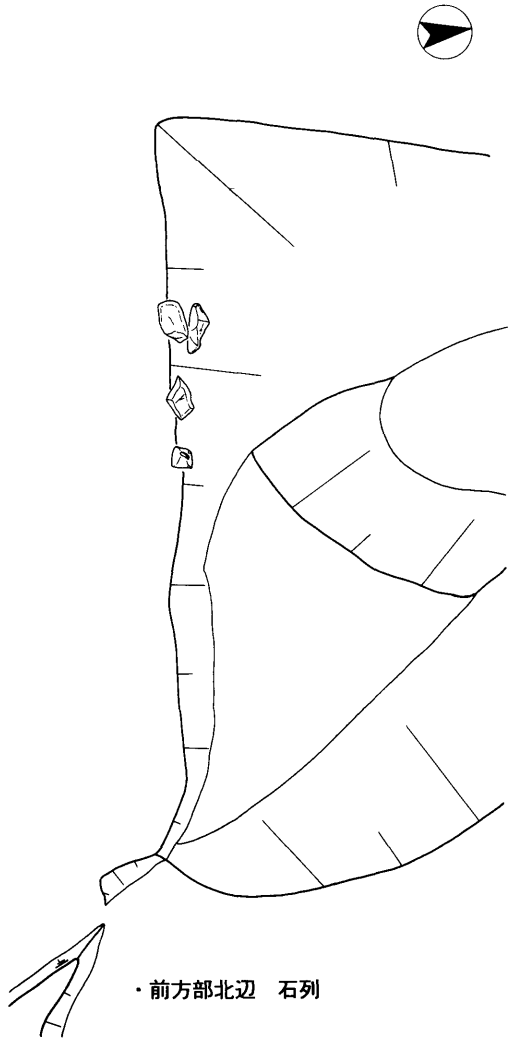
・南辺溝　壺（26）出土状況



・北東コーナー　高杯（33）出土状況



・北辺溝　高杯（31）出土状況



・前方部北辺　石列

0　3m

第15図　ＳＸ３周溝遺物出土状況図（1：40）

cmほどと浅く、遺物もなかったが、周溝と同じような黄褐色の粘質土を埋土としており、周溝墓と何らかの関わりがあるのかもしれない。

遺物

周溝内から土器が出土したが、完形に近いものは壺（26）と高杯（31）の2点のみであった。

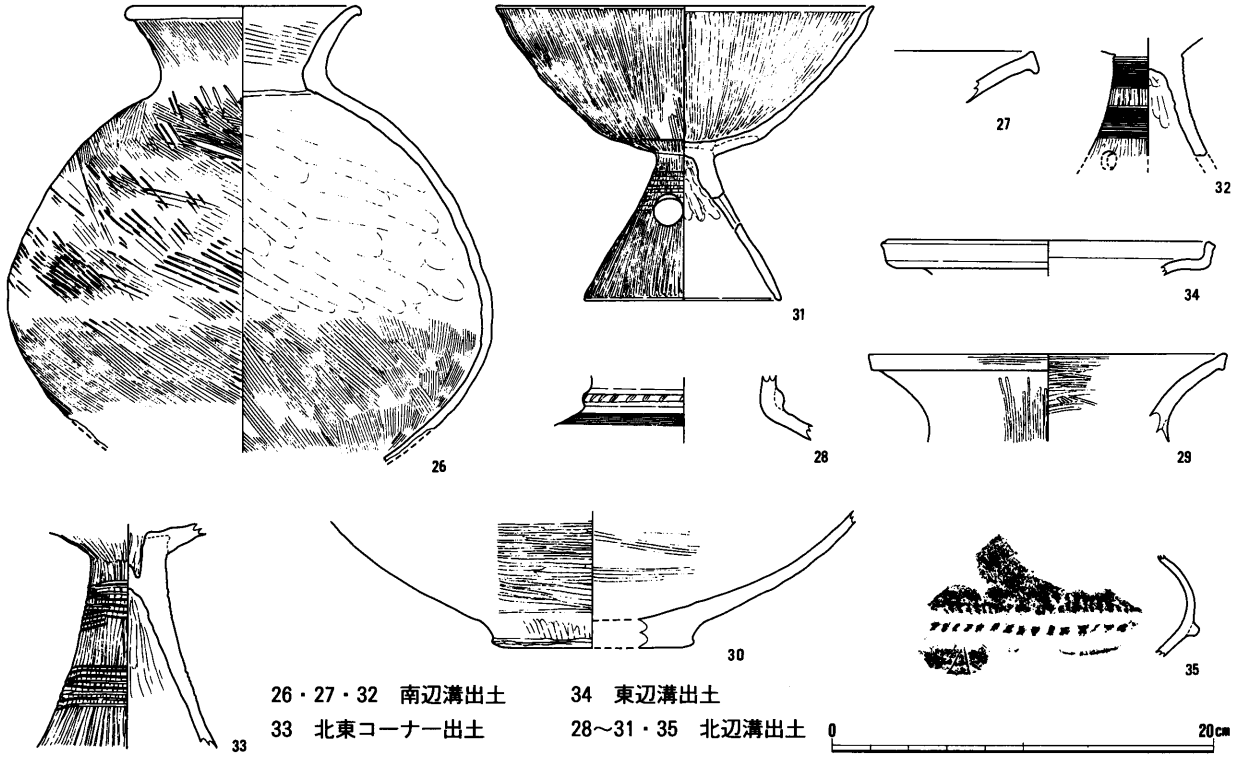
壺（26）は、南辺溝の一番広くなった所で溝底から40cmほど浮いた状態で出土した。つぶれてはいるが、口縁を上にして正置の状態であり、意図的に置かれたようにも思われる。しかし、溝底から浮いている事を考えると、やはり墳丘部からの転落であろうか。

北辺溝からは、高杯（31）や壺片（30）・手焙り形土器細片（35）などが出土している。壺や手焙り形土器の破片は溝埋土からの出土であるが、高杯（31）については溝の底に接して潰れていた。

出土した土器は、概ね古式土師器の範疇で捉えられると思うが、中には弥生土器と言っても差し支えないと考えられるものも含まれる。破片が小さいということもあり、曖昧な点を残しての報告となるが、ここでは、はっきりと時期のわかる高杯（31）の時期でくくり、すべてを古式土師器の範疇で報告する。

壺（26～30）　26は、逆ハ字形の口頸部が体部から直接開いて取りつく。口縁端部は外側に丸められ、曲面をつくる。体部の最大径は、体部中位よりやや下方にあり、そこで粘土を接いでいる。外面はハケメ調整されているが、体部中位は引っ掻き傷のような雑な調整である。底部は見つからなかった。27と29は口頸部のみの出土である。27は直線的に開く部位のみの小片で、端部は下方に少し拡張し、顎をつくる。29は体部から少しだけ直立した部分（頸部）があるようである。28は頸部のみの出土で、刻みを施した粘土紐の突帯で装飾する。表面の風化が激しくはっきりはしないが、外面肩部には横線が施されているようである。30は底部片で、径を推定すると残存部の最大部で28cmにもなる。底には、外面から意図的な力を加えて器壁を剥いだような跡が残る。

高杯（31～33）　32と33は柱状部が長めの脚部で、杯との接合部から下に横線帯を2段持つ。31は破片を接合してほぼ完形になった高杯である。口縁端部は内傾斜面を持ち、やや内弯しながら杯底部に向かう。その杯底部径は口径の0.4倍ほどで、やや弱いものの杯体部との境に稜をもつ。脚部は接合部からハ字状に開き始め、柱状部がほとんどなく、裾部は内弯するものの、その度合いは小さい。脚上部に櫛描横線が施され、その文様帯の下半から円形透かしが



26・27・32　南辺溝出土　　34　東辺溝出土
33　北東コーナー出土　　28～31・35　北辺溝出土

第16図　ＳＸ３出土遺物実測図（1：4）

3カ所に穿たれている。この透かし部分の断面を見ると、脚外面側の半分はきれいに整形されているが、内側の半分は全く調整されていない。脚内面以外はヘラミガキがなされている。そのヘラミガキ部分には所々に朱が付着しており、おそらく磨かれた面全体が赤彩されていたものと思われる。

甕（34）　受口の口縁細片である。頸部からほぼ水平に折れ、2㎝ほどで直立し受口部をつくる。施文等の装飾はされず、ヨコナデによる仕上げである。水平部外面の頸部に近い部分に、僅かに煤らしきものの付着がみられる。

手焙形土器（35）　鉢部片だと思われる。外面に刻みを施した突帯が巡る。内面下半はハケメ調整される。

ＳＸ４

平成５年度の調査で検出された溝の続きが、平成６年度の調査によりブーメラン状の平面形で検出された。遺物は出土しなかったが、ＳＸ３のすぐ西側にあり、鉤状に折れる溝、そしてその溝の走る方向がＳＸ３と同様であることなどから判断して、方形周溝墓とみなした。ＳＸ３を中心とした周溝墓群の一つであろう。東西方向に走る北辺溝と、それに続く西辺溝が約2.5mほど残っており、他は削平されてしまったのであろう、検出できなかった。北辺溝は、内側ラインが直線的で外側ラインが弧状を示し、辺の中央付近での溝幅は１ｍほどで、北西コーナー部では50㎝となる。溝の深さは、やはり北西コーナー部で浅くなる。　（西　村）

ＳＤ５

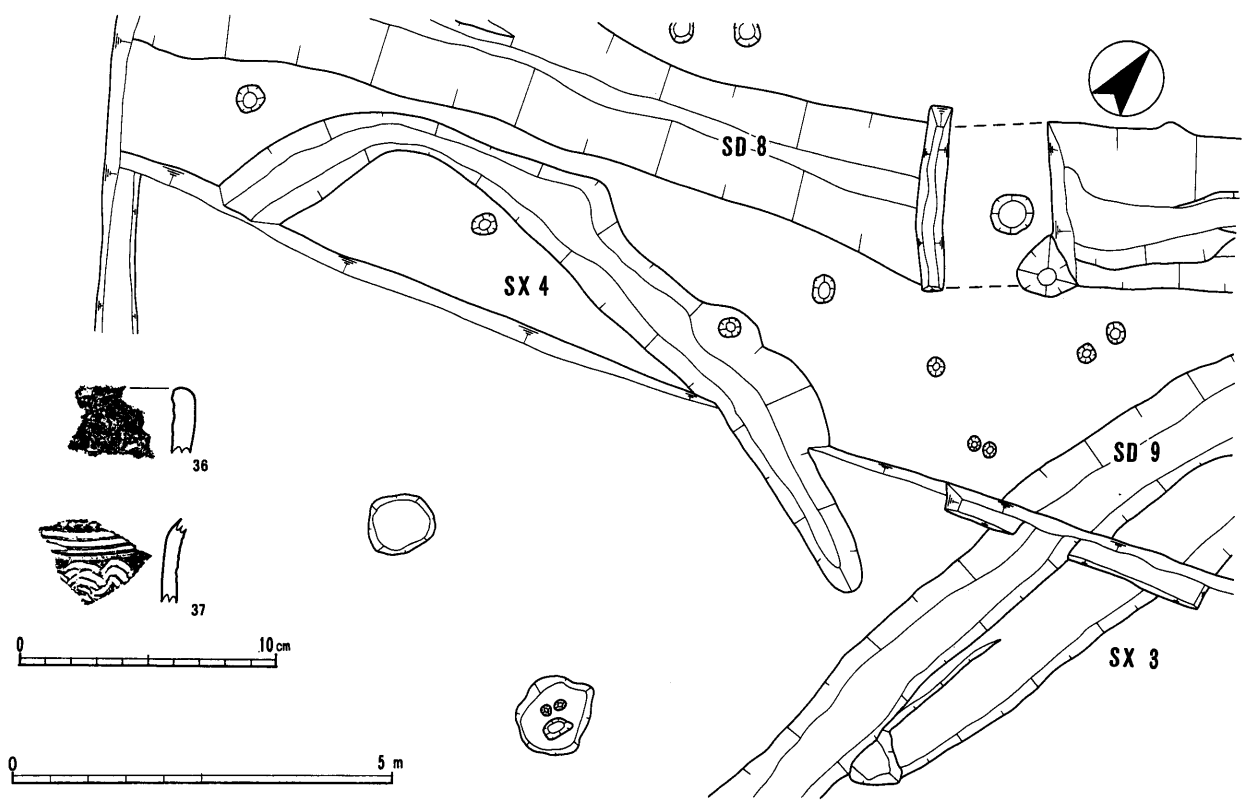
中地区の南部東壁付近で検出。長さ3.2m、幅0.9m、検出面からの深さは25㎝である。溝の方向はＳＸ３・ＳＸ４の西溝や、ＳＤ６と同じであり、一連の方形周溝墓群の一部と考えられる。ただし、南溝が想定される所には溝は検出されていない。

この溝からの出土遺物は、古式土師器の小片しかなく、図化できるものはない。この溝に近い発掘区の壁面において出土した、体部下半を欠失した壺(646)は、あるいはこの溝に関連する遺物かもしれない。

（田　村）

ＳＤ６

南区の調査区西端で3.3mほどの長さ分だけ検出され、調査区外へ延びていく溝である。幅は、調査区壁面付近で1.4m、東端部で90㎝である。その東端部は角張っており、検出面からの深さも40㎝ほどあり、



第17図　ＳＸ４実測図（1：4）

はっきりとそこで切れておさまっている。底部は、東端部から1.2mほどの所で15cm弱の段を持ち、調査区壁面側が深くなっている。

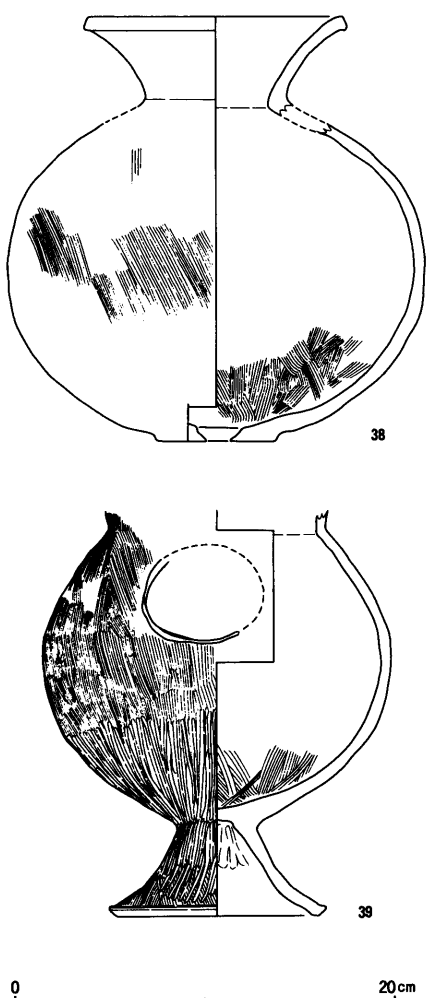
この溝の走る方向はＳＸ３の西辺溝と同一で、位置としてもその西辺溝の延長線上になる。遺物がなく、決定的なことはいえないが、周溝墓群の一部と考えられるのではないだろうか。　　（西　村）

Pit.64　（Ｎ30－Ｐ４）

中区中央やや西寄りで検出。この付近は、遺構検出を行った面からさらに下でも、縄文土器などの遺物が包含されており、検出に困難をきわめた。直径約0.3m、深さ20cmの円形のピットである。いくつかのピットが重複する。埋土から広口壺（38）の破片が出土したが、特に注目すべきような出土状態ではなかった。弥生時代後期ないし古墳時代初頭か。

出土遺物

壺（38）　やや偏平な球状の体部から外反しながら開く口縁部を持つ壺である。無文で、体部には細かいハケメが施される。底部は平底で、中心部には穿孔と思われる孔が見られる。



第18図　Pit.64、Pit.65出土遺物実測図（１：４）

Pit.65　（Ｌ33－Ｐ４）

中区南西端近くで検出。径0.3m、深さ12cmの略円形のピットである。埋土から弥生時代後期の丸窓付き土師器台付甕（39）が出土した。出土状況に特に注目すべきものはなかった。弥生時代後期か。

出土遺物

台付き甕（39）　口縁部を欠くが、ほぼ器形のわかるものである。球胴状の体部上半に、径約６cmほどの孔が１カ所あけられている（焼成前調整）。体部上半はハケメ、下半はミガキ、脚部はミガキが粗く、隙間にはハケメ調整の痕が残る。　　（田　村）

４．飛鳥～奈良時代の遺構と遺物

ＳＨ10

中地区の南東端付近で検出した。東西辺が2.75m、南北辺が3.5mの隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。検出面からの深さは30cmほどであった。西南隅部を新しい土坑により切られ、北辺中央やや東寄りに、破壊されたカマド跡と思われる焼土の塊が見られた。床面はとくに貼床やたたきしめの痕跡は認められなかった。また柱穴は認められなかった。埋土および床面から若干の遺物が出土した。出土した土器から、奈良時代前期と考えられる。

出土遺物

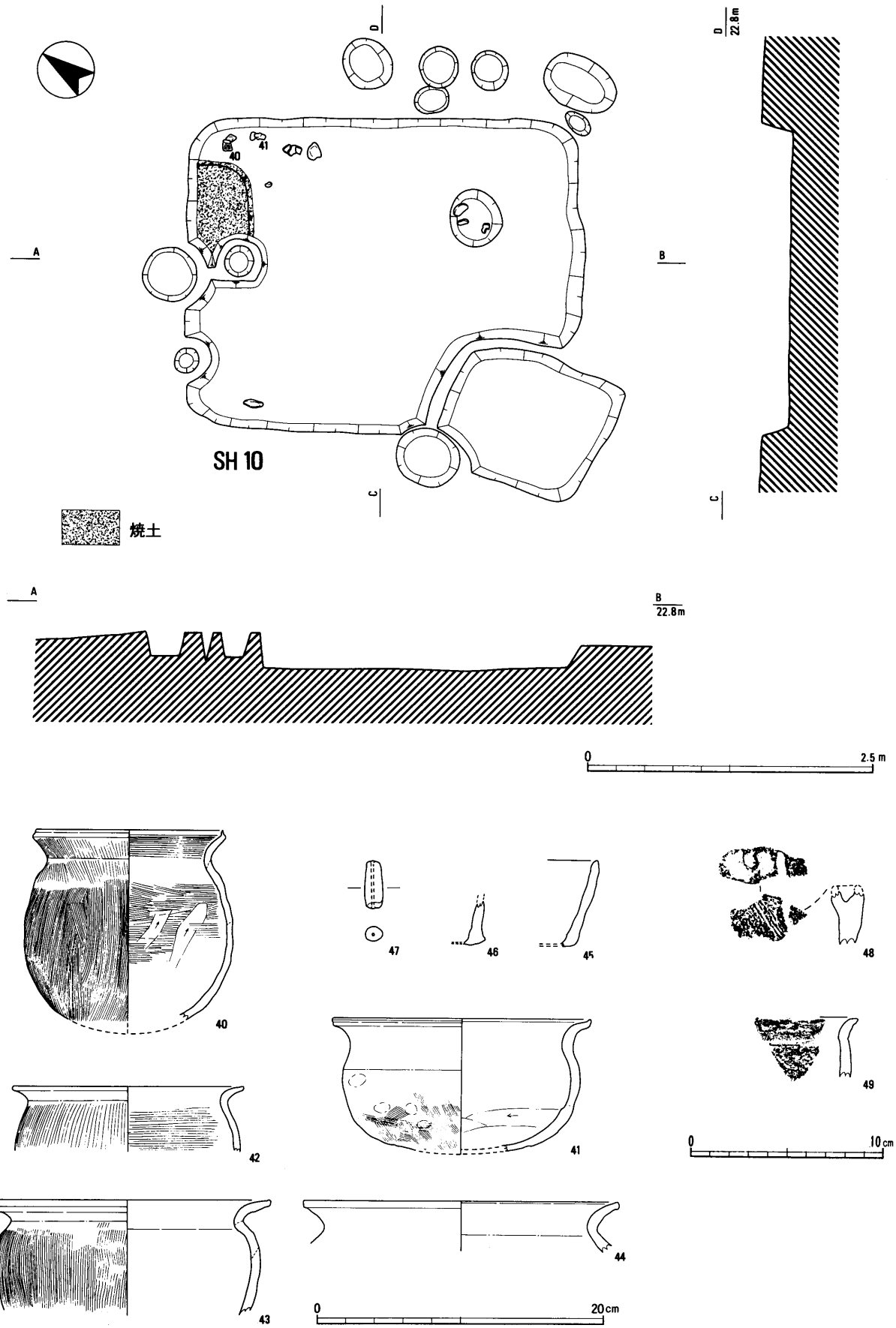
土師器甕（40～44）　口縁部の屈曲が弱く、ゆるやかに斜め上方に立ち上がり、端部をつまみ上げる40と、強く外反する41～44がある。41を除いて他は端部を上方へつまみ上げない。

製塩土器（45・46）　いわゆる志摩式製塩土器である。45は口縁部から底部まで残るもので、やや薄手のもの。器壁は直立せず、やや内弯しながら斜め上方へ開く。口縁端部はやや尖り気味。46は下半のみの残存。

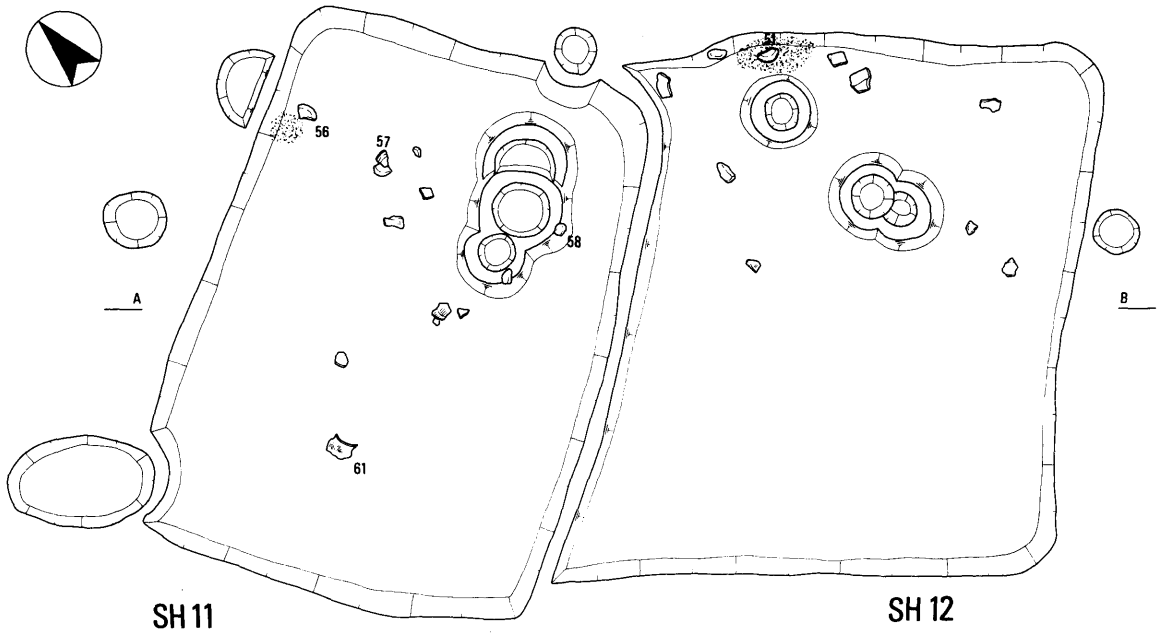
このほか、土錘（47）や混入品の縄文土器（48・49）がある。

ＳＨ11

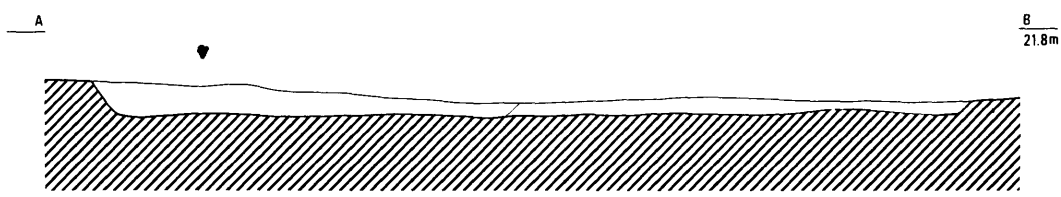
ＳＨ10の南西６mに位置する。ＳＨ12と重複するが、ＳＨ11がＳＨ12を切る。東西辺が3.8m、南北辺

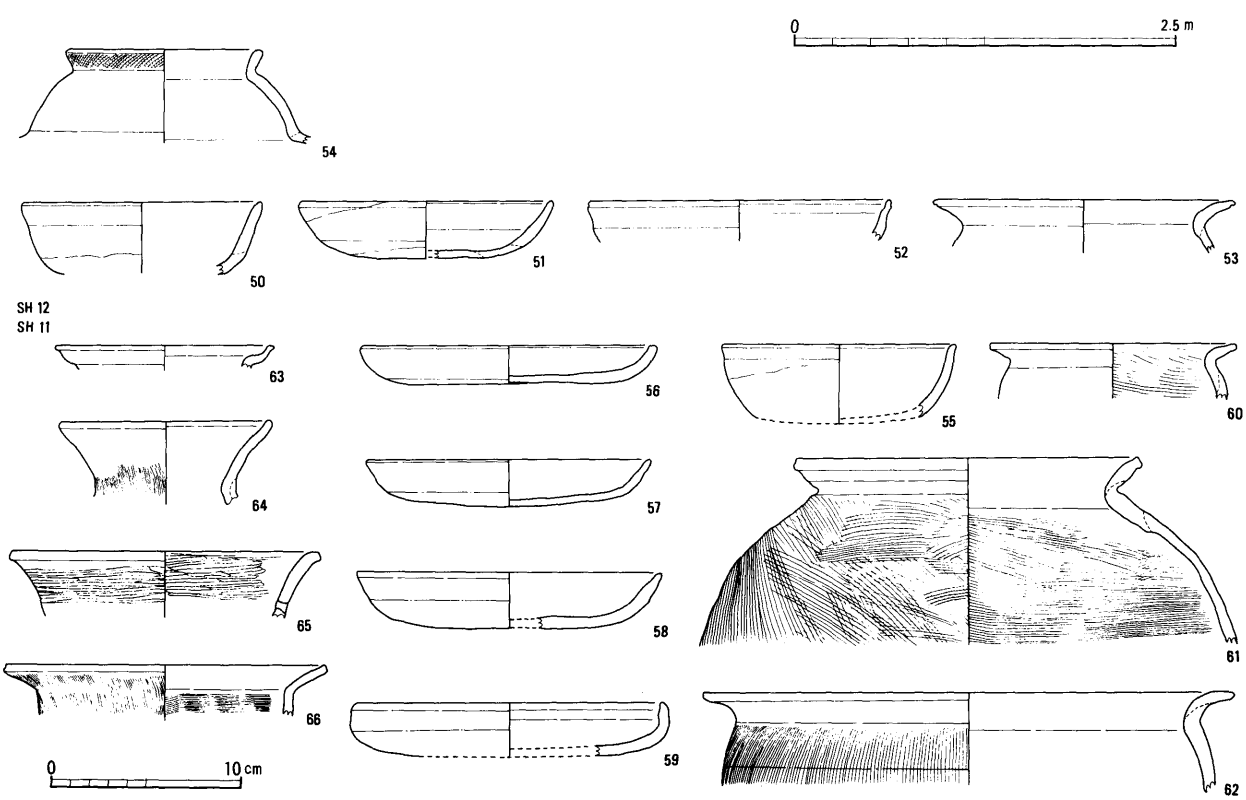


第19図　ＳＨ10実測図（1：50）、出土遺物実測図（1：4）



焼土





第20図　ＳＨ11・12実測図（1：50）、出土遺物実測図（1：4）

が2.6mの隅丸方形の竪穴住居跡である。検出面からの深さは20cm、北東隅に近い北辺部に小規模な焼土が見られたが、柱穴は確認できなかった。床面は貼床やたたきしめの痕跡などを確認できなかった。

埋土および床面から若干の遺物が出土した。

出土遺物

土師器皿（56～59）　口径16cm前後で口縁部が斜め上方に立ち上がるもの（56～58）と内弯する59がある。58・59は底部をヘラケズリするが、56・57はケズリはない。杯は1点のみ（55）。甕（60～62）の口縁部形態は三様である。

このほか、混入と考えられる弥生～古墳時代の土器（63～66）がある。

ＳＨ12

ＳＨ11に北辺を切られる。東西辺は3.5m、南北辺が約3.2mほどが現存する若干ゆがんだ隅丸方形の竪穴住居跡である。検出面からの深さは約10cmと浅かった。カマド跡と考えられる焼土や柱穴などは確認できなかった。また、貼床やたたきしめの形跡も認められなかった。ＳＨ11およびＳＨ12出土土器には大きな違いは見られず、時期的に大差のない奈良時代後期と考えられる。

出土遺物

土師器杯（50～52）　50は器高が高く椀に近いもの、52は口縁部を強くヨコナデするもの。

土師器甕（53）　口縁部が外弯しながら強く外反する甕。端部は細くすぼまっておさまる。

この他に、混入の縄文土器（54）がある。

ＳＸ13

中地区の中部東端で検出。一部は発掘区外へ延びる。確認できた範囲では、長辺1.7m、短辺75cmの隅丸のゆがんだ長方形を呈する。検出面からの深さは20cmほどであった。

埋土は焼土のブロックが混じる褐色土で、東辺中央部付近で土師器の杯（半欠）が伏せられた状態で底から約15cmほど浮いた状態で出土した。このほか、土師器杯、甕が出土した。飛鳥時代末期ないし奈良時代初頭に比定される。

遺構の平面形、焼土の存在、遺物の出土状態などから、この土坑の性格は墓壙と推定される。

出土遺物

土師器杯（67・68）　67が口径10.6cm、68はやや大きく12cmである。いずれも口縁部を強くヨコナデする。底部はいずれも平底となっている。

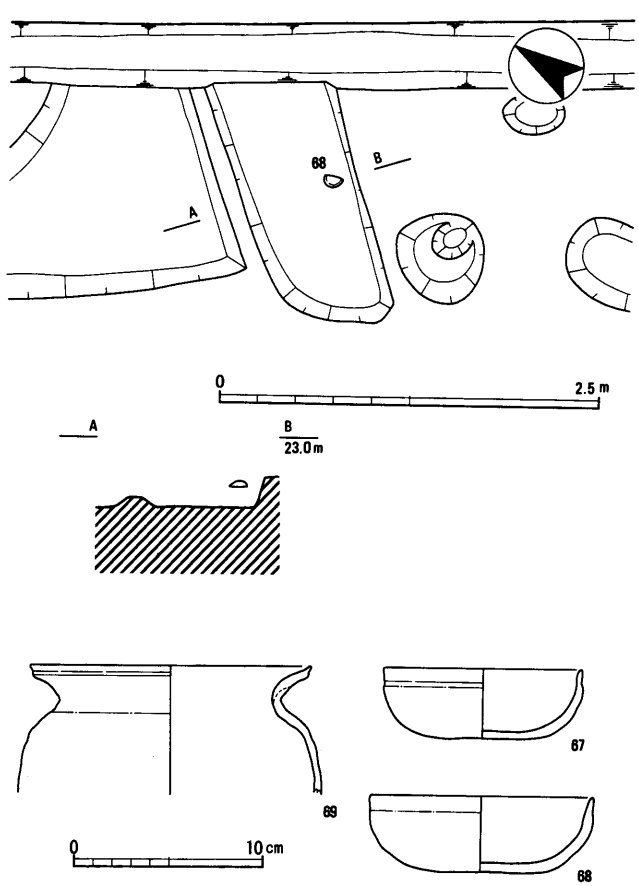
土師器甕（69）　推定口径14.8cmの小型甕である。ヨコナデによってやや薄くなった頸部から、ゆるく外反しながら厚みをもった口縁部が開く。端部は少しだが斜め上方につまみ上げられ、丸みをもって収められる。体部外面にはハケメが見られず、ていねいなナデ調整が施される。

ＳＤ７

北地区のほぼ中央部を北東から南西へ流れる溝である。検出面における幅は1.5m、深さは東端の最深部で90cmであった。発掘区の南西端において不明瞭となる。室町時代の溝ＳＤ56・58や後世の耕作溝などに切られて、攪乱部分が多く認められた。土師器などが少量出土した。奈良時代前期と考えられる。

出土遺物

土師器杯（70）　口径13cmで丸底に近い底部を有



第21図　ＳＸ13実測図（1：50）、出土遺物実測図（1：4）

する杯である。器壁はやや薄く、大部外面にユビオサエ痕を残す。

土師器甕（71～74）　口径が15cm程度の小型甕71・72と、口径23cm程度の中型（73・74）、大型の75がある。いずれもく字状に外反しながら斜め上方に開く口縁部形態のもので、75を除き端部は尖り気味におさめられる。76は甑である。

須恵器高杯（77）　平底から直線的に立ち上がる杯部のつく小型の高杯である。脚中央部に一条の沈線を施し、外反して開く裾部の端部には面を持つ。当遺跡の南約1.2kmに位置する明気３号窯出土須恵器に酷似する。（田　村）

ＳＤ８

ＳＸ３の北西コーナーを切り、ＳＫ48のほとんどを内包して調査区を横切る溝である。検出面での幅は、広い所で2.3m、狭い所で1.5mある。溝底幅は、広い所で１mあるが、西半部はかなり狭く30cmほどである。深さは1.3mで、断面は大部分の所で逆台形である。調査区東端壁の溝断面を見ると、底に近い部分は溝法面の傾斜が垂直に近いほど急で、上半は45°程度の傾斜となっている。また、少なくとも４回の溝底の変化が窺われる。

ＳＫ48を内包する地点でＳＤ９が取り付く。（もっとも、ＳＤ８とＳＤ９の切り合い関係は、ＳＫ48の存在ということもあり、平面でも断面でもとらえられなかったので、本来ＳＤ８の東半部分とＳＤ９をつないだ流れが本流であり、ＳＫ48より西側部分のＳＤ８が支流であるとも考えられる。）

出土遺物は多くなく、比較的浅い部分から、土師器片や須恵器片が出土している。この溝はＳＤ７と同時期と思われる。

出土遺物

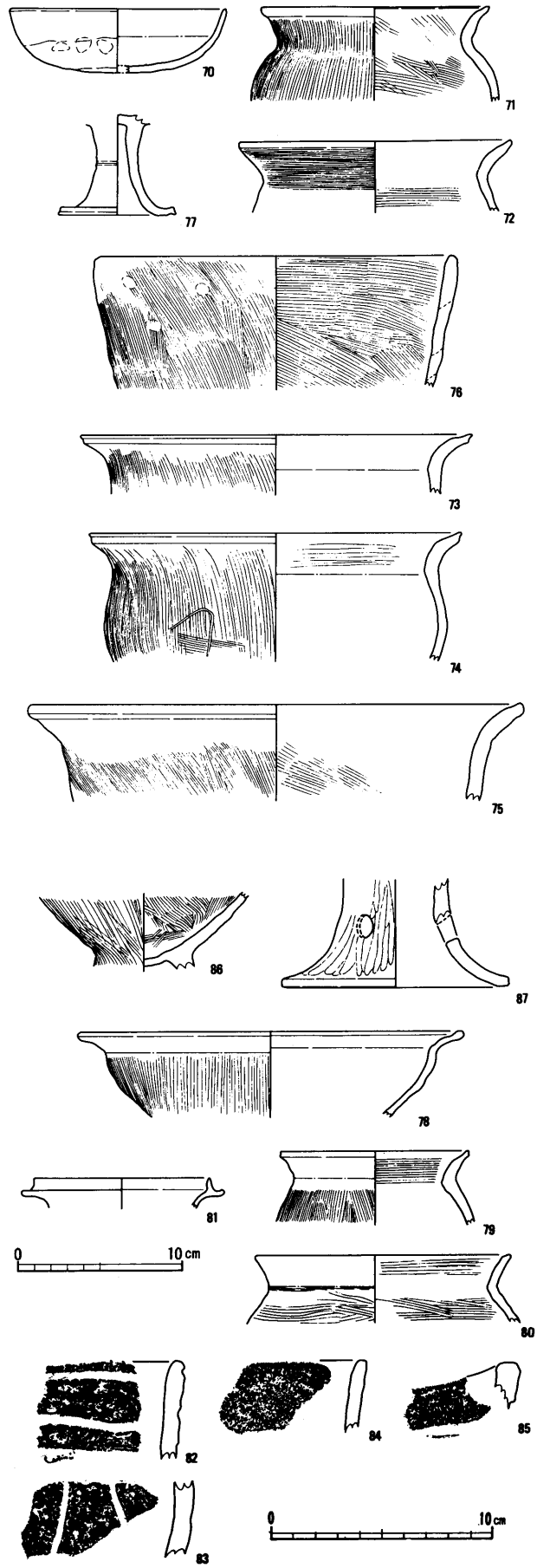
土師器甕（78～80）　78は浅い鉢形の甕、また80は「く」字状の口縁部を有する甕である。

須恵器杯身（81）　薄手で立ち上がりの低い古墳時代タイプの杯身。77の高杯と同様、明気窯産と思われる。

この他、混入品の縄文土器（82～85）や、古墳時代の土器（86・87）がある。

ＳＤ９

ＳＫ48から、ＳＸ３に西辺に沿い、ほぼ南北に走



第22図　ＳＤ７・８出土遺物実測図（1：4）

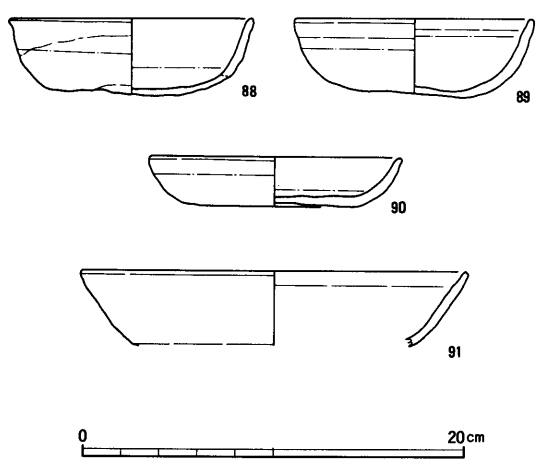
る溝である。ＳＸ３の西辺溝の外側半分ほどを抉ったかたちで掘られている。検出面での幅は、調査前に畑地であった地山の高い部分で２ｍ、調査前に水田であった部分で１～1.5mである。底幅は40cmほどで、やや丸みを帯びている。法面はどちらかというと直線的で、断面は大雑把に見ると逆台形である。

埋土の状況を観察すると、大きく二層に分かれる。上層は褐色系のやや粘質土であるが、下層は砂が主体で、その中にやや粘質の黒色土と黄褐色土が、径２～10cmの斑点状に混じる。ＳＸ３の溝と重なる辺りでは、下層の埋土をＵ字状に抉った層が見られ、浚渫の跡をも思わせる。遺物は上層からは土師器細片が微量出土したが、下層からは全く出土しなかった。（西　村）

Pit 66　中区のほぼ中央部に位置し、直径0.6mほどの円形ピットである。検出面からの深さは10cmで、中心部に直径30cm、深さ５cmほどの小ピットがある。ピット内から４個体の土師器杯が出土した。奈良時代後期に属しよう。

出土遺物

土師器杯（88～91）　器高のやや高い88・89と、浅い90、および大型の91がある。88には体部外面に明瞭な粘土巻き上げ痕が見られる。（田　村）



第23図　Pit.66、Pit.67出土遺物実測図（1：4）

５．平安～鎌倉時代の遺構と遺物

Pit 67（Q33-P.7）

中区の南東部ほぼ中央に位置する。直径25cmの円形小ピットで、堀形とほぼ同じ大きさの土師器甕（完形）が、ほぼ正立状態で検出された。また、蓋として土師器杯が、甕の口縁部に納まっていた。この土師器杯は完形ではなく、一部（約１／５）が欠損していた。そして、その上に３～５cm程度の石が数個見られた。

所属時期は平安時代後期と考えられるが、このピットの性格は不明である。

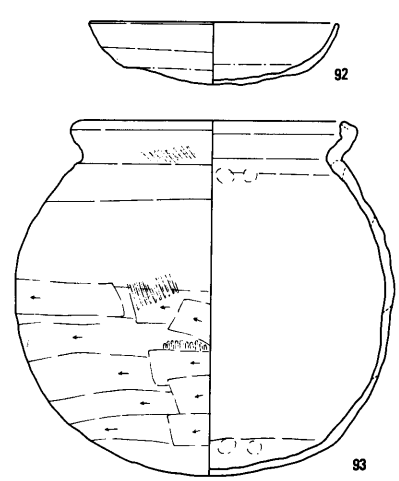
出土遺物

土師器杯（92）　口径13cm、器高３cmをはかる。口縁部は内外面ともヨコナデ、底部外面はユビオサエ。内面は乱ナデ。

土師器甕（93）　口径13cm、器高19.2cmをはかる。く字状に外方へ折れて伸びた口縁部は、端部で内折して終わる。口縁部全体にやや厚みがある。大部は若干長胴ながら、球形に近い。体部外面上半をナデ調整、下半をヘラケズリする。

ＳＤ14

中区のほぼ中央部を北東から南西に流れる溝である。検出面での溝幅は１～1.3m、深さは0.5～0.9mであった。断面形は逆台形を呈する。この溝からは縄文土器がかなり多量に出土したが、弥生～古墳時代の土器などと共に混入と考えられる。１点出土した土師器皿（96）から、平安時代中期に比定することができよう。



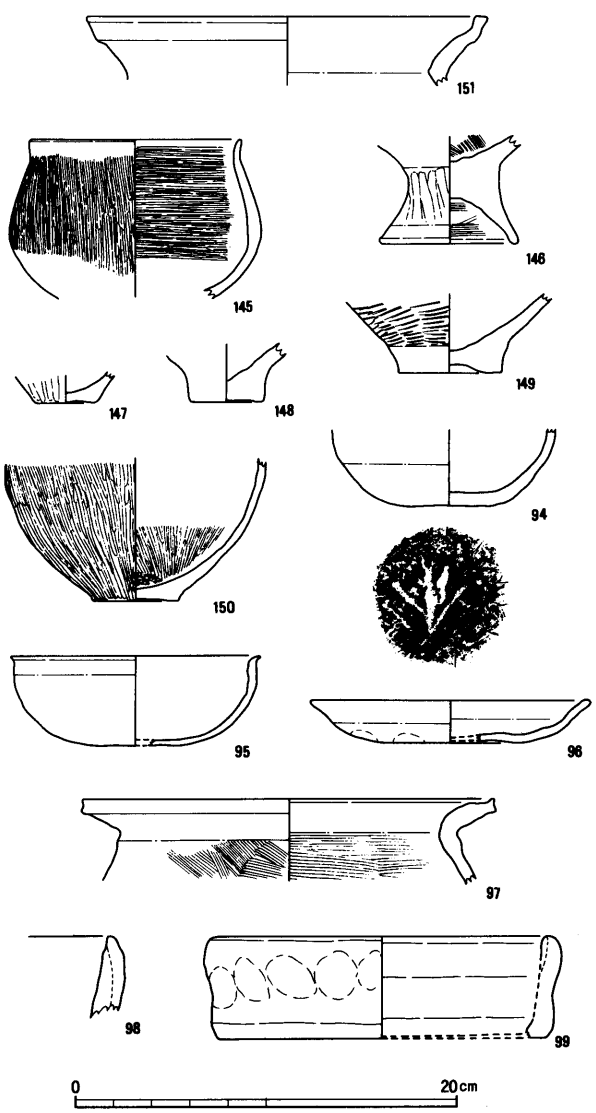
出土遺物

土師器皿（96）　推定口径14.3cm、器高2.3cmで、ユビオサエ痕の残る底部から、ゆるく外弯気味に外方へ立ち上がる。端部は丸味をもっておさめられ、口縁部内外面には強いヨコナデが施される。

土師器椀（94・95）　94は平底に近い底部から内弯しながら体部が立ち上がるが、口縁部を欠く。底部外面には木葉痕が見られる。95は丸底の底部から内弯しながら立ち上がる。体部は、口縁部で外半し端部は薄くおさめられる。いずれも奈良時代に比定されよう。

土師器甕（97）　「く」字状に外方へ折れる口縁部は肥厚し、つまみ上げながら強くヨコナデされ、端部はやや薄くなる。奈良時代に比定されよう。

製塩土器（98・99）　いわゆる志摩式と呼ばれるもの。99は口径が推定できるもので、17cmと推定。底部は残存していないが、非常に薄い。一部器壁が剥離するが、体部外面にはユビオサエ痕が連続的に残る。98は細片であるが、口縁端部が尖るもの。



第24図　ＳＤ14出土遺物実測図（1：4）

以上のほか、100～144の様な縄文時代中期・後期の土器のほか、弥生時代後期の土器（145 ～150）や、古墳時代前期と考えられる土器（151）などが混入していた。

ＳＤ15

ＳＤ14から南へ約14mほど離れ、ほぼ平行して走る溝である。検出面での幅１～1.2m、深さ0.5～0.7mで、ＳＤ14とよく似ている。埋土より縄文土器、弥生土器、奈良時代などの土器が混入品として出土しているが、溝の時期としては、平安時代後期と考えられる。

出土遺物

土師器杯（152 ～153）　152・153は混入と考えられるもの。 154は底部と体部が不明瞭で、ユビオサエにて成形され、口縁部で強く外反する。

黒色土器椀（155）　口縁部に近い体部は、強いヨコナデのため器厚が厚くなり、その分端部は尖り気味となる。内面には細かいハケメが残っている。内面のみ黒色の、Ａ類の椀である。

土師器甕（156～159）　156～158は小型、159は大型品である。いずれも口縁端部は、ほぼ水平な面を持つ。

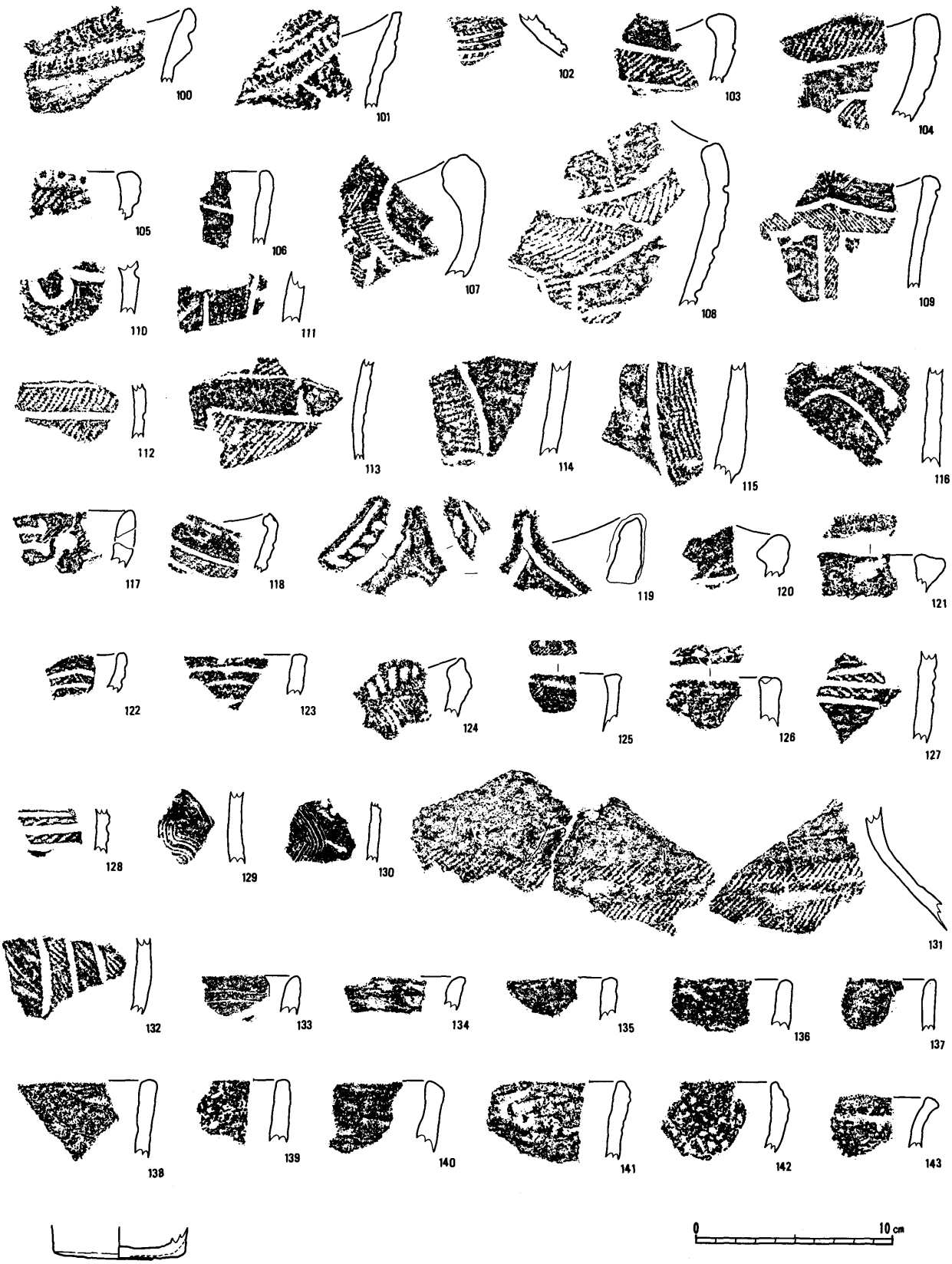
灰釉陶器椀（160）　底部を欠損する破片。丸みを帯びた体部から口縁部は強く外反しておわる。釉は漬け掛け。

以上のほか、縄文中～後期の土器（161～172）、弥生後期の土器（173～179）が出土している。

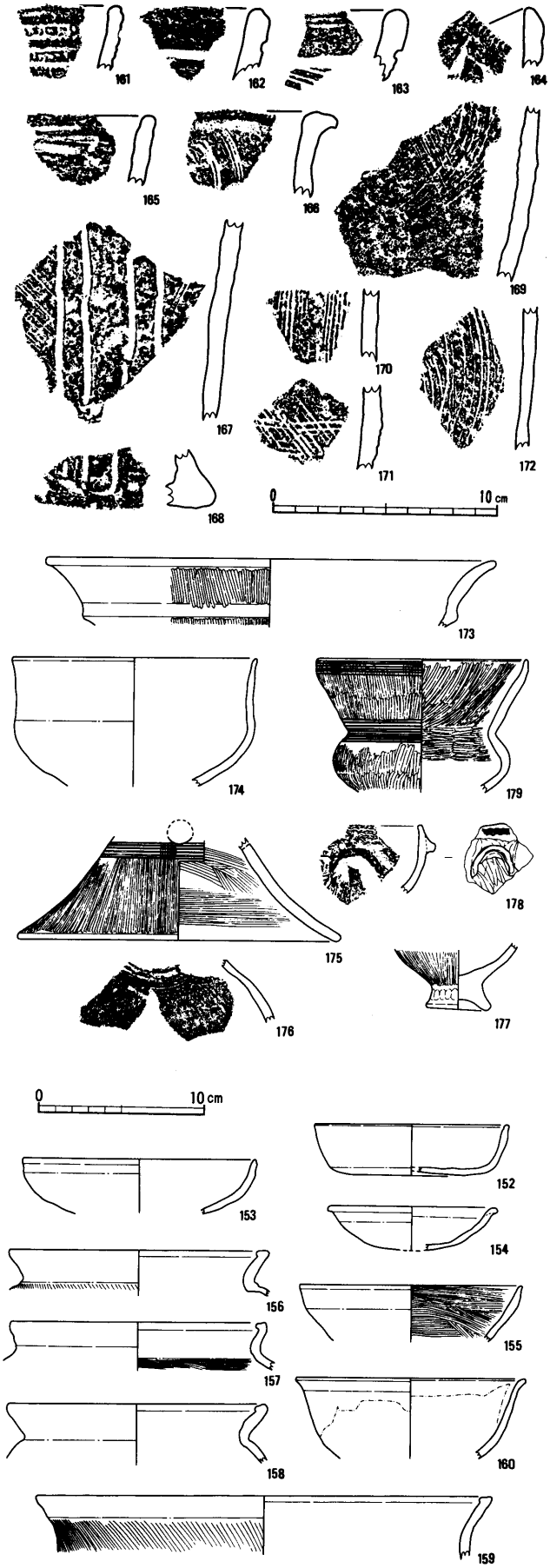
ＳＺ16

ＳＤ15に近い中地区南西部で検出。東西1.8m、南北２mで方形に石が疎らに配される。石は拳大から人頭大の河原石で、南側の両コーナー部には見られない。平面形は方形もしくは隅丸方形であろう。また中央部にも集石が見られる。この遺構の下部には、中央の集石部に小土坑が検出された。遺物も出土したが、すべて細片ばかりで図示できるものはない。鎌倉時代前期ころに比定できる。

また、すぐ南のＳＤ15埋土上面からその南にかけ



第25図　ＳＤ14出土縄文土器拓影（1：3）



第26図　ＳＤ15出土遺物実測図（1：4）拓影（1：3）

て、同程度の大きさの石が散在していた。これもＳＺ16と同様の遺構が破壊された痕跡かもしれない。

ＳＺ17

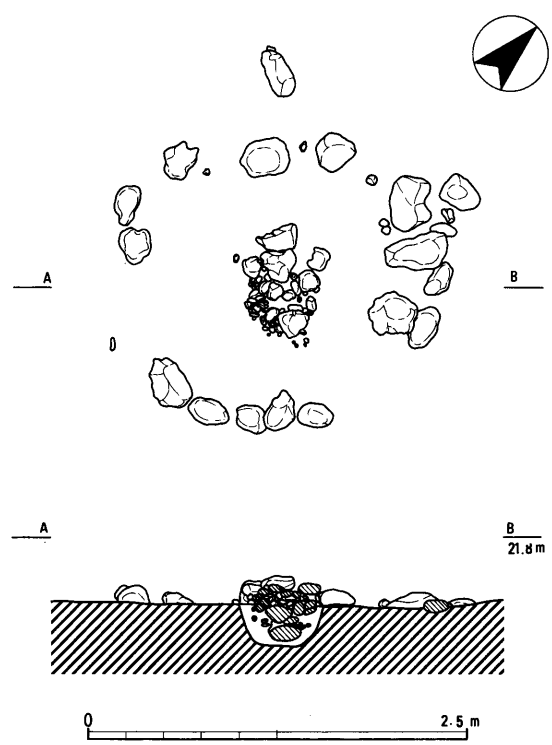
ＳＺ16の北東約12mに位置する。拳大から人頭大の石がコの字状に配される。もとは方形もしくは円形に配されていたものと思われる。南北の規模は1.2mと考えられるが、かなり破壊を受けているとみられ、特に西半の破壊が著しい。下部に浅い土坑を検出したが、上部の配石とややずれており、別の遺構かとも思われる。ＳＺ16と同様に性格は不明である。鎌倉時代初頭ころに位置づけられる。

出土遺物

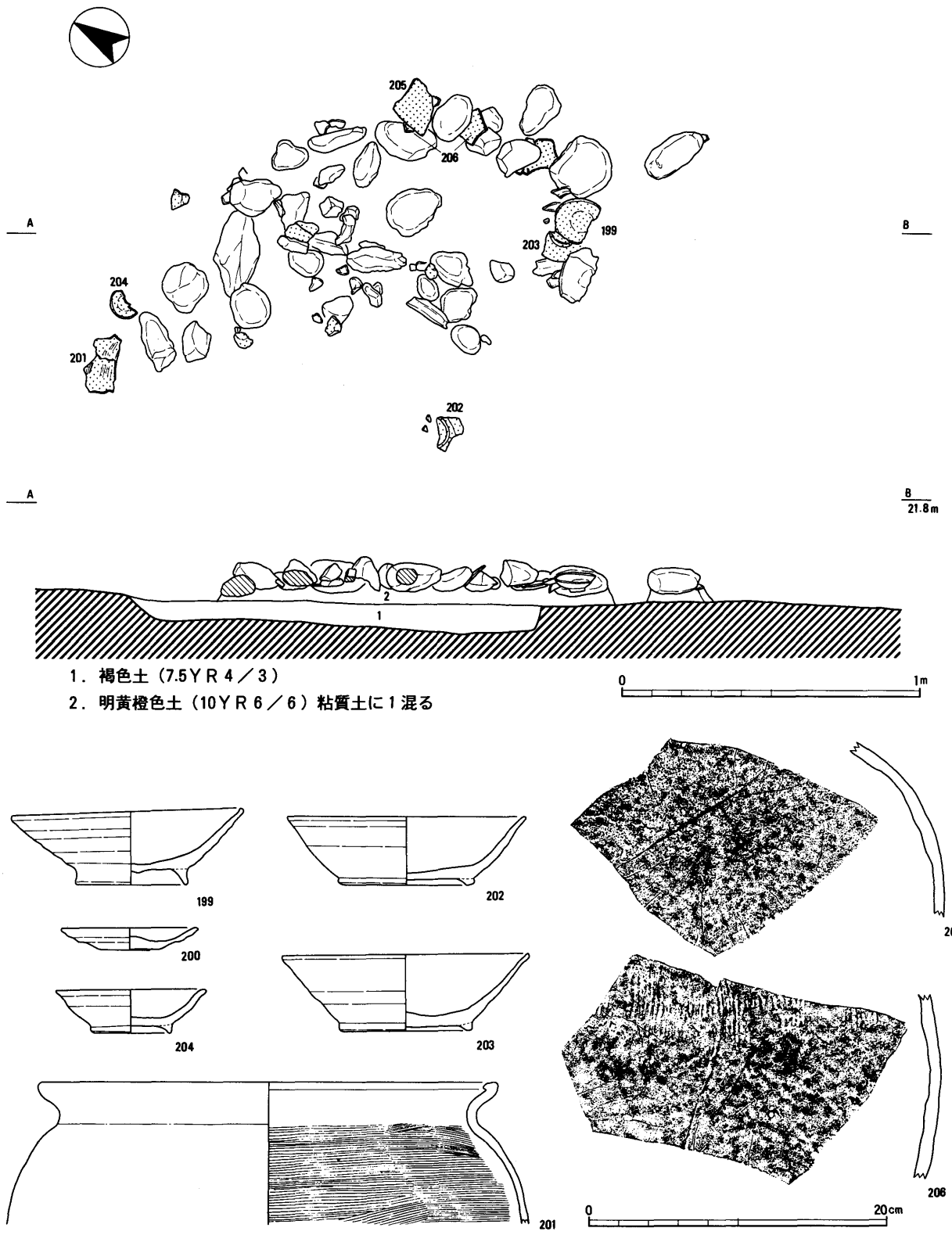
遺物としては、石の間などから土師器甕（201）、ロクロ製土師器（199・200）、山茶椀（202・203）、小椀（204）などが出土した。

土師器甕（201）は口縁端部の形状は平安時代末期の特徴をもつが、端部を内面に折り返す次期の手法の萌芽が認められる。

ロクロ製土師器には椀（199）と皿（200）がある。山茶椀は203のように、体部が直線的になり口縁端部が肥厚するやや新しい傾向も見られる。小椀（204）は断面三角形のしっかりした高台がつくもの。205・206は常滑産甕の体部片である。



第27図　ＳＺ16実測図（1：50）



第28図　ＳＺ17実測図（1：20）、出土遺物実測図拓影（1：4）

掘立柱建物

平安時代以降と考えられる掘立柱建物が多数あるが、現地で確認できたのはごくわずかである。出土遺物がなく、時期の決め手を欠くものも多い。ここでは、不詳・不明のものも含めて一括して取り扱った。それぞれの時期や規模等については、一覧表にまとめたので、ここでは主なものについて述べることにする。

ＳＢ20　中調査区の南東端で検出した。各柱穴は直径40～50㎝の略円形の掘形をもつ、桁行３間、梁行２間の東西棟の建物と考えられるが、西側柱の柱穴は精査したものの検出できなかった。奈良時代の竪穴住居ＳＨ10の埋土に柱穴を掘り込んでいる。柱穴より土師器杯（180・181）や皿（182）、甕（183～184）、製塩土器片が出土した。土師器杯などの特徴から、平安時代前期に位置づけられる。

出土遺物

土師器杯（180・181）　180はＳＨ２の出土遺物として取り上げられている。181は底部外面ヘラケズリがなされるものである。

土師器皿（182）　底部外面には２周ほど強くユビオサエした痕跡が明瞭に残る。

土師器甕（183～184）　いずれも小片。丸みを帯びた口縁部は頸部から強く外反する。特に183などは直角に近い。体部外面には粗い縦位のハケメが施される。ほかに把手付き甕もある。

製塩土器は図示しなかったが、口縁部を欠くもので、胎土は良いが２～４㎜程度の砂粒を多量に含むものである。

ＳＢ21　ＳＢ20に重複する位置で検出された。桁行３間以上、梁行２間の東西棟と考えられるが、疑問が残る。北側桁行の柱穴が、他の遺構が重複するため確認できなかった。柱穴から土師器、ロクロ製土師器、山茶椀が出土した。平安時代末ないし鎌倉時代初頭ころと考えられる。

出土遺物

土師器（185～188）　やや厚めの器壁から口縁部は薄くなり、丸みをもって仕上げられる椀（185）と、底部から急角度で立ち上がる杯（186）、口縁部外面にヨコナデによる面をもつ皿（187）と小皿（188）ががある。

ロクロ製土師器（189）　底部のみ遺存。糸切り痕が残る。

土師器甕（199・191）　いずれも小片。頸部からく字状に外反した口縁部は、端部で丸みをもちつつ内側へ摘まれ、水平方向に面を持つ。

山茶椀（192・193）　いずれも断面三角形のしっかりした高台をもつ。体部は丸みを帯び、器高も高いめで、口縁部付近で外弯する。

ＳＢ22　ＳＨ11の東２ｍほどに位置し、ＳＢ20・21と重複する。桁行３間×梁行２間の南北棟建物であるが、柱間が0.9～1.1ｍほどと狭い。平安時代末ないし鎌倉時代初頭ころと考えられる。柱穴からは、ロクロ製土師器椀（194）のほか、縄文土器や土師器の小片が出土した。

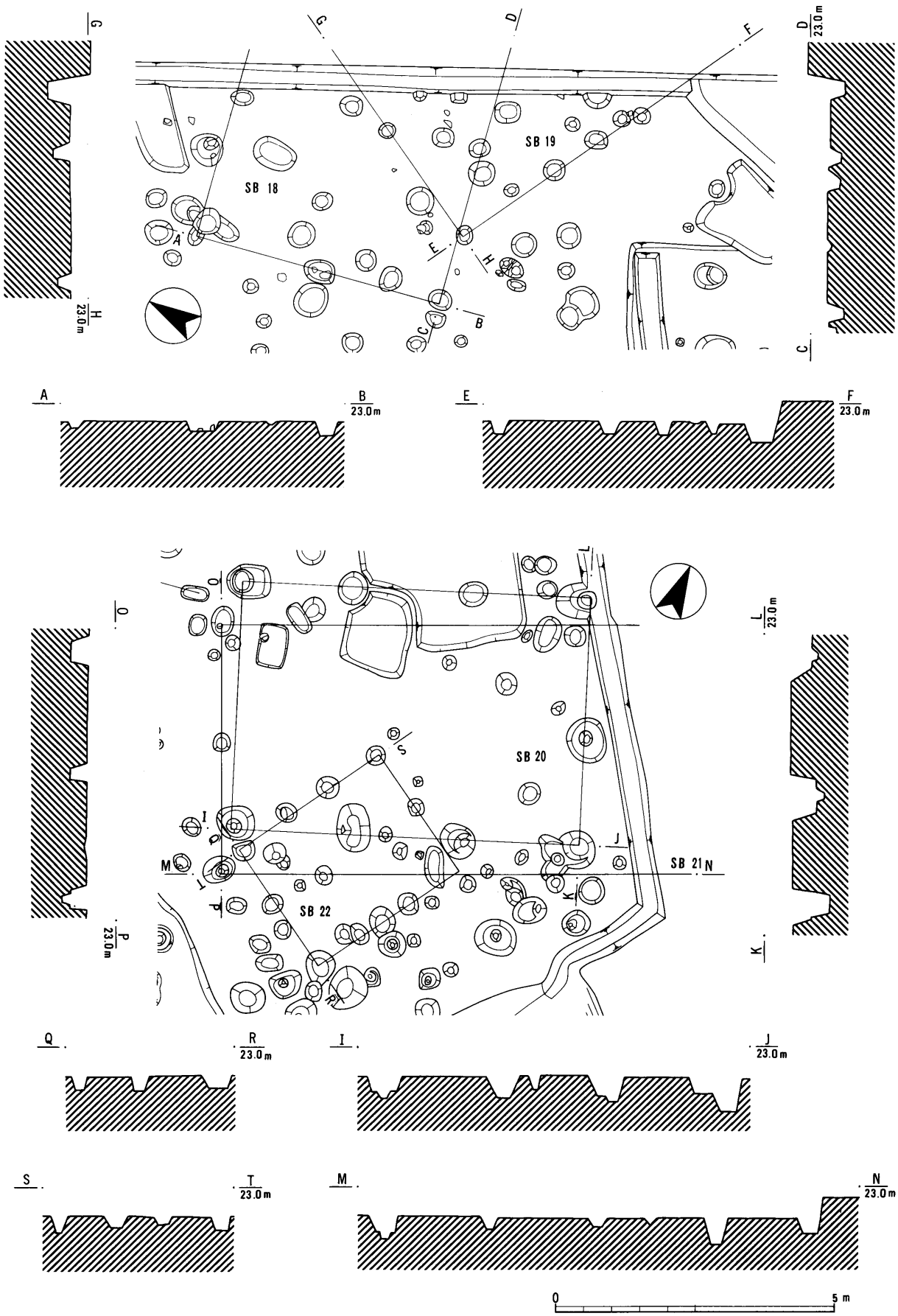
ＳＢ23　ＳＢ20の西南約４ｍに位置する桁行３間×梁行２間の東西棟の建物。棟方向はＥ23°Ｎで、ＳＢ20とよく似た方向である。平安時代末ないし鎌倉時代初頭ころと考えられる。柱穴より縄文土器片、土師器皿・甕、須恵器片などが出土した。図示できるものは土師器の小皿（195）しかない。

ＳＢ24　ＳＨ11の西に隣接する桁行３間×梁行２間の東西棟建物と考えられるが柱通りはよくない。各柱穴から縄文土器や土師器などが出土している。図示できるものは混入品のタタキ目のある甕（196）のみであるが、出土した土師器甕や皿、山茶椀などから、平安時代末から鎌倉時代初頭ころと思われる。

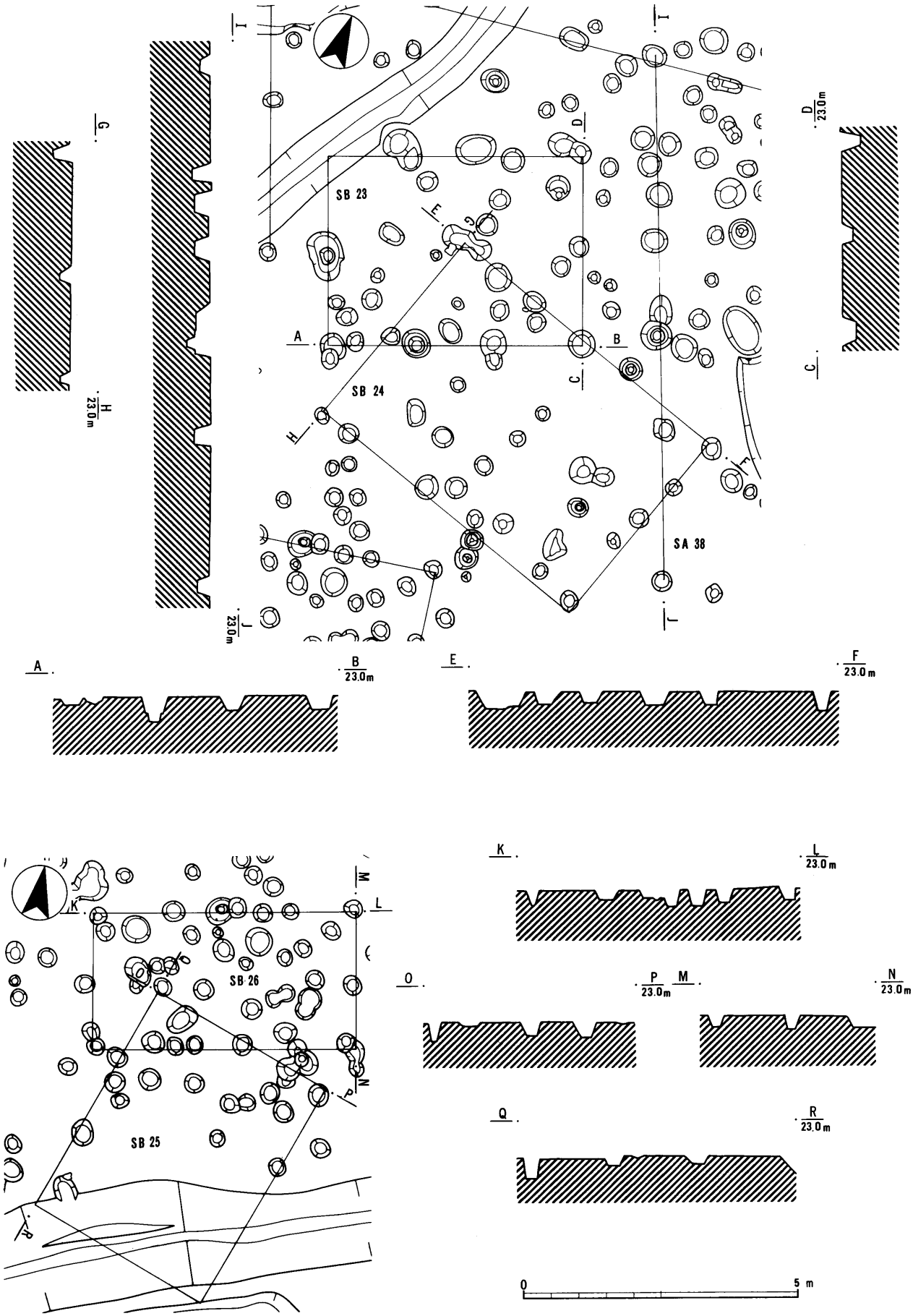
ＳＢ25　ＳＢ24の南４ｍに位置する桁行３間×梁行２間の南北棟と思われる建物である。南部分は奈良時代の大溝ＳＤ10を掘削する際に見落としたものと思われ、柱穴は検出されていない。ＳＢ24と棟方向がほぼ直行する。柱穴からは図示できるものはないが、縄文土器片や土師器杯・甕のほか、製塩土器片も出土している。平安時代におさまる建物であると思われる。

ＳＢ26　ＳＢ25に一部重複する位置にある。桁行４間×梁行２間の東西棟である。柱穴からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

ＳＢ27　ＳＢ26の西約４ｍに位置する。梁行２間の東西棟と考えられるが、ほとんど調査区外のため全容は不明。柱穴からの遺物の出土もなく、時期も不明である。



第29図　ＳＢ18・19・20・21・22実測図（1：100）



第30図　ＳＢ23・24・25・26実測図（1：100）

ＳＢ28　中区の南半中央部に位置する。桁行３間×梁行２間の南北棟の建物である。柱穴より土師器皿や甕（197）が出土した。平安時代末期に属しよう。

出土遺物

土師器甕（197）　器壁の薄い球状の体部から、口縁部が直立気味に立ち上がる。端部は丸みを帯びつつ内折する。

ＳＢ29　ＳＢ28と重複する桁行３間×梁行２間の東西棟の建物。棟方向はＳＢ28とほぼ同じである。柱穴より土師器、須恵器、土錘などの小片が出土しているが、図示できるものはない。出土遺物より、この建物は平安時代に属しよう。

ＳＢ30　ＳＢ28・29に重複する２間×２間の総柱建物。柱穴の規模は40～50cmの円形で、他の掘立柱建物の柱穴の規模よりやや大きい。柱穴より平安末～鎌倉初頭ころの遺物が出土しているが、時期については不詳である。

ＳＢ31　ＳＢ28・29の南に位置する桁行３間×梁行２間の東西棟である。柱穴から縄文土器、土師器などが出土している。出土した土師器鍋の特徴から、鎌倉時代前期の建物と判断。遺物は図示できない小片ばかりである。

ＳＢ32　ＳＢ32に重複する。桁行３間×梁行２間の東西棟である。出土遺物がなく、時期は不明。

ＳＢ33　ＳＢ31の東に隣接する桁行３間×梁行２間の東西棟であるが、北側桁行の柱穴を確認できなかった。出土遺物には平安時代と思われる土師器杯片もあるが、山茶椀（198）があり、鎌倉時代前期と考えられる。

出土遺物

山茶椀（198）　やや低く潰れかけた高台がつき、体部の立ち上がりもやや直線的になっているが、口縁部はヨコナデのため外反し、端部はまだ厚くなっていないものである。底部は中心部分が薄い。

ＳＢ34　ＳＢ38に一部重複する位置にある。桁行３間×梁行２間の南北棟と考えられるが、確認できていない柱穴が多く、疑問が残る。出土遺物もなく、時期も不明である。

ＳＢ35　ＳＢ33の東に隣接する位置で確認。桁行３間以上×梁行２間の東西棟。東部分は調査区外にのびるため不明である。柱間距離が若干異なるが、ＳＢ31と棟方向をほぼ同じくする。柱穴からの出土遺物に土師器細片が多いが、明確な時期は決めがたいものの、鎌倉時代後期以降かと思われる。

ＳＢ36　ＳＢ35の南に位置する２間×２間の総柱建物である。ＳＢ30とよく似た規模であるが、方向に若干違いが見られる。出土遺物はごく微量のため不明ながら、ＳＢ30とほぼ同時期と思われる。

ＳＢ37　中地区の北半で一部が検出された。東西２間分、南北２間分が確認されたが、あとは調査区外へのびるため不明である。柱穴からの遺物の出土はなく、時期は不明である。

ＳＡ38　中地区の南半中央部付近に位置する。ＳＢ23の東で南北４間の柵列と思われる。ＳＢ20・21・23などと方向を同じくする。柱穴から土師器小皿片が出土しており、鎌倉時代前期と考えられる。

ＳＡ39　ＳＢ23西側にのびる南北方向の柵列と思われ、南北６間分のピット（一部欠）が相当するが、柵列とするかどうか問題が残る。柱間距離は2.8ｍほど、北端でほぼ直角に東へ折れるかもしれない。出土遺物は縄文土器の細片しかなく、時期は不明。

ＳＡ63　中地区南半部を東西にのびる柵列。柱穴の掘り形は長円形である。縄文土器、土師器、山茶椀などの細片が出土しているが、時期は中世後期もしくは近世以降の新しい時期のものであろう。

Pit.68（Ｒ33 Pit６）

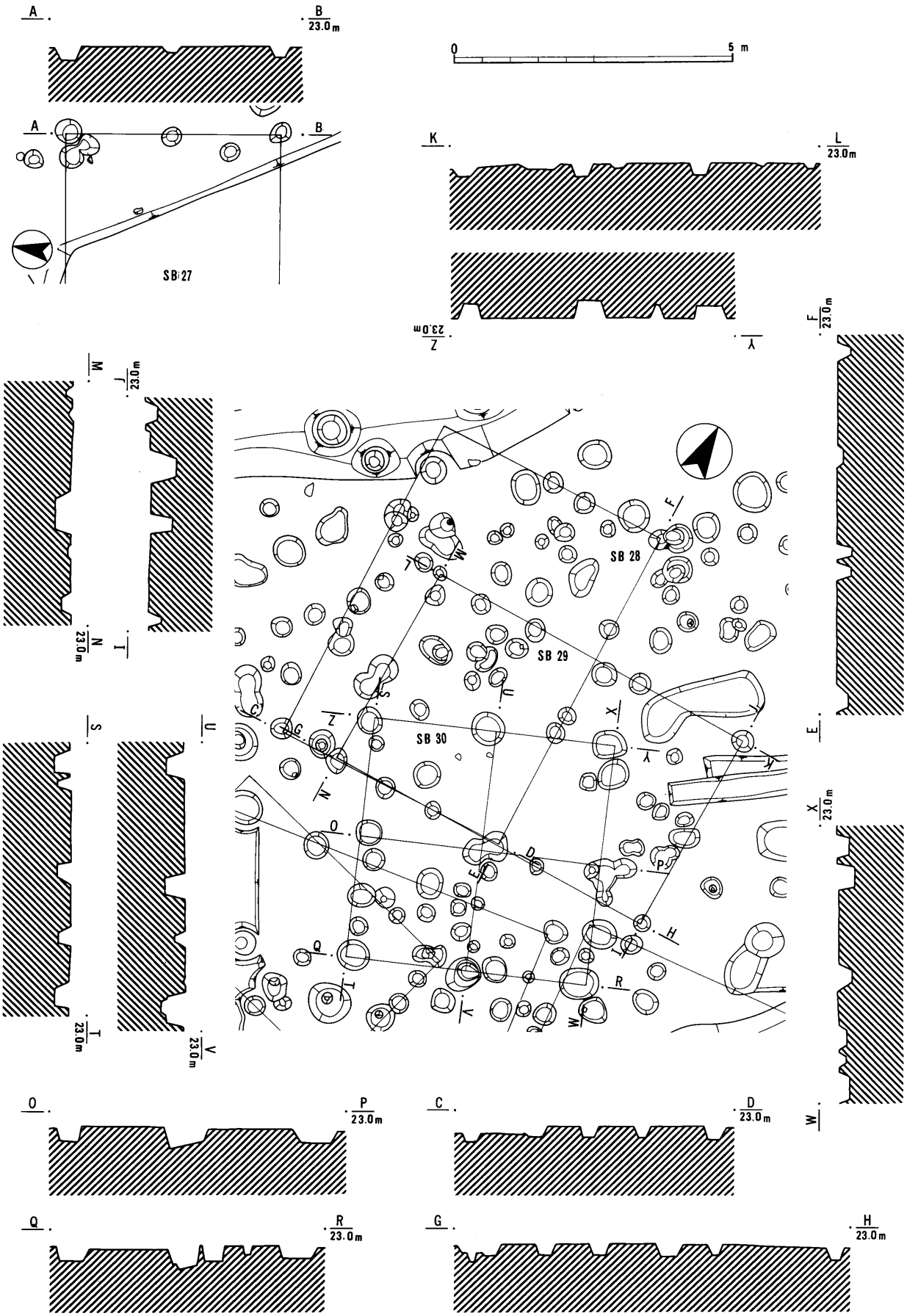
中地区の南東部付近、ＳＨ10とＳＨ11のほぼ中間に位置する。平面形が0.5×0.8mの長方形を呈するピットで、検出面からの深さは10cmほどであった。

ピットの端近くで底面から少し浮き、傾いた状態で完形の土師器鍋（207）が出土した。この鍋は口径が18.4cm、器高11cmで体部外面に煤が付着している。鎌倉時代前期に比定できる。なお、この遺構の性格は不明である。

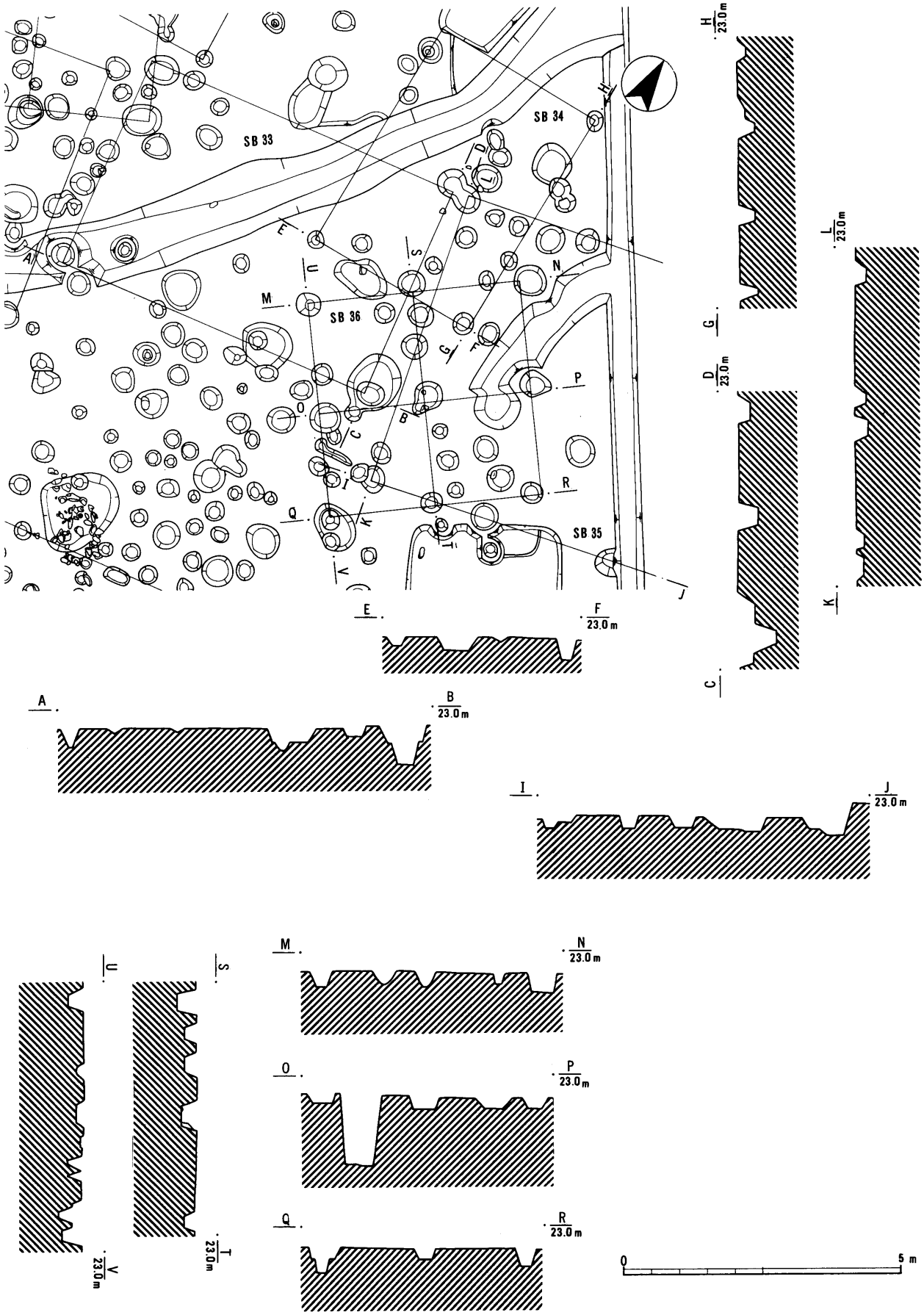
ＳＤ40

中地区の南西部にて検出。平安時代後期の溝ＳＤ15を切って、南東から北西方向へ流れ、段丘崖で切れている。幅0.9ｍ、深さ0.5ｍ、断面は逆台形である。南端に重複する土坑との切り合い関係は不明であるが、同一の遺構とも考えられる。

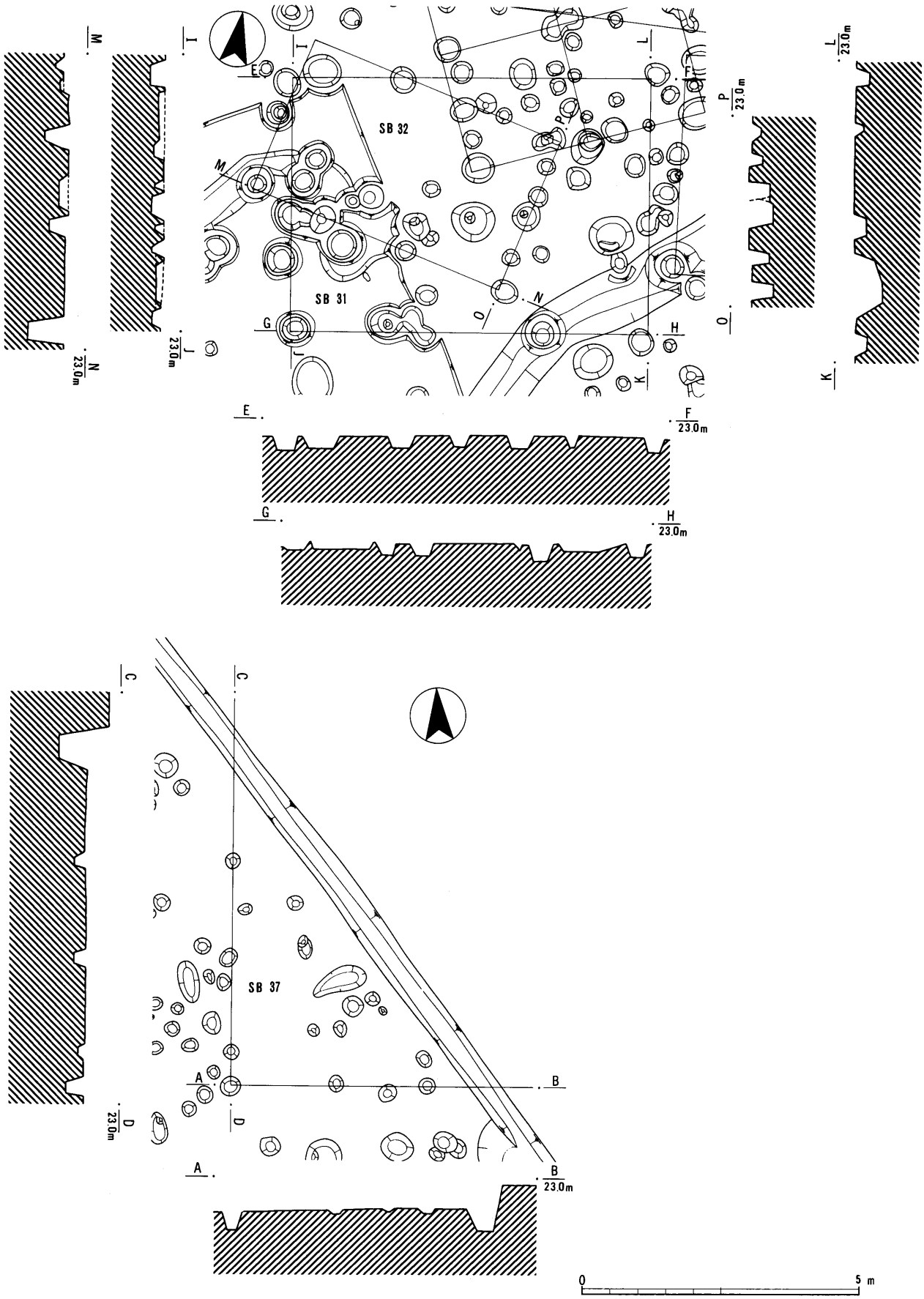
出土遺物



第31図　ＳＢ27・28・29・30実測図（1：100）



第32図　ＳＢ33・34・35・36実測図（1：100）



第33図　ＳＢ31・32・37実測図（1：100）

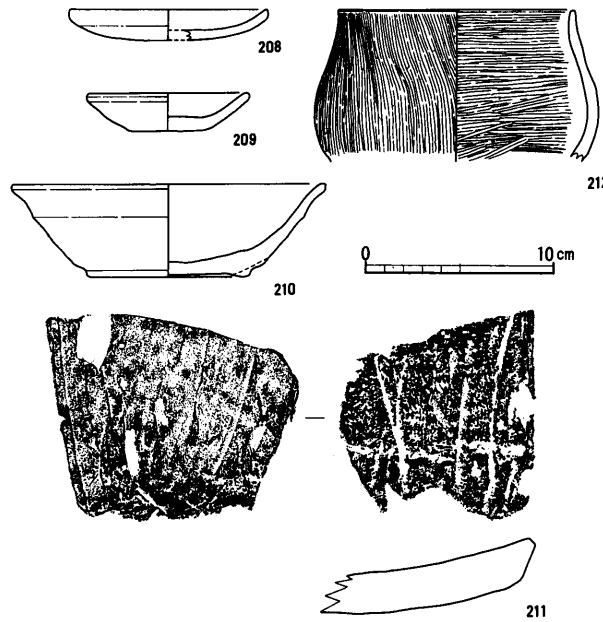
土師器小皿（208）　口縁部外面にヨコナデによる面をもつもので、やや浅い器高のもの。

山茶椀（210）は低い高台のつくもの。山皿（209）は無高台である。

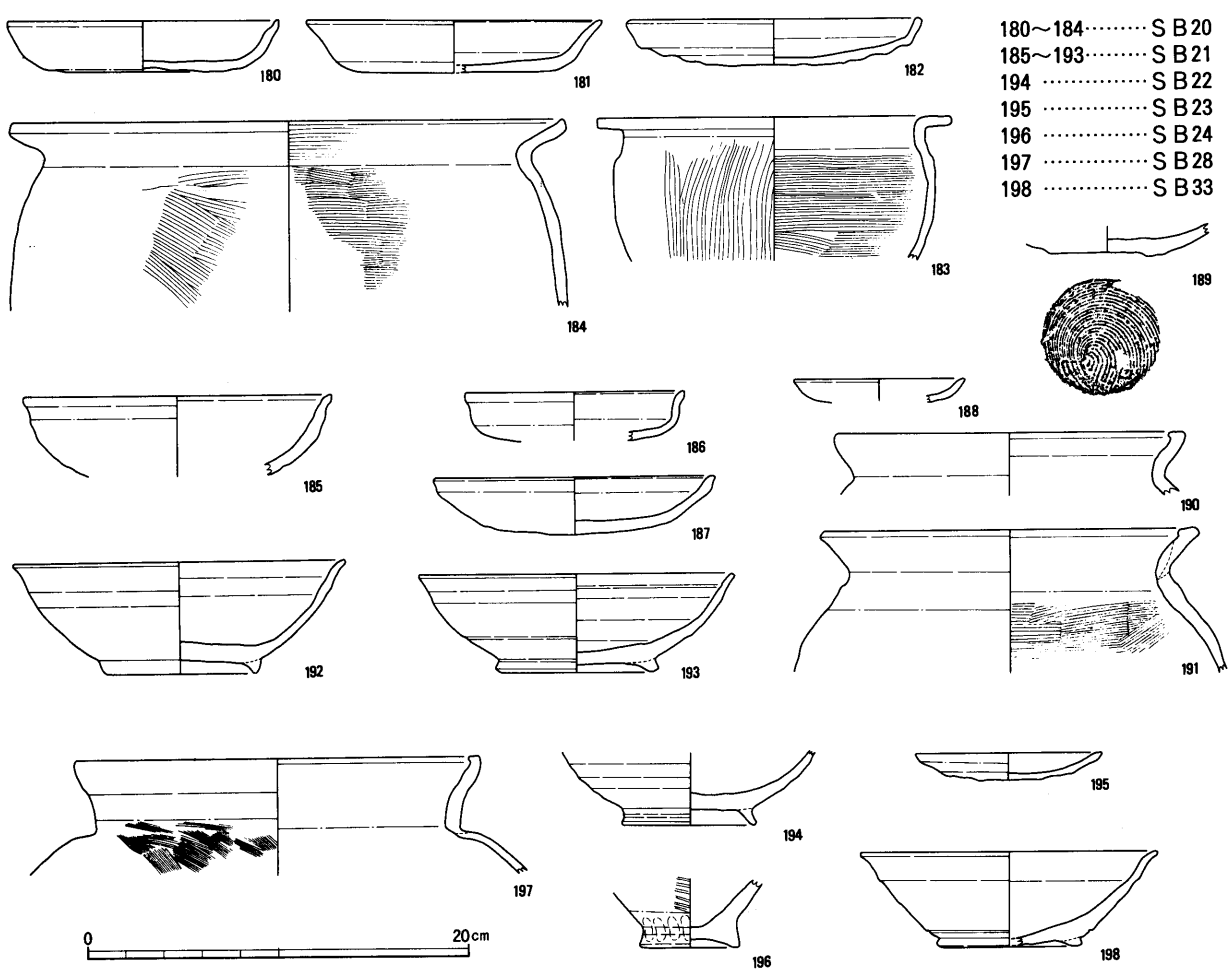
211は平瓦片で、非常に精良な胎土が使用されたもの。凸面はヘラズリ、凹面は布目痕が残る。このほか、混入品と考えられる弥生時代後期の高杯（212）などがある。　（田　村）

ＳＤ41

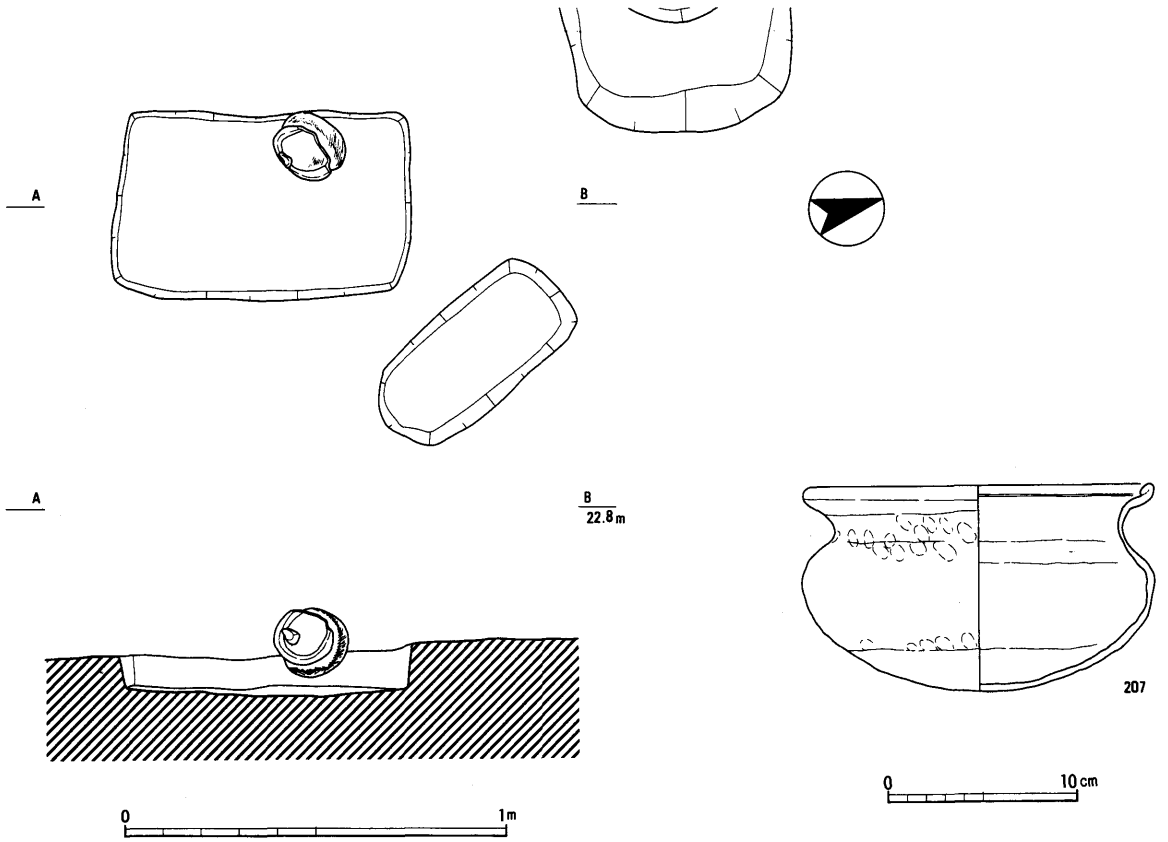
ＳＸ３の南側を、北東－南西方向に走る溝である。調査区の西半ではほぼ南北方向の流れとなるが、東半部と比べると、深さが10cmほどとかなり浅くなり、溝の肩のラインも明瞭さに欠けた。しっかりと検出された調査区東半部では、溝は二重になっているように見え、1.6～２m幅の溝（外溝）の中に60～70cm幅の溝（中溝）が通っている格好である。ただ、溝の南辺は、外溝の肩から中溝の肩まで斜面が続くのに対して、北辺ははっきりとテラス状の部分が見られ、単純に溝の中に溝が掘られたとは結論づけられないようである。テラス部分は、ＳＥ46に続き、また、調査区東壁近くでとぎれる。



第35図　ＳＤ40出土遺物実測図（1：4）



第34図　掘立柱建物出土遺物実測図（1：4）



第36図　Pit.68実測図（1：20）、出土遺物実測図（1：4）

遺構名	規　模	棟方向	桁行（m）	梁行（m）	柱間寸法（m）		時　期	備　考
					桁行	梁行		
SB18	（2）×2	E18° N	−	4.6	2.6	2.3		
SB19	（2）×（1）	E22° S	−	−	2.3	2.0		
SB20	3×2	E20° N	6.1	4.5	2.0	2.25	平安前期	
SB21	（3）×2	E22° N	−	4.5	2.0	2.25	平安末～鎌倉	
SB22	3×2	N33° E	3.0	2.5	1.0	1.25	平安末～鎌倉	
SB23	3×2	E23° N	4.5	3.5	1.5	1.75	平安末～鎌倉	
SB24	3×2	E17° S	6.0	4.0	2.0	2.0	平安末～鎌倉	
SB25	4×2	E10° N	4.8	2.6	1.2	1.3	平安	
SB26	（2）×2	N23° E	−	3.4	−	1.7		
SB27	−×2	E10° N	−	3.8	−	1.9		
SB28	3×2	N5° W	6.3	4.4	2.1	2.2	平安末期	
SB29	3×2	E3° N	6.2	3.8	2.1	1.9	平安	
SB30	2×2	E25° N	4.3	4.3	2.15	2.15		総柱
SB31	3×2	E10° N	6.4	4.6	2.3	2.3	鎌倉前期	
SB32	3×2	E10° S	4.8	2.9	1.95	1.95		
SB33	3×2	E13° N	5.9	4.0	2.0	2.0	鎌倉前期	
SB34	3×2	N2° W	4.5	3.2	1.6	1.6		
SB35	（2）×2	E13° N	−	5.4	−	2.7	鎌倉後期～？	
SB36	2×2	N35° W	3.9	3.8	1.95	1.9		総柱
SB37	（2）×（2）	N4° E	−	−	2.0	1.8		柱間距離不揃
SA38		N23° W			2.5		鎌倉前期	柱間距離不揃
SA39		N22° W			2.8～3.6			柱間距離不揃
SA63		E8° N			2.8～3.0			柱間距離不揃

第4表　掘立柱建物・柵列一覧

遺物

土師器の小皿・皿（ロクロ製土師器を含む）・椀（ロクロ製土師器）・鍋、山皿・山茶椀・捏鉢等の陶器類が出土している。

土師器

小皿（213）・皿（214・215）　口縁端部をヨコナデし、内面はナデてきれいにするが、外面は指オサエの痕で凸凹したままの皿である。

ロクロ製土師器皿（216）・椀（217・218）　216は底部を疑高台状に突出させている。椀は、ロクロ水挽きで成形し回転糸切りした体部に高台を貼りつけたものである。217は通常の平らな底部に高台を貼りつけ、白色に近い胎土であるのに対して、218は疑高台状に厚くなった底部に高台を付け、胎土は赤みを帯びたものである。

鍋（219～221）　口縁部は、上方に延びる短い頸部の先を外反させている。端部は折り返しにより肥厚させている。219と220は内面にハケメの跡が薄く残る。

陶器

山皿（222）　口縁端部のヨコナデが強く、外弯する。底部は疑高台状に出っ張り、1／2ほどの残存部からは、回転糸切り痕をナデ消したような様子が窺える。

山茶椀（223～235）　223・224・226・229などは、体部に丸みがあり、比較的器壁が薄く、高台の作りも貼りつけ方もやや丁寧である。比して、225や228は体部がやや直線的で、高台がかなりぞんざいである。藤澤編年に当てはめると、前者が4型式に近く、後者が5型式ということになろう。

鉢（236）　体部外面はヘラ状工具で調整してあるようだが、非常に弱くわかりにくい。

ＳＤ51

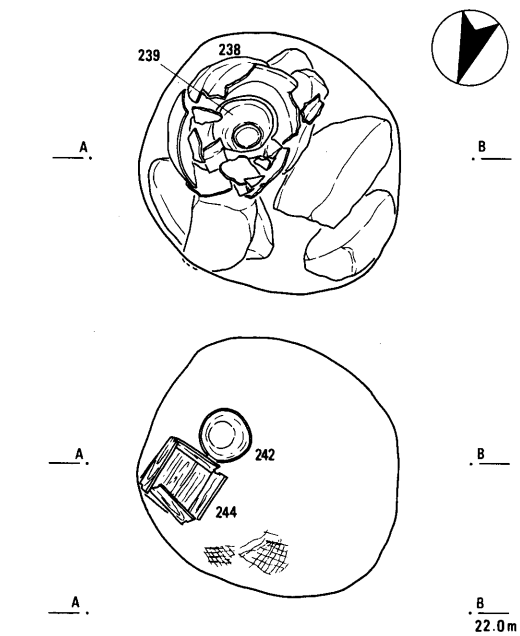
ＳＤ41と2～3ｍの間隔をもってほぼ平行に検出された。幅60cm、深さ20cmでかなり直線的である。ＳＤ41が流れを南北に変える地点で切れる。

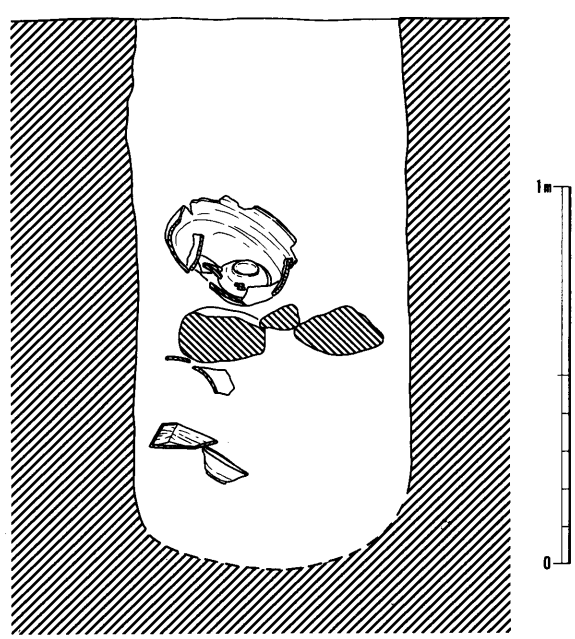
ＳＤ41とＳＤ51は、平行に近いという検出のされかたから、何らかの関係があるように思える。また、調査前、この2条の溝の上にはかなりの利用度があった農道が存在し、ＳＤ41が描くカーブはまさにその農道のルートである。ＳＤ41とＳＤ51に挟まれた部分は、当時も道路ではなかったのだろうか。

そもそもこの辺りは条里による方格地割りがなされていた所である。そんな中で、カーブをもった道路が水田を分けていたのには些か不自然さがあった。これらの遺構の時期には、ＳＤ41より北側はまだ水田には開発されておらず、自然堤防の微丘陵地のままであったのであろう。

ＳＥ42

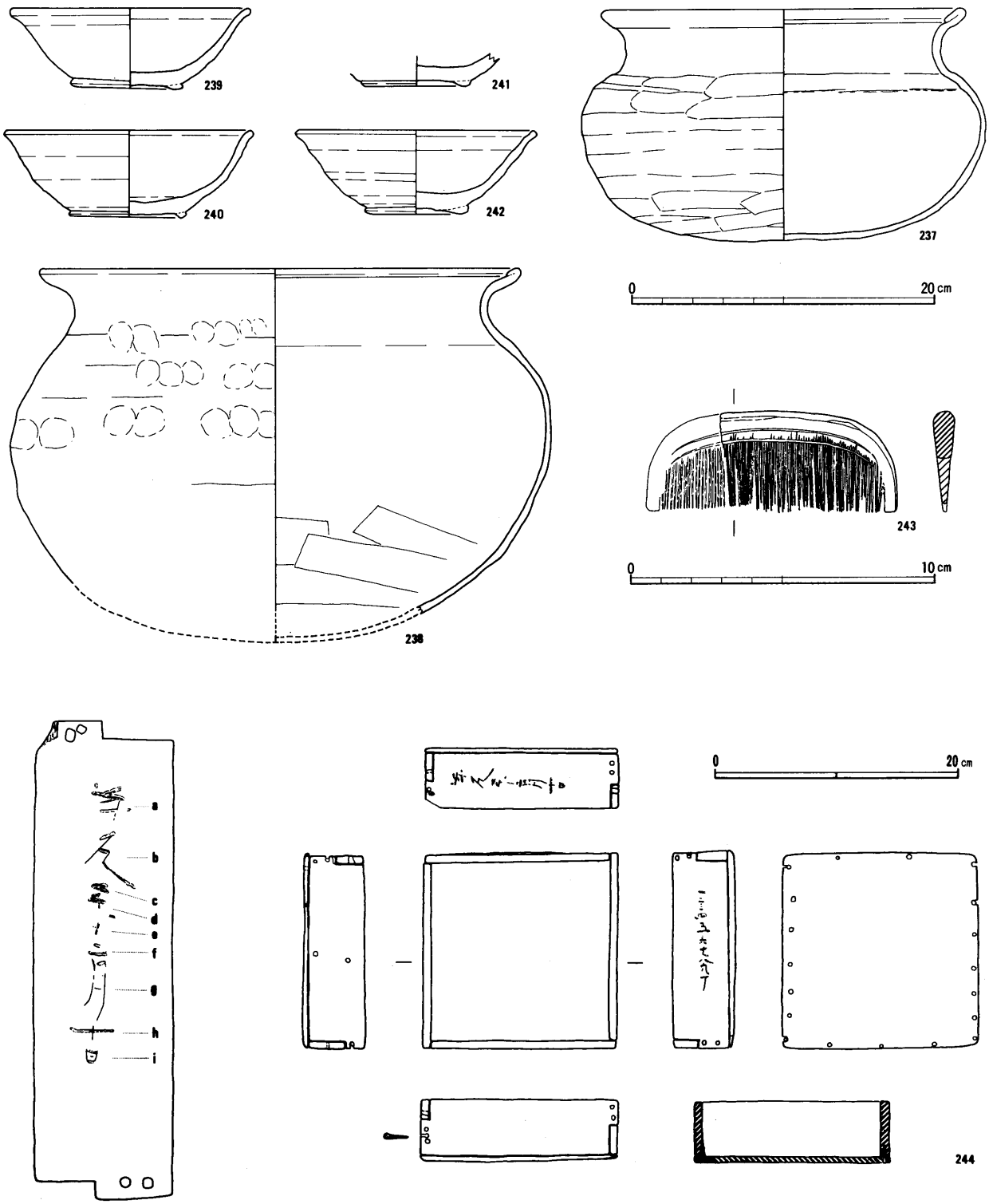
直径70cmで円筒形に掘られた素掘りの井戸である。検出面では、褐色土に暗褐色土が斑点状に混じっ





第37図　ＳＥ42遺物出土状況実測図（1：20）

た土が埋土として確認された。掘り下げていくと、検出面から50cmの深さで10～20cmの川原石がほぼ同レベルで5個見られ、その直下に土師器の鍋（238）が検出された。そしてこの鍋の中からは、2個体の完形山茶椀（239・240）が口を合わせた状態で見つかった。この出土状況からは、わざわざそのようにして井戸に沈めたと思われる作為的なものが強く感じ取られる。これらの下方、検出面から70cmの所では、再び川原石が見られたが、ここでは、30cm大の少し大きめの石が、あたかも井戸を塞ぐように7個詰まっていた。その下には土師器鍋（237）が、そしてそのさらに下、検出面から110cmほどで櫛・枡・完



第38図　ＳＥ42出土遺物実測図（１：４ほか）

形山茶椀（243・244・242）が検出された。これらの遺物の周辺には、藁状の繊維質の植物痕跡も残っていた。なお、櫛については、掘削した泥とともに検出され、出土状況図は録れなかった。井戸底部は少しすり鉢状になっており、最深部で検出面から1.45mの深さであった。

埋土掘削中、水が湧きはじめたのは土師器鍋（237）が検出されたあたりからである。水の湧き方は、当然天候にも左右されるが、通常は、50～60cmの深さでは水を全て除去したあと30分ほどで元の様に溜まるという程度であるが、底に近づくにつれて、水のしみだしが目に見えて分かるようになった。

遺物

土師器

鍋（237・238）　238は口径31.2cmの大型、237は口径23.5cmの中型鍋である。238の体部が球形に近いのに対して、237は底部が平たく偏平感がある。口縁部は両方とも同様の作りで、体部から上部に立ち上がる頸部を持ち、斜め上方に開いて端部を折り返し肥厚させる。

陶器

山茶椀（239～242）　体部がやや内弯して延び、口縁部が少し外反する。幅広感のある高台が貼りつけられる。

藤澤編年の5型式にあたる。

木製品

櫛（243）　現存長5.5cmの横櫛で、復元すると8.5cmほどの長さになろうか。中央部で2cmほどの深さの刻みを入れ、厚さ0.5mm弱の歯を作りだす。刻みは両側から施され、歯の基部からさらに8mmほど刻みの線だけがついている。表面には漆などの痕跡はなく、白木のままの製品だったようである。材質はイスノキであるという分析結果が出ている。

枡（244）　15.8×4.5×0.8cmの板の端部をカギ状に加工し、合欠状に組み合わせて正方形の枠を作り、底板を付けて容器としている。板のつなぎ合わせには長さ1.5～2.5cmほどの木釘を用いる。全体に雑な作りで、特に底板を留めるための釘の打ち方には規則性がなく、また、側板を割ってしまったり、側板からはみ出たりする釘もある。さらに、底板は枠に合わせた正方形ではなく、四辺のうち一辺が枠よりも2cmほど大きいままである。

側面のうち2面には線刻がある。一面には一から九までの漢数字が刻まれ、もう一面には年月日が刻まれる。

この升の容量は、14.8×14.6×4.5cm＝972.4cm³と計算できる。

〈　側面に線刻された年月日について　〉

現状で第38図のように線刻を写し取った。はっきり読み取れるのはｆ～ｉの最後の4文字であり、それぞれ「二」「月」「十」「日」と読める。ａ～ｅについては、推測もまじえて以下のように読むことができる。〔三重県埋蔵文化財センター主事小林秀氏に解読していただいた〕

・ｂ＝元、ｃ＝丶、ｄ＝「年」という字の頭の部分、としてみる。

　そうすると［ａ元元年］と読める。

・2文字目が「元」という字の元号を探す。

貞元（ 976～78）	寛元（1243～47）
天元（ 978～83）	康元（1256～57）
長元（1028～37）	正元（1259～60）
保元（1156～59）	乾元（1302～03）
安元（1175～77）	嘉元（1303～06）
承元（1207～11）	延元（1336～40）

・伴出する山茶椀から、平安末～鎌倉初の時期の年号にしぼると、保元・安元・承元・寛元あたりが候補となる。

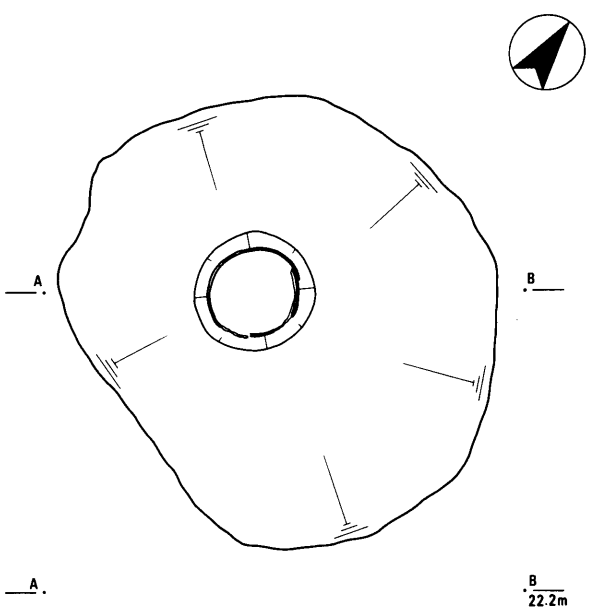
・「保」「安」「承」「寛」の形とａの形を比べてみると、どれとも似ていない。

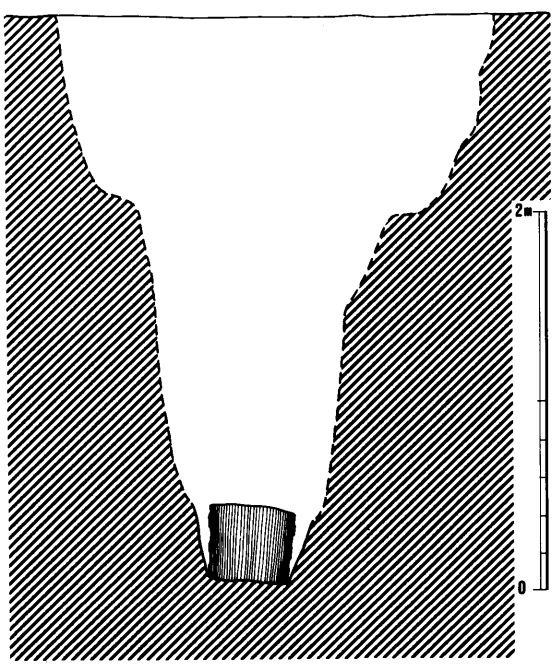
　しかし、それぞれの異体字まで考慮して比べてみると、ａは「承」の異体字の「𢘑」の上部によく似ている。

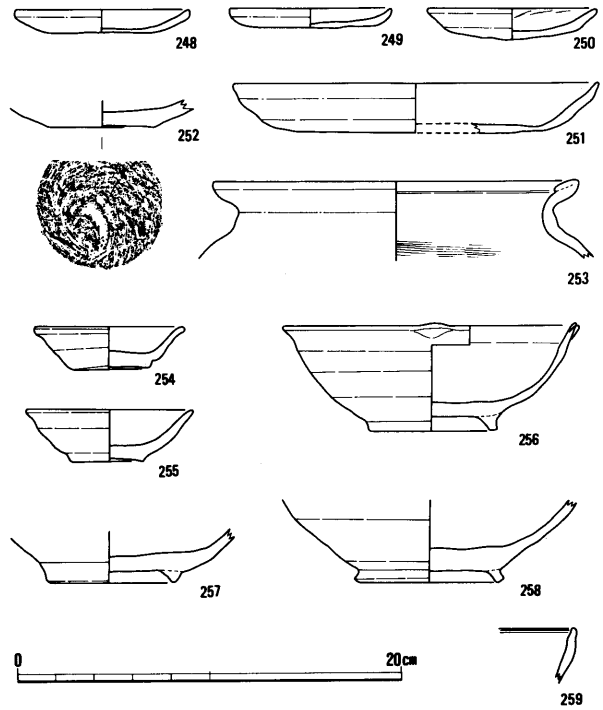
☆　すなわち、元号は”承元（1207～11）”と推測でき、ａ～ｄまでで、「承元丶年」ということになる。

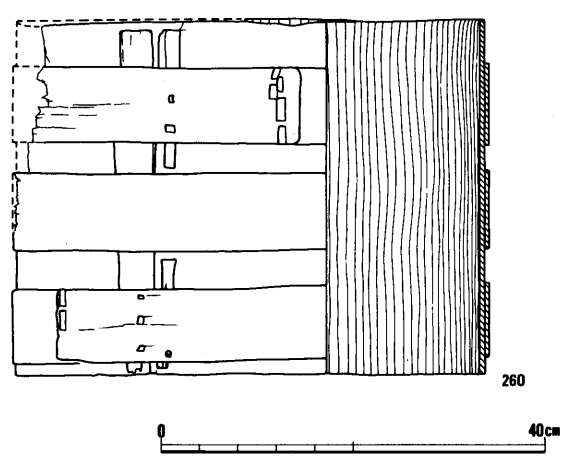
・ところで、ｅの「｜」はｄの「年」という字の最終画ともとれるし、漢数字の「十」の縦棒とも考えられる。前者の場合、日にちは「二月十日」となり、後者の場合は「十二月十日」となる。

・さてそこで、元号を承元とした場合、承元元年は10月25日から始まっていることから、承元元年の二月十日はあり得ず、従って、ａは漢数字の「十」









第39図　ＳＥ46実測図（1：40）、出土遺物実測図（1：4）

ということになる。

以上、この線刻は、

「承元丶年十二月十日」　と読める。

＊ 承元丶年＝1207年

ＳＥ43

直径90cmの円筒状に掘られた遺構である。埋土は灰色の砂と褐色土が混じったものであるが、底の方ほど砂の割合が多い。最深部までは77cmの深さであり、その底面には、20cm大の河原石があたかも置かれたかのように２個みられた。掘削中に水が湧いてくることはなかったが、井戸として掘られたもので

あろう。埋土の中に土師器皿（ロクロ土師器を含む）の細片や山茶椀片が混じっていた。

遺物

土師器皿（245）は胎土が白っぽく、1㎜大の砂粒が多数含まれる。口縁端部のみヨコナデされ、わずかに外反する。

ＳＥ44

直径1.2mの円筒形の素掘り井戸である。壁の崩落と湧水のため、1ｍほどの深さまで人力で掘り、あとは重機による断ち割り調査とした。

底は、砂利層手前のオリーブ黄色砂層で止まっており、検出面からの深さは2.1mである。

遺物

土師器片が少量と完形山皿（246）が出土した。246は外面に軽く稜を持ち、大きく2段に水挽きした指のあとが窺える。いわゆるヌタも見られる。

ＳＥ45

直径1.2mの円筒形の穴である。検出当初は井戸であろうと推測したが、検出面からの深さが40～50cmで底となってしまった。調査期間中、水が湧いて溜まるというようなことはなかった。形状からすると、やはり井戸であろうが、掘削の途中であったのだろうか？

遺物

土師器細片が少量で、図示できるものはいわゆるロクロ製土師器の小皿（247）が1点だけであった。

247の胎土は赤褐色で、白色の微細砂粒が混じる。底部に比べて口縁が薄く、内面では底部が盛り上がったように段ができている。

ＳＥ46

周溝墓ＳＸ3の溝部にかかる素掘りの井戸である。検出当初は直径2ｍ程の円形の平面形であったが、降雨により壁が崩れ2.0m×2.4mの不整形な円形となってしまった。

検出面から1ｍほどの深さで、壁の崩落、水の湧きだし等の理由から人力掘削を諦め、調査最終段階で重機による断ち割りを試みた。その結果、検出面から2.6mの深さで曲物が検出され、井戸の底部となった。曲物自体の深さ（曲物側面の高さ）は約40cmで、検出面からおよそ3ｍ下の砂利（2～3㎝大）層の上に置かれている。深さ3ｍの井戸は、当遺跡では最深である。

井戸上部は崩落により、また、下部は重機のバケットによる掘削のため、壁面の様子は正確には記録できなかった。しかし、深さ1.5mの所に、植物を多数含む暗褐色土が凸レンズ状に溜まっている部分があり、それを、この井戸のある時期の底であると考えると、径1ｍの円筒状井戸を想定することができる。ただ、曲物設置部分については元々の様子がよく観察できた。それによると、厚さ30～40㎝の灰色の砂層を径60～40㎝の逆円錐台状に抉り、そこにすっぽりと曲物を入れ込んでいる。曲物と砂層の間にできた隙間には、5㎜ほどの大きさの砂利がつめこまれていた。

遺物

人力で掘削した上部1ｍほどまでの部分で、さほど多くはないが土器が出土した。土師器皿・鍋と山茶椀・山皿である。ほとんどが破片であったが、山皿（254・255）は完形であった。また、1片ではあるが瓦器椀片もみられた。

土師器

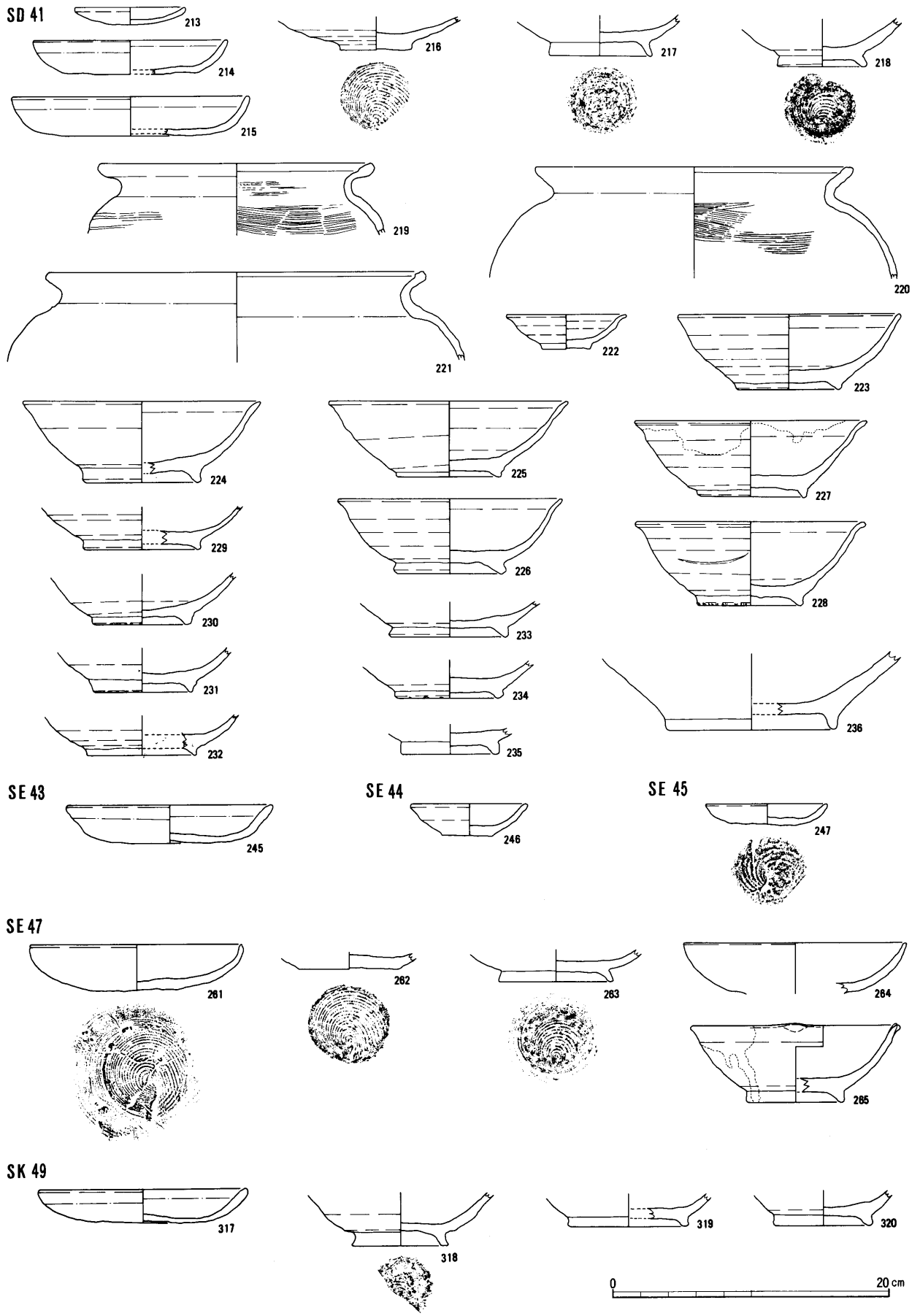
小皿（248～250）・皿（251）　口縁端部をヨコナデし、内面をナデ、外面は指オサエのままという成形パターンの皿である。248・249はやや薄い器壁で器面が少し波うった感があるが、250は少し厚手で248・249よりしっかりした感がある。251の皿は口縁が直線的に外方向に延び、端部で少しだけ内側方向に折れる。

ロクロ製土師器皿（252）　褐色で、他の土師器に比べて焼きの硬いものである。

鍋（253）　口縁から肩部にかけての9×5㎝程度の小片である。推定の口径は18.8㎝と、鍋としては小型である。肩部から軽く上方に折れ小さな頸部をつくり、その先に口縁部を広げる。口縁端部は折り返され、ヨコナデされている。肩部内面には横ハケが施される。

陶器類

山皿（254・255）・山茶椀（256～258）　山皿は、底部から若干の湾曲を持って斜め上方に体部が立ち上がり、口縁部でヨコナデが強くなりやや外反する。高台は持たないが、外面に段が見られ、疑高台とでも言うべき底部となっている。



第40図　ＳＤ41・ＳＥ43・ＳＥ47・ＳＫ49出土遺物実測図（1：4）

山茶椀も、やや湾曲した体部が底部から延びる。256は弱い輪花を持つ。

瓦器

椀（259）　口縁部のみの小片である。口縁部内面の沈線は端部に弱く施される。口縁は、横ナデにより内弯し、体部には指オサエ痕が見られる。ヘラミガキは、内面は密に施されるが、外面はかなり疎である。

木製品

曲物（260）　162×37×0.7cmの板に、ほぼ1cm間隔の切り目を入れ、円筒形に丸める。両端の重なった部分を桜の皮で留め、外周に幅8cmの板のタガを3枚入れる。タガと本体の間には薄い板を差し込み、隙間を埋めている。

ＳＥ47

直径1.2mの円筒形の素掘り井戸である。ＳＥ23と同様に、深さ1mほどまで人力掘削で、以下は重機による断ち割りとなった。検出面から1.7mで底となる。底部には、木の枝や竹片・草などの植物が比較的多くみられた。また、ロクロ製土師器皿（261）も底部から出土している。

遺物

ロクロ製土師器　261の皿は、口縁端部と内面についてはやや丁寧に仕上げているが、外面には指痕や粘土カスの付着が見られ、雑な仕上げであるといえよう。口縁端部は、ヨコナデが強くなされているのであろう、端部内面円周の一部に内傾する幅の狭い面をもつ。

264は体部のみである。やはり、内面は丁寧な回転ナデで、外面はほとんど水挽きのままという状態である。

山茶椀（265）　やや丸みを帯びて体部を立ち上がらせ、口縁端部を外反させる。1／2弱残存している口縁部分に輪花が一か所見られ、また、灰釉が漬け掛けされている。藤澤編年の4型式におさめることもできる山茶椀である。

ＳＫ48

ＳＤ8の埋土に掘り込まれた土坑である。径2.4～2.5mのやや方形がかった円形の平面形で、壁をほぼ垂直にして筒状に掘られている。検出面からの深さは1.2mである。底部はかなり平坦であると言えるが、一部に段状の不整形部分が見られる。埋土は概ねU字状に堆積する。

遺物

最上層と最下層以外で、ほぼ万遍無くどの層からも、土師器の皿（大・小）や鍋、山茶椀などが多数出土した。土師器の中にはロクロ製土師器も混じり、遺跡全体の、この時期（平安末～鎌倉初）の出土土器の縮図といってもよい。

土師器

小皿（266～292）　口径8～9cmの小皿である。器高は1.5cm程で、深さはあまりない。ロクロを使用せずに作られ、基本的に、口縁端部はヨコナデ、内面はナデ、外面は指オサエのままという調整方法である。ヨコナデの施され方により、口縁部外面にはっきりと面を持つものと、そうでないものとに分けることもできる。

皿（293～302）　口径15cm、器高3cm程である。製作技法は小皿に準じる。

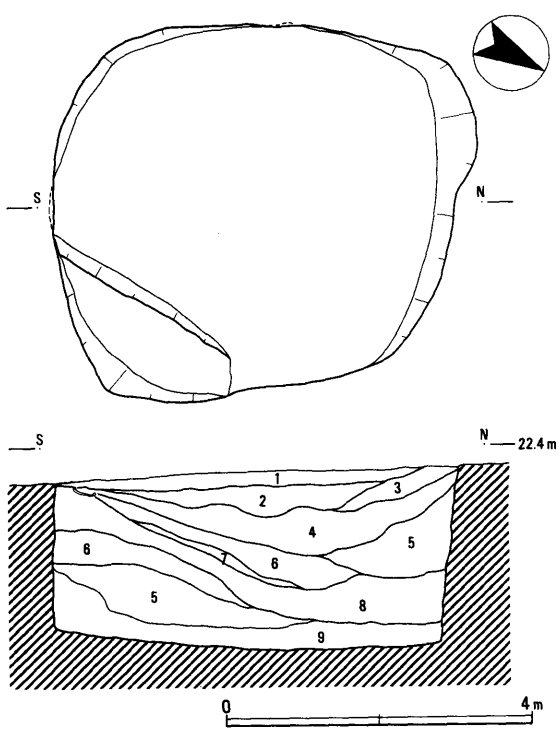
ロクロ製土師器小皿（303・304）　304は、底部がやや突き出て疑高台状になる。底面は、糸切り痕というよりも、棒状工具のようなものでナデられているようでもある。

ロクロ製土師器皿（305・306）　305の口縁部の内弯が目立つのに対して、306は直線的である。

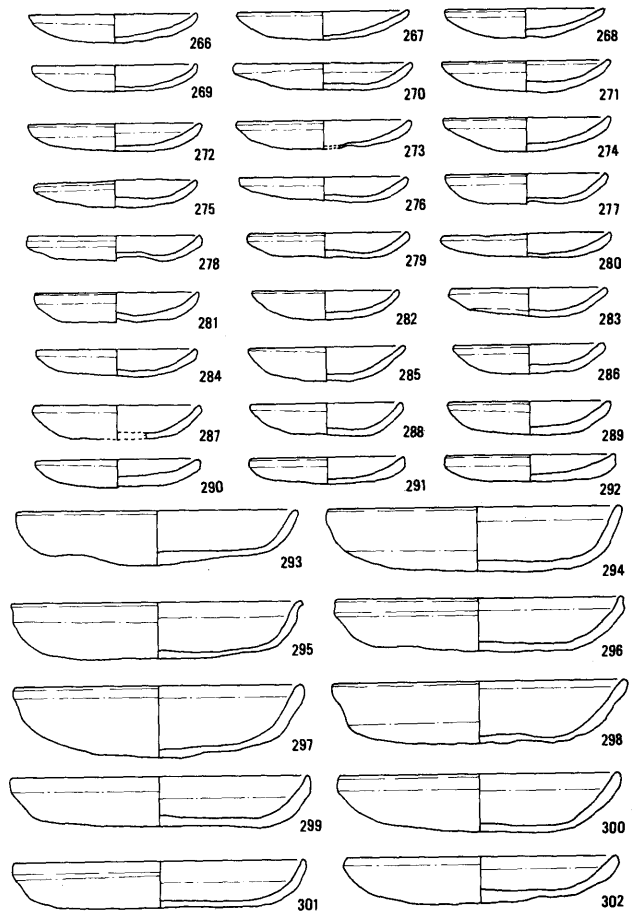
ロクロ製土師器椀（307・308）　307は乳白色の胎土で、308は橙色系の胎土である。307の高台が中頃から段を持って外に開くのに対して、308は直線的な高台である。

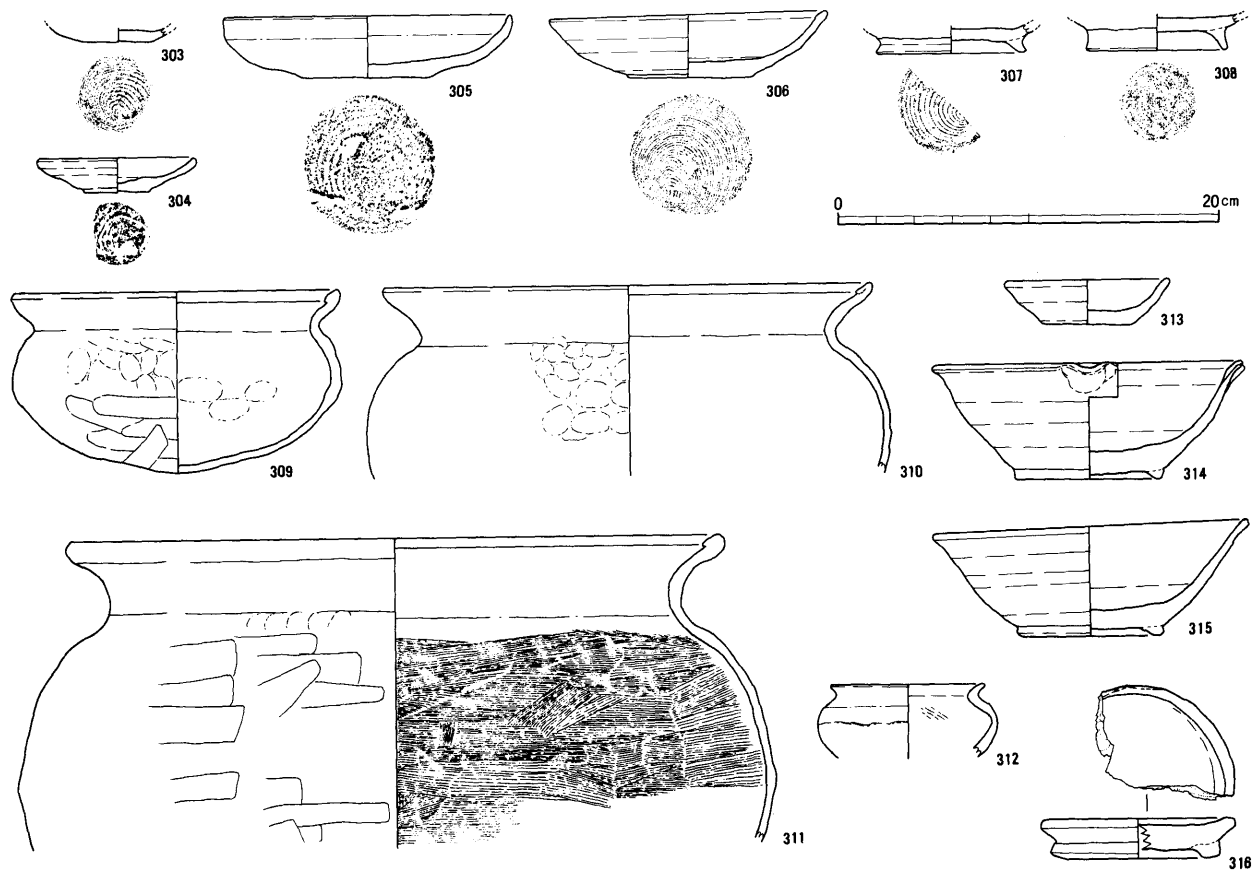
鍋（309～311）　大、中、小の3種の大きさがある。いずれも口縁端部を折り返し、肥厚させたものである。309と310は、口縁が体部から直接逆ハ字形に延びるが、311は少し上方に延びる頸部とも言える部分を持つ。調整は、口縁部はヨコナデ、体部上半は指オサエのまま、もしくはその上に軽いヘラケズリ（板ナデ）、体部下半はヘラケズリとなる。311は体部内面にかなり細かいハケメを施す。外面には煤が付着する。

ミニチュア鍋（312）　口径7.9cmの鍋形をした土器である。底部は見つけられなかったが、口縁部から体部にかけての破片が2片と口縁部のみの破片が1片ある。口縁部は3片合わせて2／3ほど残る。



1．暗褐色(10YR3/4)土。
2．1に淡黄色(5Y8/4)粘質土ブロックと黒色土粒が混じる。
3．1＋淡黄色(5Y8/4)砂質土。
4．1＋黒色(10YR2/1)土。
5．褐色(10YR4/4)土。
6．5＋明黄褐色(2.5Y7/6)土。
7．炭化物。
8．5＋炭化物。
9．オリーブ褐色(2.5Y4/6)やや粘質土。





第41図　ＳＫ48実測図（1：50）出土遺物実測図（1：4）

口縁から体部までの破片の一方には内外面とも炭化物の付着が見られるが、もう一方は、表面が風化したのであろうか、それが見られない。口縁端部に折り返しはなく、鍋形の土器をそのまま真似た特別な用途の土器とは即断できないが、ここでは取り敢えずミニチュア鍋としておきたい。

陶器

山皿・山茶椀（313～315）　山皿（313）は、体部に少し丸みがあり、口縁をやや外側に反らす。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部との境（底面円周）を面取りをするようにナデている。口縁端部から内面にかけて自然釉がみられる。山茶椀は、器壁が口縁に向かって少し薄くなり、口縁部を外反気味にする。高台は低く、貼りつける際に高台内側を潰すようにナデている。314は輪花が一か所施されている。

硯（山茶椀からの転用硯）（316）　山茶椀の体部を欠いて底部だけにし、その欠き口を磨り削ってきれいにし、硯としている。山茶椀の見込みにあたる部分は、墨を擦ったのであろ磨耗してツルツルとはしているが、それでもまだ表面の細かい凹みは消えておらず、それほど長い期間の使用ではなかったようである。高台は幅広のボリューム感あるものである。

これらの山茶椀は、藤澤編年の５型式の時期にあたる。

ＳＫ49

調査区東端で検出され、調査区外へも延びる土坑である。南西－北東方向に長軸をもつ楕円の平面形であるが、南西の先端部にはピット状の窪みがある。深さは、最大値をとると30cmである。

遺物

ＳＤ41等と同様の土器片が出土している。318のロクロ製土師器椀は白っぽい胎土である。（西　村）

６．鎌倉末期～室町時代の遺構と遺物

ＳＫ52

平面のほとんどの面積が試掘坑にひっかかった遺構である。一辺1.1mの正方形に近い土坑で、深さは、検出面から７～８cmほどである。

遺物は出土しなかったが、平面形や規模から、ＳＸ53と同様の性格を持つものと思われる。

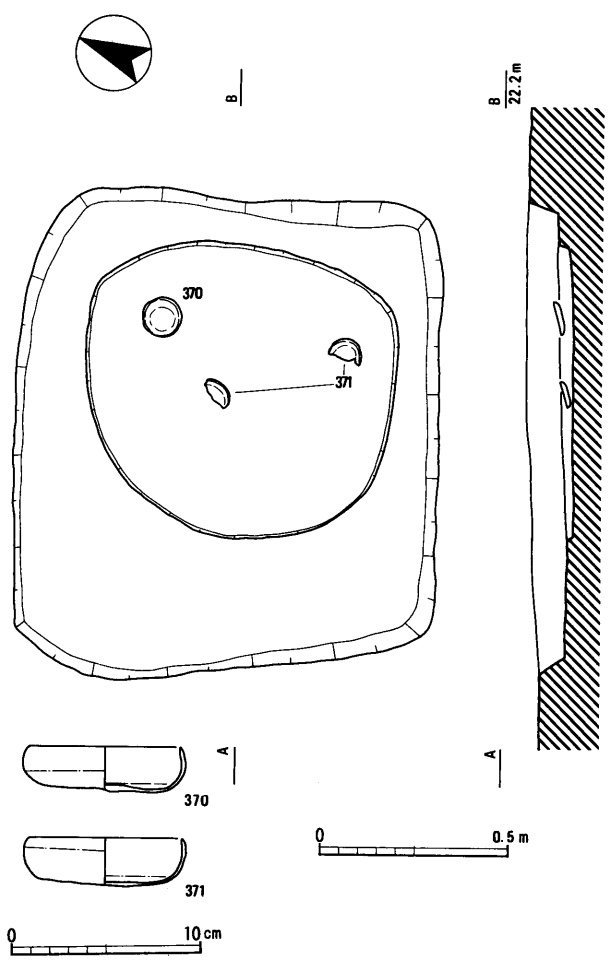
ＳＸ53

1.1×1.2mの隅丸方形プランの土坑である。検出面からの深さは８cmと浅いが、壁面は垂直に近く、底面もフラットで、わりと丁寧に掘られた感がある。平坦な底面の中央よりやや東に片寄って、径75～85cmのやや歪な円形の褐色の染みが見られ、その染みの範囲内に土師器皿が２個体分（370・371）検出された。370は、割れてはいたものの完形での検出であったが、371は２箇所に分散しての出土であった。染み込みの深さは１～２cm程の浅いものであった。

想像の域は出ないが、染みの部分が桶状木製品の痕跡とも考えられなくはなく、骨片などは見当たらなかったものの、埋葬施設である可能性も捨てきれない。

遺物

土師器小皿（370・371）　両方とも薄く作られ、大きさも形もよく似ている。370は、口縁部を内弯さ



第42図　ＳＸ53実測図（1：20）出土遺物実測図（1：4）

せ、内面をナデ調整し、外面は指オサエのままとしている。口縁端部はあえて特別にヨコナデなどの調整はしていない。371の方の調整は、表面の風化によりはっきりしないところが多いが、おそらくは370と同様であろう。

ＳＺ54

調査区東端で検出された、集石を伴う遺構である。比較的新しい耕作溝や他の遺構のためはっきりはしないが、隅丸方形らしい掘り方をもつ。その掘り方の中に、30～40cm大の川原石を１～２段半円形に並べ、その弧内に20cm大の石が投げ込まれたかのように雑然と集められている。石の間には、土師器鍋・小皿、陶器小皿（384・385）が破片の状態で入っていた。集石の下は、深さ30cm程度のすり鉢状の窪みとなる。

リン・カルシウムの分析結果（本書Ｐ72参照）を見ると、集石間の土から高い濃度のリン酸成分が検出されている。

ＳＺ55

人頭大の石が60cmほどの範囲に不規則に集められ、その南側に径約1.5mの広がりで土師器鍋片が集中していた。ＳＤ58の一部分とも考えられなくはないが、石材の北側に巡る掘り方の肩のラインが弧状にきれいに検出され、切り合いは不明ではあるが、独立した遺構であると判断した。石材の下には穴などの施設めいたものはなかった。

遺物

土師器の小皿・鍋・羽釜と陶器の小皿が主な遺物であるが、緑釉陶器と山茶椀の破片も紛れ込んでいた。

土師器

小皿（372～375）　口径７～８cm、器高２cm弱の大きさである。口縁部は内弯して立ち上がり、最先端部は調整せず波打ったままである。器壁はかなり薄い。

皿（376）　口縁はどちらかというと直線的に外に開き、端部のみヨコナデを施し微妙に内弯する。

鍋Ａ（377～381）　体部から、口縁部が「く」字状に屈曲して開くタイプの鍋である。口縁端部を折り返し、つまんでヨコナデする。口縁部は全体がヨコナデ、体部外面上半はハケメで下半はヘラケズリという調整が基本である。口縁付け根（屈曲部）の径よりも体部最大径のほうが４cmほど大きい。

377は口縁端部が上方に折られ、受け口状になっているが、先端をさらに内側に曲げてヨコナデすれば通常の形になると思われる。

鍋Ｂ（382）　体部が半球状で、水平近くまで折り曲げた短い口縁を持つタイプの鍋である。口縁端部は鍋Ａと同様の処理をする。口縁の下に少し膨らみをもたせる。ハケメ調整はしない。

実測図では、体部上部が傾いているが、なにぶん小片であり、本来はもうすこし垂直に近いのかもしれない。

羽釜（383）　口縁端部を外側に折り返し、その上をヨコナデする。しかし、親指の腹の幅（1.5cm）からはみ出した部分は調整せず折り返したままの状態で、ヨコナデした部分は少し薄くなり、親指のあたらなかったところが相対的に突帯状になって盛り上がる。

体部はほんの一部しか残っていないが、外面にハケメの沈線が見える。鍔の下面から下方に煤の付着が見られる。

陶器

山茶椀（388）　水挽きのままの体部に逆台形の高台を貼りつけたものである。見込み部は擦られてスベスベとしている。

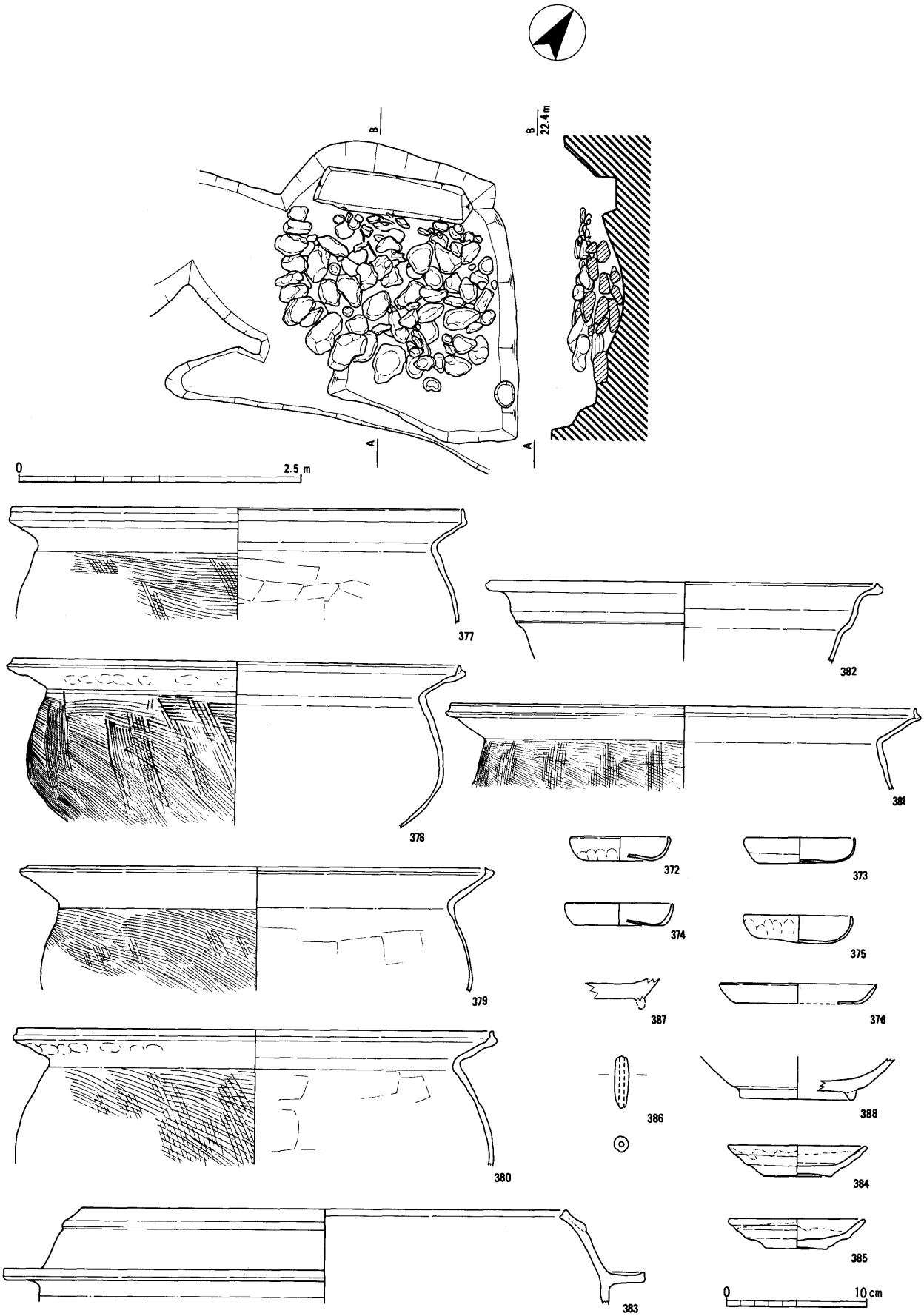
緑釉小皿（384・385）　ロクロ水挽き成形で、底部に回転糸切り痕を残す。口縁内面に幅１～1.5cm程の灰釉の帯が施される。外面の釉は内面に比べて幅が狭く、また釉の掛からない所もあり、意図的というよりも流れたというようなものである。口縁端部内側に灰釉をナガシガケしたのであろうか。

この緑釉小皿は、古瀬戸後期Ⅲ～Ⅳ期（15世紀中頃）にあたる（藤澤編年）。

緑釉椀（387）　5.5×４cmの小片で、付け高台である。確定はできないが、器種は椀ということにしておく。内外面とも、やや赤みを帯びた胎土が少し透ける程度に緑釉が施される。

ＳＤ56

幅65cm前後で、東西方向に調査区を横断する溝である。東はまだ調査区外に延び、西は、調査区西半斜面の途中で終わる。断面は、基本的にはＵ字状で、



第43図　ＳＺ54実測図（1：50）、出土遺物実測図（1：4）

深さは10cm程である。部分的に、大きいもので30cmを越える川原石が詰まり、また、土師器の鍋片も多く出土した。

ＳＤ57

ＳＺ54の位置から南方向に延びる溝である。全長12mほどで、南先端部は細く丸く収まる。深さは10cmと浅く、本格的な溝として長く機能していたものではなさそうである。ＳＺ55の方向へ流れ込むものなのか、逆に流れ出るものなのかも結論付けられない。土師器鍋片が、特にＳＺ55に近い部分で多く出土した。

ＳＤ58

ＳＺ55、ＳＺ54に連続して西へ走る溝である。調査区東半の平坦部では、まず、1.1mの幅で検出され、10cm強の深さまで掘削したところで幅の北半分がさらに20～30cm深く掘り込まれていた。すなわち、溝の南半はテラス状に浅く段をなす。この浅いテラス状部分が、ＳＺ55やＳＤ57と連続するのである。そして、調査区西半の斜面部分では下方の水田部に向かってラッパ状に開く。

深く掘り込まれた溝は、ＳＺ54のすぐ西から始まり、調査区西端まで続くようである。幅は、60～70cmを基本とするが、ＳＤ７と交差するところはかなり広がっているようである。この交差地点は前述のように、切り合い関係等がはっきりせず、ＳＤ７の流れとの区別がつかない状態である。土師器鍋の遺物の出土範囲から推測するに、この交差部分は、北に２mほど広がっているようである。

遺物

ＳＤ56・ＳＤ57・ＳＤ58の３条の溝からは、皆同様に土師器小皿・鍋・羽釜・茶釜形土器などが出土した。ほとんどが鍋の破片であり、皿類は少なく、茶釜となると数個体もないと思われる。

伊勢型鍋７類[21]（新田洋．1985）、南伊勢系鍋第４段階[22]（伊藤裕偉．1990）に相当する土師器がほとんどであるが、401のように口縁端部に近い内面に断面三角形の突出帯が巡るという一段階古い様相のものも見られた。

また、397は体部が鍋Ｂのプロポーションでありながら口縁の様相は鍋Ａと変わりがない。（西　村）

ＳＤ59

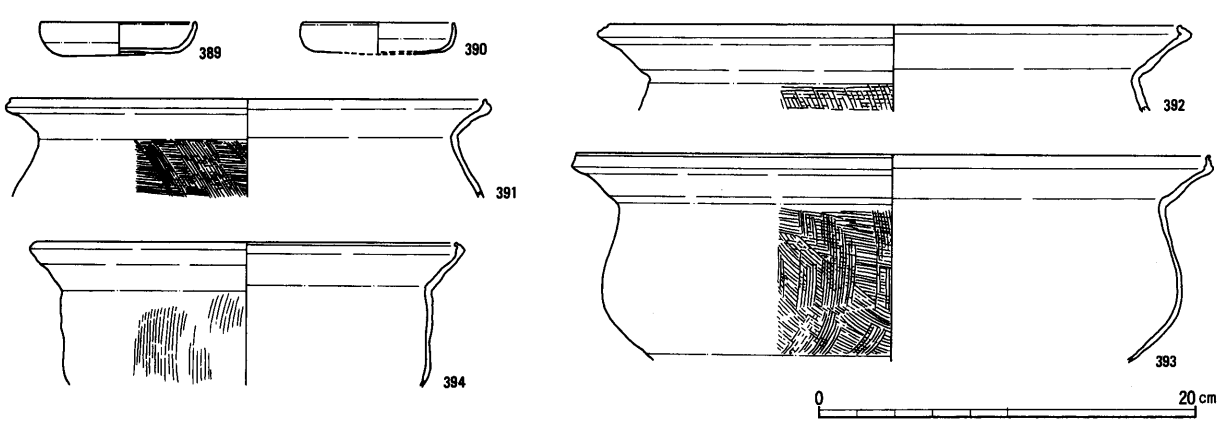
中地区の南西部に位置する。幅0.5m、長さ８mほどの溝である。検出面からの深さは10cmで、断面形は逆台形である。土師器の小皿が出土した。

ＳＫ60

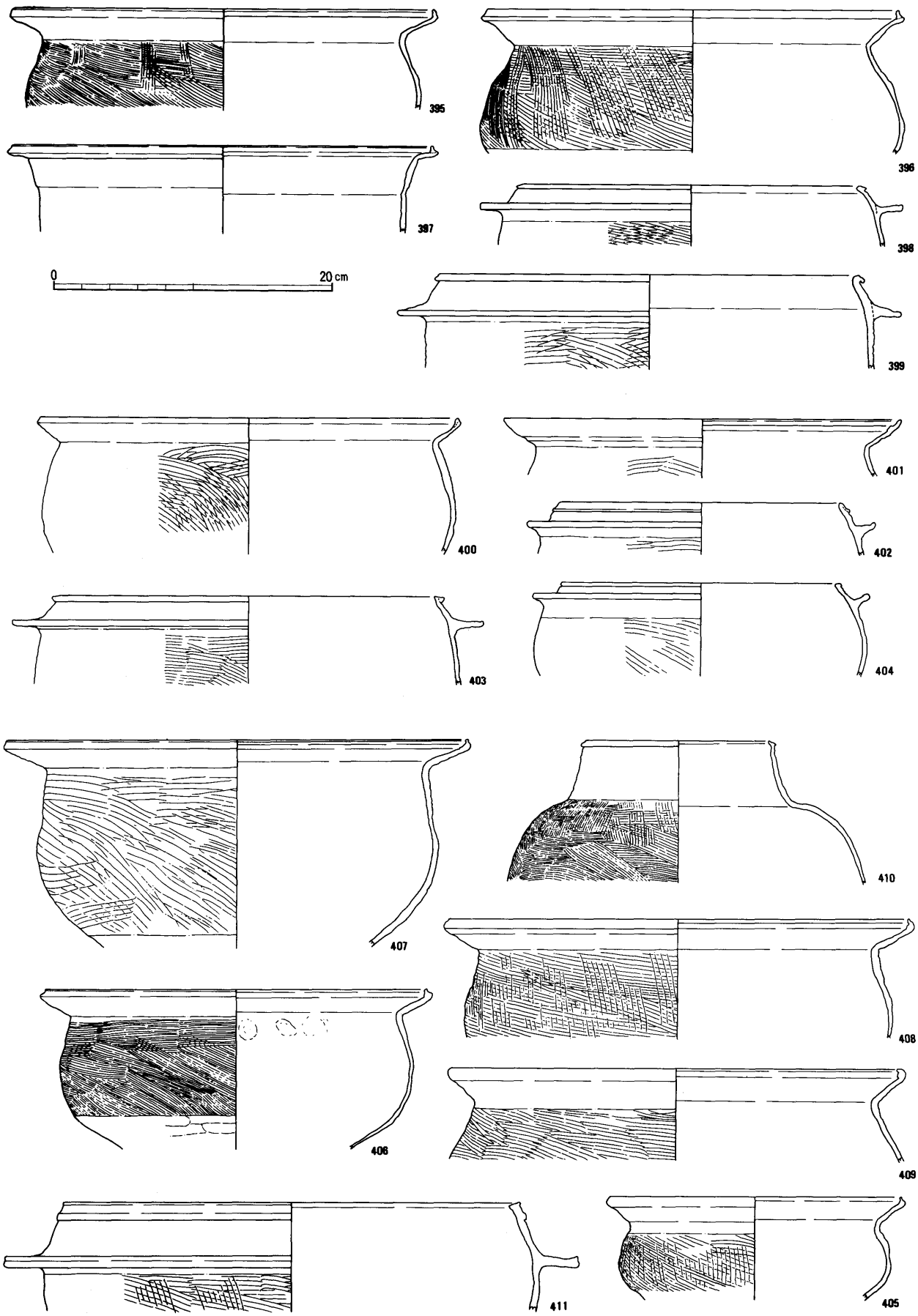
ＳＤ59から北西へ３mほどに位置する。南北３m、東西1.4mの楕円形を呈する土坑で、検出面からの深さは0.7mであった。微量の土師器片などが出土したにすぎない。（田　村）

７．ピット出土の遺物

掘立柱建物としてまとまらなかった多数のピットからも、完形品を含めて多数の遺物が出土した。ここでは、そのうちの主なものを第46図に示した。これらのほとんどは、平安時代から鎌倉時代のものである。中にはPit.70のように、多数の遺物（349～369）を出したピットもある。個々の遺物については遺物観察表を参照されたい。



第44図　ＳＺ55出土遺物実測図（1：4）



第45図　ＳＤ56・57・58出土遺物実測図（1：4）

8．遺物包含出土の遺物

遺物包含からは多量の縄文土器をはじめ、多数の土器を中心とする遺物が出土した。個々の内容は遺物観察表にゆずるが、ここでは主なものについて述べる。

（1）縄文土器

縄文時代の遺物には土器と石器がある。石器は後述するので、土器のみ概要を示す。

第47図に中期に属するものを一括した。前半期のものとして、412～416、424～427が瀬戸内の船元IおよびII式に相当し、418～423は隆帯上に連続C字状爪形文を施すもの。419は口縁部の隆帯間に、C字状爪形文と同じ原体（半截竹管）を連続的に刺突している。

428・429は竹管の外側を使って逆C字状爪形文を施したもの。いわゆるキャタピラー文で、勝坂式に類似するものであろう。429は口縁部近くの破片で、内面に曲線文が見られる。浅鉢と考えられる。また430はC字状爪形文を施している。

431は口縁部外面に細かな縄文（RL）を施し、竹管による平行沈線の下部に三角形の沈刻を施す。

432は浅鉢であろう。口縁部外面は無文であるが、内面に文様が見られる。端部付近にはC字状爪形文、その下部に沈線と三角形の沈刻が見られる。

439・440は同一個体であるが、口縁部が強く内折し、特異な器形であろう。竹管による平行沈線によってつくられた窓枠状の区画内に縄文を施し、そこに三叉文を施している。口縁部内面は直角に面をつくり、肥厚する。

433・436などはC字状爪形文や、三角形の沈刻が見られるもの。器壁の磨滅のため、詳細に観察できない。

442～447は中期後半のもの。量的には非常に少ない。445は北白川C式の富士山形を呈する山形口縁の破片である。

441は磨滅はげしく、詳細な器面の観察ができず、所属時期も不明である。鉢形土器と思われるが、頸部の沈線下に縄文が施されるものかもしれない。後期に属するものかもしれない。

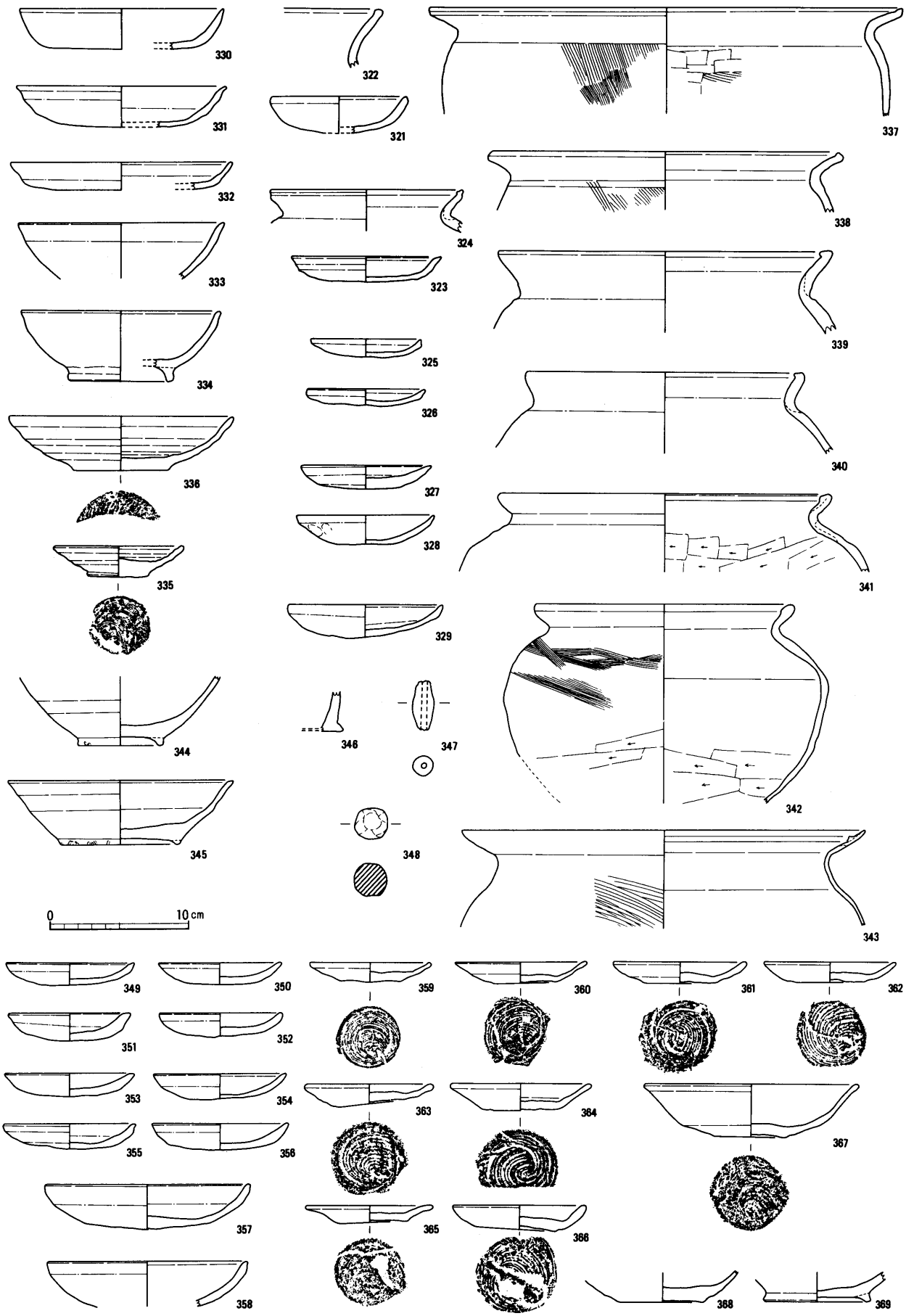
448～511は後期に属する有文土器の口縁部片。448～477は初頭の中津式。当遺跡の出土縄文土器中で大きな破片を含め数量的に最も多い。しかし、文様構成までわかるような資料は少なく、当遺跡における特徴を摘出するまでにはいたらない。ただ、少ない資料からでも、松阪市藪ノ下遺跡における中津式土器の様相と同様の傾向が窺える。すなわち、文様構成としては縦位に展開するものと、横位に展開するものが認められることや、2本の沈線で帯状に曲線的な文様を描き、沈線間に充填する文様として、縄文を充填するもの（448～465）、条線を充填するもの（466～472）と、無文のもの（475～477）とがあり、条線文を充填するものが一定量存在することである。

462は沈線間の縄文帯に刺突を施した短沈線が加えられる。461と462は縄文帯に刺突がなされるもの。これらの手法は瀬戸内や山陰方面で多く見られるが、当県地方でも量的には少ないものの、鈴鹿市東庄内A遺跡や、当遺跡に近い田中廻り遺跡にも類例がある。

464は波頂部にキザミが施されるものであるが、文様帯の幅が少し狭くなってきているもの。

645は実測図のみ提示したが、中津式の文様の基本である一筆書きの構成が確立していない段階と考えられるもの。口縁部は肥厚せず、上半が切れた6単位の窓枠状区画文が施され、それに対応するように、区画文の下に渦巻き状の文様がつく。これは上部の区画文には連続していない。観察が可能な3カ所の様子を詳しく見ると、1本の沈線で逆“コ”の字状に平行する横長の帯状文をつくる。これは沈線の起点と終点が別の場所で、閉じたものではない。一方、起点と終点が閉じて逆“コ”の字状となるものもある。いずれも帯状となった部分に、単節のRL縄文を充填している。このほか、口縁部の窓枠状区画文間にも縄文を施している。口縁部とは接合しないが、ナデ調整の体部から底部まで遺存している。なお、底部は薄手で若干の上げ底である。

最も大きな破片である472は6単位の波頂部をもつ波状口縁深鉢と考えられる。頸部がやや強くくびれる胴張りの器形であろう。口縁部はやや肥厚する傾向が見てとれる。窓枠状区画文は上部へ上がってしまった結果下半部分が残り、その下に横位に展開する帯状文からJ字状文とその下に「大」の字状の文様が下がる。そして、その下で横に連結して下端区



第46図　ピット出土遺物実測図（1：4）

画を構成するものと思われる。条線で充填された文様帯と無文帯がネガとポジの関係を構成するようである。

これらに続く時期のものには478～505がある。479は3本の沈線を直交させるような文様構成をとる。沈線帯には縄文が施され、口縁部内面にも文様が施される。

480～486は同一個体であるが、関東の堀之内1式に相当するものである。大型の深鉢の破片で、肥厚させて縁帯部を作りだした口縁部に2条の並行沈線を横走させる。波頂部には円孔とそれに沿う弧状沈線と刺突文を施す。以下の体部には単節のＬＲ縄文を施す。487も同様の口縁部片であろう。

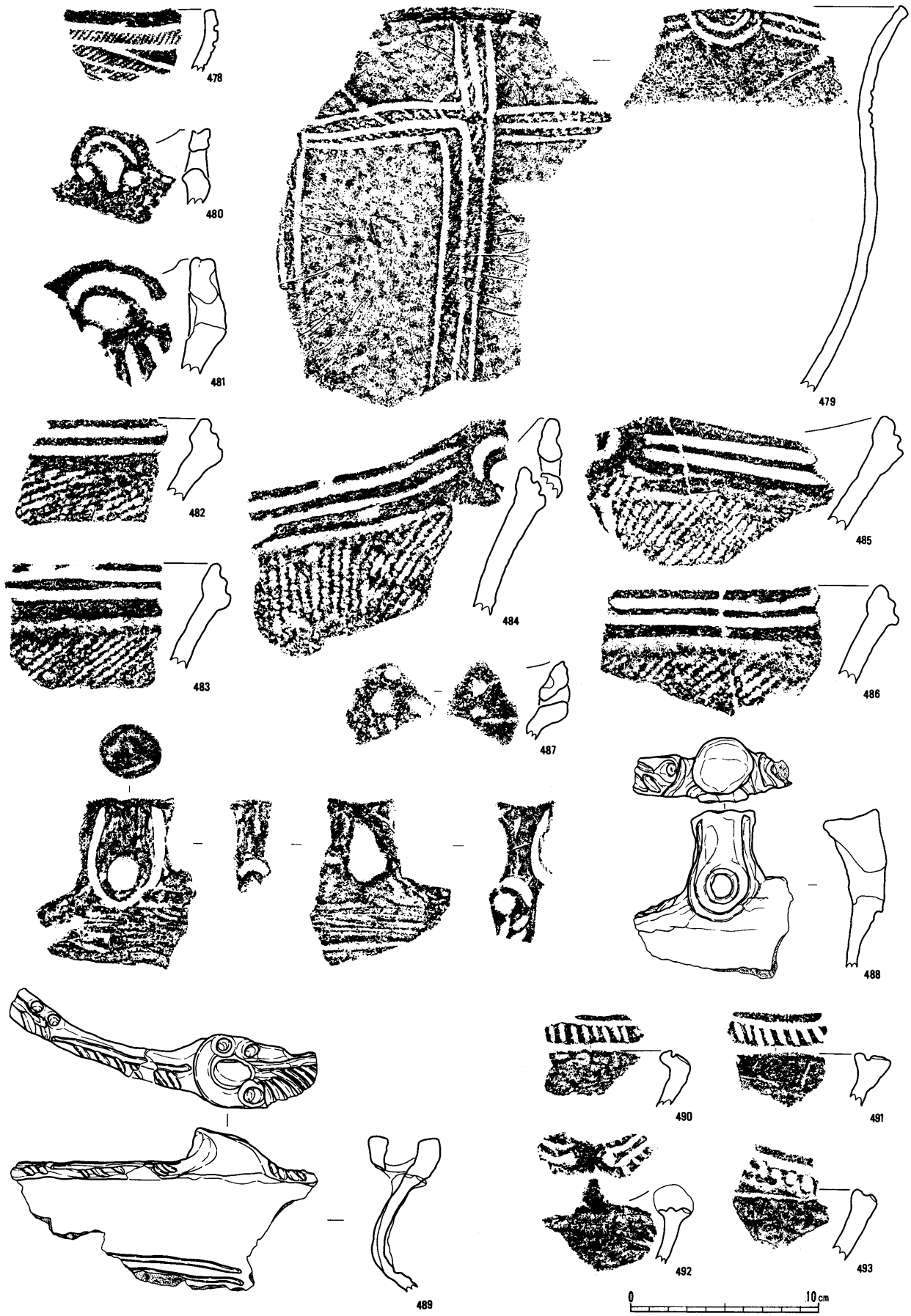
488～505はいわゆる縁帯文土器成立前の広瀬土坑40段階に位置づけられるもの。量的にはさほど多くない。そして、北白川上層式2ないし3期にあたる506～510が若干ある。このころより後は当遺跡の南方に広がる巣護遺跡などで、後期後半まで断続的な遺跡の営みがあったようで、元住吉山式など微量の遺物が出土している。

511は幅広で浅い凹線文が施されたもの。後期末葉の宮滝式の可能性があるが、この時期の遺物は他に出土しておらず、判断に苦しむ。

なお、同様の例として643がある。晩期末の突帯文

第47図　包含層出土縄文土器拓影（1：3）

第48図　包含層出土縄文土器拓影（1：3）



第49図　包含層出土縄文土器拓影（1：3）

土器の破片かと思われるが、やはりこれ1片のみの出土である。

512～555は条線文や縄文が施されたもの、および無文土器の口縁部を集めた。ほとんどが後期に属するものであろう。

512～518は条線文が施される。519～521は縄文が施されるもの。521 は口縁端部に刺突文が見られる。その他はすべてナデ調整の無文土器であるが、525には条痕が認められる。

556～619は体部片のうち有文のものを集めた。556～587および589～592は中津式の、588および593～600は堀之内式並行、601～605は北白川上層式の体部片であろう。他にも多数の破片が出土している。

底部には620～642がある。すべて平底ないしは若干の上げ底である。628には底部外面に網代痕が認められる。また、629では結節縄文が見られる。624および626もこれとよく似ており、同一個体かもしれない。これは中期のものである。

以上のほか、土製円盤が1点（644）出土している。

（2）弥生～古墳時代の土器

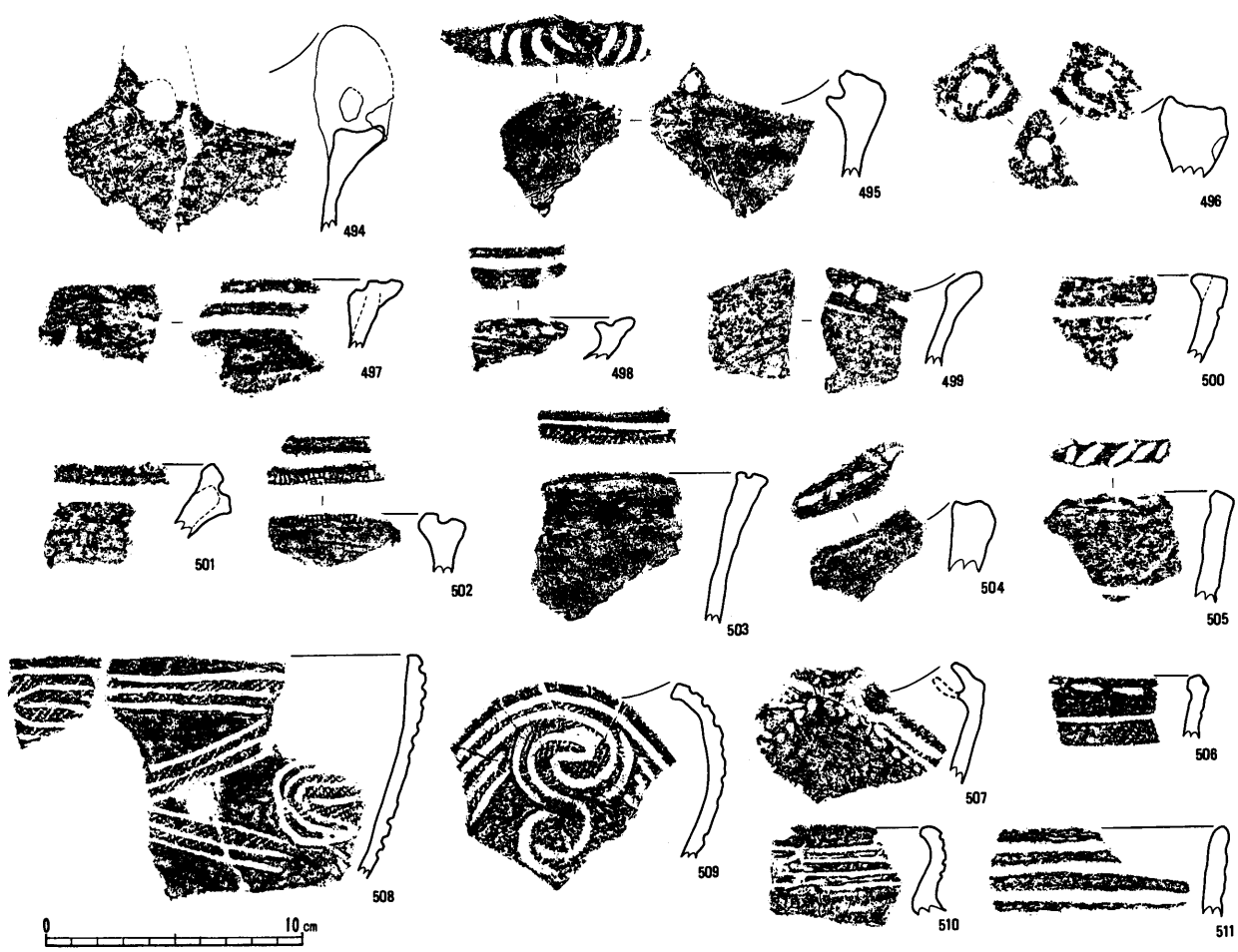
弥生時代後期の壺（647・648）、高杯（649・650）や、甕（651～653）などがある。

646は発掘区の東壁で出土した。底部を欠くが、体部から口縁部にかけてはほぼ完形である。櫛状工具によって体部には直線文、刺突文、はね上げ文のような文様が施される。また、口縁部内面にも口縁に沿って2列の刺突文が施される。弥生時代後期ないしは古墳時代初頭のものと思われる。

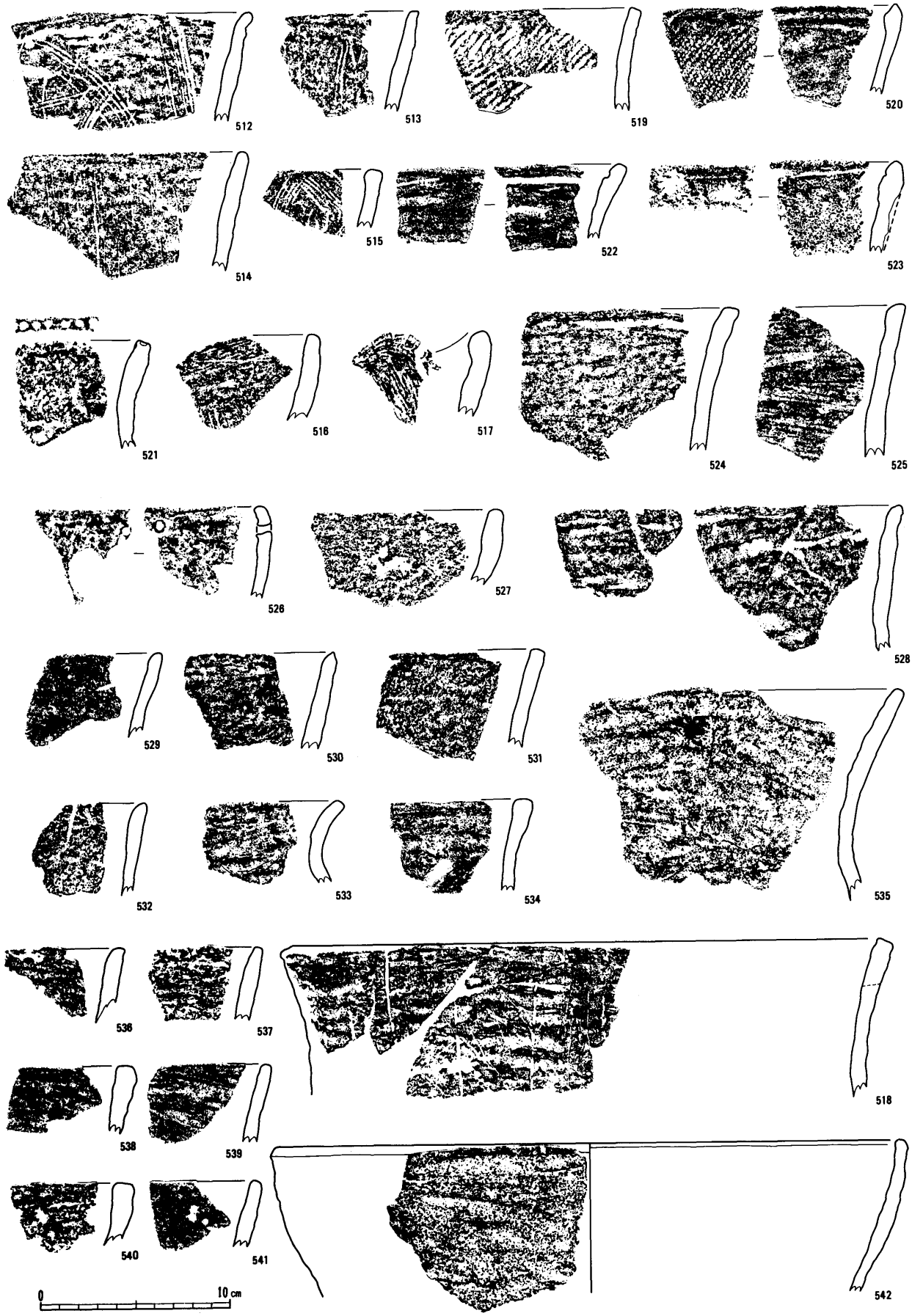
この他、古墳時代の土器として654～656が1カ所からまとまって出土している。656の底部内面には、細い棒状のもので穿孔をしようとした形跡が残る。そのほか、664の須恵器杯身などもある。

（3）奈良時代の土器

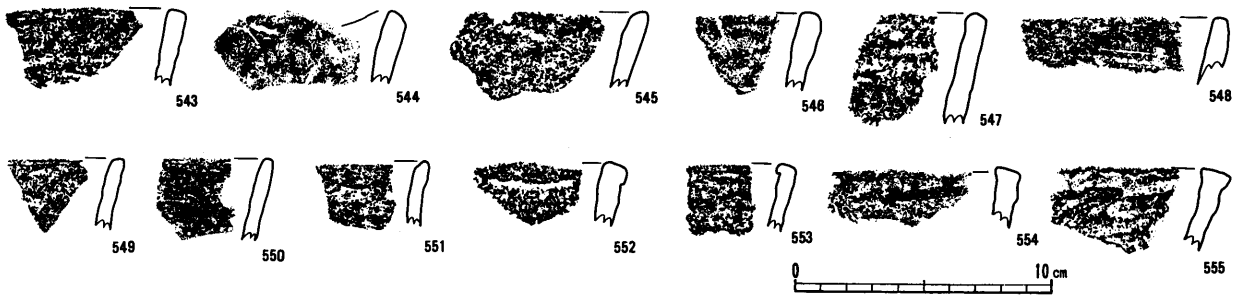
土師器の椀（657）、杯（658・659）、Ⅲ（660・661）や高杯（662・663）、須恵器杯（665）がある。



第50図　包含層出土縄文土器拓影（1：3）



第51図　包含層出土縄文土器拓影（1：3）



第52図　包含層出土縄文土器拓影（1：3）

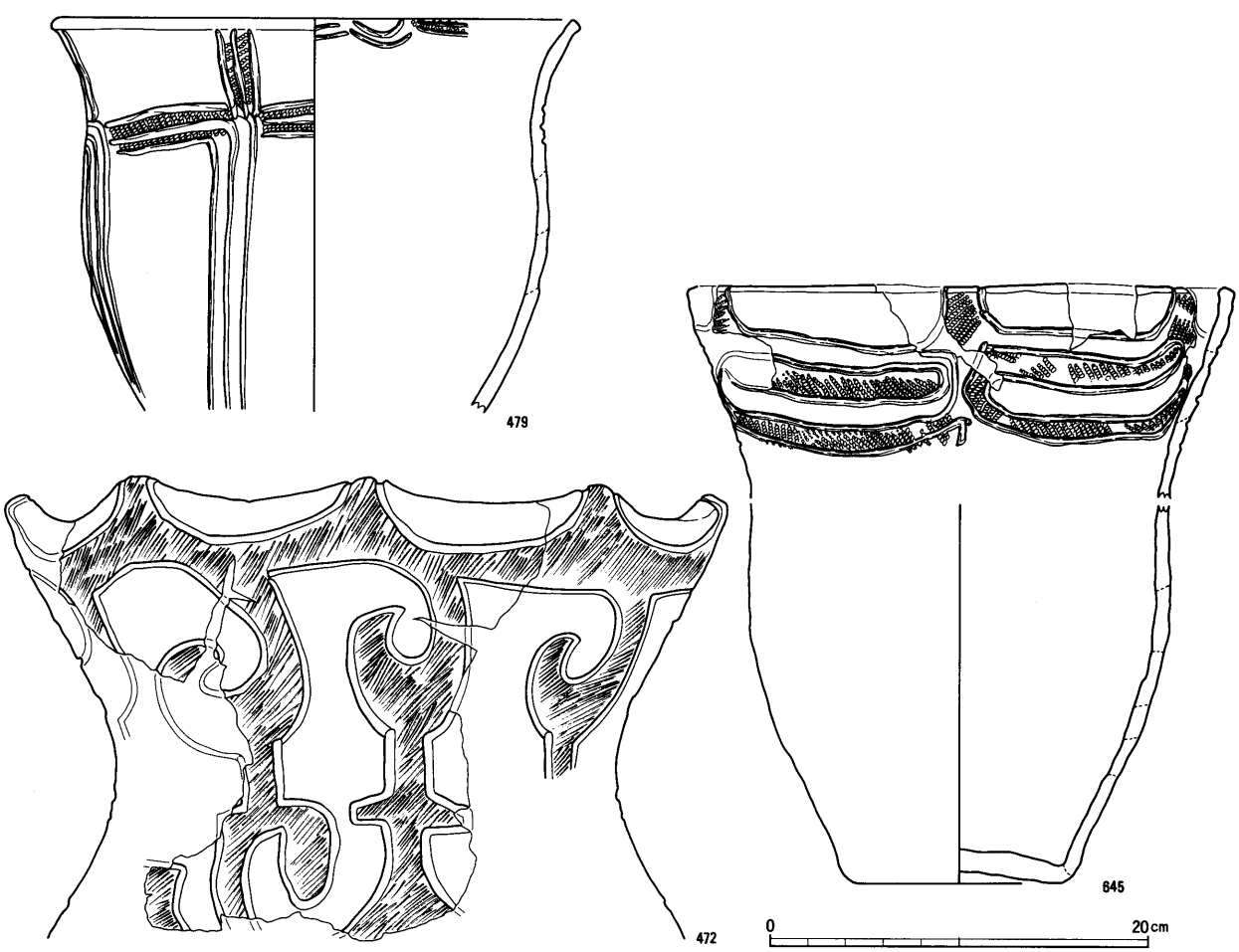
（4）平安時代以降の土器

土師器甕（666）、灰釉陶器椀（667）などのほか、山茶椀、669・670のような山皿（小椀）、縁釉小皿（671）、常滑産甕（672）、平瓦片（673）や須恵器片を転用した加工円盤（674）など多種・多様で多数の破片が出土している。

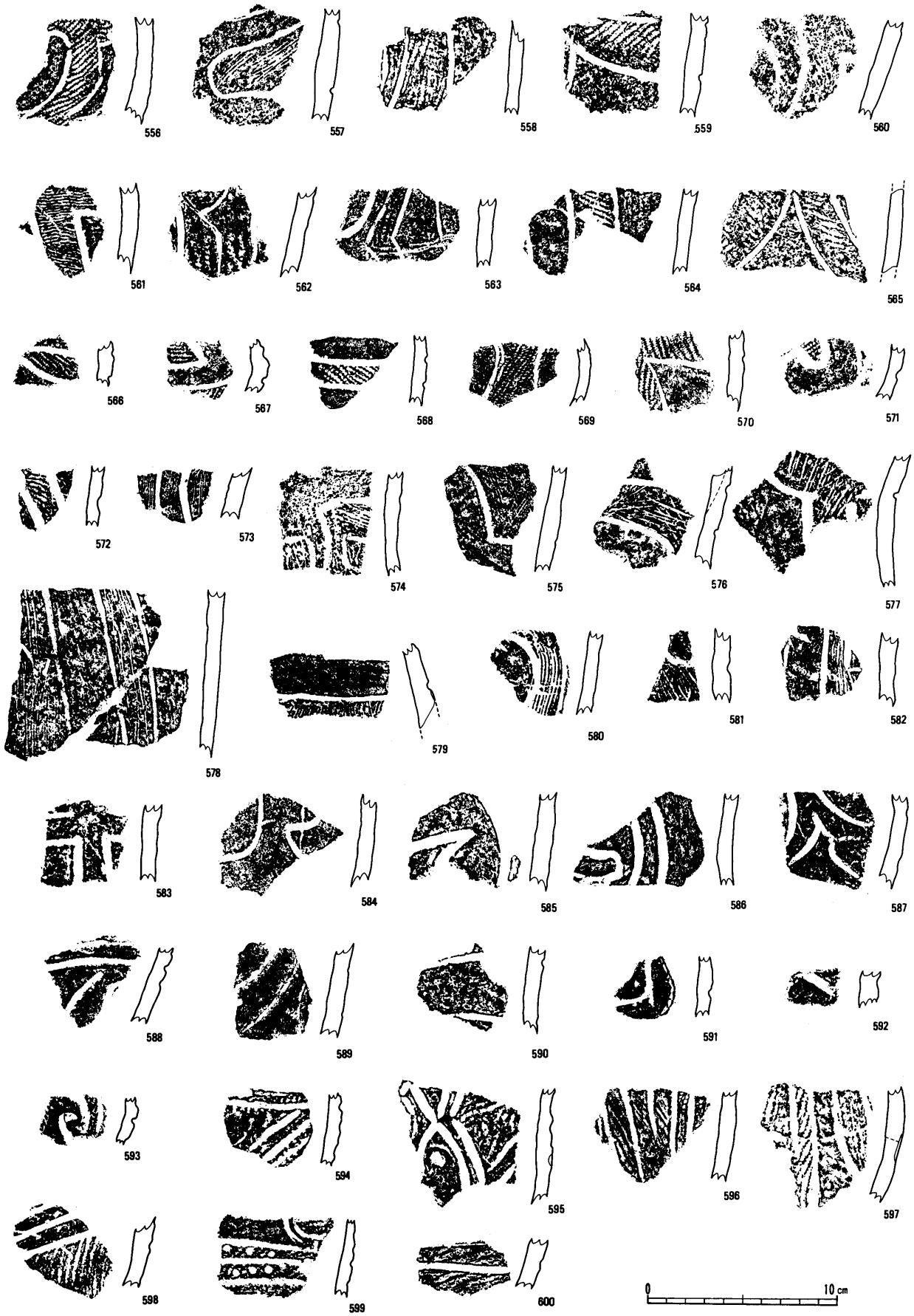
8．石製品

石製品には石鏃（677 ～686）、石匙（687）、削器（688）、スクレーパー（689～691）、楔形石器（692）、石錘（693～712）、打製石斧（713）などがある。これらについては第5表にまとめた。

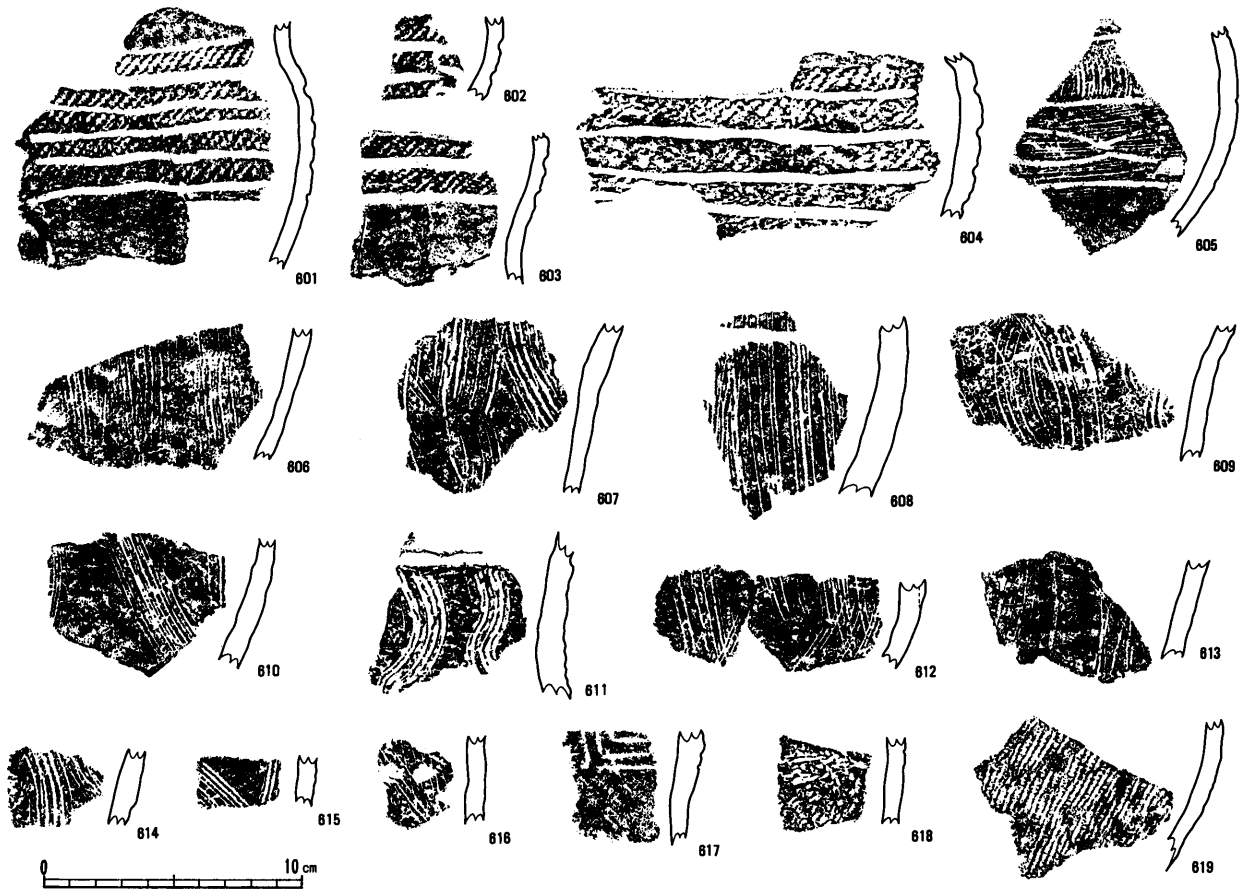
このほか、多数の剥片や砕片があるほか、注目すべきものとして大珠（676）がある。出土状況は不明である。長さ6.13cm、幅2.68cm、厚さ0.63cm、重量は19.43gで、淡い黄緑色を呈する。偏平な形状で玉斧と呼ばれるタイプに属しよう。当初は蛇紋岩製かと考え、定角式磨製石斧を転用した可能性なども想定したが、一種の硬玉製である可能性もあるという教示を得ている。　（田　村）



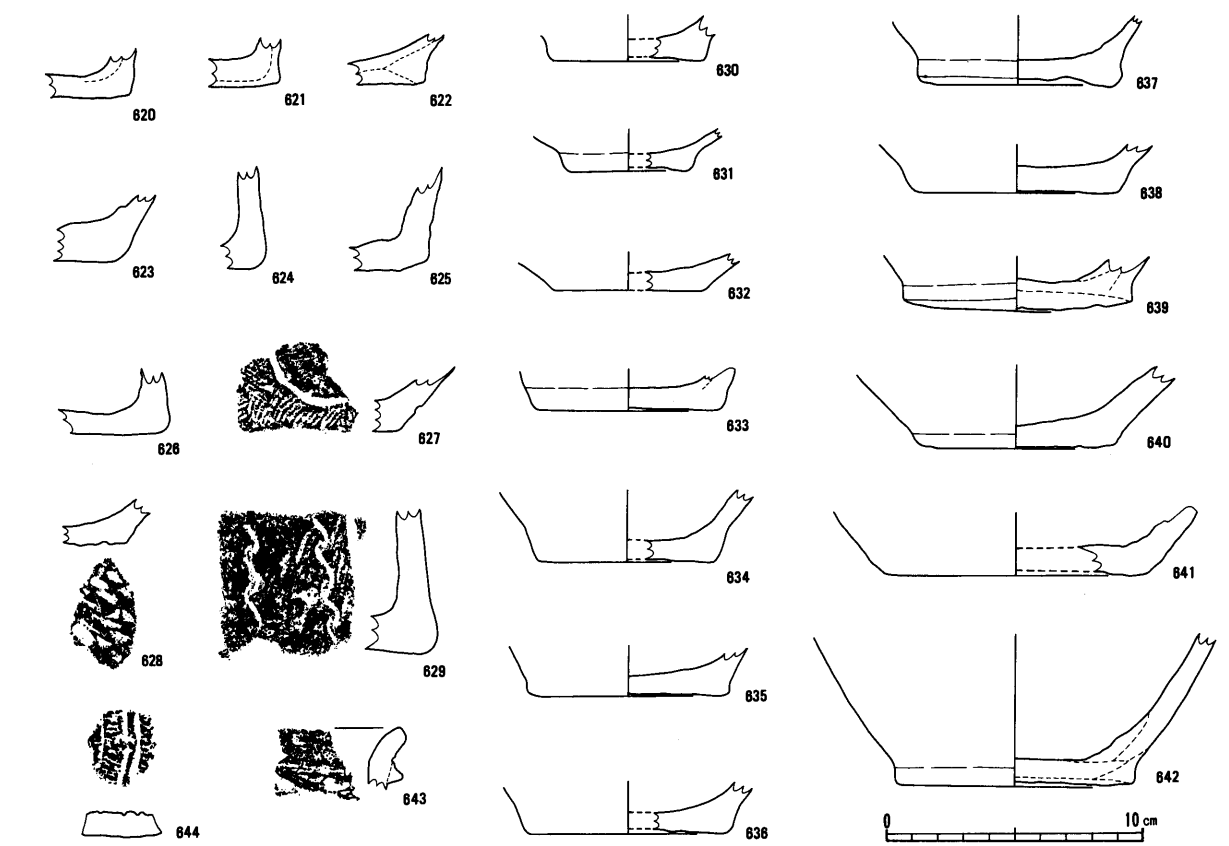
第53図　包含層出土縄文土器実測図（1：4）



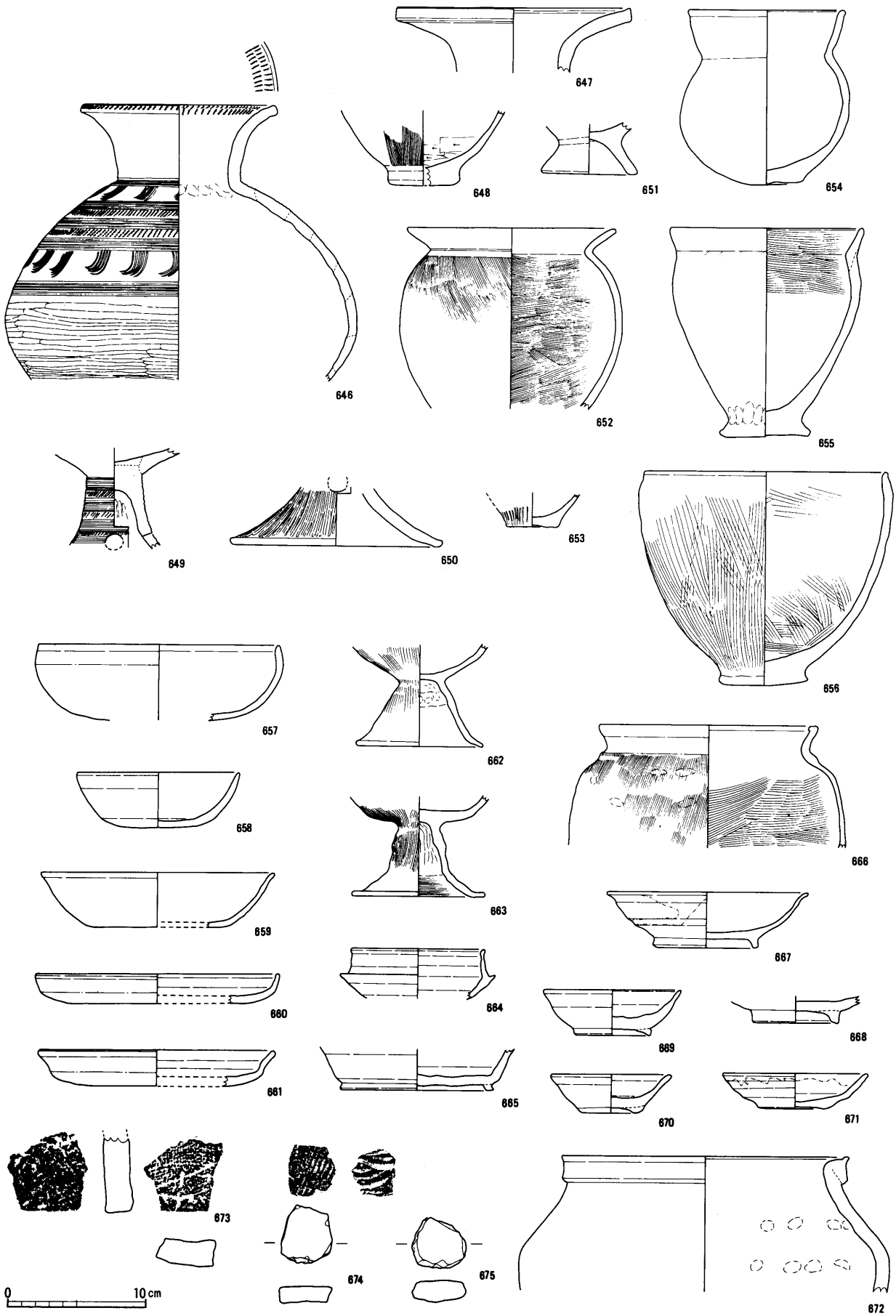
第54図　包含層出土縄文土器拓影（1：3）



第55図　包含層出土縄文土器拓影（1：3）



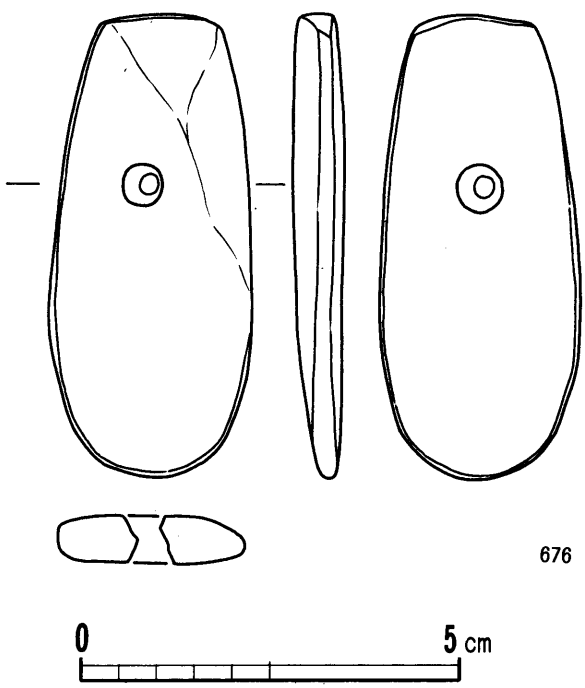
第56図　包含層出土縄文土器実測図、拓影（1：3）



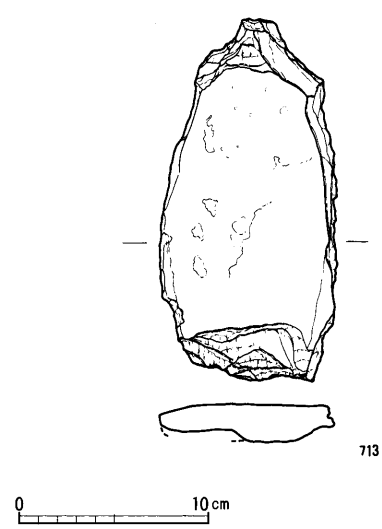
第57図　包含層出土遺物実測図（1：4）

図番号	実測番号	地区名	遺構層位	器　種	石　質	遺存状態	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備　考
676		R 26	包含層	大珠	硬玉？	完存	61.3	26.8	6.3	19.43	
677	082-04	N 30	黒ボク上面	石鏃	チャート	一部欠	(17.5)	(13.0)	4.4	0.68	
678	084-03		表面採集	石鏃	サヌカイト	一部欠	(16.0)	(12.0)	3.0	0.39	
679	082-01	M 29	SZ15	石鏃	サヌカイト	完存	20.0	18.0	3.0	0.54	
680	082-06	Q 28	P 5	石鏃	サヌカイト	一部欠	(16.0)	15.0	2.0	0.39	
681	082-02	M 30	SD14	石鏃	サヌカイト	一部欠	(19.0)	(12.0)	3.0	0.35	
682	082-05	N 34	P 5	石鏃	サヌカイト	完存	20.0	14.8	3.8	0.71	
683	082-08	Q 34	SH7Ⅵ	石鏃	サヌカイト	一部欠	27.0	24.2	7.8	4.42	
684	082-09	R 30	包含層	石鏃	サヌカイト	一部欠	(24.0)	(10.0)	2.5	0.37	
685	082-03	N 28	SD1	石鏃	サヌカイト	一部欠	(15.7)	(12.0)	2.4	0.44	
686	082-07	Q 34	P 16	石鏃	サヌカイト	一部欠	(16.0)	(7.5)	2.8	0.25	
687	079-03	M 34	包含層	石匙	サヌカイト	完存	27.0	58.5	8.0	13.75	
688	083-01		表面採集	削器	サヌカイト	一部欠	(41.0)	(30.0)	11.5	15.05	
689	081-01		表面採集	スクレーパー	サヌカイト	完存	36.0	59.0	11.1	23.13	楔形石器に転用
690	079-02	O 35	包含層	スクレーパー	サヌカイト	完存	36.0	58.0	15.4	27.80	
691	081-02	S 31	P 5	スクレーパー	チャート	完存	44.0	63.5	15.9	43.42	
692	083-02	N 30	包含層	楔形石器	サヌカイト	完存	40.0	21.5	11.0	8.43	
693	075-04	L 33	地山直上	切目石錘	結晶片岩	完存	93.0	29.0	12.0	51.54	
694	075-01	Q 19	包含層	切目石錘	粘板岩	一部欠	(56.6)	27.2	20.0	40.3	
695	084-01	S 14	東端壁試掘溝	切目石錘	結晶片岩	完存	63.5	21.0	14.5	33.15	
696	075-03	S 17	包含層	切目石錘	粘板岩	完存	46.0	28.9	15.7	30.42	
697	075-02	Q 19	包含層	切目石錘	粘板岩	一部欠	(38.1)	(18.9)	(17.6)	4.92	
698	078-03	R 26	SD 1	打欠き石錘	粘板岩	完存	50.0	36.9	14.8	45.51	
699	077-01	N 30	地山直上	打欠き石錘	細粒花崗岩	完存	61.5	38.0	22.0	72.56	
700	084-02	P 13	表土直下	打欠き石錘	砂　岩	完存	65.0	32.0	14.5	41.15	
701	076-04	S 26	にじみ	打欠き石錘	砂岩片岩	完存	63.0	27.0	13.2	38.6	
702	077-02	N 25	包含層	打欠き石錘	結晶片岩	完存	82.5	30.0	8.5	37.50	
703	078-04	P 27	包含層	打欠き石錘	砂　岩	完存	54.0	46.5	17.0	65.79	
704	078-01	P 20	P 3	打欠き石錘	砂　岩	完存	58.0	23.5	16.3	36.65	
705	085-01	R 37	黒ボク上面	打欠き石錘	砂岩片岩	完存	57.0	29.0	12.0	26.80	
706	076-02	S 30	SD4	打欠き石錘	千枚岩	完存	57.0	28.0	12.1	29.59	
707	076-03	M 31	SD12	打欠き石錘	珪質粘板岩	完存	61.0	33.0	19.0	55.91	
708	077-03	N 34	包含層	打欠き石錘	粘板岩	一部欠	(43.4)	36.4	7.9	16.43	
709	076-01	S18付近	包含層	打欠き石錘	粘板岩	一部欠	50.7	(30.0)	12.0	25.07	
710	077-04	N 34	包含層	打欠き石錘	砂岩片岩	一部欠	48.0	44.8	(10.5)	33.58	
711	079-01	O 29	包含層	打欠き石錘	硬砂岩	完存	39.2	32.0	11.0	20.51	
712	078-02	Q 31	P 15	打欠き石錘	砂岩片岩	完存	58.5	31.5	21.6	59.63	
713	080-01	S17	土器溜	打製石斧	緑色片岩	完存	192.0	96.0	20.9	452.0	

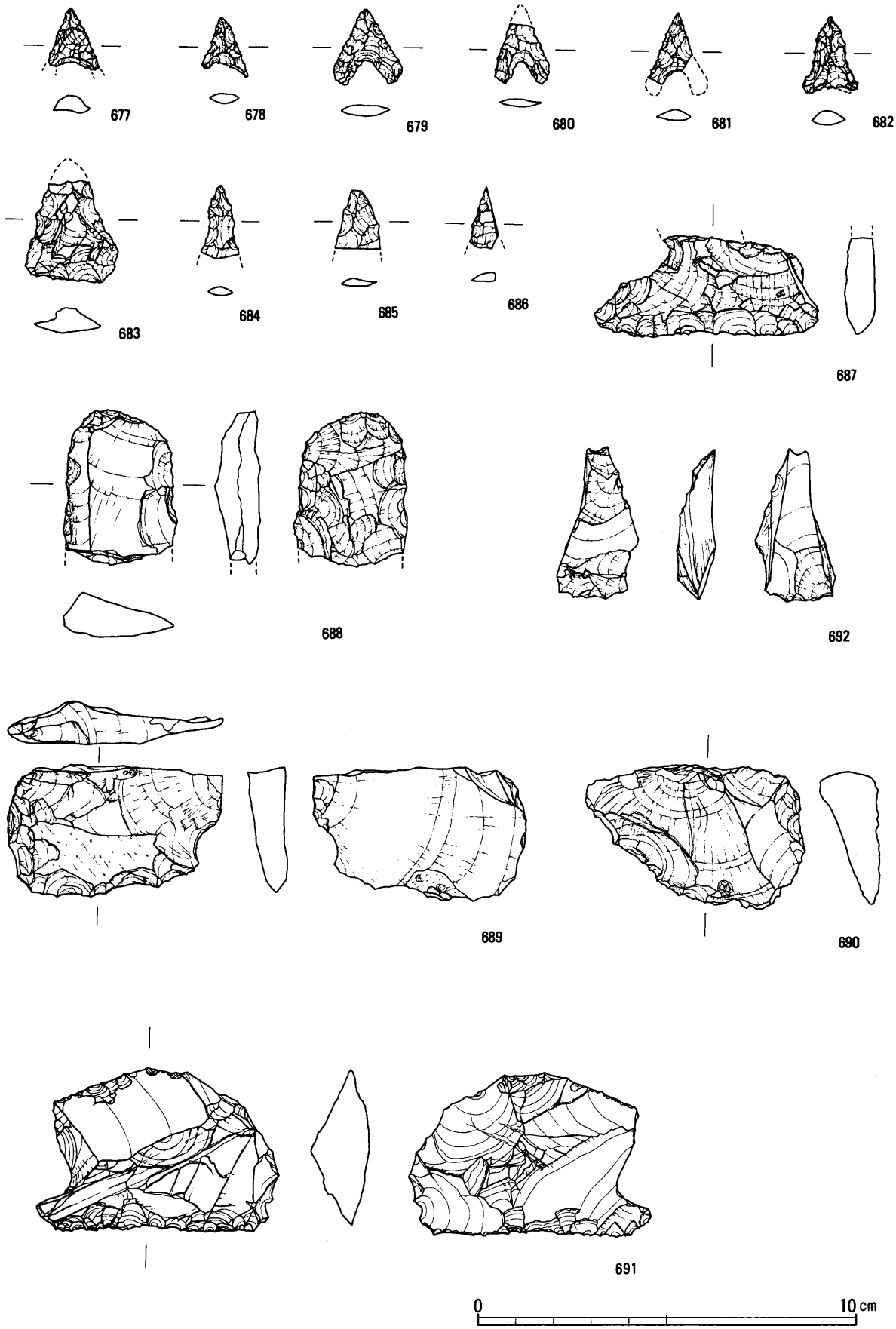
第5表　石器一覧表



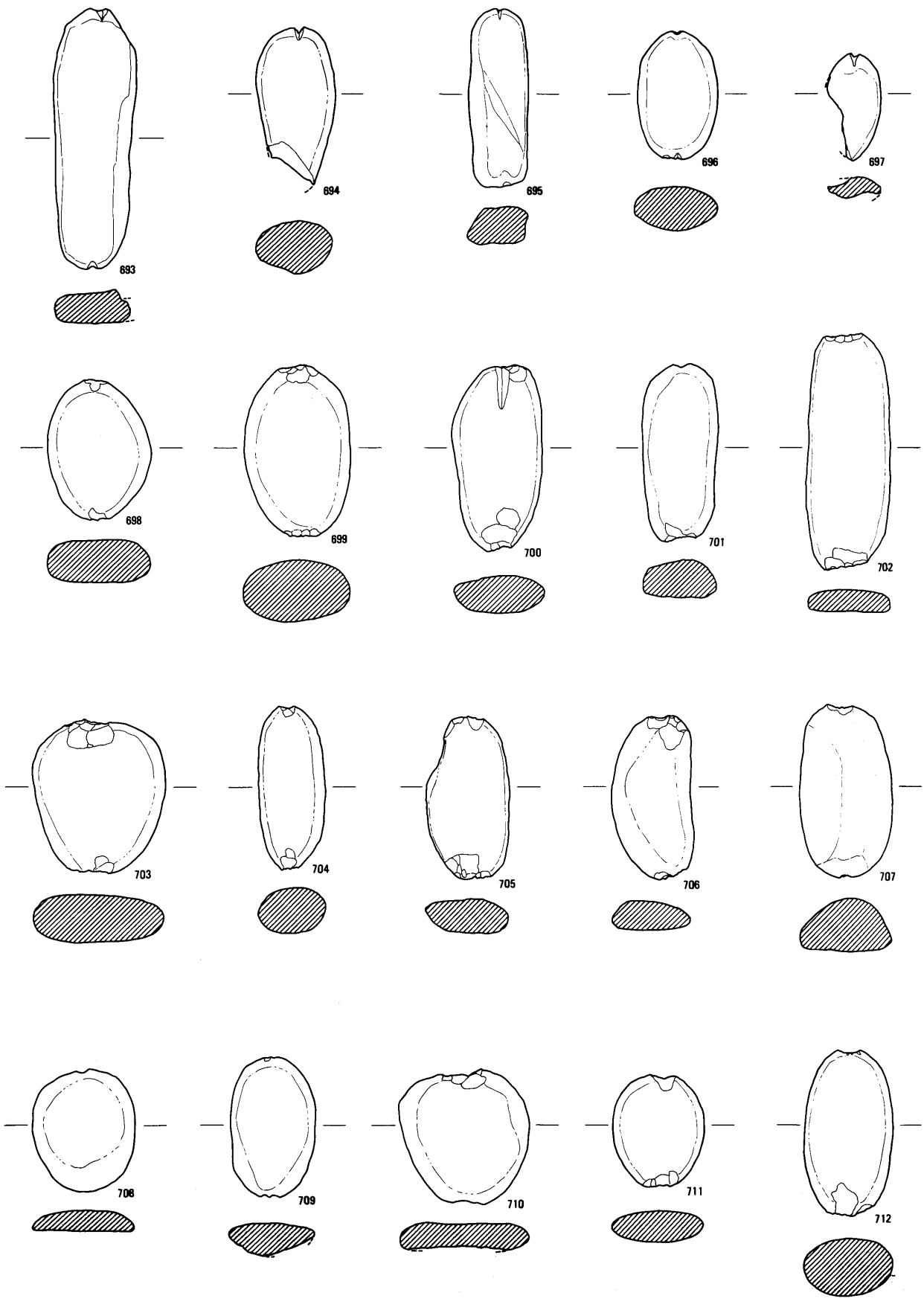
第58図　大珠実測図（1：1）



第59図　打製石斧実測図（1：4）



第60図　石器実測図（2：3）



第61図　石器実測図（1：2）

4．自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．土器内容物の検討

（1）試料

分析試料は、第6表に示した調査地点2カ所の計15点である。今回の分析調査では、古墳時代初頭の前方後方型周溝墓ＳＸ3より出土した壺や、鎌倉時代初頭の井戸ＳＥ42より出土した山茶椀等の内容物の推定を行う。ＳＸ3では遺構の性格上壺内への人骨埋納が予想されたので、その手法として、人体特に人骨に多量に含まれ、しかも土壌中では比較的拡散・移動しにくいリン酸量を測定し、土壌中に局所的な濃集状態から人体の痕跡を定性的に推定するリン分析（竹迫、1981）を実施する。また、リン酸とともに骨の主成分であるカルシウムについても分析を行う。またＳＥ42についても、比較の意味で同様の分析を行った。

なお、土壌中を流亡しにくいリン酸も年月の経過に伴い、当時の含有量をそのまま保持することは難しい。したがって、含量対比のために、各遺構ごとに埋設時の影響を受けていない周辺土壌を対照試料とした。

（2）方法

リン、カルシウムの測定は、土壌標準分析・測定法委員会（1986）、土壌養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考として、以下の操作行程で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）5㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、10㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg／g）とカルシウム含量（CaOmg／g）を求める。

（3）結果

リン酸、カルシウム分析の結果を第7表に示す。

・ＳＸ3

対照試料とした周溝外地山のリン酸含量2.29P_2O_5mg／gに対し、壺直下周溝底部、壺内部および周溝埋土壺隣接部の試料では1.30～2.15P_2O_5mg／gでほぼ同じかそれ以下の値を示す。カルシウム含量は、対照試料6.99CaOmg／gよりいずれも低い値である。

・ＳＥ42

対照試料とした井戸外地山試料のリン酸含量1.76P_2O_5mg／gに対し、山茶椀内部、伊勢型鍋内部の試料では5.99、5.77P_2O_5mg／gでかなり高い値を示し、リン酸の濃集が認められる。また、井戸底近くの試料でも2.97P_2O_5mg／gと高い値である。カルシウム含量も、対照試料の3.73CaOmg／gに対し、いずれも自然賦存量範囲内ではあるが、4.88～5.06CaOmg／g と高い値を示す。

（4）考察

土壌中に含有されるリン酸含量は、Bowen（1983）が調査した世界各国の土壌での含量の中央値は2.0P_2O_5mg／g、Bolt and Bruggenwert（1980）では1.0～2.5P_2O_5mg／gとされている。また、わが国では、川崎ら（1991）の調査で黒ボク土の平均値が未耕地で2.1P_2O_5mg／g、既耕地で5.5P_2O_5mg／gとされ、天野ら（1991）はリン酸の自然賦存量が2.7P_2O_5mg／g以下であると報告されている。これらの報告例から、土壌本来のリン酸含量は通常上記の値と考えられ、これを著しく越える土壌では人骨などのリン成分を多く含むものが何らかのかたちで土壌中に遺存したものと考えられる。

土壌中のカルシウム含量については、普通1～50CaOmg／g（藤貫、1979）といわれ、自然賦存量の含量幅がリン酸よりも大きいから、土壌本来の含量と外的要因により富化された含量の区別することが難しい。この自然賦損存量と今回対照試料とした土壌の含量から、周溝墓周溝、井戸より出土した壺や土器の内容物について次のことが考えられる。

ＳＸ３周溝の壺内部および周溝埋土壺隣接部ではリン酸の濃集はみられず、壺内への人骨埋納についてはよくわからない。今後周溝内埋葬を考慮し、周溝埋土の面的調査も必要であろう。一方井戸ＳＥ42から出土した山茶椀内部、伊勢型鍋内部および井戸底近くでは、リン酸の濃集が認められる。したがって、この井戸内にはリン酸成分を多く含有したもの（例えば動物遺体・植物遺体など）が存在したことが推測される。カルシウムについては、いずれも自然賦存量範囲内の値を示したので、これが動物遺体かどうかについては断定できない。なお、この点をさらに追求するには、同一試料で炭素含量（植物由来と考えられる）を推定し、リン酸含量と回帰分析を行うのが有効である。

２．木製品の樹種

（１）試料

試料は、鎌倉時代初頭の井戸ＳＥ42から出土した櫛と、同時期の井戸ＳＥ46から出土した底部曲物の本体およびタガの合計３点である。

（２）方法

剃刀を用いて、試料の木口（横断面）・柾目(放射断面）・板目(接線断面）の切片を作成し、ガム・クロラールで封入してプレパラートを作成する。プレパラートは、生物顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（３）結果

櫛はイスノキ、曲物本体とタガはスギにそれぞれ同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・スギ〔Cryptomeria japonica（Ｌ．ｆ）D. Don〕
スギ科スギ属

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・イスノキ〔Distylium racemosum Sieb. et Zucc.〕
マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管はほとんど単独、横断面では多角形。道管は階段穿孔を有し、段数は５前後。放射組織は異性Ⅱ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。柔組織は独立帯状または短接線状でほぼ等間隔に配列する。

（４）考察

イスノキの材は緻密で、ツゲ（柘植）に次ぐ櫛の良材とされ、各地・各時代の櫛に同定例が多い。遺跡から出土した櫛の樹種同定結果をみると、ツゲよりもイスノキが同定されることが多い（島地・伊東、1988)。このことは、過去においてはイスノキが最も適していた材と考えられていた可能性を示唆する。今回の結果から、本地域においても櫛にイスノキが使用されていたことが明らかとなった。

曲物はスギであった。同様の木製品には、これまでの調査でもヒノキ属やスギが多く確認されている。またスギは、比較的近い朱中遺跡Ｂ地区から出土した奈良・平安時代～中世（？）の板材等に多数確認されており、古くから本地域の建築・土木に広く利用されていたことが推定される。この背景には、周辺植生から入手しやすかったこともあろう。今回の結果から、周辺植生から入手しやすい木材の中から、曲物に必要な板状の加工が容易で耐水性がある木材を選択したことが考えられる。

３．藁状植物遺体の種類

（１）試料

試料は、鎌倉時代初頭の井戸ＳＥ42底部近くから検出された藁状植物遺体１点である。肉眼観察では、イネ科草本類に類似する。

（２）方法

植物遺体を数片採取し、電気炉による乾式灰化法(600℃、30分間）で処理する。得られた灰像をブリュウラックスで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下で観察する。

（３）結果

得られた灰像には、２形態の植物珪酸体が認められた。ひとつは、ファン型（近藤・佐瀬、1986）を呈する。いわゆる断面形が扇形で縦長が50μｍ前後である。また、顕著な亀甲模様が認められ、側面形が長方形である。この形態から、栽培植物のイネ属に形成される葉身機動細胞珪酸体と見ることができる。これらの機動細胞珪酸体は列を成し、ところど

ころで直線的に配列する。

もうひとつは、キビ型（近藤・佐瀬、1986）で、その中でも二重亜鈴型を呈する。両端は側面の湾曲が大きい。また、中央部のくびれが顕著である。縦長は10～20μm程度である。これらの点は、イネ属の葉部短細胞珪酸体の特徴である。なお、この短細胞珪酸体も列を成す。

以上の点から、この藁状植物はイネ属である。

（4）考察

藁状の植物はイネ属であった。本遺跡は、現在でも水田地帯に位置し、地名などから周辺では古くから条里制に地割が行われていたと考えられている。このことを考慮すれば、今回の植物遺体は稲藁であることが考えられる。また、その用途等については、井戸内の遺物の出土状況等の吟味を経て推定されるべきであろう。

Ⅱ．上ノ垣外遺跡におけるリン・カルシウム分析

1．試料

試料は、室町時代の集石SZ54およびその周辺の地山から採取された土壌10点（試料番号1～6、A～D）である。各試料の詳細については、分析結果と共に第8表に示した。この集石の内容物について、リン・カルシウム分析により検証する。

2．分析方法

Ⅰ－2（2）参照

3．結果

リン酸、カルシウム分析結果を第8表に示す。

対照試料とした集石外掘方、集石下の地山、SZ54掘方外の試料のリン酸含量1.63～2.34P_2O_5mg／gに対し、集石内石間埋土の試料では3.37～3.72P_2O_5mg／gと高い値を示すが、集石下の遺構底部の試料番号4・5では対照試料とほぼ同じ値である。カルシウム含量は、対照試料3.50～3.66CaOmg／gに対し、集石内石間埋土では4.17～4.88CaOmg／gで自然賦存量範囲ではあるがやや高い傾向を示す。

4．考察

対照試料とした集石外堀方、集石下の地山、SZ54掘方外の試料のリン酸含量からみて、集石遺構SZ54ではリン酸の濃集が認められ、リン酸成分を多く含有したもの（動・植物遺体等）が存在したことが推測される。カルシウムについては、自然賦存量範囲内の値であり、これが動物遺体であるかどうか不明である。植物由来と考えられる炭素含有量の測定を行い、リン酸含量との回帰分析を行うのも有効であろう。

〈引用文献〉

竹迫　紘（1981）11号住居址内埋甕中の土壌リン酸分析．横浜市高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告，p156-158，横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団．

土壌標準分析・測定法委員会（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，博友社．

Bowen,H.J.M.（1983）環境無機化学－元素の循環と生化学－．浅見輝男・茅野充男訳,297p.，博友社［Bowen,H.J.M.(1979)Enviromental Cemistry of Elements］．

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.(1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳,309p.，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976) SOIL CHEMISTRY］,p. 235-236.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」,149p.: p.23-27.

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（19-91）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」,p.28-36

島地　謙・伊藤隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.,雄山閣．

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25,31-64

遺構名	試料番号	出土位置・試料名など
SX3	②	周溝埋土　壺隣接部
	④	〃
	⑤	〃
	⑥	〃
	⑦	〃
	⑧	壺直下周溝底部
	⑨	〃
	⑩	〃
	⑪	壺内部（上部）
	⑫	〃　（下部）
	⑬	周溝外地山
SE42		二つ合わせた山茶椀内部
		伊勢型鍋内部
		井戸底近く
		井戸外山地

第6表　土壌分析試料

遺構名	試料番号・試料名	リン酸含量 P_2O_5mg／g	カルシウム含量 CaOmg／g	土　色　・　土　性
SX3	②	1.88	4.05	2.5Y3／3暗オリーブ褐・Ｌ～ＣＬ
	④	2.15	4.89	2.5Y3／3暗オリーブ褐・ＣＬ
	⑤	1.3	3.11	2.5Y4／3オリーブ褐・Ｌ
	⑥	1.92	4.17	2.5Y4／3オリーブ褐・ＣＬ
	⑦	1.86	4.48	2.5Y4／3オリーブ褐・ＣＬ
	⑧	1.48	3.26	2.5Y4／3オリーブ褐・Ｌ～ＣＬ
	⑨	2.06	4.75	2.5Y4／3オリーブ褐・ＣＬ
	⑩	1.59	4.28	2.5Y4／3オリーブ褐・Ｌ
	⑪	2.17	5.22	2.5Y4／3オリーブ褐・ＣＬ
	⑫	2.09	4.85	2.5Y4／3オリーブ褐・ＣＬ
	⑬	2.29	6.99	2.5Y3／2黒褐・ＣＬ
SE42	二つ合わせた山茶椀内部	5.98	5.02	2.5Y4／3オリーブ褐・ＣＬ
	伊勢型鍋内部	5.77	4.88	10YR3／3暗褐・ＣＬ
	井戸底近く	2.97	5.06	2.5Y3／1黒褐・ＣＬ
	井戸外山地	1.76	3.73	2.5Y3／3暗オリーブ褐・Ｌ

第7表　ＳＸ３，ＳＥ42リン・カルシウム分析結果

注.（１）　土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（２）　土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。Ｌ…壌土（ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。）、ＣＬ…埴壌土（わずかに砂を感じるが、かなりねばる。）

遺構名	試料番号	採取位置	リン酸含量 P_2O_5mg／g	カルシウム含量 CaOmg／g	土　色　・　土　性
SZ54	1	集石内、石間埋土	3.37	4.17	2.5Y4／4オリーブ褐・ＣＬ
	2	集石内、石間埋土	3.72	4.27	2.5Y4／4オリーブ褐・ＣＬ
	3	集石内、石間埋土	3.63	4.88	2.5Y4／4オリーブ褐・ＣＬ
	4	集石下の遺構底部	2.45	3.69	2.5Y4／4オリーブ褐・ＣＬ
	5	集石下の遺構底部	2.16	3.54	2.5Y4／4オリーブ褐・ＣＬ
	6	集石下の遺構底部	2.20	4.33	2.5Y4／4オリーブ褐・ＣＬ
	A	集石外、堀方内	2.34	3.52	2.5Y5／4黄褐・ＣＬ
	B	集石外、堀方内	2.13	3.51	2.5Y5／4黄褐・ＣＬ
	C	集石下の地山	1.93	3.66	2.5Y5／4黄褐・ＣＬ
	D	SZ54の堀方外	1.63	3.50	2.5Y5／4黄褐・ＣＬ

第8表　ＳＺ54リン・カルシウム分析結果

注.（１）　土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（２）　土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。）
ＣＬ…埴壌土（わずかに砂を感じるが、かなり粘る。）

Ⅲ. 結　　語

上ノ垣外遺跡は、櫛田川中流右岸に注ぎ込む小支流、相可川の形成した自然堤防上に立地した遺跡である。遺跡は自然堤防上の東西120m、南北200mほどに広がり、今回の発掘調査はこのうち遺跡西部の約5,000㎡について調査したことになる。その結果、縄文時代中期初頭から人間の営みのあったことが判明した。遺跡の全体を発掘調査していないため、全容の解明には至っていないが、調査で明らかになったことや新たに問題になったことなどをここで整理し、まとめにかえたい。

（１）遺跡の立地環境について

すでに述べたが、当遺跡は櫛田川中流右岸に注ぎ込む小支流の相可川が形成した自然堤防上に立地している。この自然堤防は、現在の相可集落ののる櫛田川本流が形成した自然堤防帯背後の低湿地帯を、櫛田川と平行して流れてきた相可川が、ようやく本流に注ぎ込もうとして、流れを北に振った地点に形成されたものである。現在の後背低地との比高は約２ｍを測り、主に普通畑や果樹園として利用されている。

今回の発掘調査では、地表面からかなり下まで、かなりの厚さでシルト質の洪水堆積物が覆っていることがわかった。部分的には２次堆積と考えられる黒ボク土が見られたり、それらが攪乱されたような複雑な堆積が認められ、上層部分ではかなり複雑な状態であった。これら土層の攪乱は、縄文時代以降の遺跡形成過程での人為的な原因もあるだろうが、度重なる洪水による侵食と堆積の結果を示すものと考えられる。卑近な例では、昭和34（1959）年に当地を襲った伊勢湾台風時でも、この地は冠水している。

縄文時代に人々が当地に生活を始めたものの、このような自然的条件から、断続的に生活が営まれていったものと思われる。この地に初めて本格的な生活の根拠をおいた縄文後期初頭の人々は、あるいは水害のために、北に少し離れた新徳寺遺跡へムラを移したのかもしれない。

以後、弥生時代後期ころまでめぼしい活動の痕跡は見られず、飛鳥時代末期以降に活発化する。遺跡の盛期は奈良時代後半から平安時代、鎌倉時代にかけてで、今回の調査区よりさらに東の畑地に、集落の中心部が存在したことが容易に想像できる。それは、遺跡の立地する自然堤防の中で、最も高いところでもある。

（２）遺構・遺物について

①縄文時代

縄文時代についてみると、今回の調査では、南勢地域における後期初頭中津式土器の比較的まとまった資料を得ることができたほか、いくつかの調査成果を得ることができた。

出土土器量からすれば中津式期の住居跡などが検出されてもよいと思われるが、その確認には至らなかった。結局、同時期あるいはもう少し後に属すると思われる土坑１基と、埋設土器１基が検出されたにとどまる。

土坑ＳＫ１は、出土した土器から福田Ｋ２式の古い段階から広瀬土坑40段階[29]までの間の時期に比定できよう。この土坑の平面形は長楕円形の掘り方で、墓的な性格も考えられるが確証は何もない。遺物についても完形・半完形品はなく、供献性は認められない。ただ、この土坑に近いＲ－26区の遺物包含層から、大珠が出土していることは注目すべきである。しかし、この土坑の性格については不明と言わざるを得ない。

ところで、今回の調査で出土した硬玉製[24]と考えられる大珠については、出土状況さえ不明であるが、三重県下では殆ど例を見ない遺物である。過去の出土例としては、わずかに南牟婁郡内出土とされる１点[25]があるだけである。これは６㎝内外の緒締型大珠ということであるが、出土地も不明[26]であり、現在は現物の所在も明らかでない。

一方、ＳＫ１から北西に18ｍ離れた位置にＳＸ２がある。底部穿孔された粗製の無文深鉢を正立埋置している。削平のため上半部が欠損していることや、無文であるため、詳しい所属時期は不明である。

しかし、当地方での埋設土器の検出状況[27]から、古

くて中期末が上限であり、最も盛行するのが後期前葉であることから、当例もこの時期すなわち中津式から広瀬土坑40段階までの間に属するものと考えられる。

なお、当遺跡で出土した縄文土器は、中期初頭を初出とし、末葉の遺物がごく微量ある。そして、殆どが後期初頭の中津式で占められ、その後量を減らしながら、北白川上層式のころまで細々と継続する。

縄文時代の当遺跡における最盛期は、後期初頭の中津式期にあった。そして、次第に衰退をはじめ、それと時を同じくするように、櫛田川合流地点の微高地上で新徳寺遺跡が隆盛を迎えるのである。

新徳寺遺跡は当遺跡との距離が約100m、何らかの理由で上ノ垣外から新徳寺へと集落を移したものと考えられよう。（田　村）

②ＳＸ３について

溝を方形に巡らしたこの種の遺構は、県内では「方形周溝墓」と呼ばれ扱われているのが現状である。方形周溝墓も含めて「墳丘墓」と呼ぶ方向に流れつつあるような昨今であるが、残念ながら“周溝墓”と“墳丘墓”の概念規定等について持論が展開できるほど筆者に見識も能力もないので、ここでは一応、見た通りの、“周溝墓”という言葉を使うことにした。言葉の上で、「墳丘墓」と「周溝墓」が同義に使われていたりするが、ご容赦願いたい。

２～３世紀ごろのＳＸ３のような形態の遺構は、赤塚次郎氏により[28]「Ｂ型墳」と分類され、前方後方墳と絡めた研究がなされている。Ｂ型墳はさらにＢ１～３型に細分され、「前方後方型墳丘墓」としてまとめられる。その分類にあてはめると、ＳＸ３は何型になるのであろうか。平面形だけを見ると、辺の中央部にいわゆる陸橋部（開口部）をもつだけのＢ１型といえそうであるが、前方部を意識していると思われる溝の掘り方を考慮するとＢ２型となるのではないだろうか。

さて、話は前後するかもしれないが、この遺構の時期につては、北辺溝の底部につぶれていた高杯がキーとなる。この高杯（31）は一見して、東海地方西部一帯に特徴的に分布する、いわゆる「欠山（様）式」の範疇に属する。しかし、脚部の内湾があまり強くなく、杯底部の稜も弱いなど、欠山式の中では新しい要素をもつ。山田猛氏[29]の時期区分の欠山様式新段階にあたるものと思われる。

櫛田川流域では、これまでに瀬干遺跡[30]や寺垣内遺跡[31]でＢ型墳が検出されている。いずれもＢ１型で、周溝墓群のなかに営まれており、単独では存在しない。時期や形態に若干の違いがあるものの、これらの例を参考にしても、やはりＳＸ３の周囲にはＳＸ４などの１～２基にはとどまらない数の墓が営まれていたであろうことは想像に難くない。上ノ垣外遺跡ののる自然堤防の縁辺、すなわち、遺構の西、南、東側にかけてのすでに水田に開発されてしまった地域も含めて、墓域が形成されていたのではないだろうか。

もし、墓域があったとすると、その墓群の中で、ＳＸ３は特別の墓であったのか、はたまた複数の同等の墓のひとつであったのか、興味あるところである。また、櫛田川右岸では、現在のところ、最古の古墳は権現山２号墳で５世紀前半のものとされる。ＳＸ３[32]からそれまでの間、どのような墓制が存在したのか、今後の調査研究で明らかになればと思う。

（西　村）

③飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代に関しては、若干の遺構を検出したにすぎない。特筆すべき事項はないが、奈良時代では中地区の南東部で竪穴住居を３軒検出したが、この時期の集落の中心は、もう少し東に広がるのであろうか。また、中地区と南地区の境近くで検出された溝ＳＤ８・９は、出土遺物が極端に少ないが概ね奈良時代と考えられる。平成２年度に今回の調査区の東方で、ほ場整備事業に伴い発掘調査が行われたが、その時に検出された直線的な溝ＳＤ４[33]につながるものであろう。

④平安～鎌倉時代

平安時代になると、住居は掘立柱建物にかわる。棟方向をそろえる建物もいくつかは認められるが、出土遺物がなく時期不明の建物が多いなど、集落の構造や変遷を把握できるものではない。他の遺構や出土遺物からみると、最盛期は平安時代末期から鎌倉時代前期にある。ただ、この時期の遺構についても、中心はやはり調査区のさらに東の畑地にある。

⑤室町時代

室町期の遺構は北区に集中する。中区にある時代のはっきりしない掘立柱建物の中には、この時期のものもあるかもしれないが、遺物の量を考えると、その可能性は低いと言わざるを得ない。いわゆる「南伊勢系」の土師器が北区から集中して出土し、中区・南区ではほとんど出土しないのである。

この時期の遺構は、溝、集石遺構、土坑などで、住居は直接は検出されなかった。住居は、現在の家屋の位置と多分に重なるのだろう。すなわち、今回の調査区は上ノ垣外遺跡の西端部を調査し、集落の一部を明らかにした訳である。今後、東の隣接地において調査が行われる時、当遺跡の全貌が明らかにされることであろう。今後の発掘調査の機会を待ちたい。（田村・西村）

〔註〕

1．位置と環境

①松葉和也・日栄智子『高皿遺跡発掘調査概報』三重県埋蔵文化財センター　1996

②奥　義次「牟山遺跡（第二編　原始）」『多気町史』多気町　1992

③河瀬信幸「鴻ノ木遺跡」『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター　1991

小浜　学・田村陽一「鴻ノ木遺跡（第5次）」『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター　1994

④奥　義次・下村登良男『鐘突遺跡発掘調査報告』松阪市教育委員会　1981

⑤奥　義次・下村登良男『上寺遺跡発掘調査報告』松阪市教育委員会　1981

⑥奥　義次・下村登良男『射原垣内遺跡発掘調査報告』松阪市教育委員会　1981

⑦奥　義次「坂倉遺跡（第二編　原始）『多気町史』多気町　1992

⑧西村修久・小浜　学「新徳寺遺跡」『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター　1995

⑨谷本鋭次ほか『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会　1971

⑩奥　義次「田中廻り遺跡（第二編　原始）『多気町史』多気町　1992

⑪奥　義次「森荘川浦遺跡（第二編　原始）『多気町史』多気町　1992

⑫田村陽一「花ノ木遺跡」『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊1　三重県教育委員会　1979

⑬下村登良男「校庭遺跡（第二編　原始）」『多気町史』多気町　1992

⑭田村陽一「巣護遺跡」『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター　1995

⑮西村修久「大日山古墳群」『一般国道42号松阪・多気バイパス地内発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター　1995

⑯吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』多気町教育委員会　1974

下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会　1986

田阪仁ほか『河田古墳群発掘調査報告Ⅳ』多気町教育委員会　1983

⑰宇河雅之「明気窯跡群」『一般国道42号松阪・多気バイパス地内発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター　1995

⑱下村登良男「中尾窯跡」『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教員委員会　1986

⑲三重県教育委員会「カウジデン遺跡」『三重県埋蔵文化財年報10』三重県教育委員会　1980

⑳三重県教育委員会「東浦遺跡」『三重県埋蔵文化財年報9』三重県教育委員会　1979

3．遺構と遺物

㉑新田　洋「平安時代～中世における煮炊用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1　三重考古学談話会　1985

㉒伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1　三重歴史文化研究会　1990

伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号　三重県埋蔵文化財センター　1992

㉓千葉　豊「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』72－6号　1989

㉔三重県立図書館の磯部克氏にご教示いただいた。

㉕江坂輝弥『縄文土器文化研究序説』六興出版　1982

㉖東海女子短期大学の岩野見司氏にご教示いただいた。

㉗千葉　豊「近畿地方出土の埋設土器について」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会　1989

㉘赤塚次郎「東海系のトレース－3・4世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』44－6　1992

赤塚次郎「前方後方墳」『季刊考古学』第40号　雄山閣　1992

赤塚次郎「東海のB型墳」『シンポジウム西相模の三・四世紀方形周溝墓をめぐって』東海大学校地内遺跡調査団　1992

㉙山田　猛「山城遺跡」『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994

㉚宇河雅之「瀬干遺跡」『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1996

㉛三重県教育委員会「寺垣内遺跡発掘調査概要」（第6回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会資料）　1988

㉜その他ＳＸ3に関して以下の文献を参考にした。

・田中新史「東国の古墳時代出現期とその前後」『東アジアの古代文化』46号　1980

・都出比呂志「墳墓」『岩波講座　日本考古学』4．集落と祭祀　1986

㉝田村陽一「上ノ垣外遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1991

遺構番号	概　　報	調　査　時	備　　考
ＳＫ１	（２次）ＳＫ９	（２次）ＳＺ９	縄文後期
ＳＸ２	（２次）埋設土器	（２次）埋設土器Ⅰ	縄文後期？
ＳＸ３	（巣護）前方後方型周溝墓	（巣護）ＳＤ18	古墳前期
ＳＸ４	（巣護）溝20	（巣護）ＳＤ20	古墳前期
	（２次）ＳＤ11	（２次）ＳＤ11	
ＳＤ５	――――――――	（２次）ＳＤ５	古墳前期
ＳＤ６	――――――――	――――――――	古墳前期？
ＳＤ７	（１次）溝１	（１次）ＳＤ５	奈良前期
ＳＤ８	（２次）ＳＤ10	（２次）ＳＤ10	奈良前期
	（巣護）溝19	（巣護）ＳＤ19	
ＳＤ９	（巣護）溝19	（巣護）ＳＤ19	奈良前期？
ＳＨ10	（２次）ＳＨ２	（２次）ＳＨ２	奈良前期
ＳＨ11	（２次）ＳＨ６	（２次）ＳＨ６	奈良後期
ＳＨ12	（２次）ＳＨ７	（２次）ＳＨ７	奈良後期
ＳＸ13	（２次）ＳＺ３	（２次）ＳＺ３	飛鳥末～奈良初
ＳＤ14	（２次）ＳＤ１	（２次）ＳＤ１	平安中期
ＳＤ15	（２次）ＳＤ４	（２次）ＳＤ４	平安後期
ＳＺ16	（２次）ＳＺ13	（２次）ＳＺ13	鎌倉前期
ＳＺ17	（２次）配石遺構	（２次）ＳＺ８	鎌倉前期
ＳＢ18	――――――――	――――――――	－
ＳＢ19	（２次）ＳＢ27	――――――――	－
ＳＢ20	（２次）ＳＢ20	――――――――	平安前期
ＳＢ21	――――――――	――――――――	平安末～鎌倉
ＳＢ22	（２次）ＳＢ16	――――――――	平安末～鎌倉
ＳＢ23	（２次）ＳＢ18	――――――――	平安末～鎌倉
ＳＢ24	――――――――	――――――――	平安末～鎌倉
ＳＢ25	――――――――	――――――――	平安
ＳＢ26	――――――――	――――――――	－
ＳＢ27	――――――――	――――――――	－
ＳＢ28	――――――――	――――――――	平安末期
ＳＢ29	（２次）ＳＢ17	――――――――	平安
ＳＢ30	（２次）ＳＢ25	――――――――	－
ＳＢ31	――――――――	――――――――	鎌倉前期
ＳＢ32	――――――――	――――――――	－
ＳＢ33	――――――――	――――――――	鎌倉前期
ＳＢ34	（２次）ＳＢ19	――――――――	－
ＳＢ35	――――――――	――――――――	鎌倉後期～？
ＳＢ36	（２次）ＳＢ26	――――――――	－
ＳＢ37	――――――――	――――――――	－
ＳＡ38	――――――――	――――――――	鎌倉前期
ＳＡ39	――――――――	――――――――	－
ＳＤ40	――――――――	（２次）ＳＤ12	鎌倉
ＳＤ41	（巣護）溝　６	（巣護）ＳＤ６	鎌倉前期
ＳＥ42	（巣護）井戸22	（巣護）ＳＥ22	鎌倉前期
ＳＥ43	――――――――	（巣護）ＳＥ21	鎌倉前期？
ＳＥ44	（巣護）井戸23	（巣護）ＳＥ23	鎌倉前期
ＳＥ45	――――――――	（巣護）ＳＥ24	鎌倉前期
ＳＥ46	（巣護）井戸26	（巣護）ＳＥ26	鎌倉前期
ＳＥ47	（巣護）井戸28	（巣護）ＳＥ28	鎌倉前期
ＳＫ48	（巣護）土坑25	（巣護）ＳＫ25	鎌倉前期
ＳＥ49	――――――――	（巣護）ＳＫ29	鎌倉前期
ＳＫ50	――――――――	（巣護）ＳＫ27	縄文後期
ＳＤ51	――――――――	――――――――	鎌倉前期
ＳＫ52	（１次）土坑　６	（１次）ＳＫ１	鎌倉末～室町
ＳＸ53	（１次）土坑　５	（１次）ＳＺ２	鎌倉末～室町
ＳＺ54	（１次）集石遺構７	（１次）ＳＺ７	鎌倉末～室町
ＳＺ55	――――――――	（１次）ＳＺ３	鎌倉末～室町
ＳＤ56	（１次）溝　２	（１次）ＳＤ２	室町
ＳＤ57	（１次）溝　４	（１次）ＳＤ６	室町
ＳＤ58	（１次）溝　３	（１次）ＳＤ８	室町
ＳＤ59	――――――――	（２次）ＳＤ14	室町
ＳＫ60	――――――――	（２次）ＳＺ15	室町
ＳＤ61	――――――――	（２次）ＳＤ23	－
ＳＤ62	――――――――	（２次）ＳＤ23	－
ＳＡ63	――――――――	――――――――	－
Pit 64	――――――――	（２次）Ｎ30－Ｐ４	弥生後期～古墳
Pit 65	――――――――	（２次）Ｌ33－Ｐ４	弥生後期
Pit 66	――――――――	（２次）Ｏ29－Ｐ２	奈良後期
Pit 67	――――――――	（２次）Ｑ33－Ｐ７	平安後期
Pit 68	――――――――	（２次）Ｒ33－Ｐ６	鎌倉前期
ＳＺ69	――――――――	（２次）Ｓ19－Ｐ１	－
Pit 70	――――――――	（２次）Ｑ34－Ｐ16	鎌倉前期

第９表　遺構番号対照表

PL 1.

昭和23年極東米軍撮影空中写真

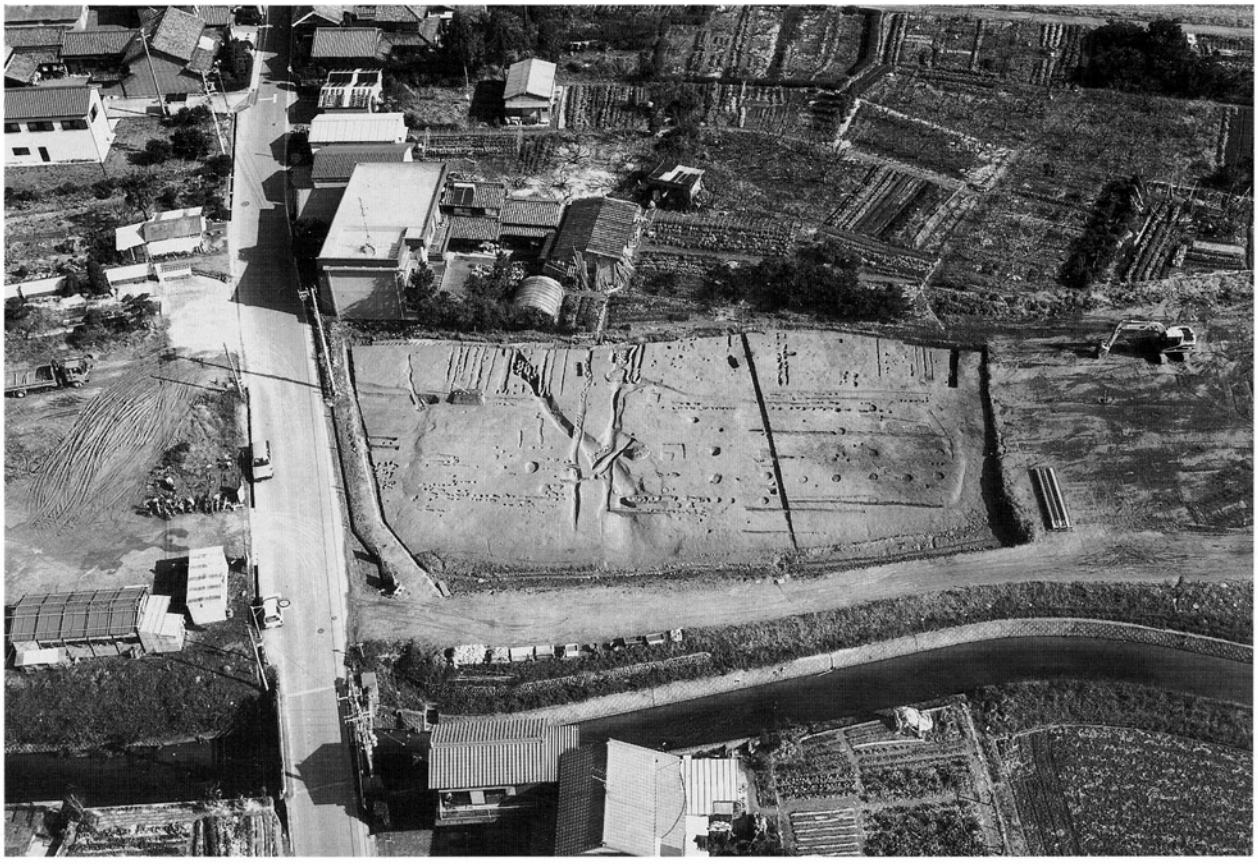
遺跡遠景（西上空から）

調査前全景（北から）

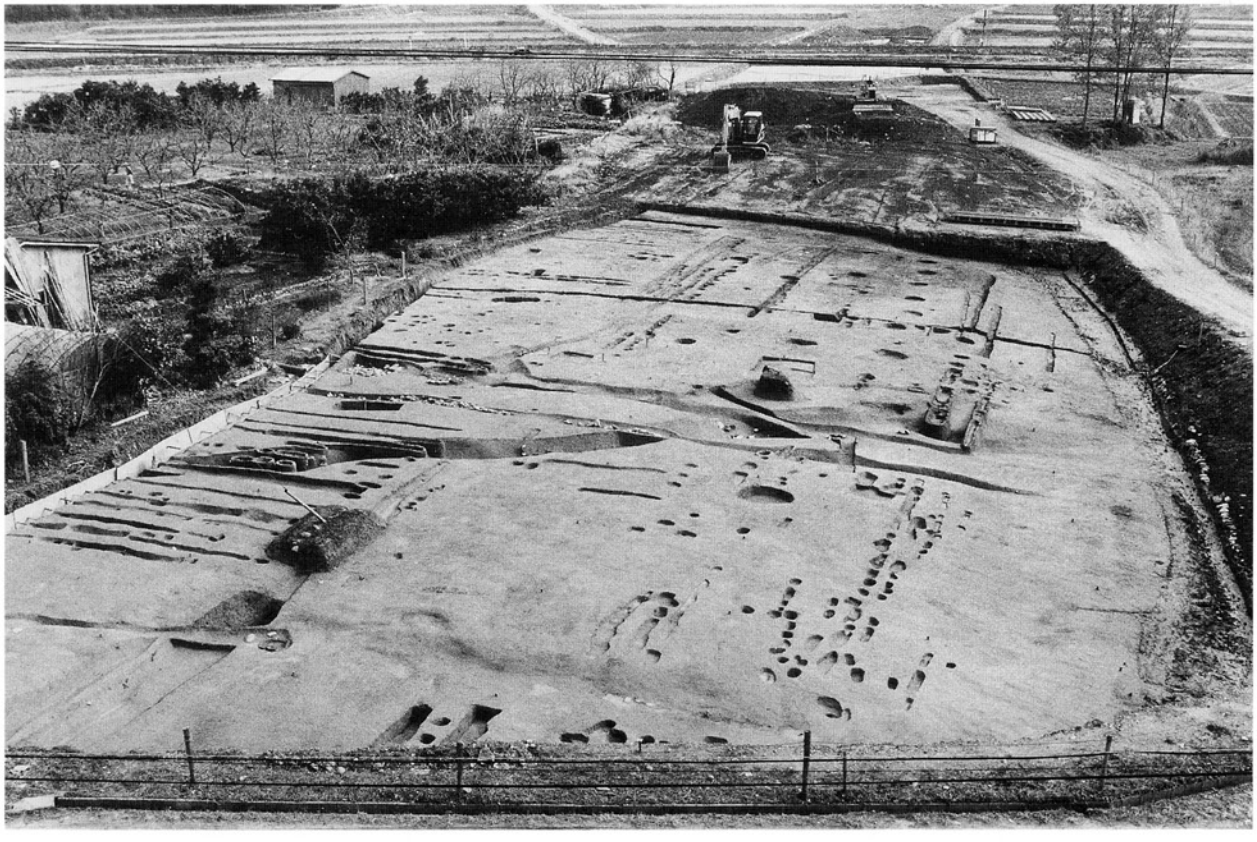
PL3.

調査後全景（北上空から）

調査後全景（南上空から）



第１次調査（北地区、西上空から）



第１次調査（北地区、北から）

PL 5.

第２次調査（中地区、西上空から）

第２次調査（中地区、北から）

巣護遺跡区（南地区、西上空から）

巣護遺跡区（南地区、調査風景）

PL 7.

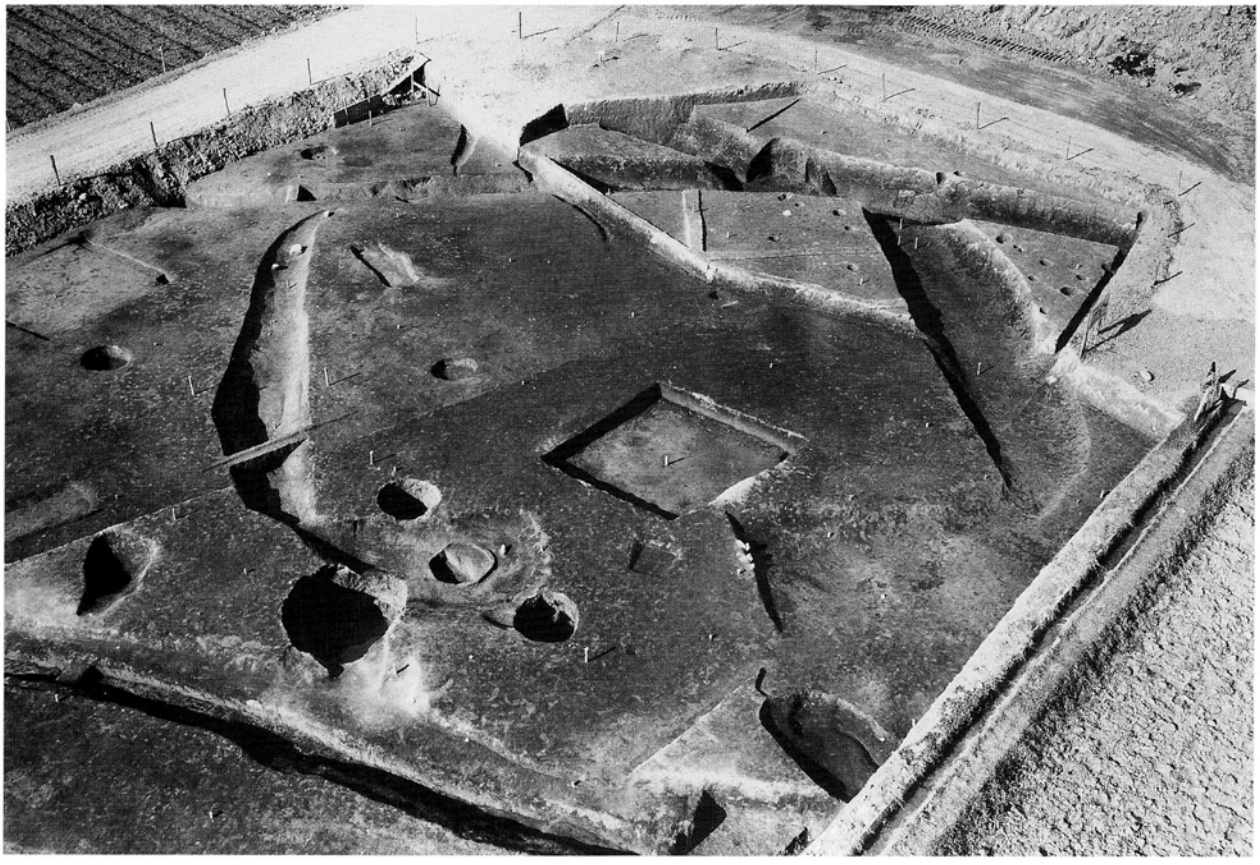
SK 1（北から）

SK 1縄文土器出土状況（東から）

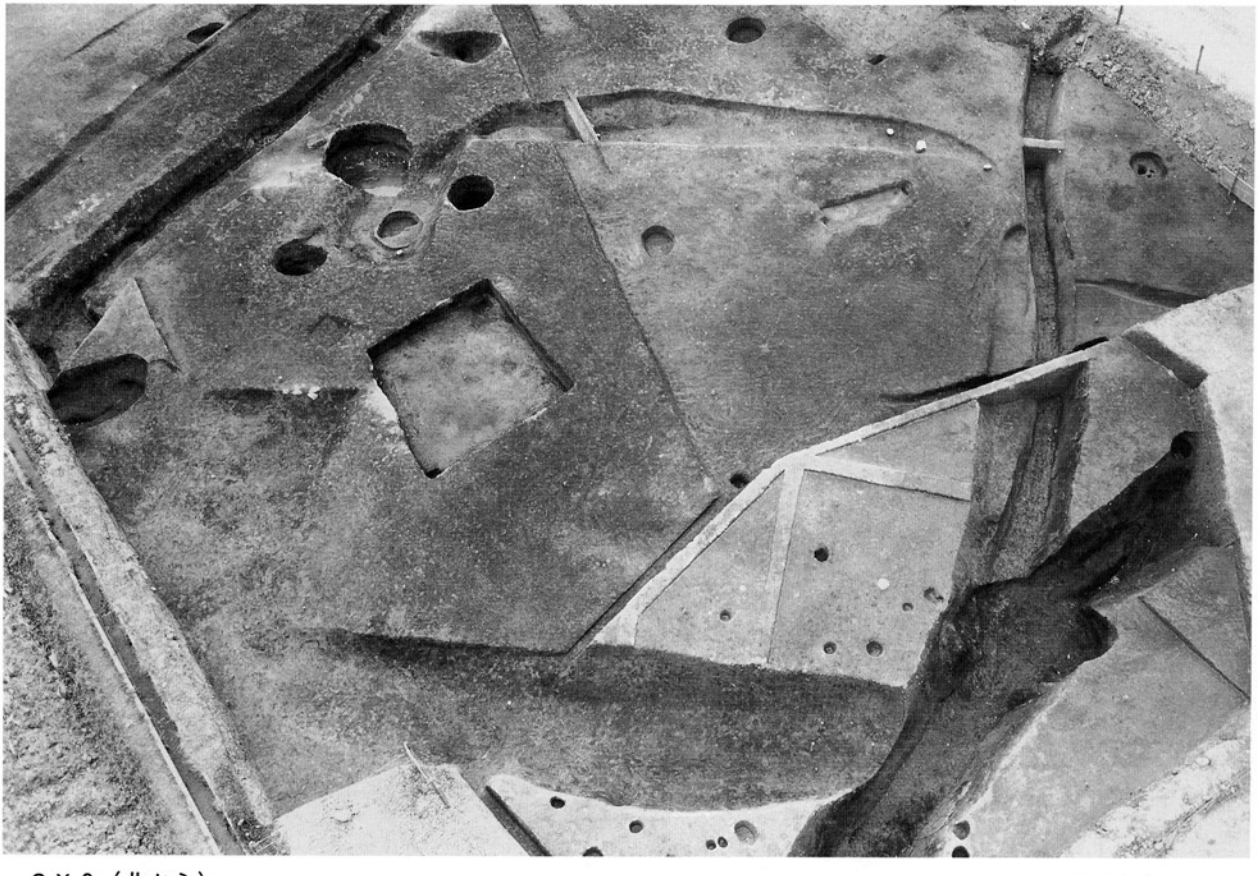
ＳＸ２検出状況（南から）

ＳＸ２埋設状況（東から）

PL 9.



SX 3（東から）

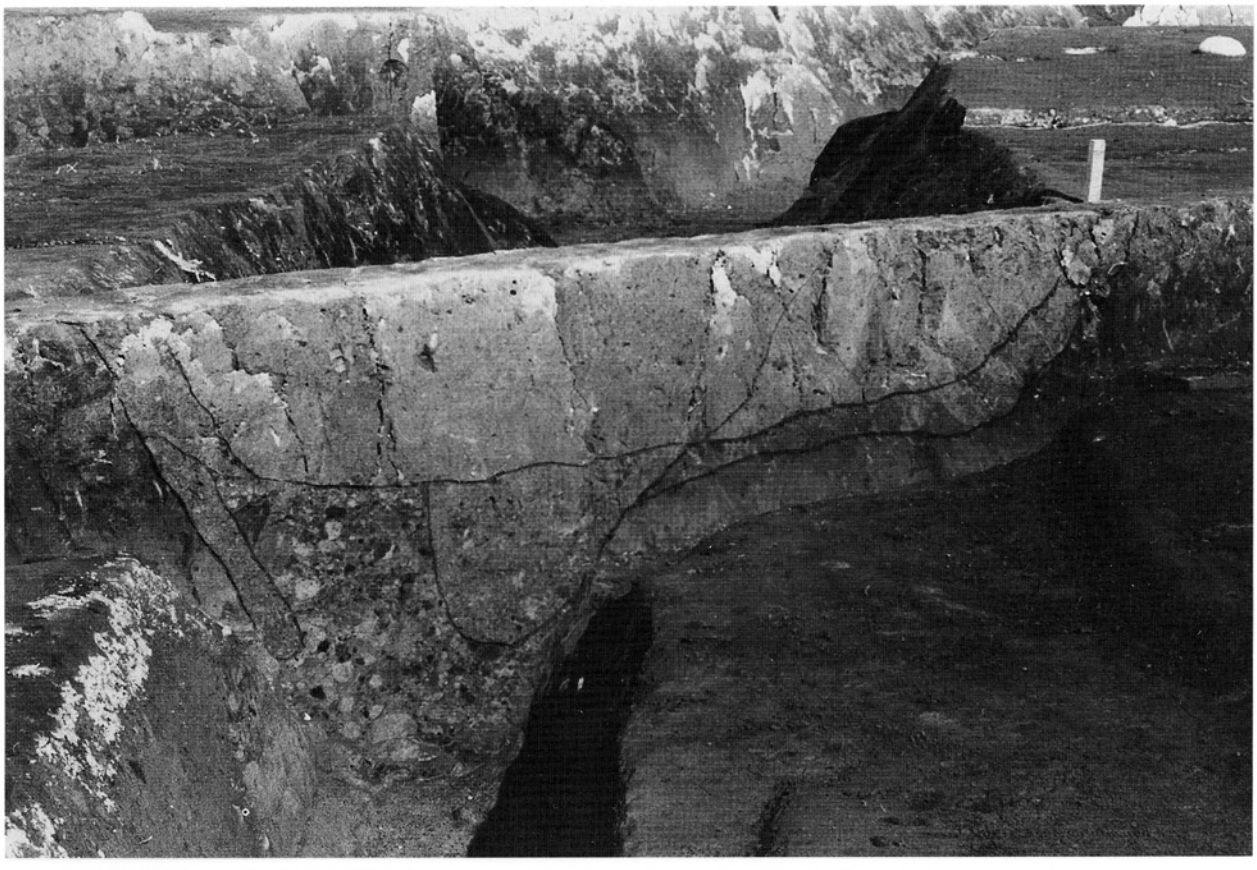


SX 3（北から）

SX3南周構遺物出土状況（東から）

SX3南周溝遺物出土状況（西から）

ＳＸ３北周溝遺物出土状況（東から）

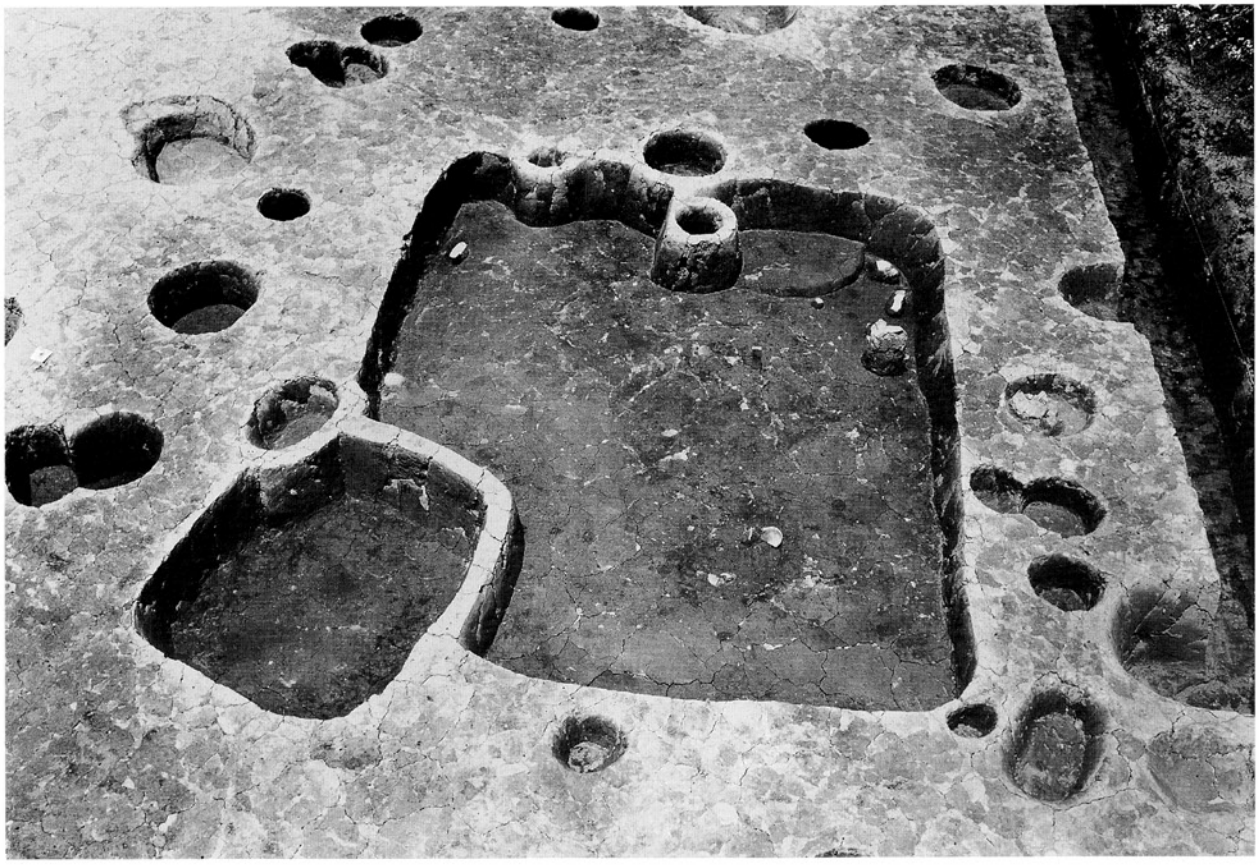


ＳＸ３西周溝・ＳＤ９断面（南から）

SX4（東から）

第2次調査（中地区）調査風景

PL13.



SH10（南から）

SH11・12（北から）

SX13（南西から）

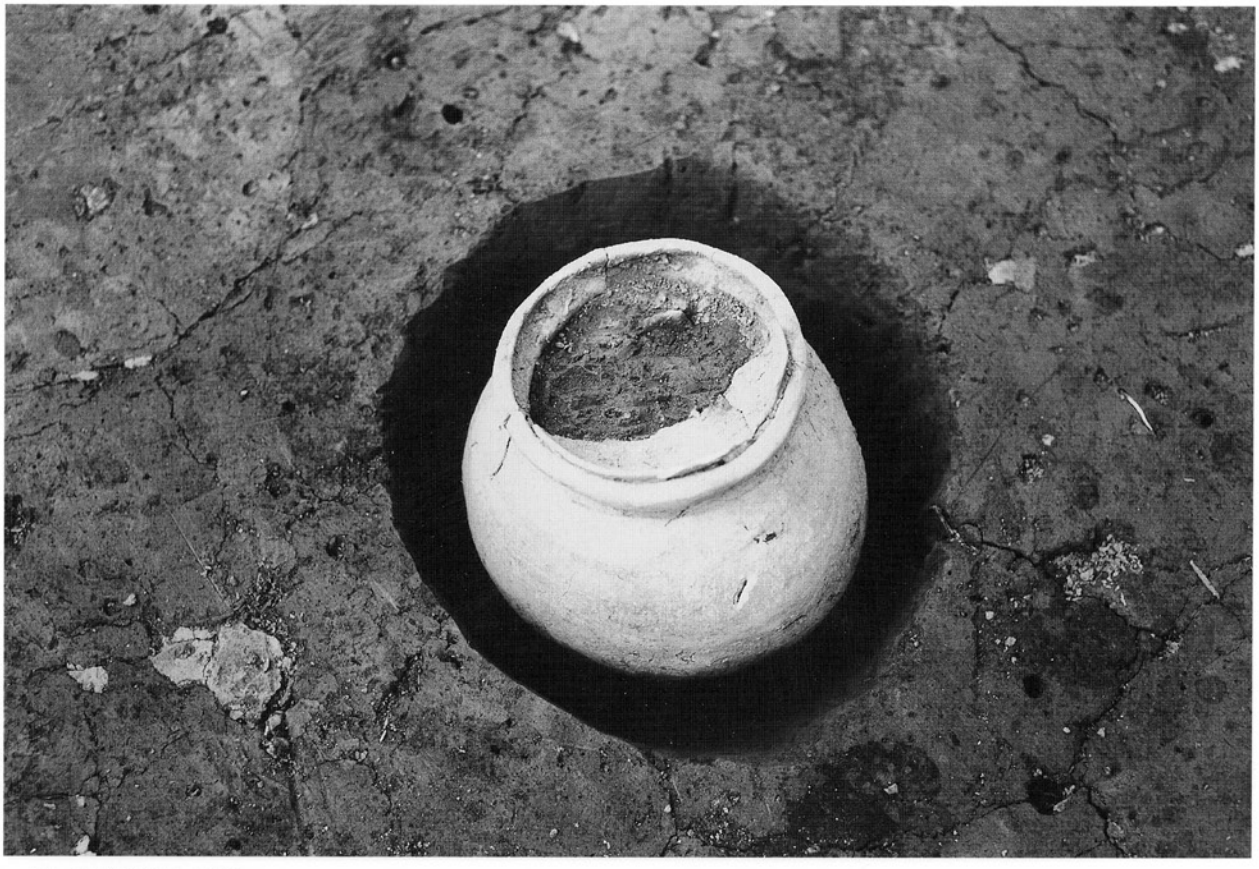
Pit.66　遺物出土状況

PL15.

SZ16（南から）

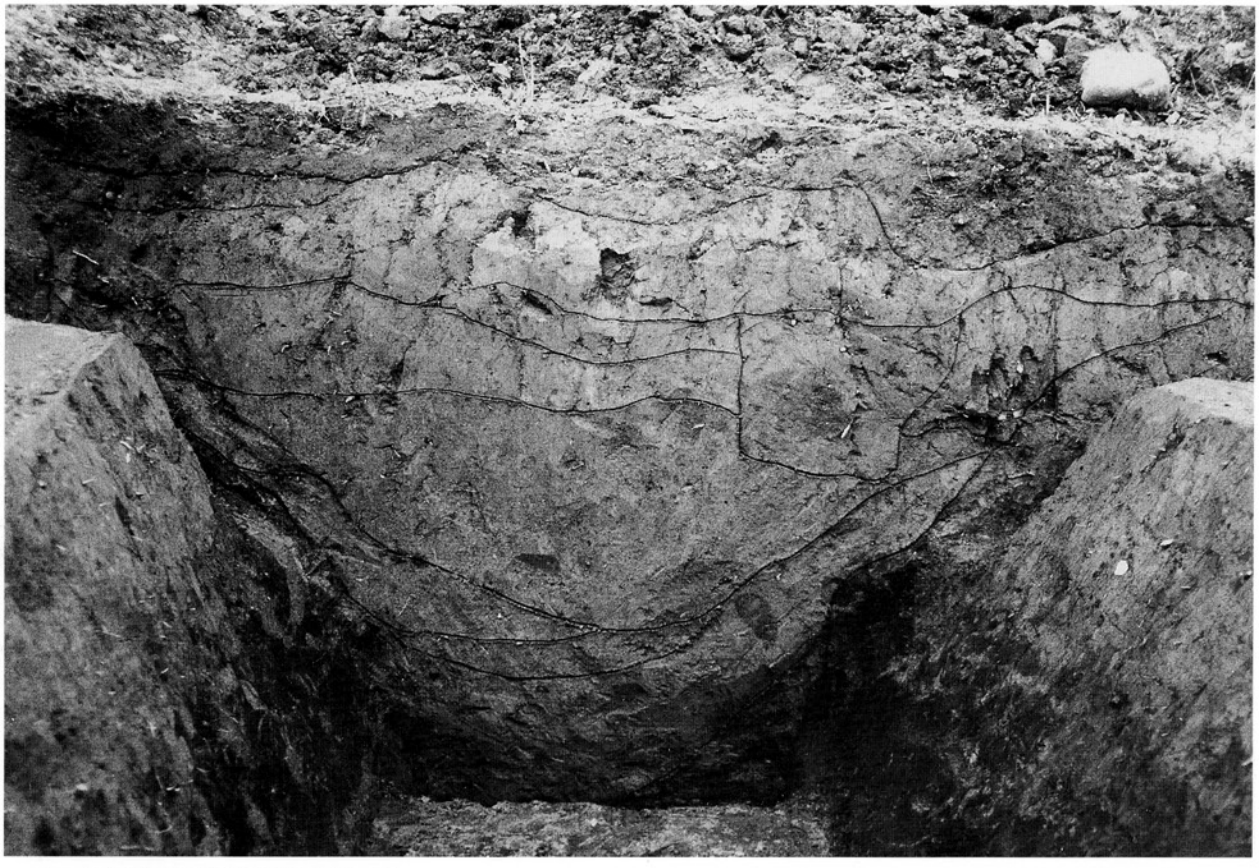
SZ17（北西から）

Pit.67検出状況



Pit.67遺物出土状況

ＳＫ48遺物出土状況（北から）



ＳＤ８発掘区東壁断面（南西から）

ＳＥ42上部遺物出土状況（北から）

ＳＥ42下部遺物出土状況（南から）

PL19.

SE42下部遺物出土状況（南から）

SE44曲物出土状況（南から）

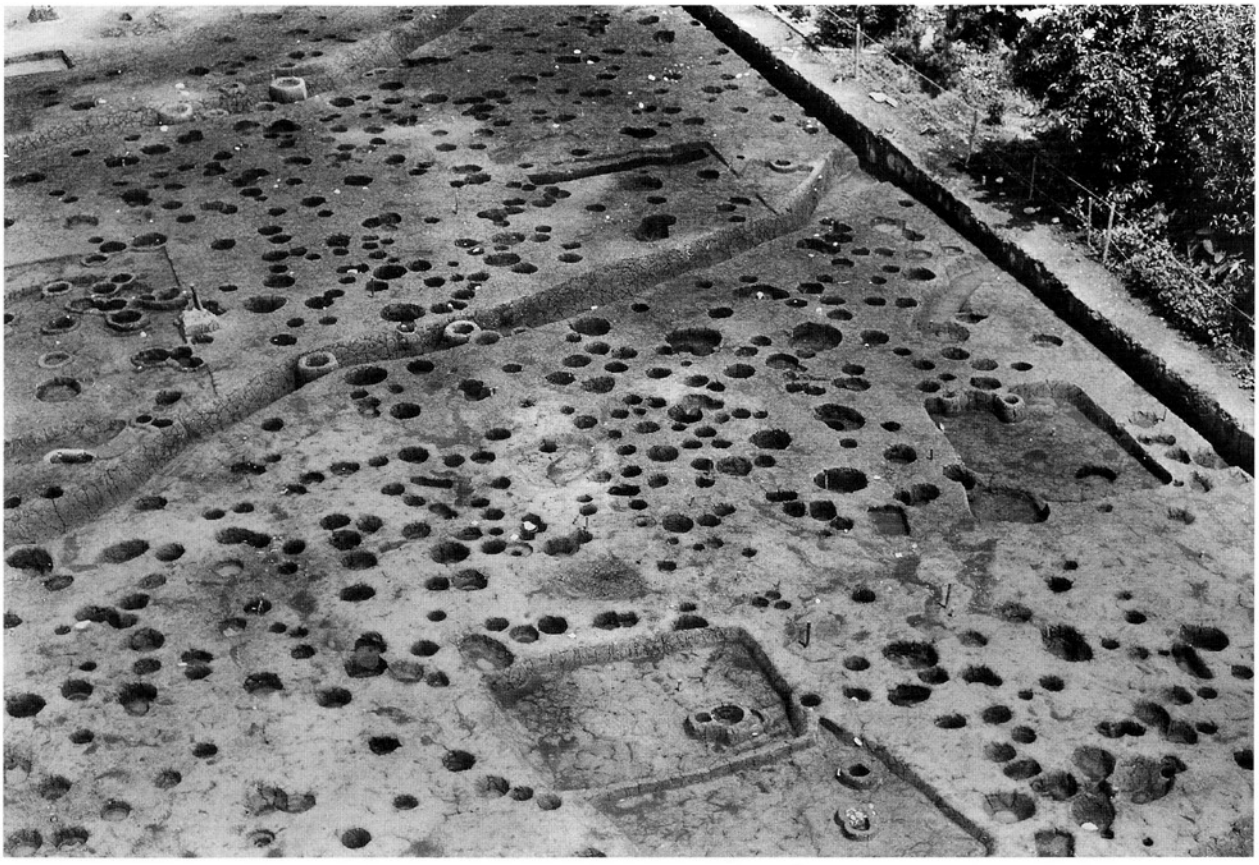
Pit.68（南から）

Pit.71（O－30 P 8）（西から）

P L 21.

S B 20・21・22ほか（南から）

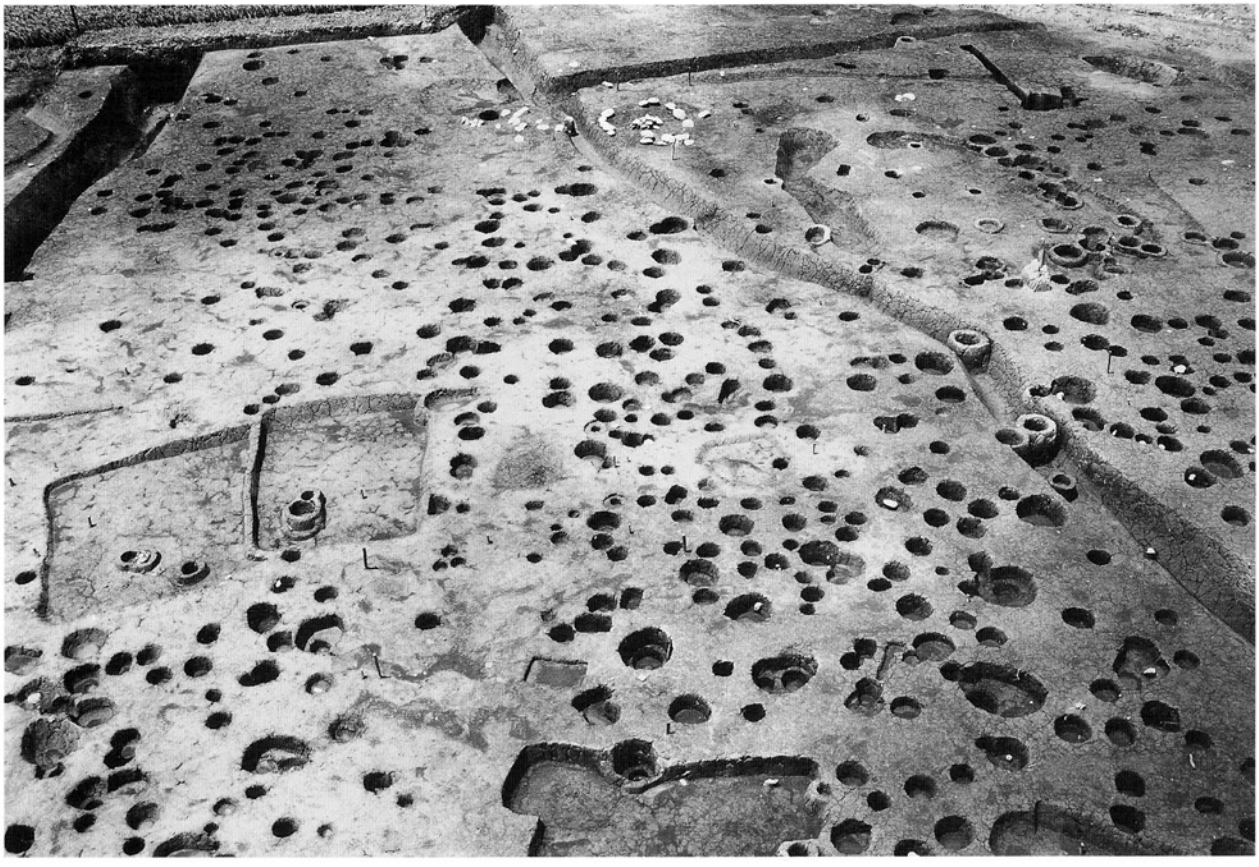
S B 23・24・25・26ほか（東から）



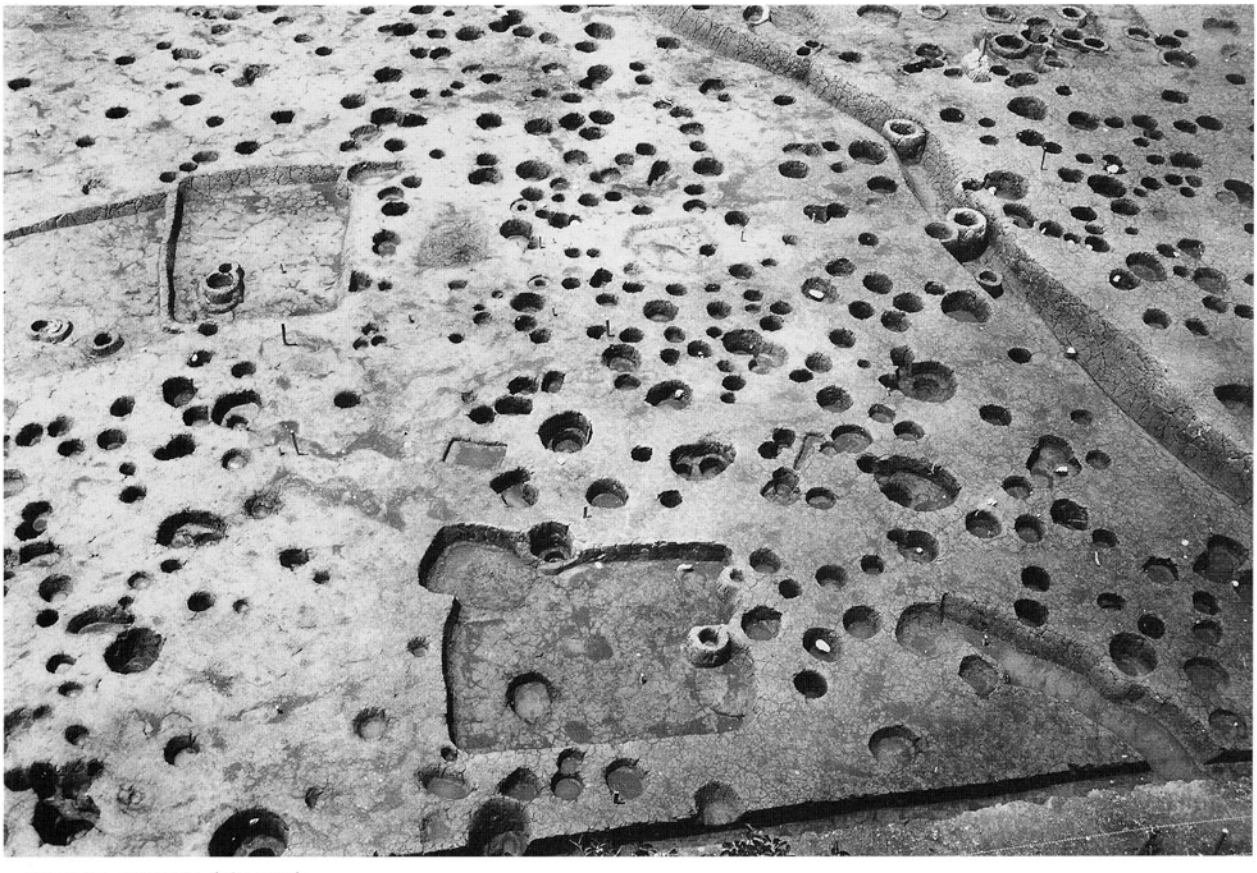
SB33・34・35・36ほか（南から）

SB23・24・SA38ほか（南から）

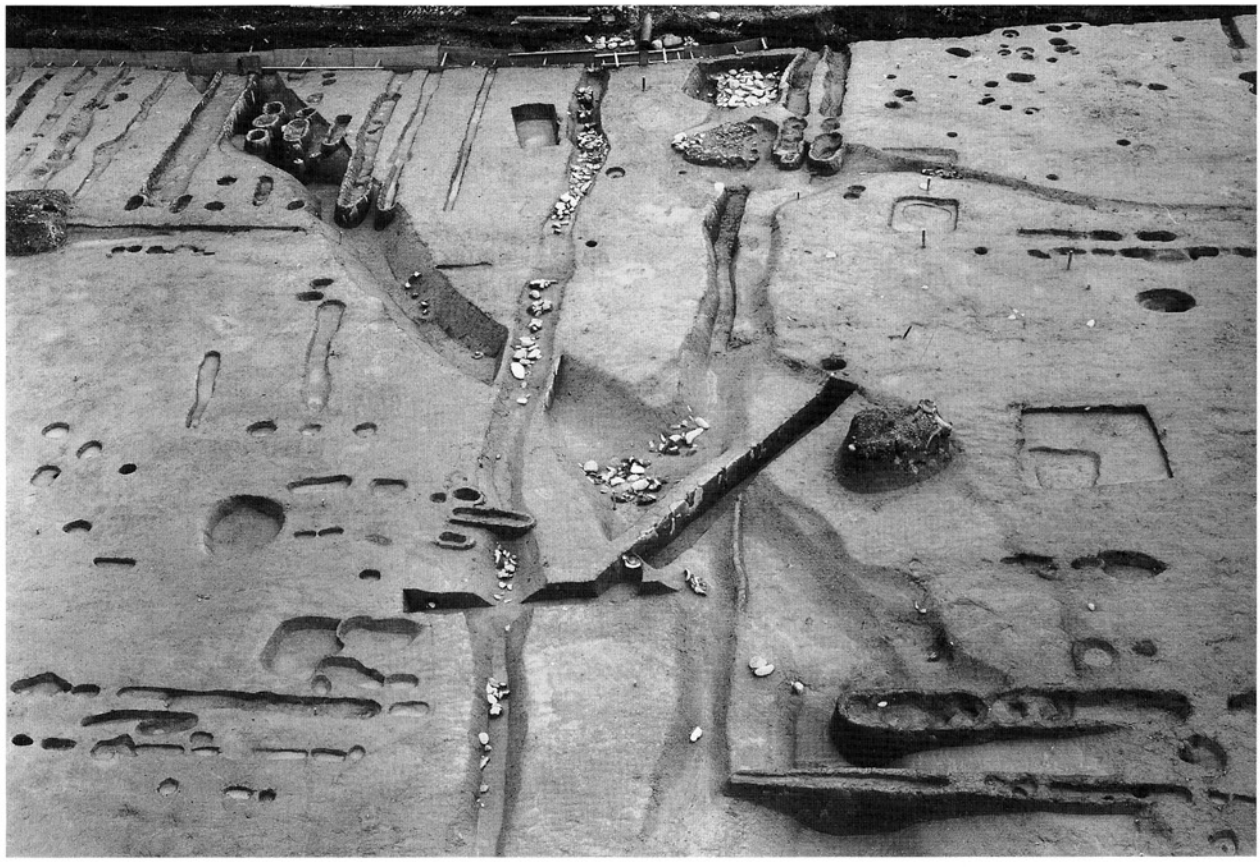
PL23.



SB23・24・SA38ほか（東から）



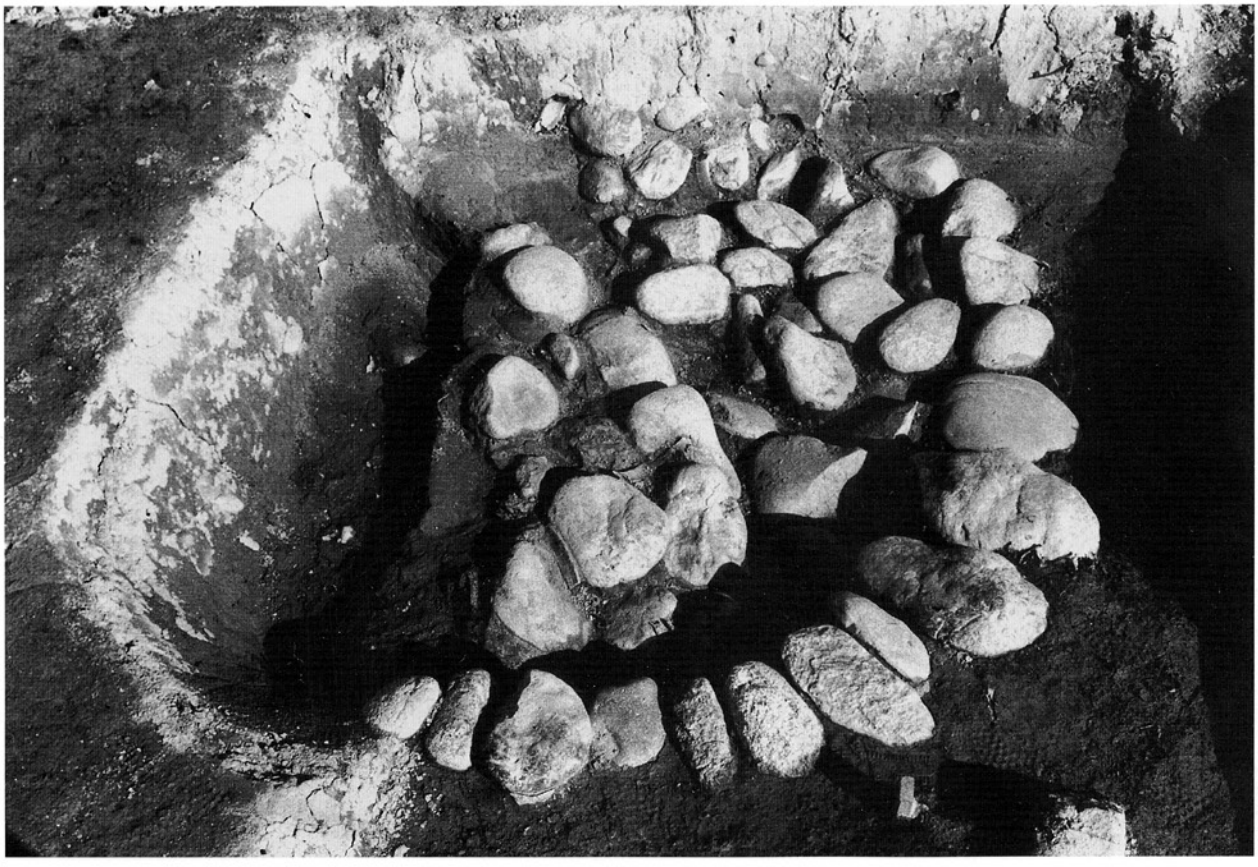
SB20・21ほか（東から）



第１次調査（北地区）主要遺構（西から）

ＳＸ53（西から）

PL25.



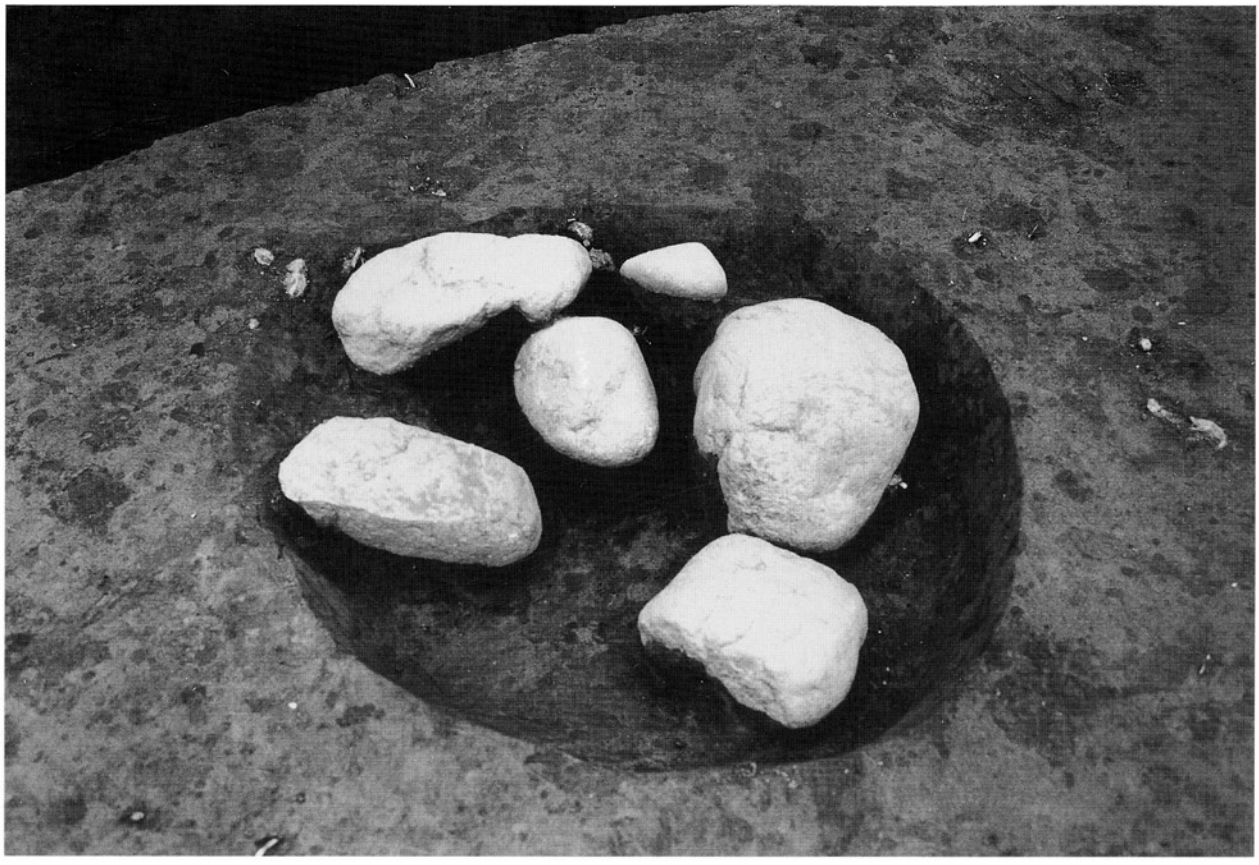
SZ54（西から）

SZ54（北から）

SZ55（南から）

SD56（西から）

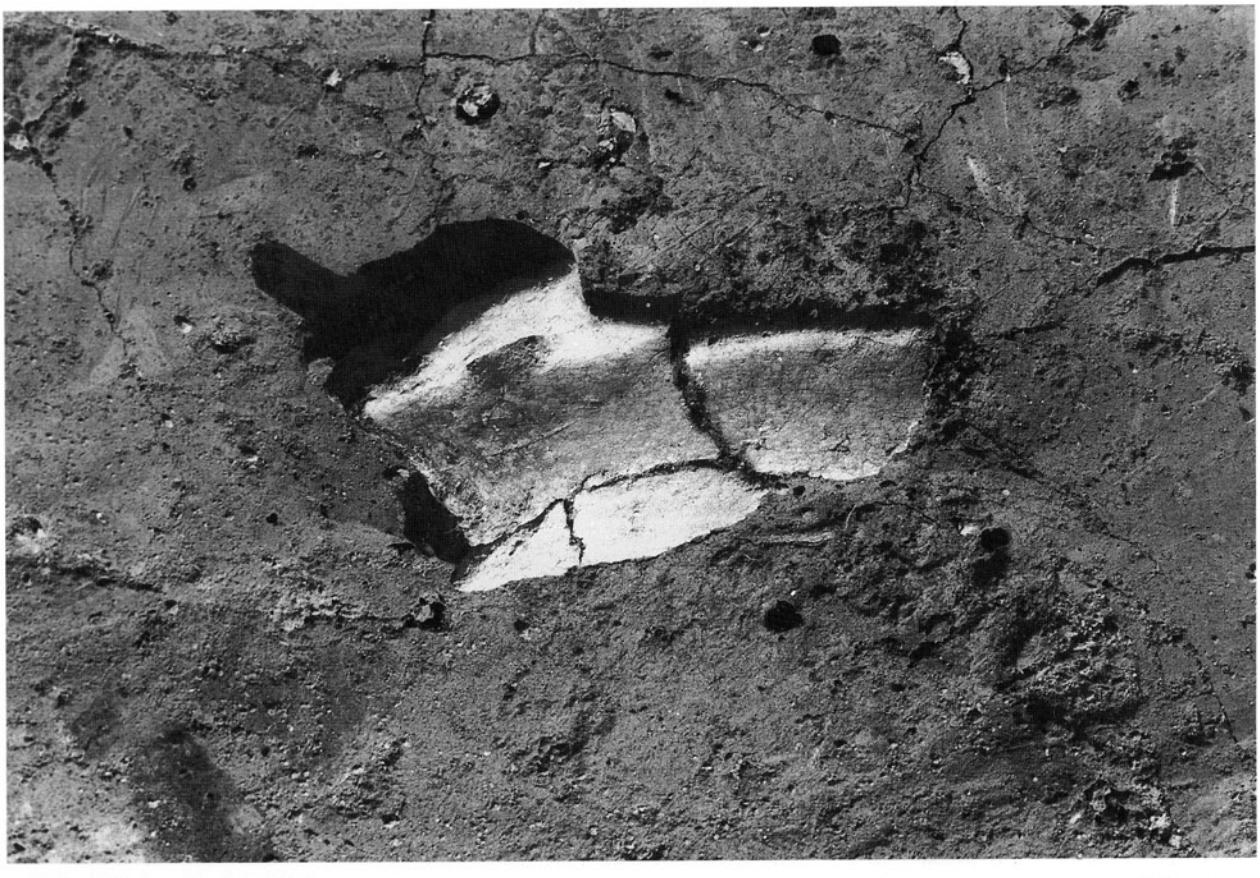
ＰＬ27.



ＳＺ69（西から）

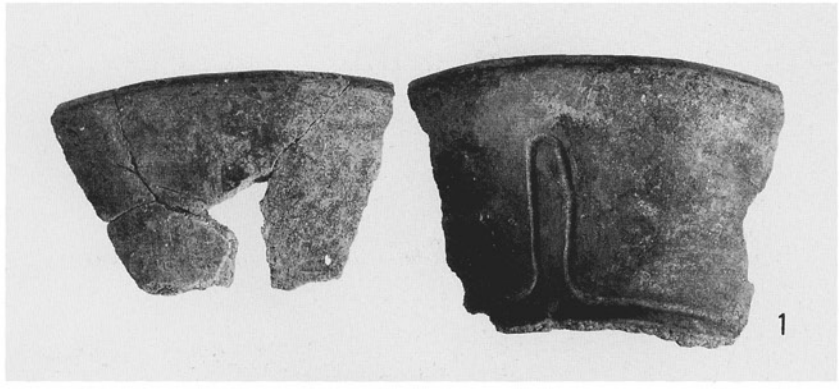
第１次調査（北地区）調査風景

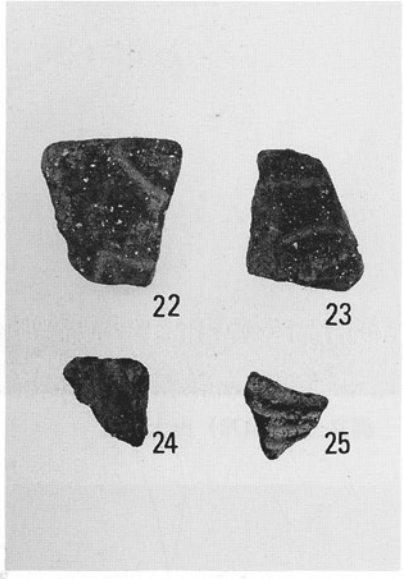
縄文土器（479）出土状況

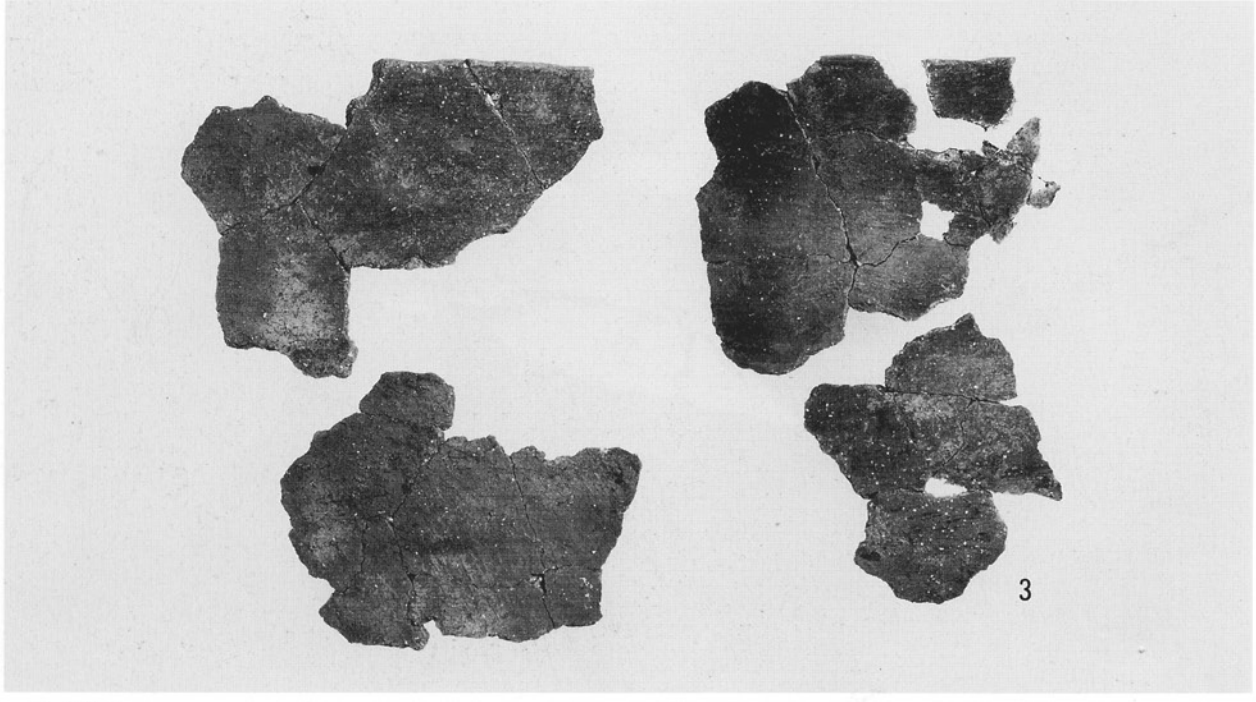


縄文土器（489）出土状況

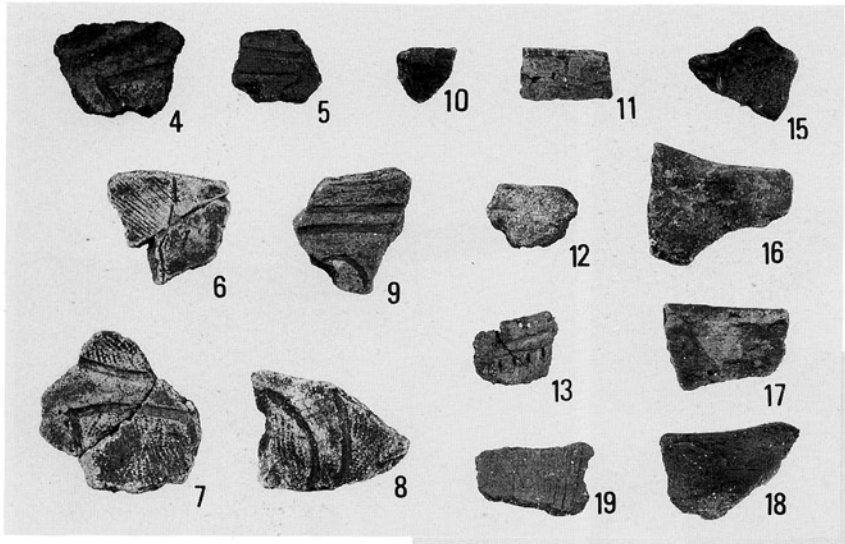
PL29.

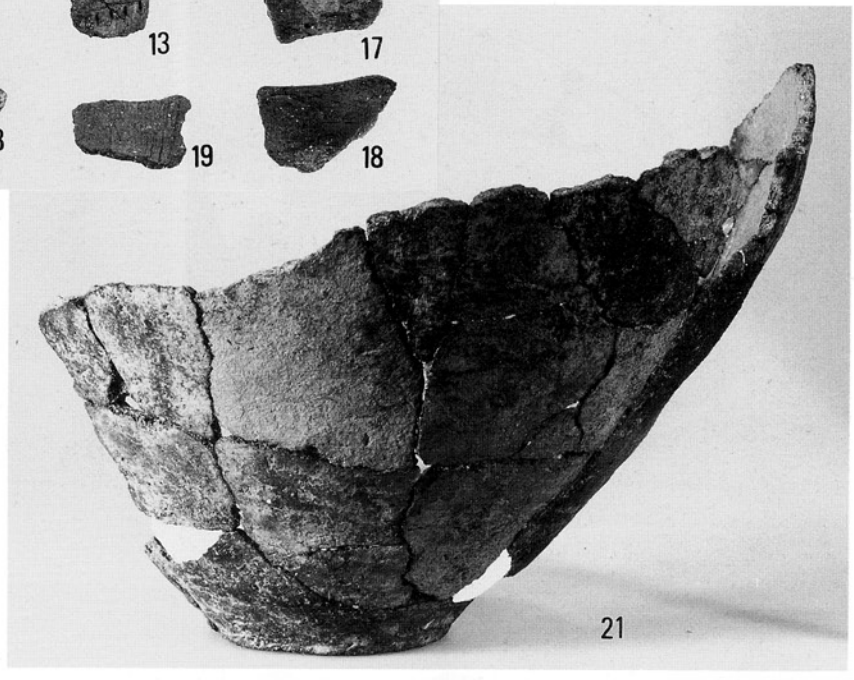






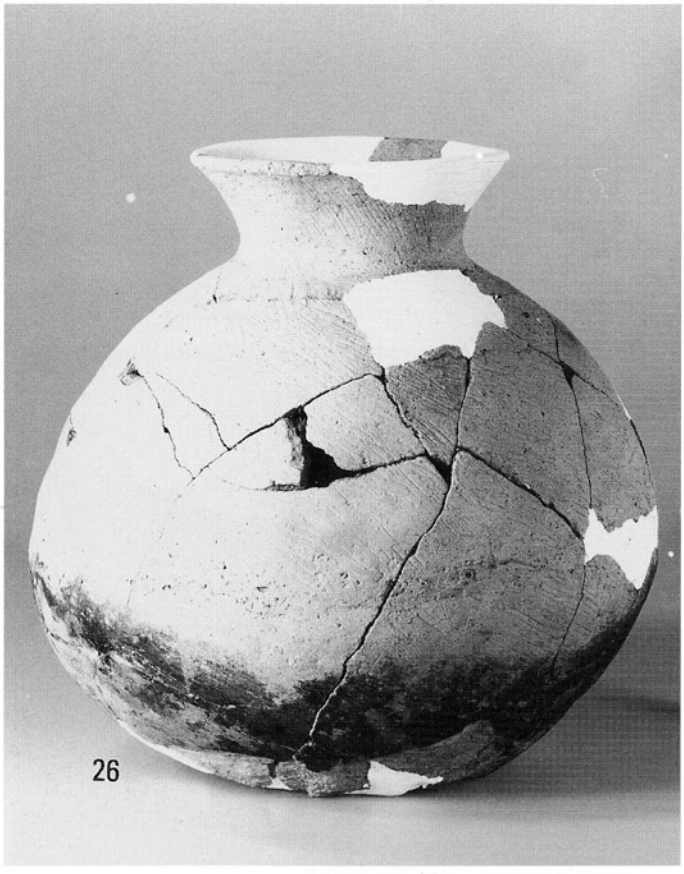
出土遺物

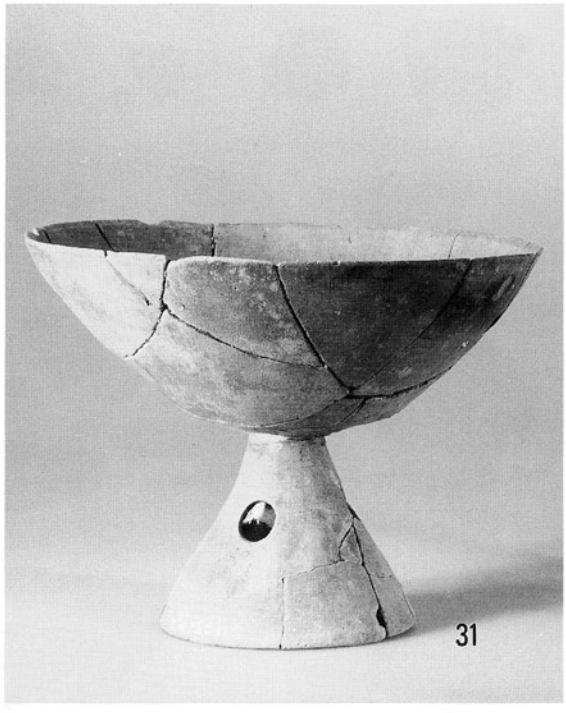


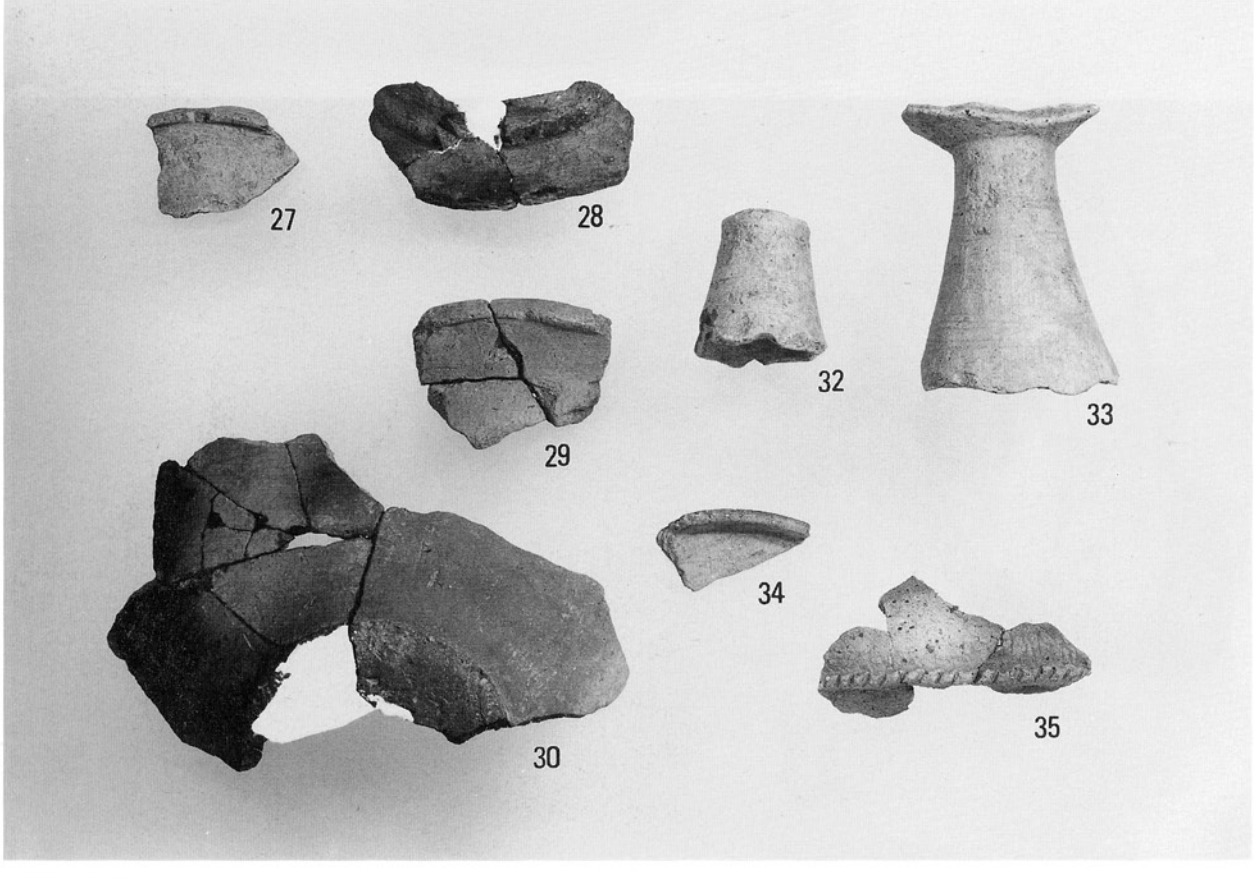


出土遺物

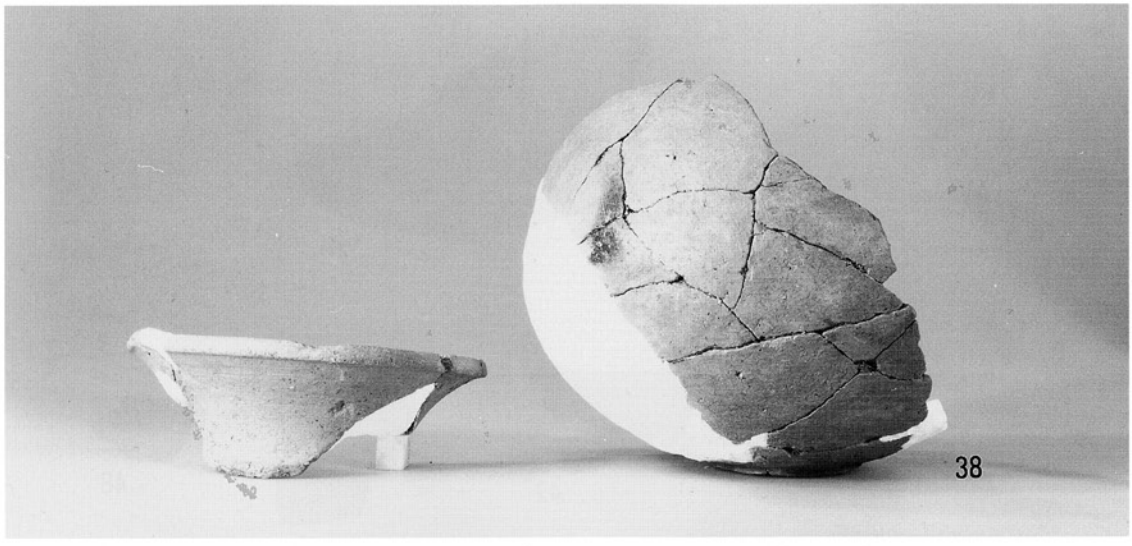
P L 31.

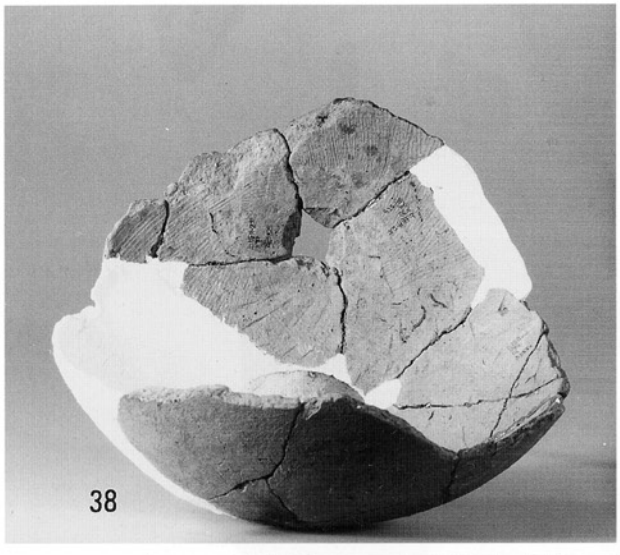


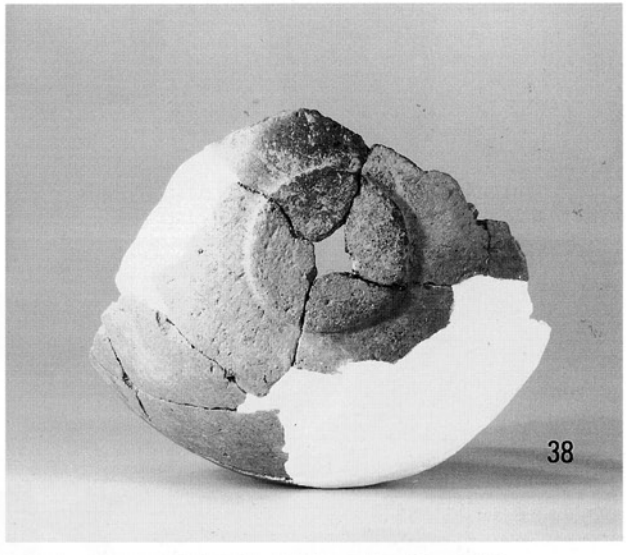




出土遺物

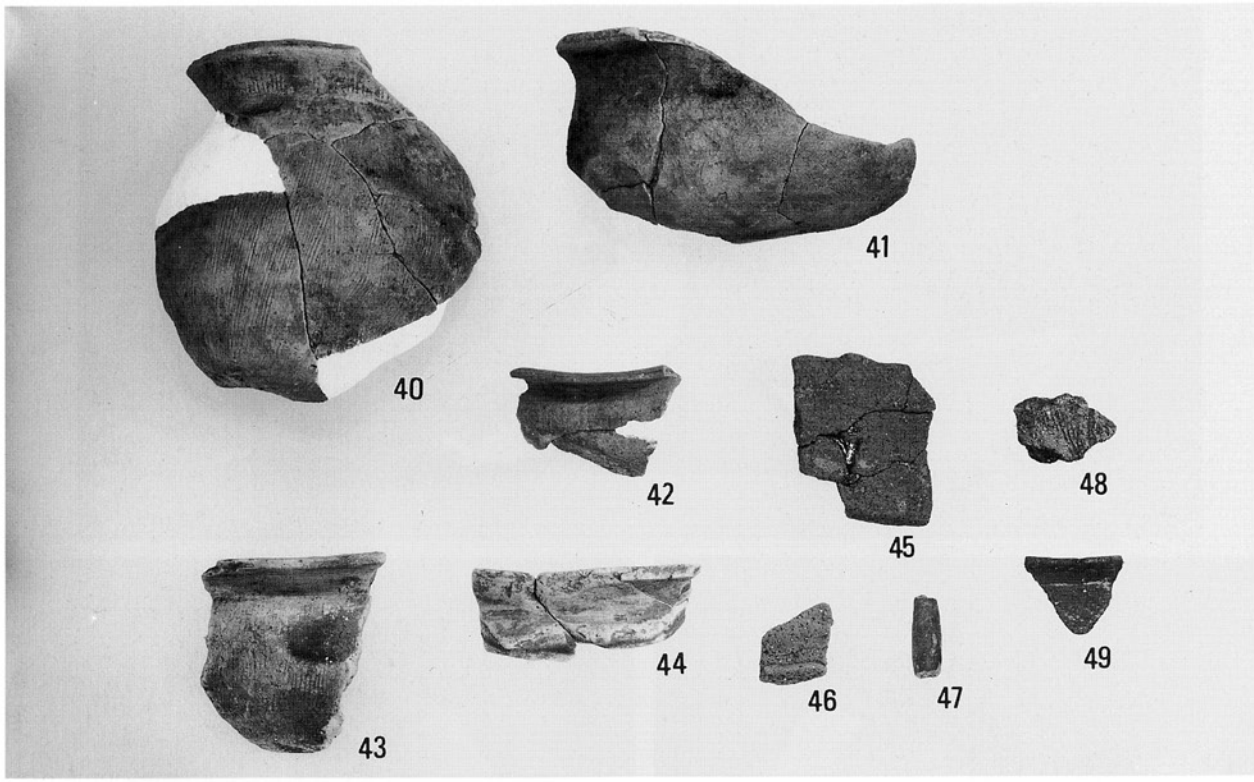


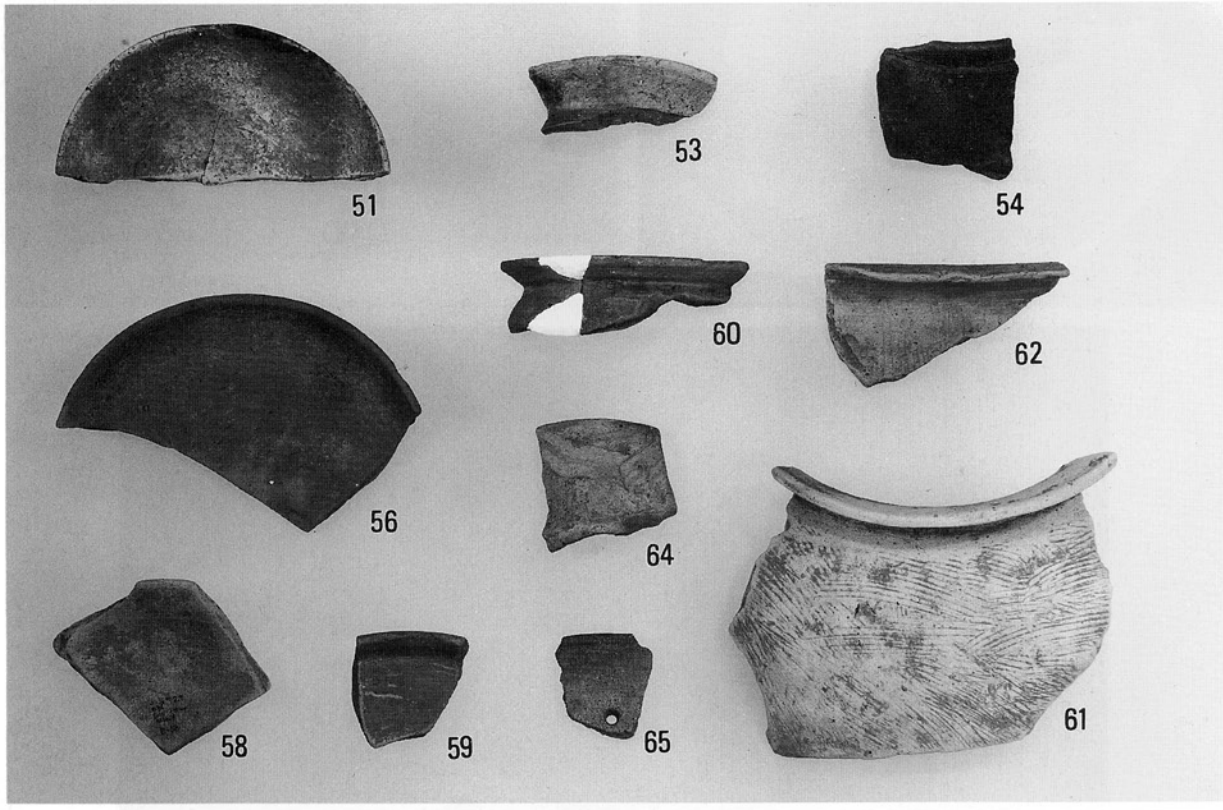


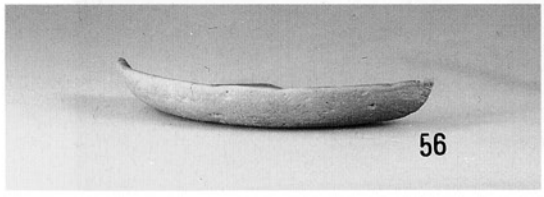


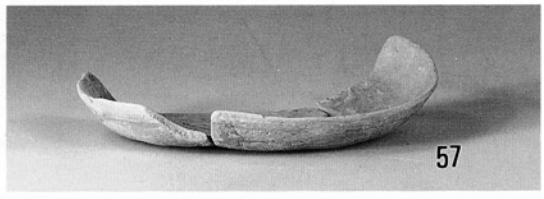
出土遺物

PL 33.

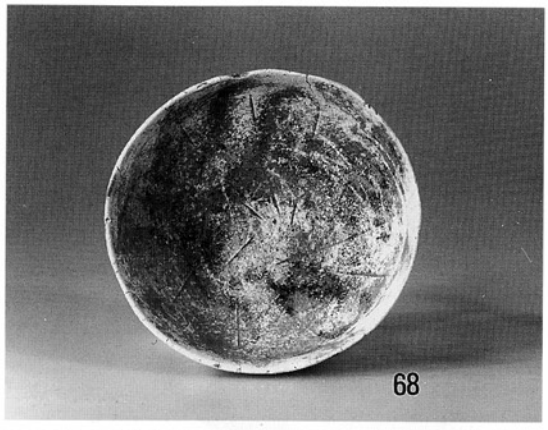


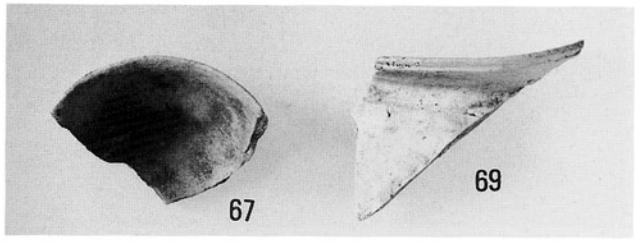


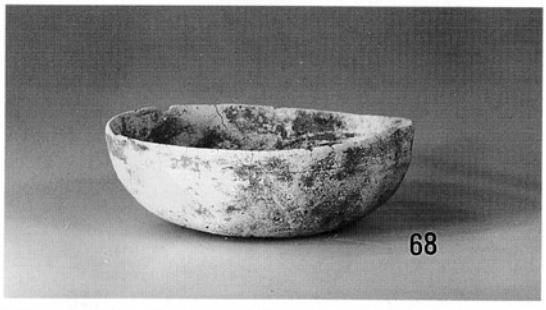


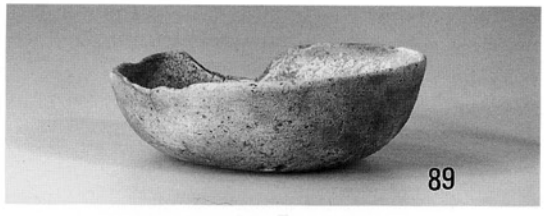


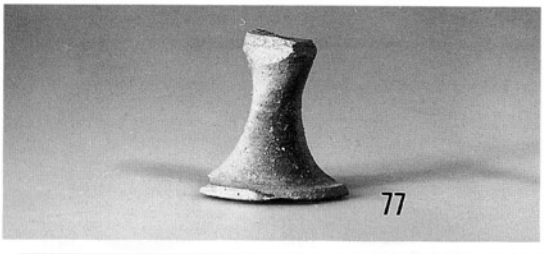
出土遺物

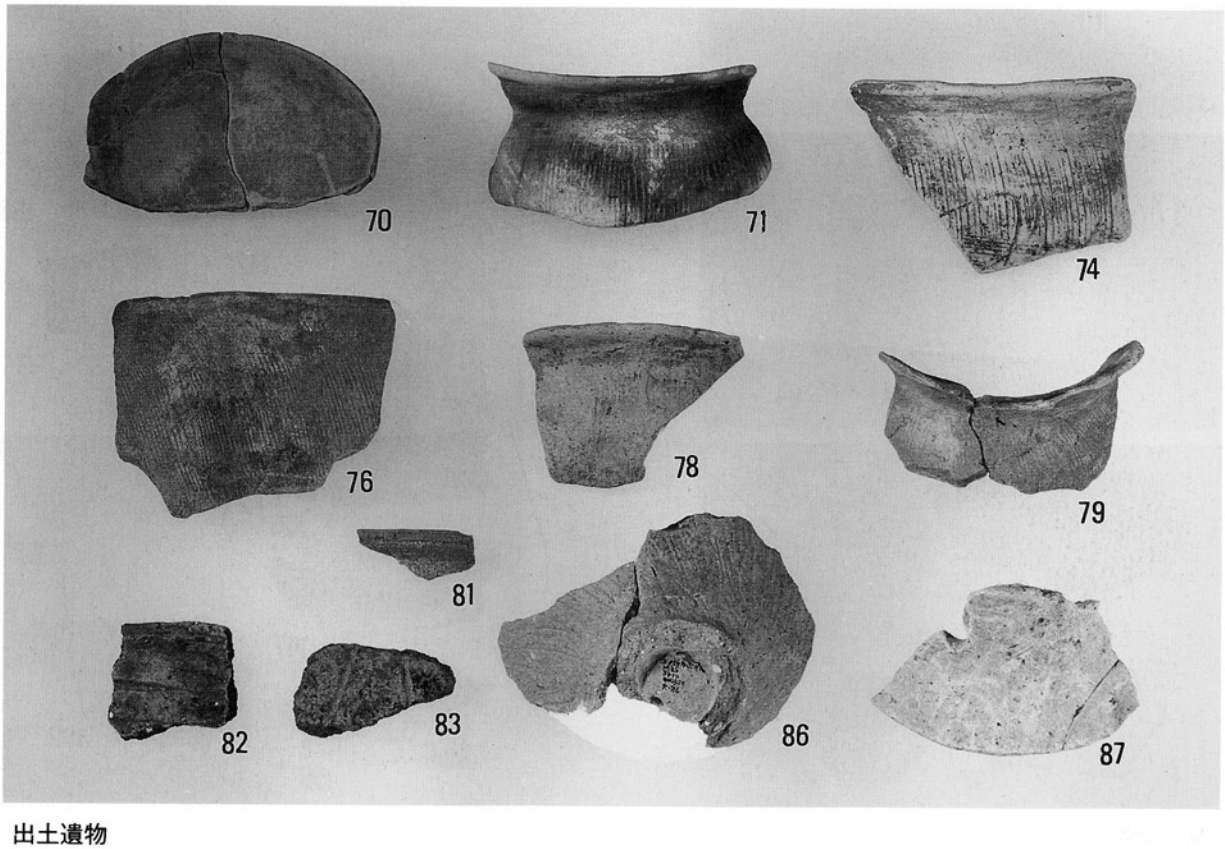






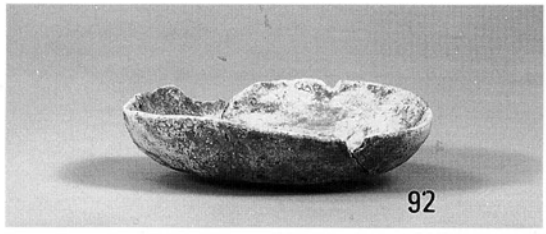


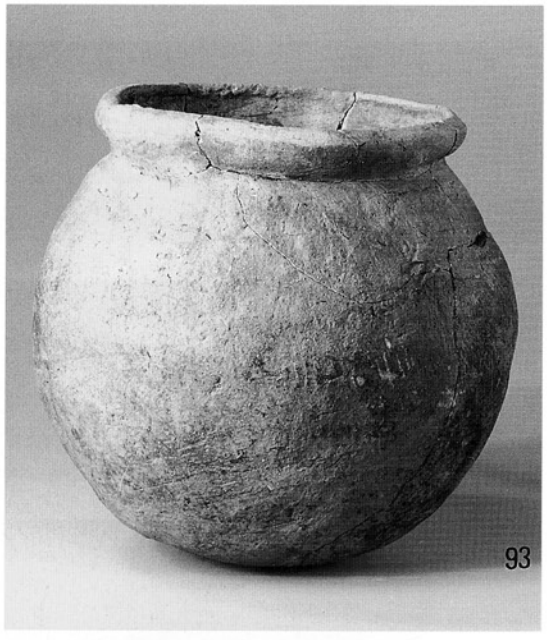




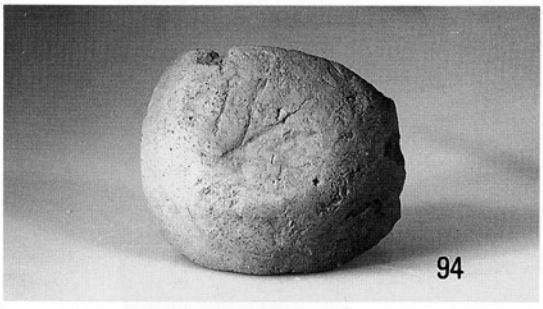
出土遺物

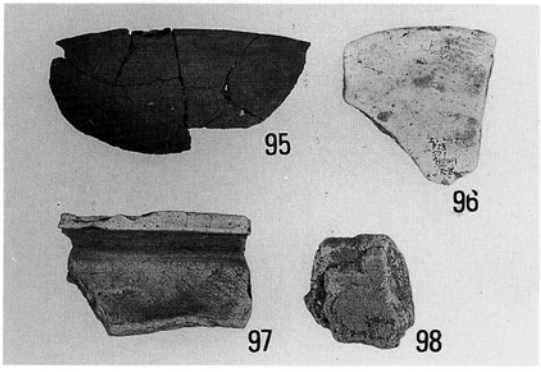
P L 35.

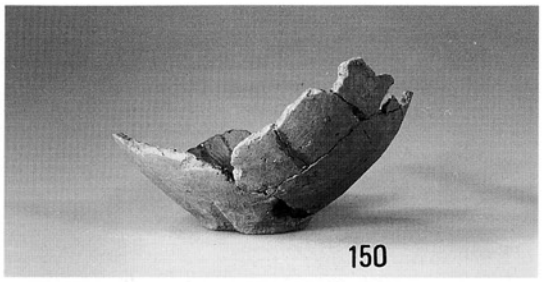

92

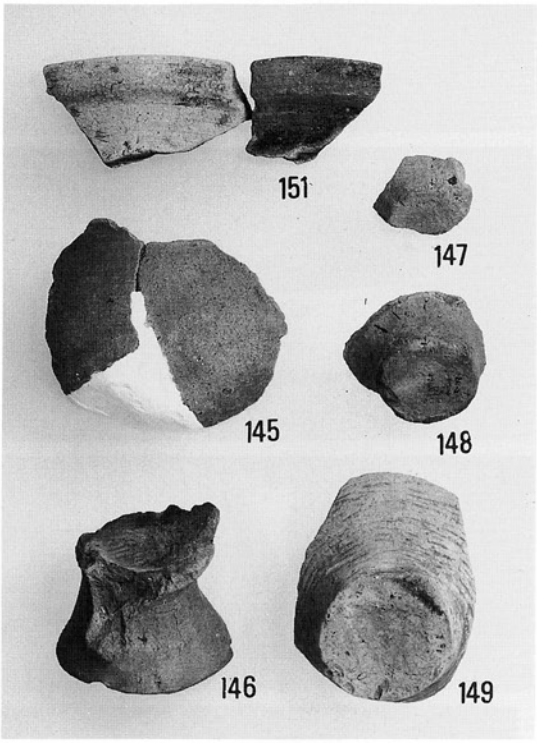

93

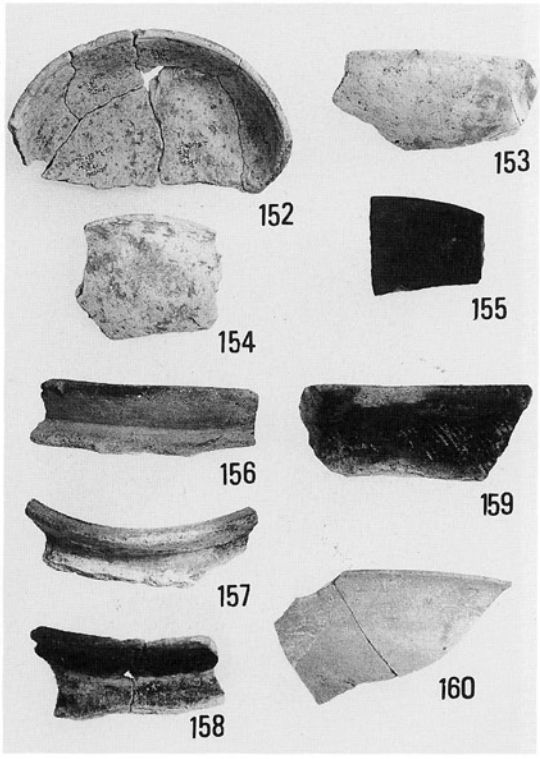
94


94

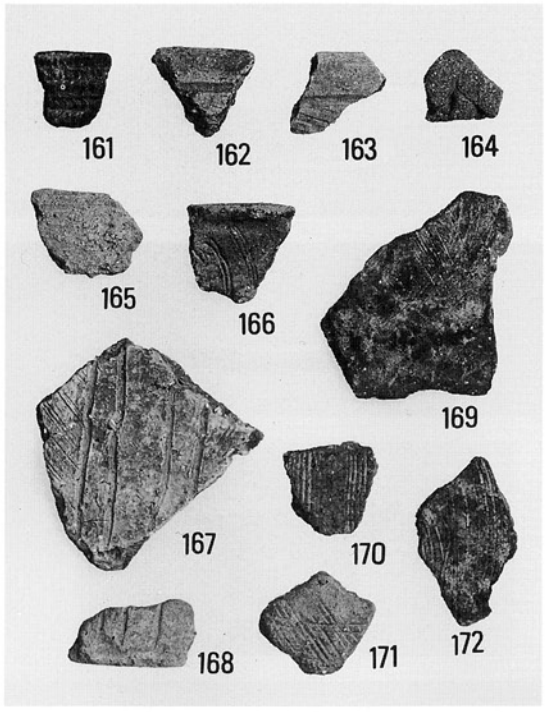

95
96
97
98

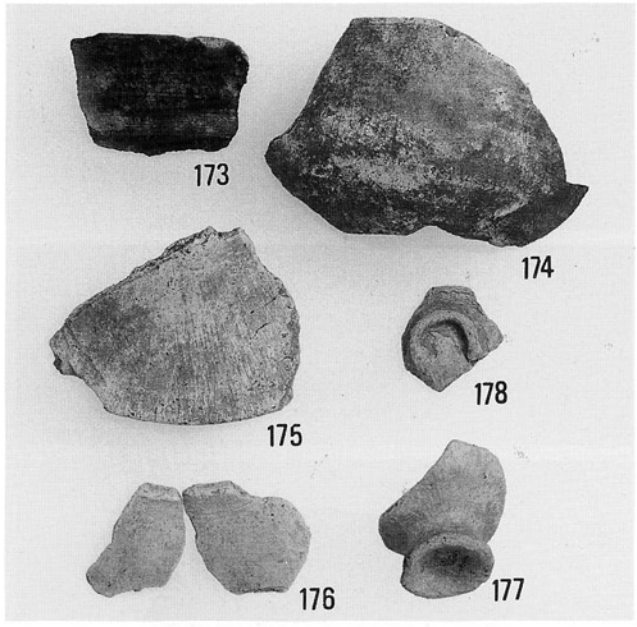

150

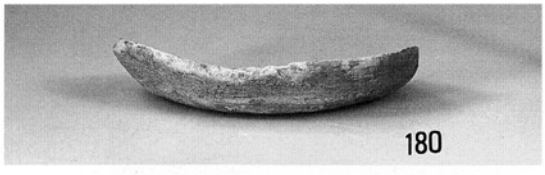

151
147
145
148
146
149

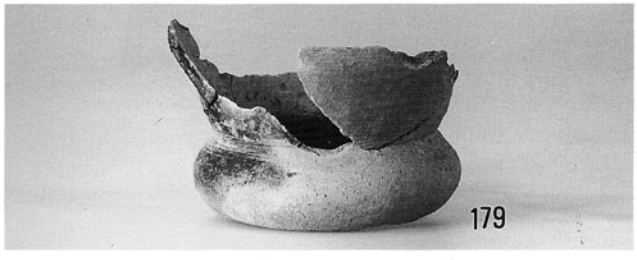

153
152
155
154
156
159
157
160
158

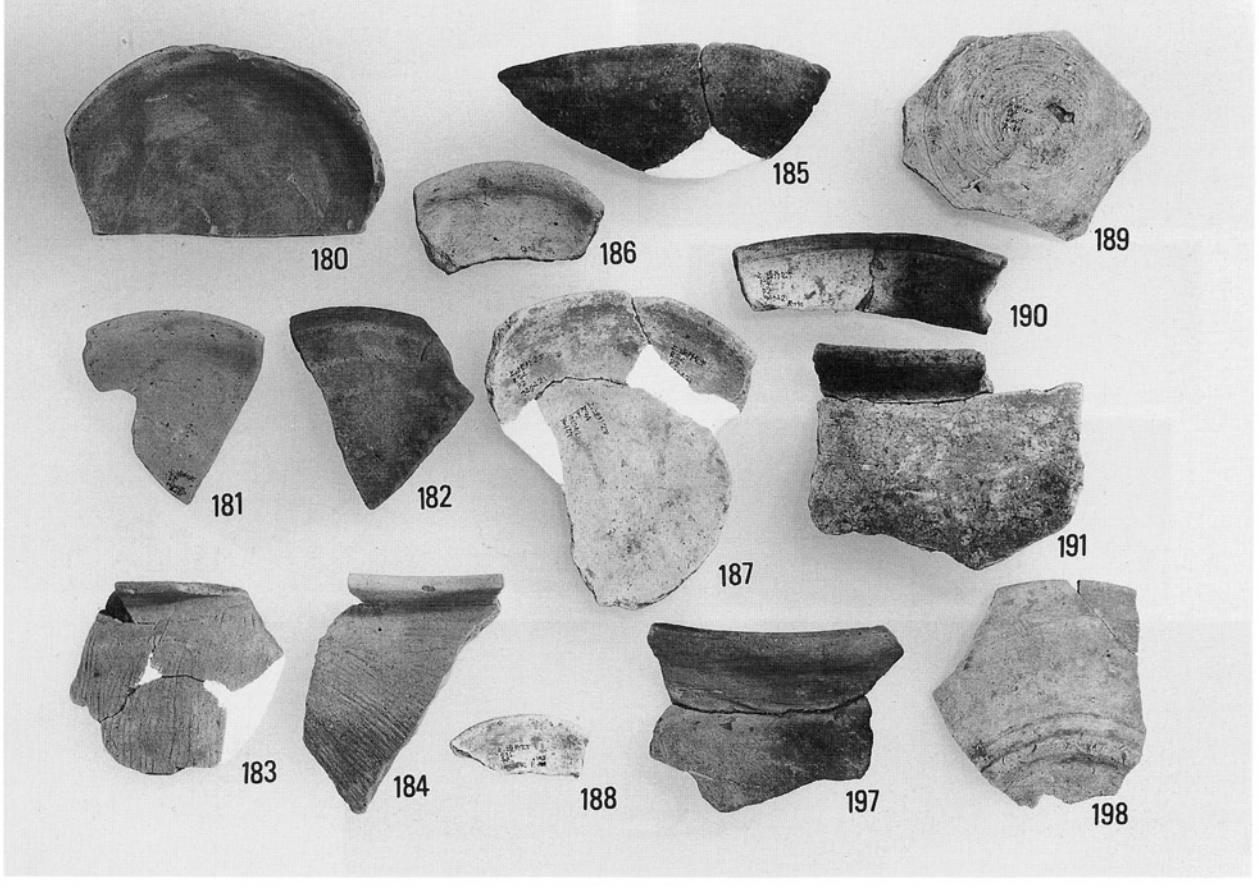
出土遺物


161
162
163
164
165
166
169
167
170
168
171
172


173
174
175
178
176
177


180


179


180
185
186
189
190
181
182
187
191
183
184
188
197
198

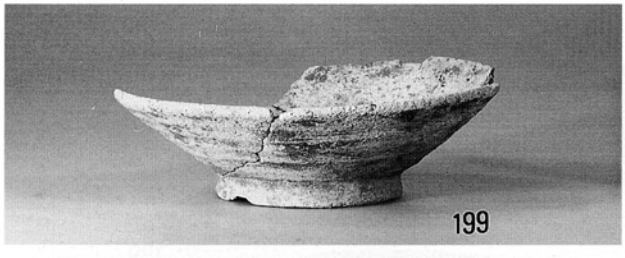
出土遺物

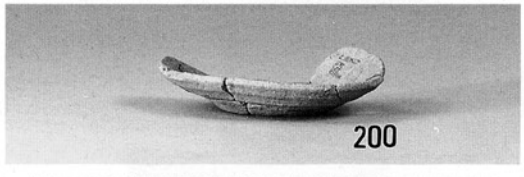
PL37.

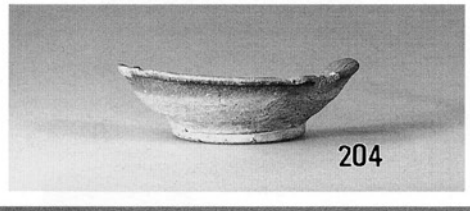
192

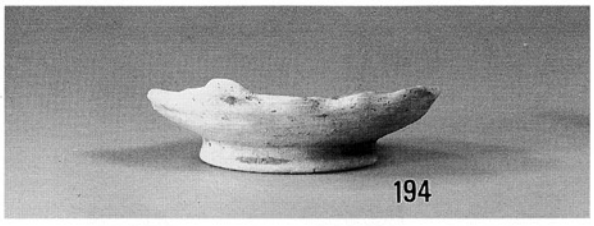
193

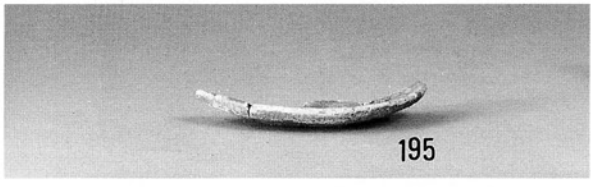
193

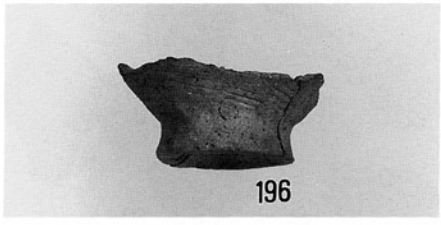

199

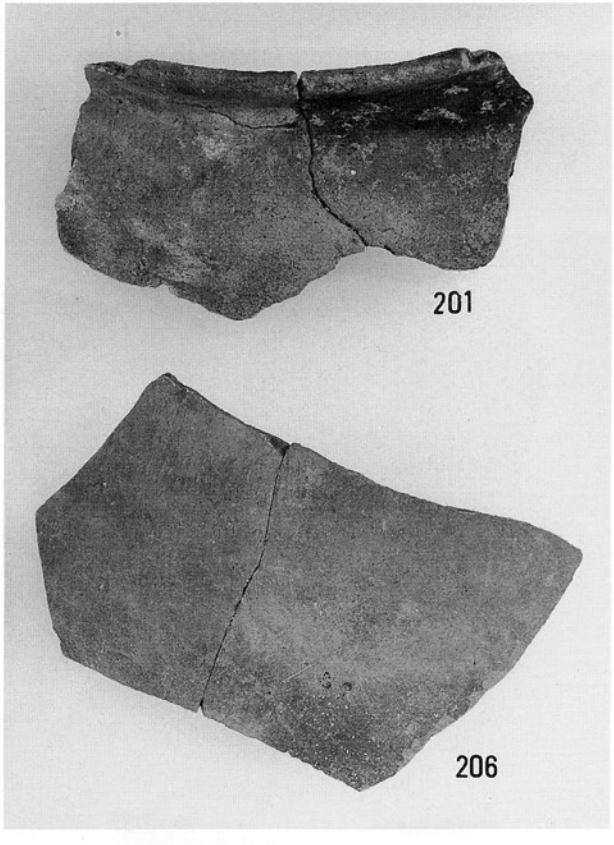

200


204

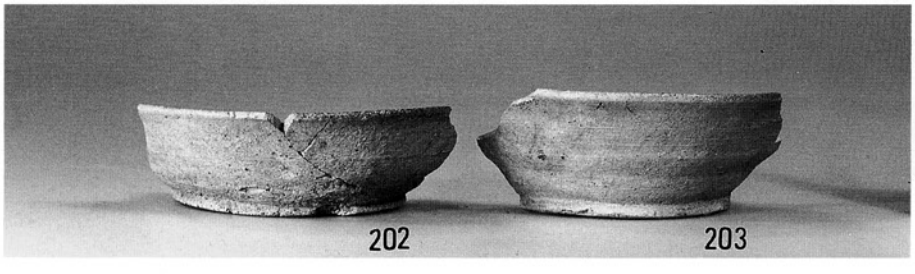

194


195


196


201

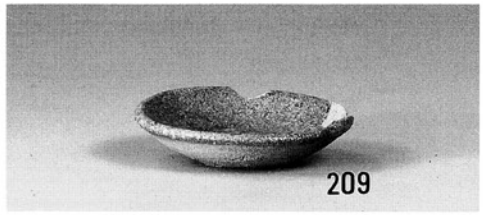
206


202

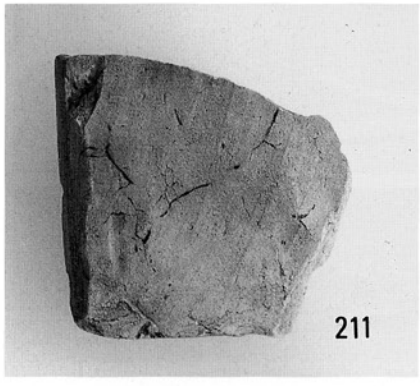
203

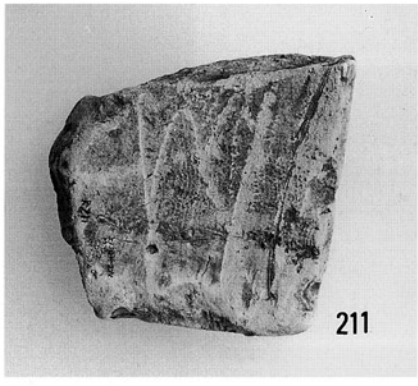
出土遺物

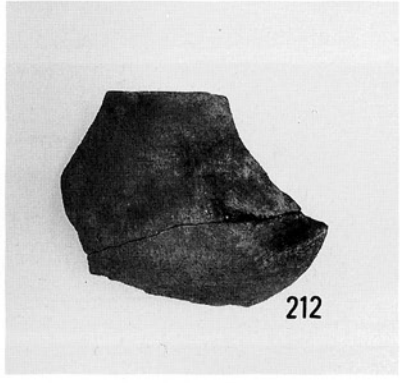
207

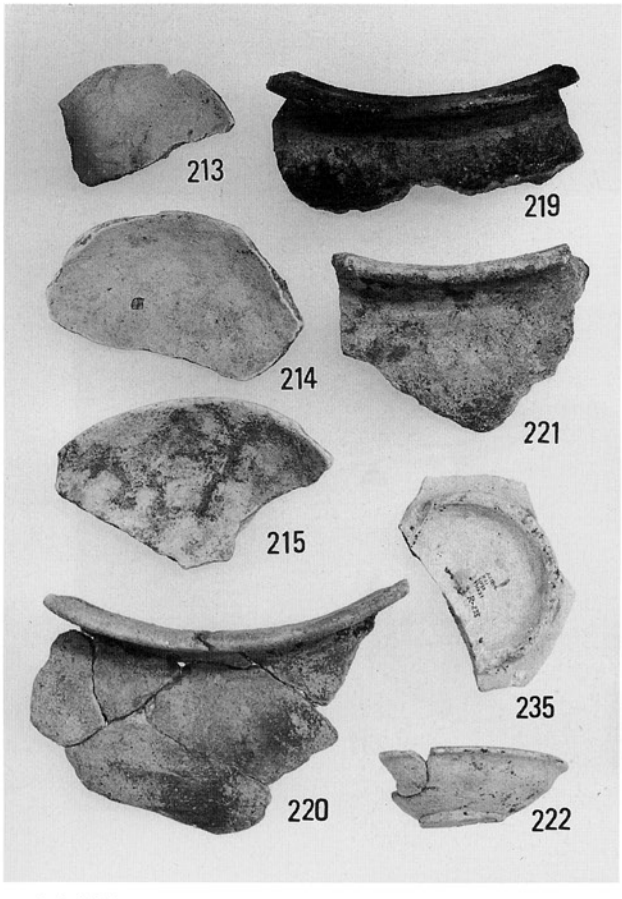

209

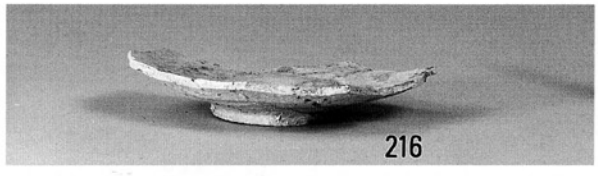
210


211

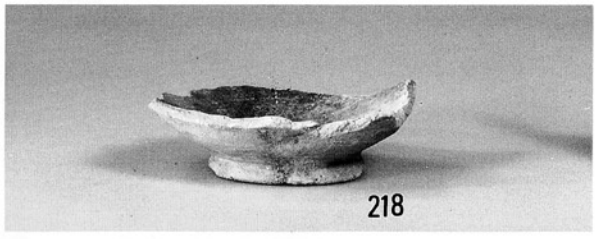

211


212


213
219
214
221
215
235
220
222


216

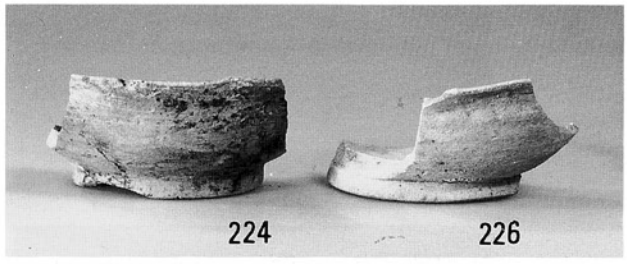
217

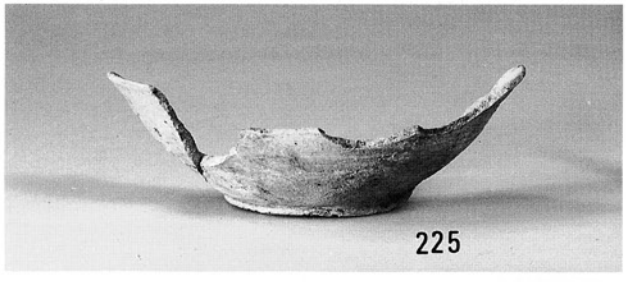

218

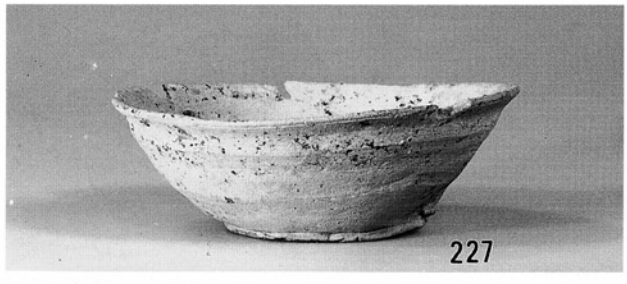
223

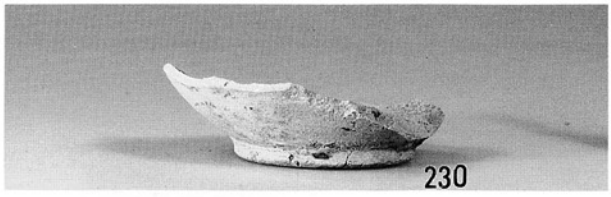
出土遺物

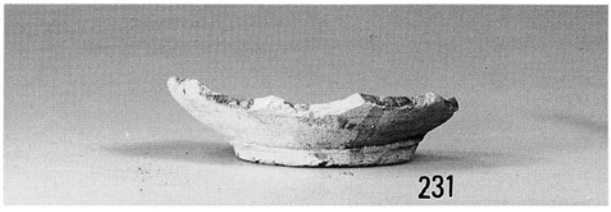
P L 39.

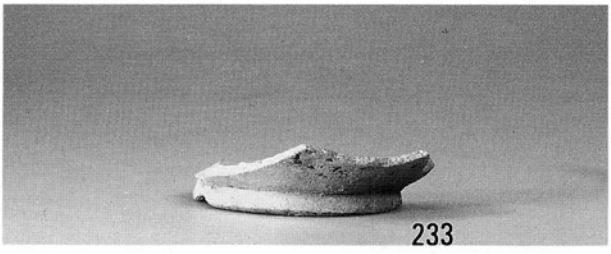


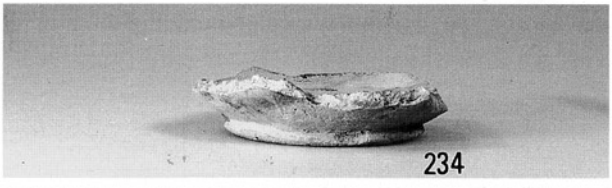


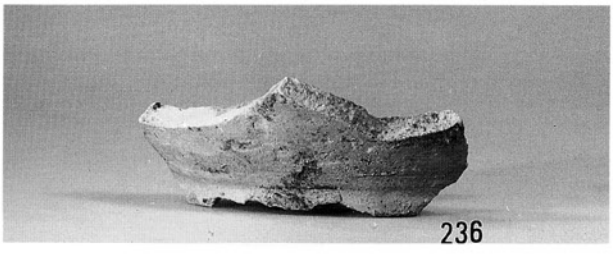




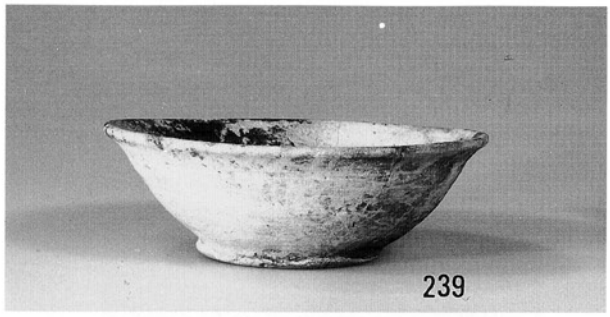


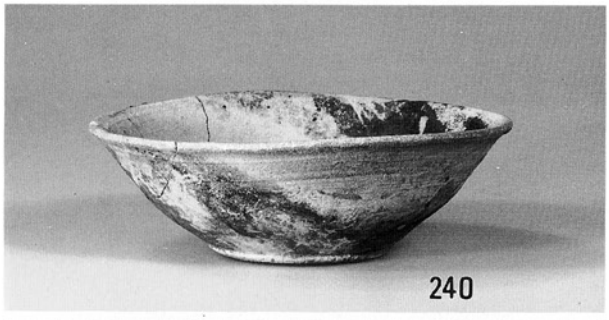


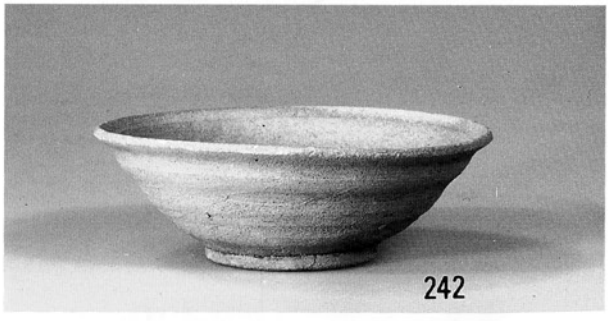


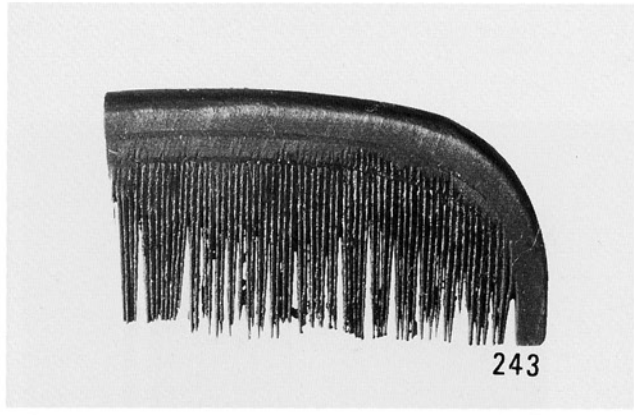


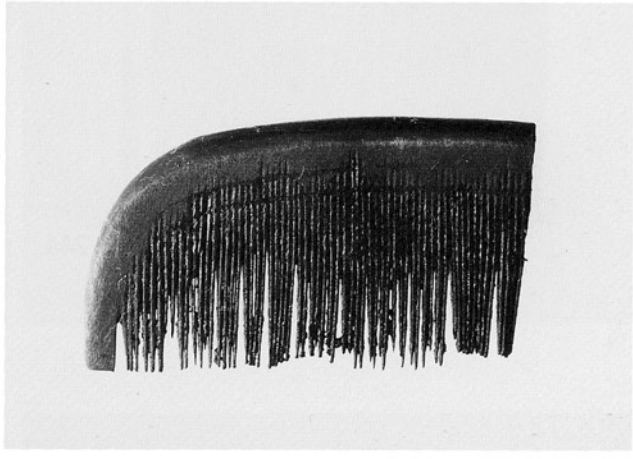
出土遺物


239


240


242

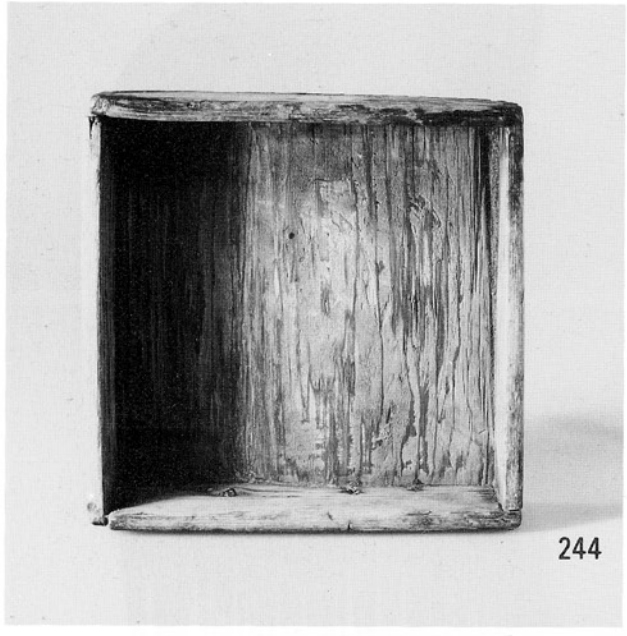

243

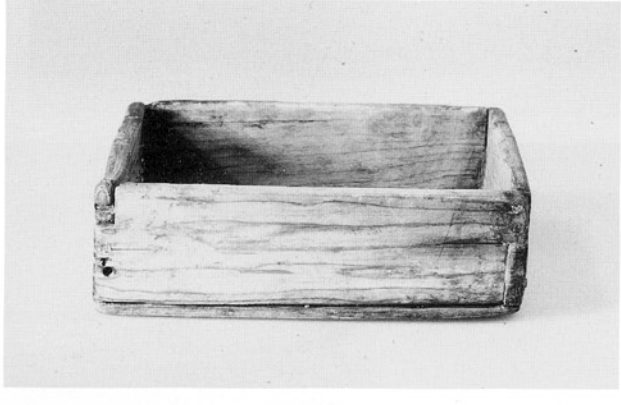


238

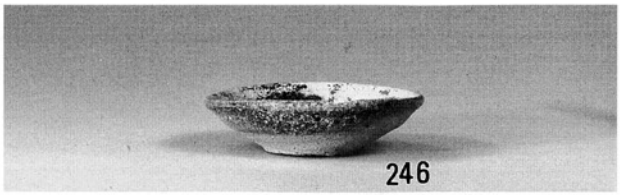
出土遺物

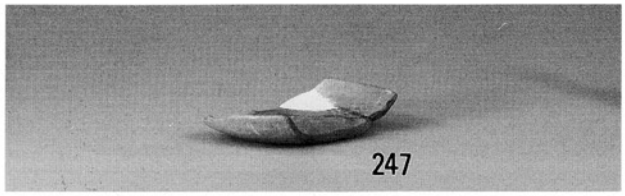
PL41.

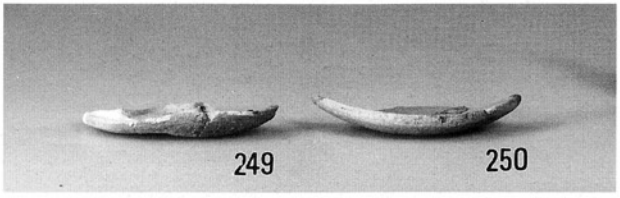

244

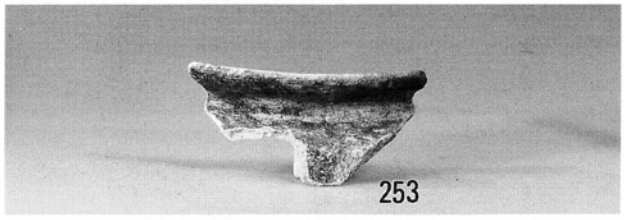


出土遺物

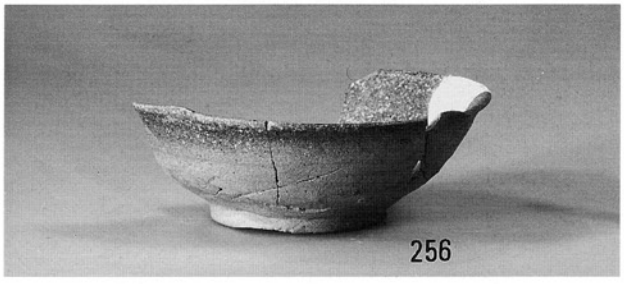

246

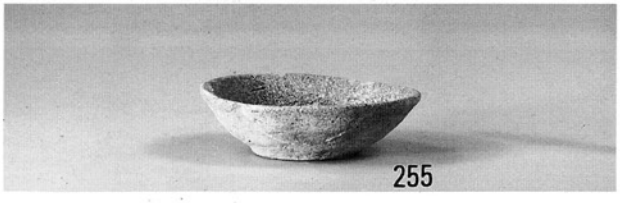

247


249 250

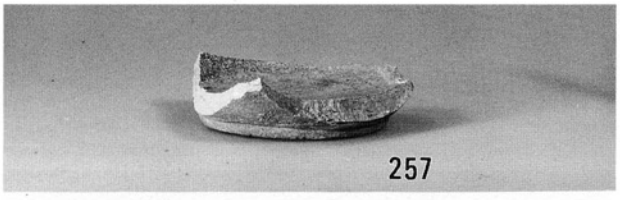

253

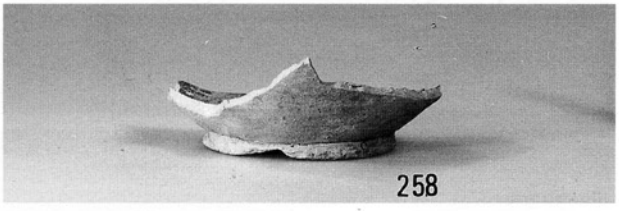
254

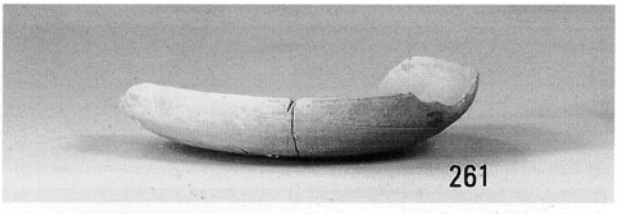

256


255

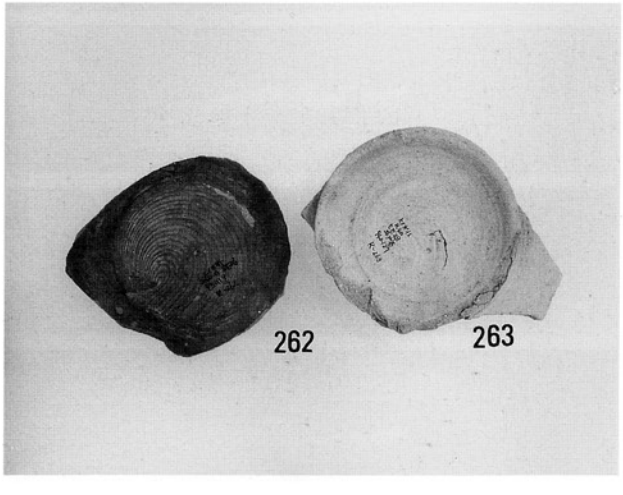
260


257


258


261

265


262 263

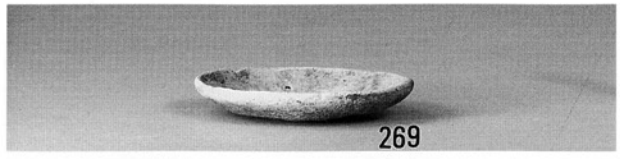
出土遺物

P L 43.

266

267

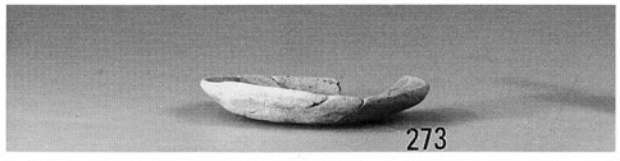
268


269

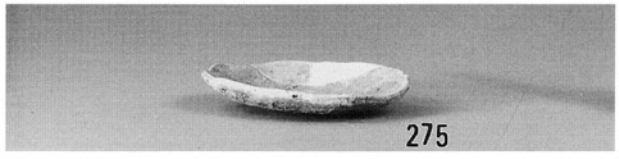
270

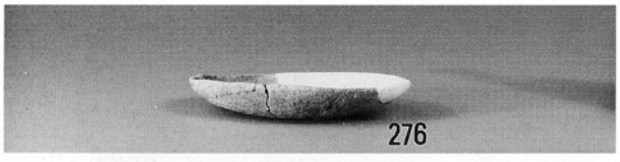
271

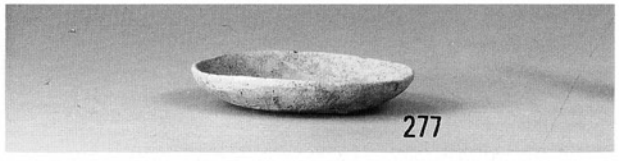
272

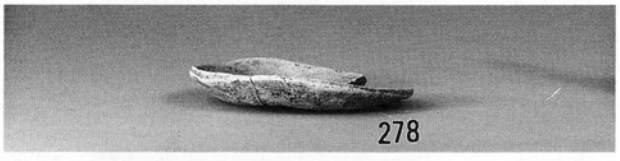

273

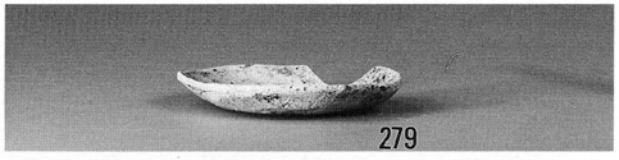
274

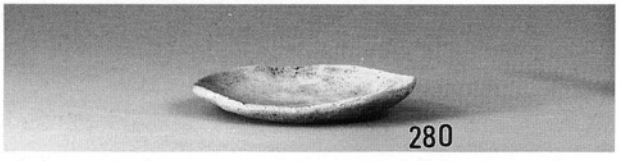

275

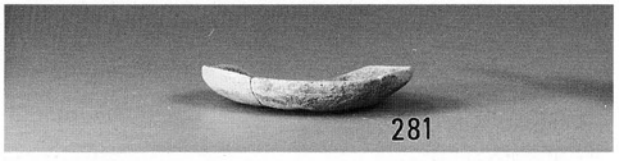

276


277


278

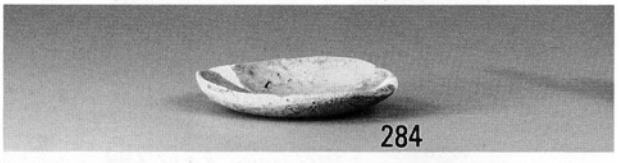

279


280


281

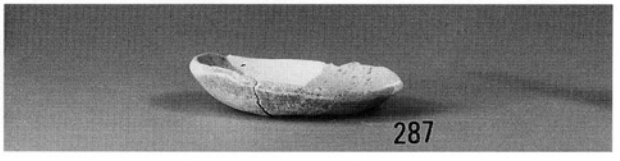
282

283


284

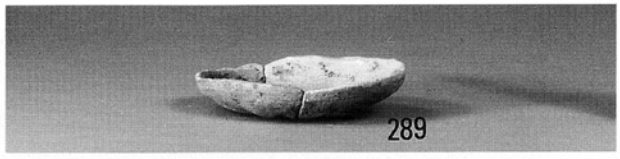
285

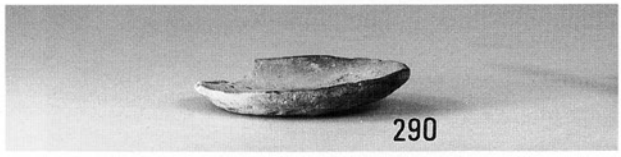
286

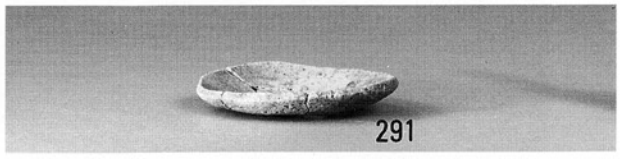

287

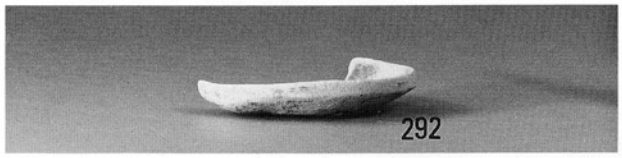
出土遺物

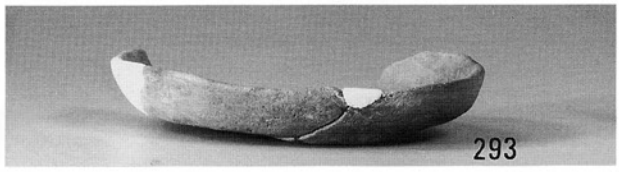
288


289


290


291


292


293

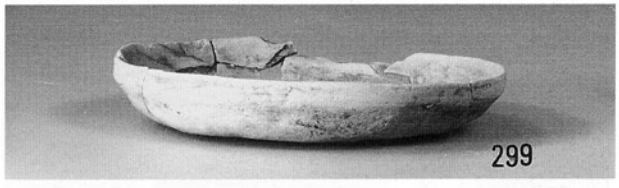
294

295

296

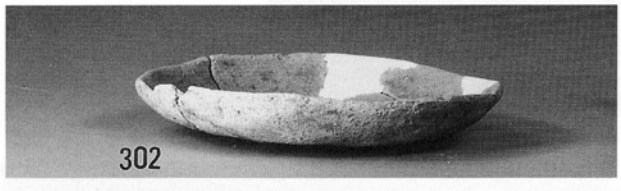
297

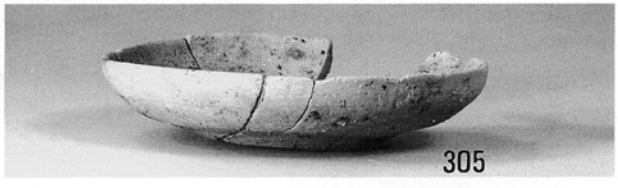
298

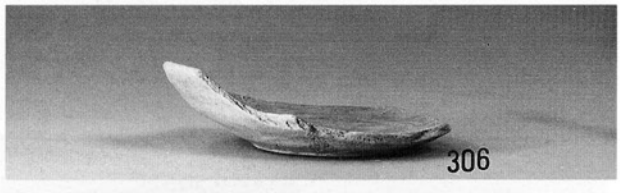

299

300

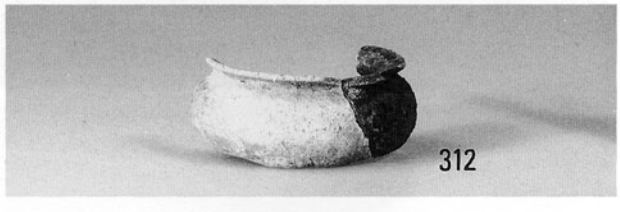
301


302


305


306

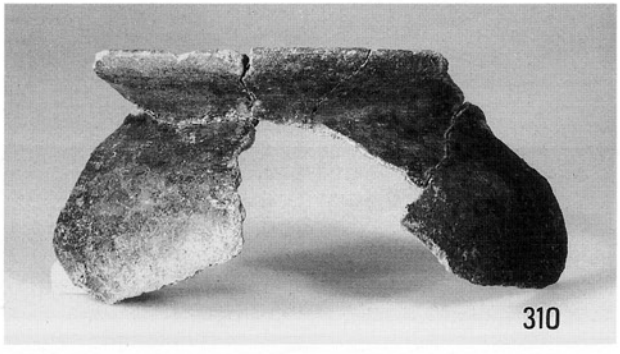
309

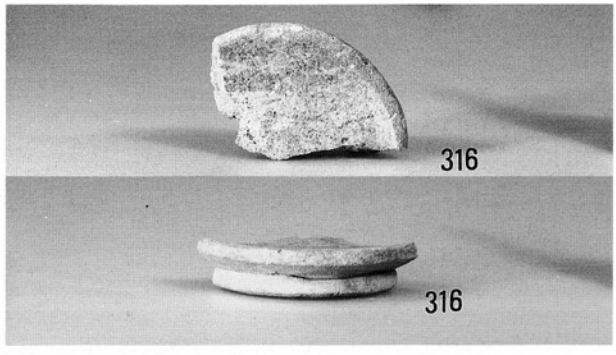

312

出土遺物

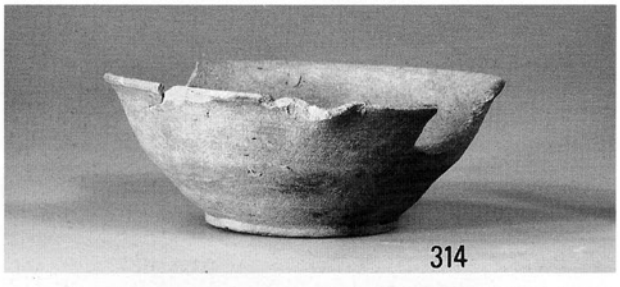
PL45.

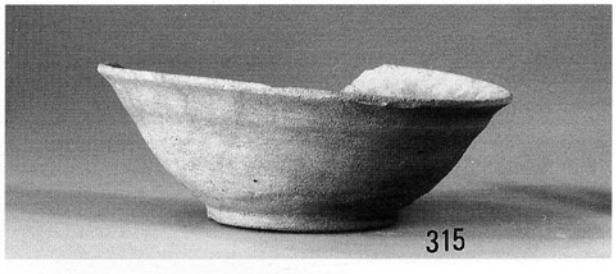
311

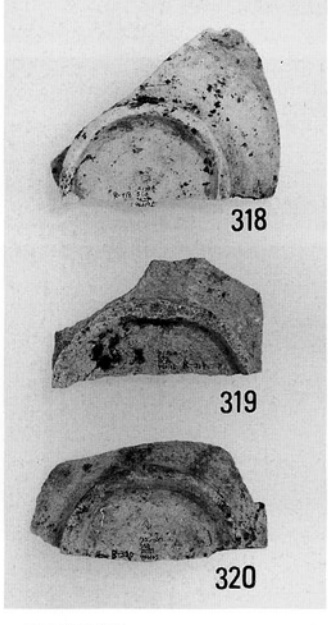

310


316

316

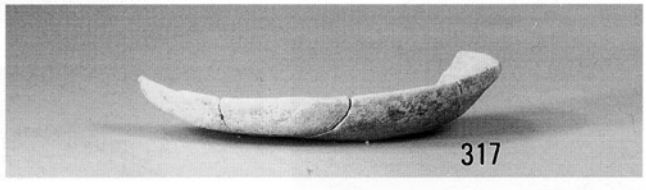

314


315

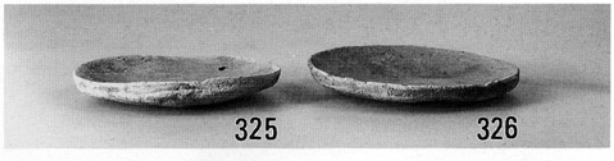

318

319

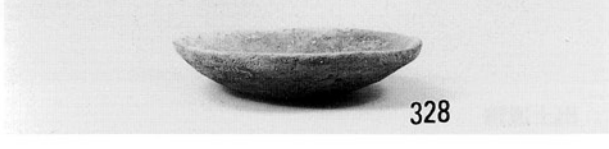
320


317

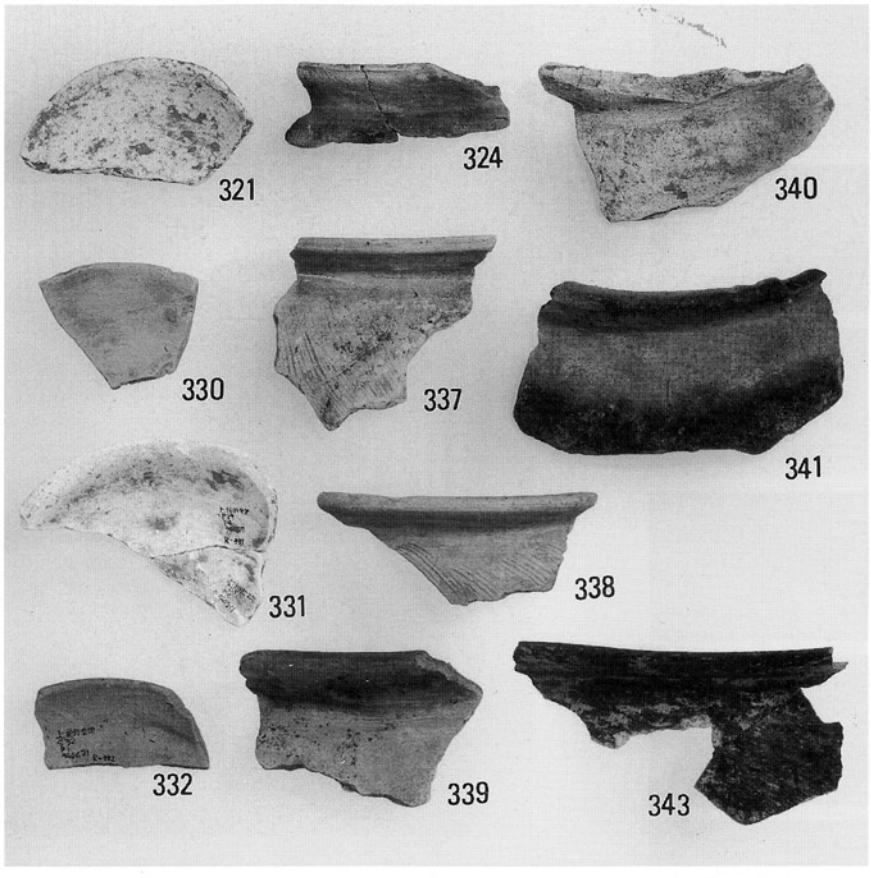
323


325

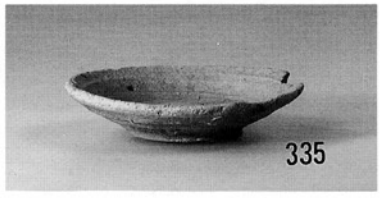
326


328

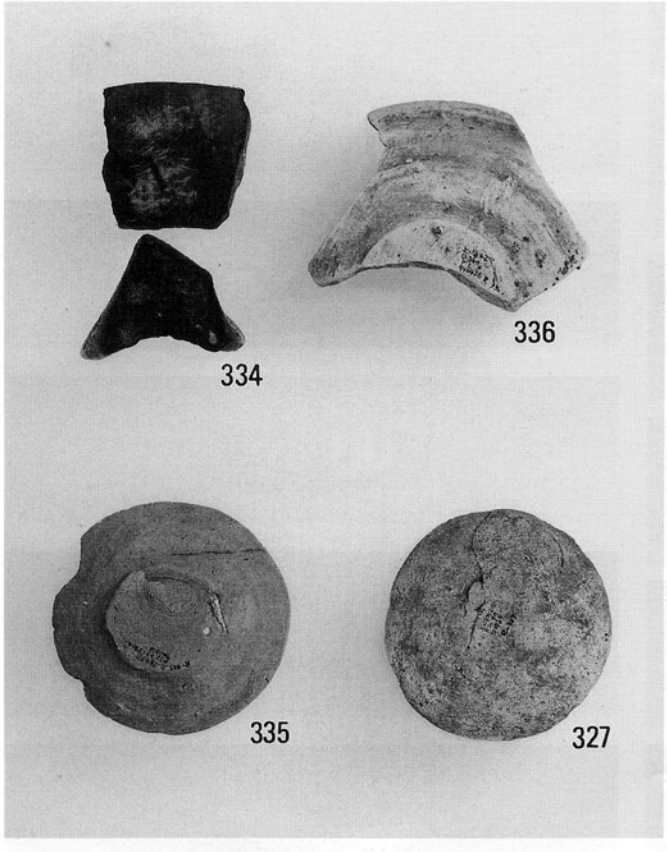
出土遺物

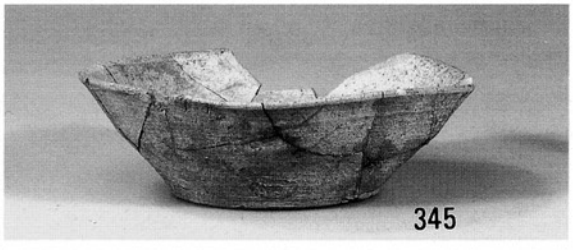

321
324
340
330
337
341
331
338
332
339
343

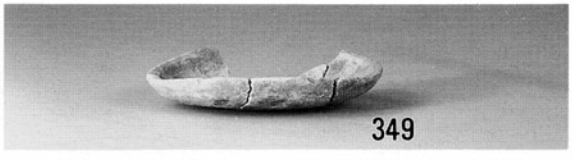
329

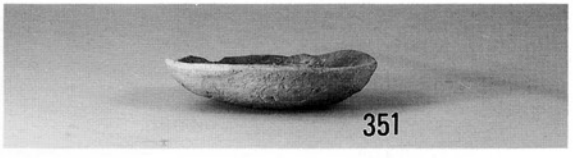

335

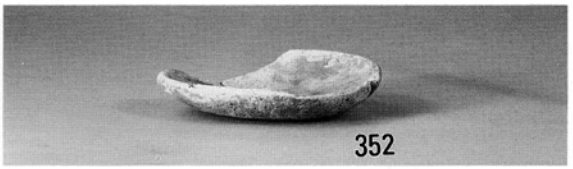
344

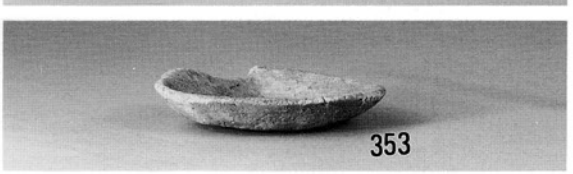

334
336
335
327


345


349

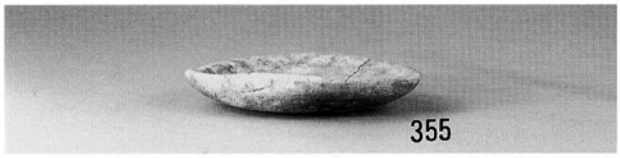

351


352


353

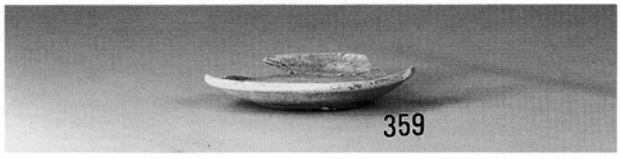
出土遺物

PL47.


355

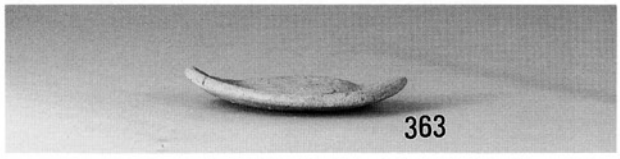
356

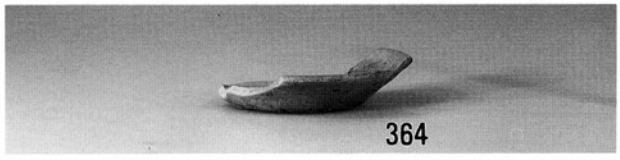
357


359

360

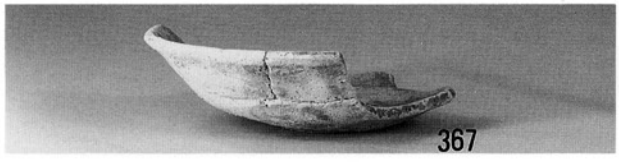
362

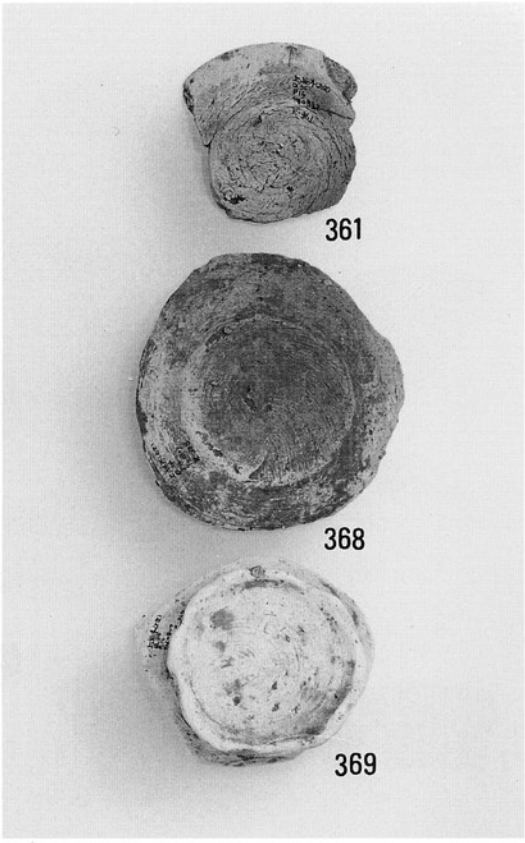

363

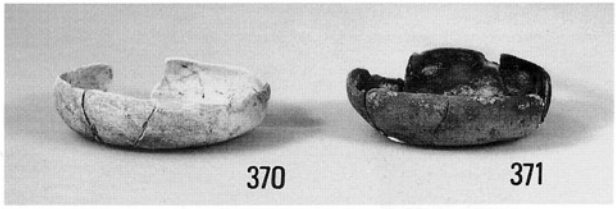

364

365

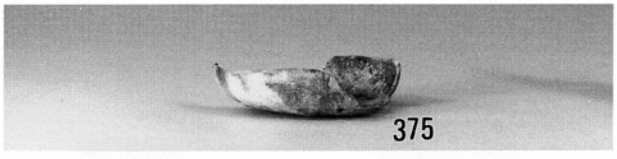
366

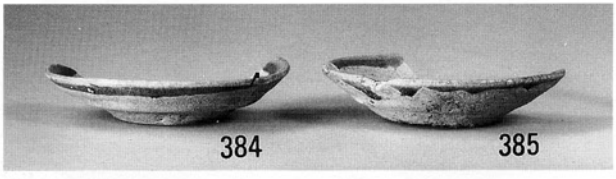

367

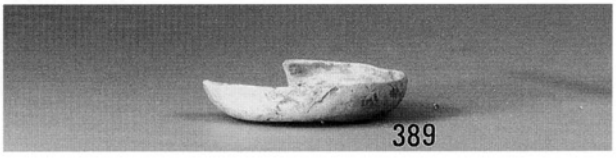

361
368
369


370
371

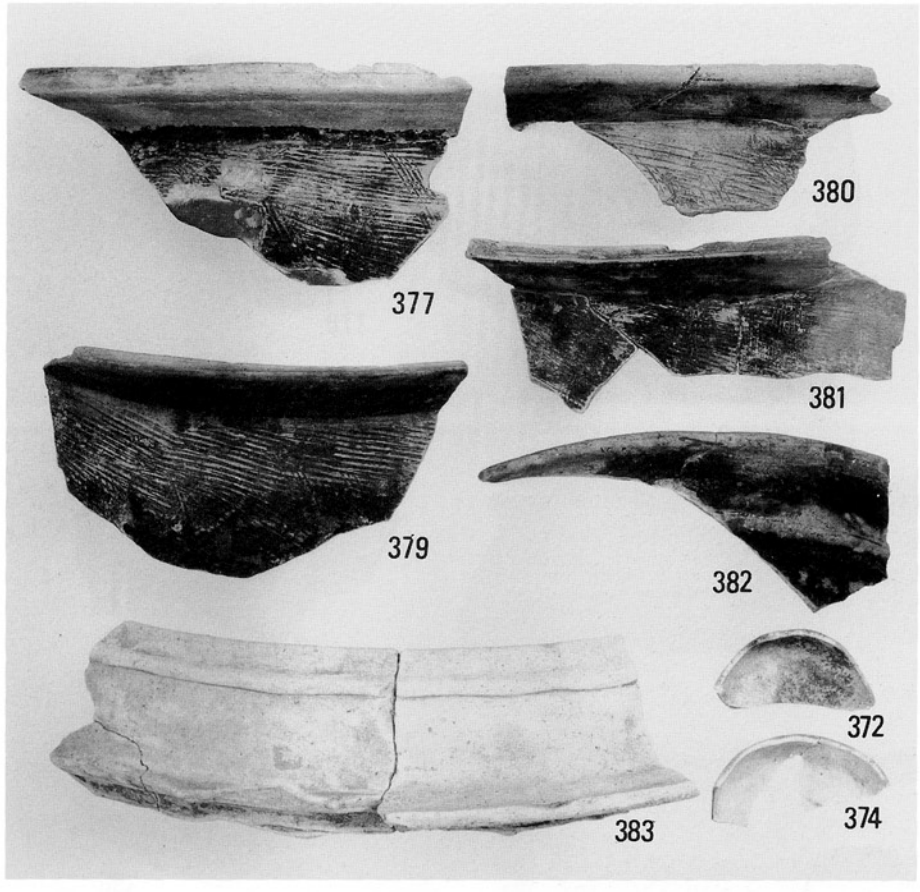
373

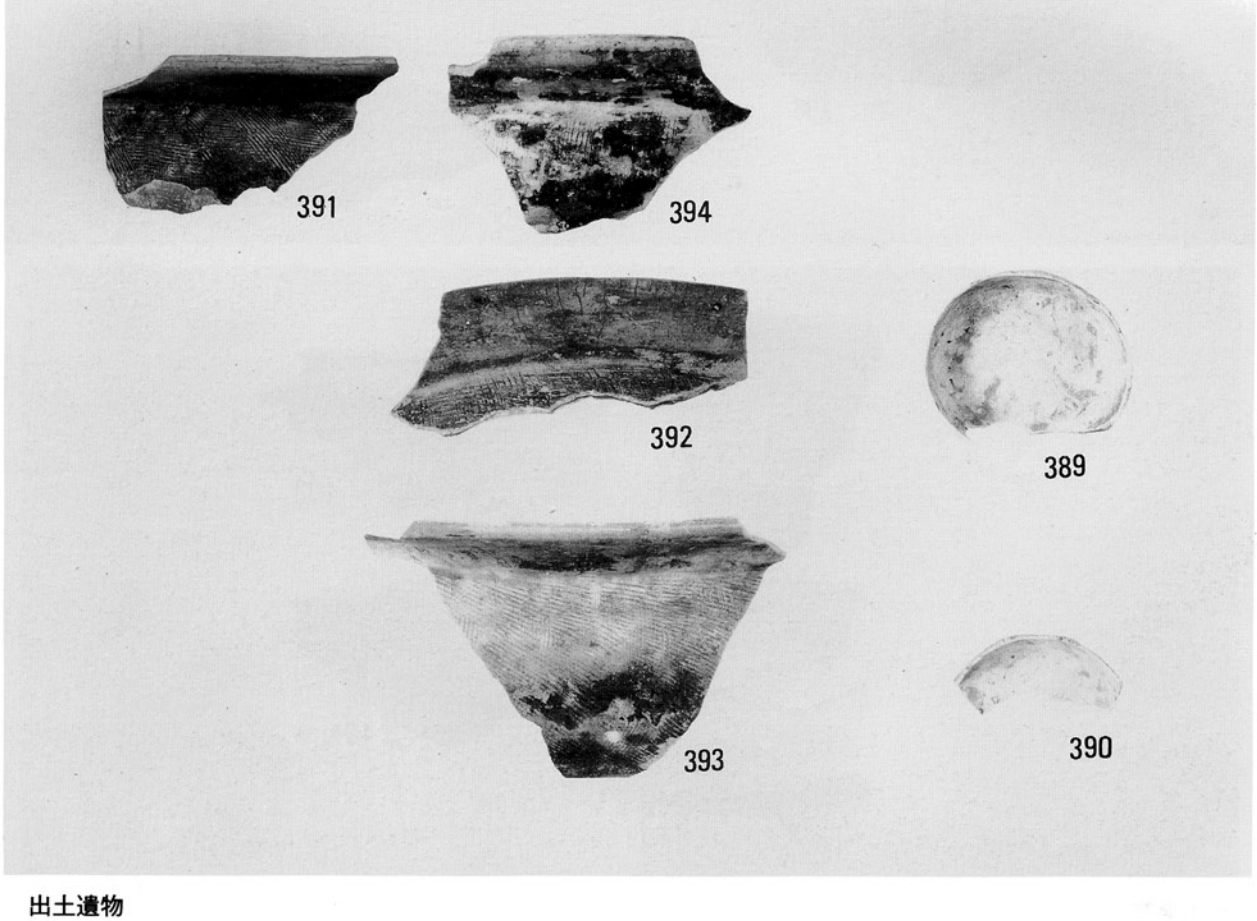

375


384
385


389

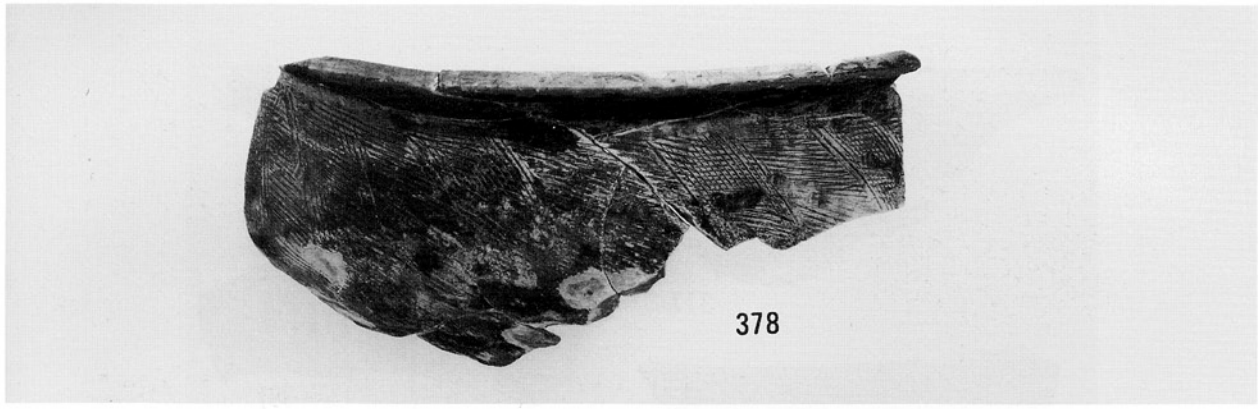
出土遺物

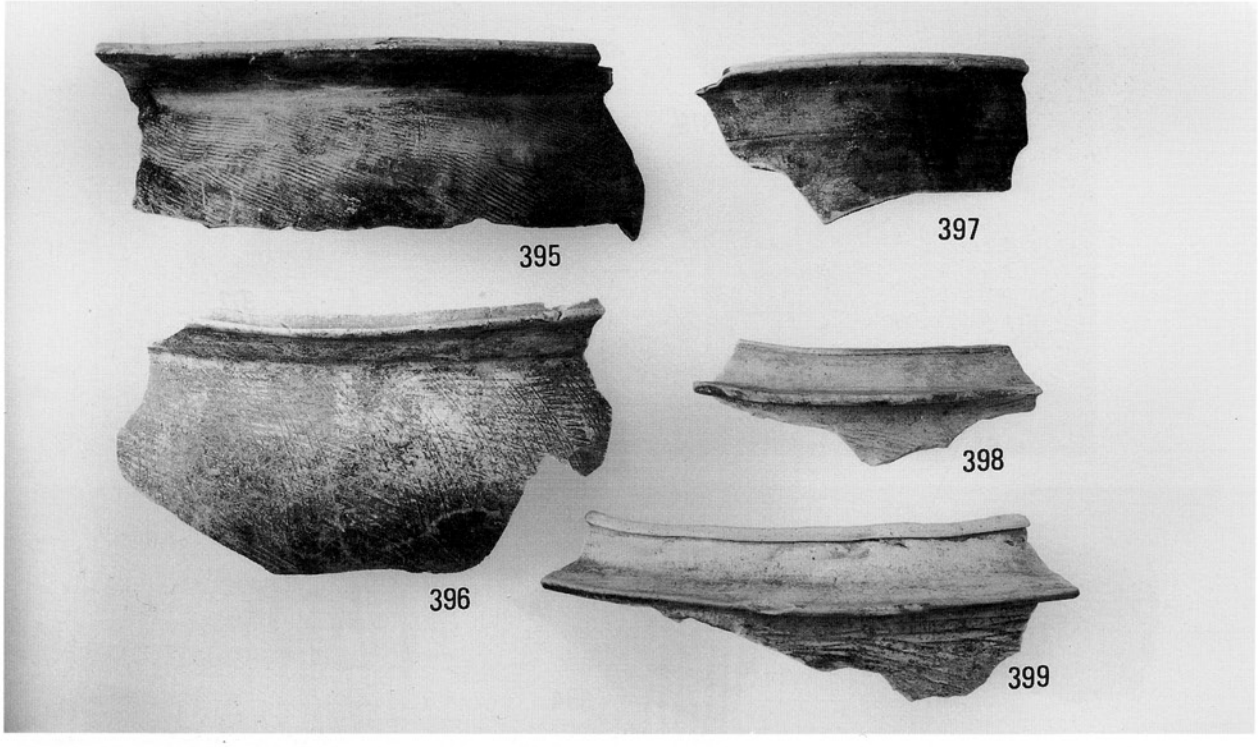


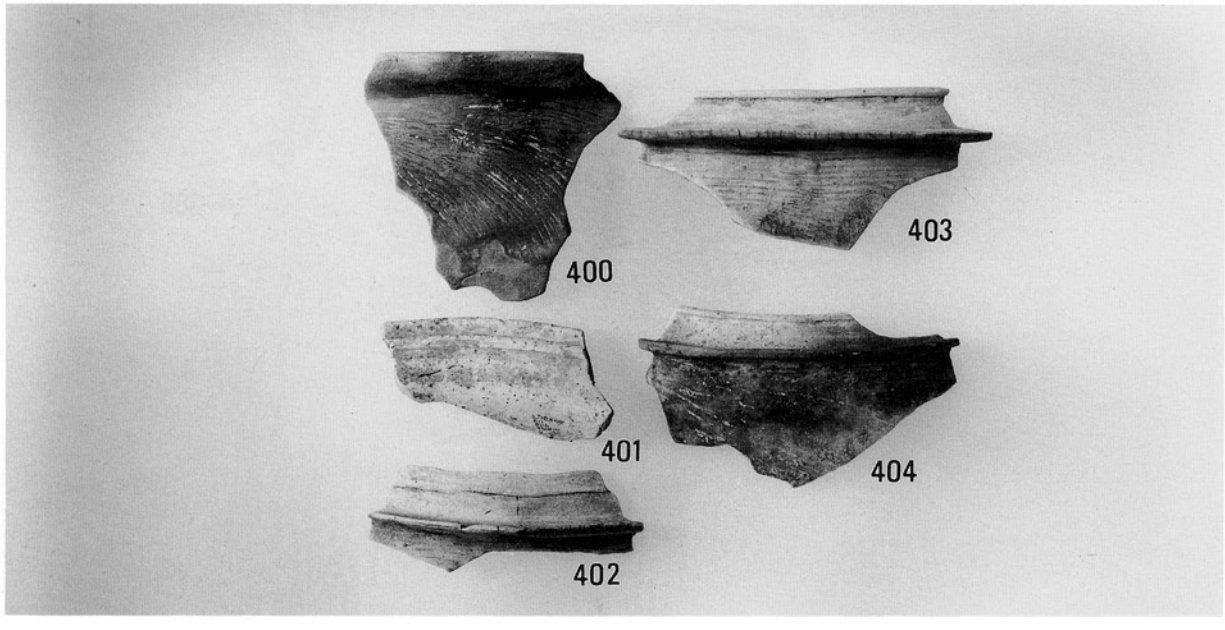


出土遺物

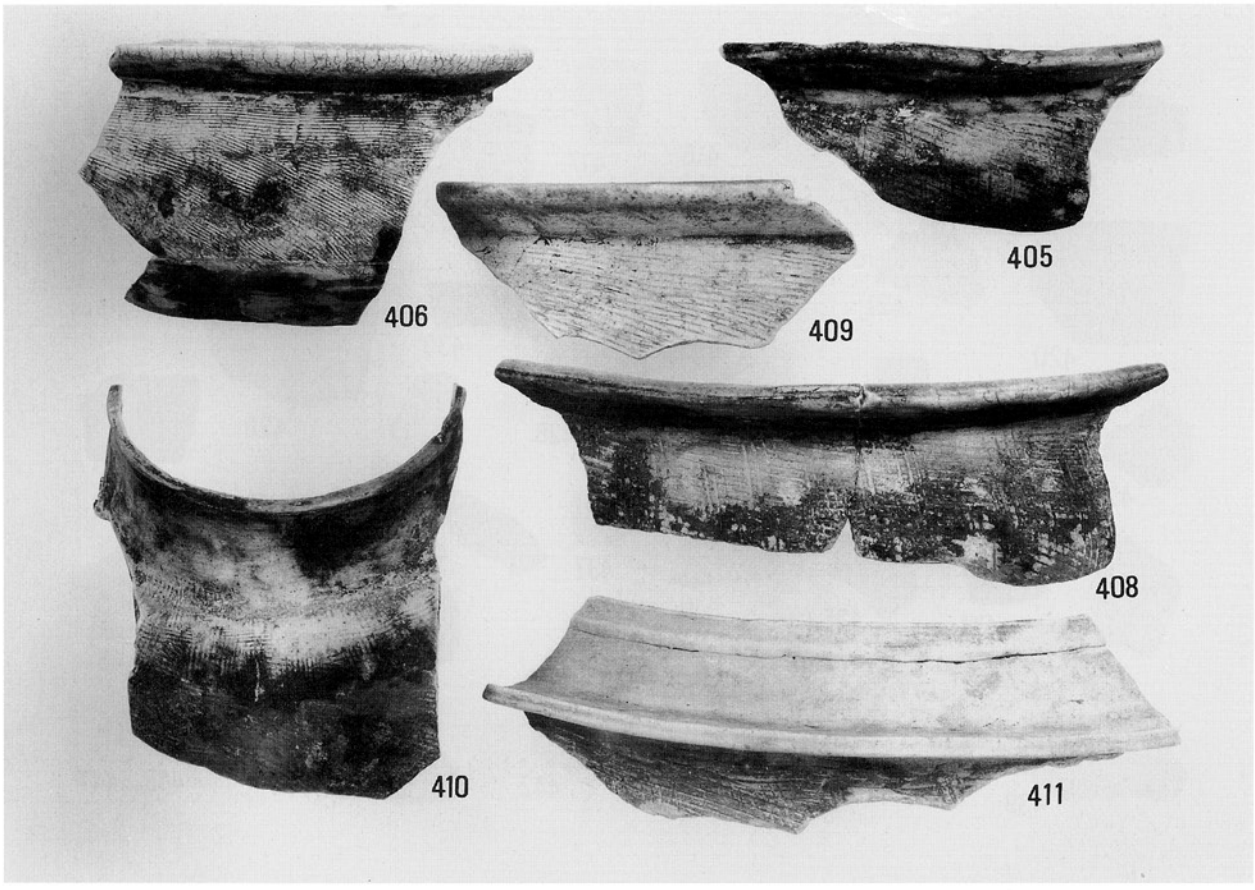
PL 49.

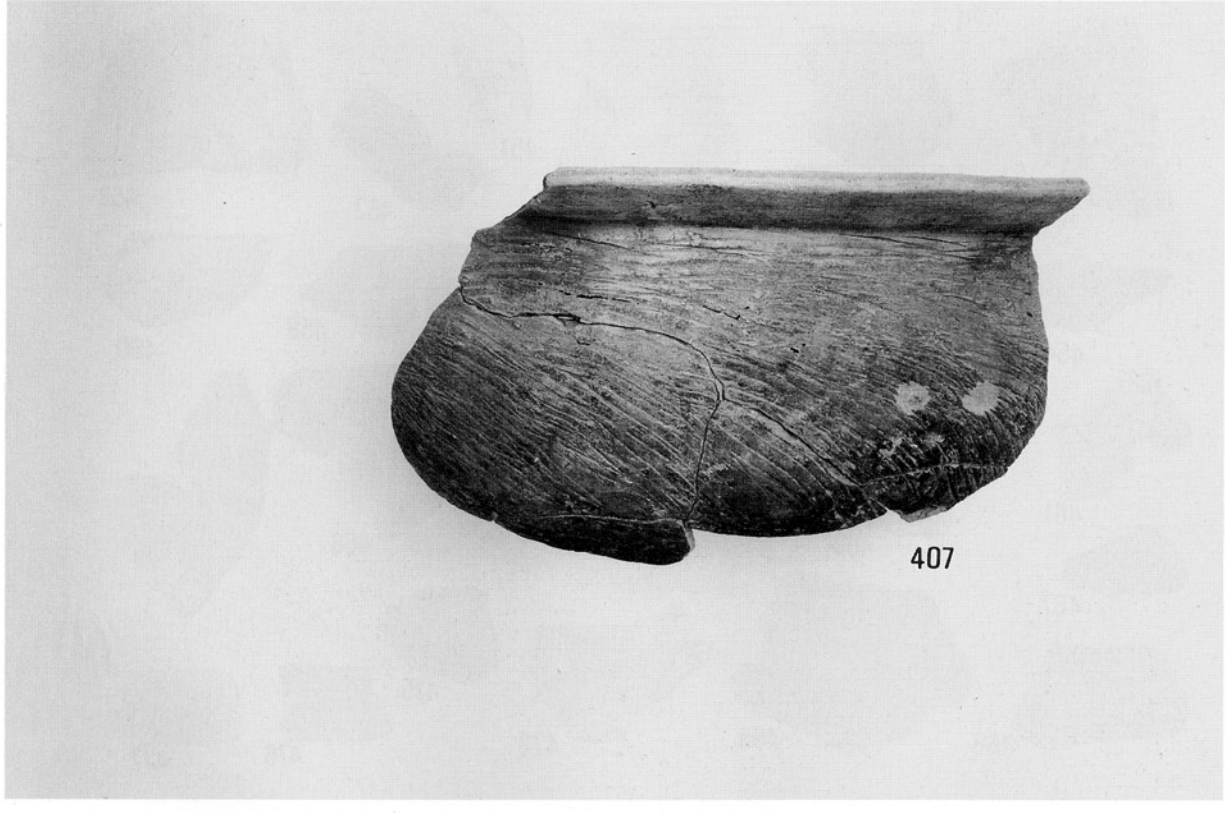






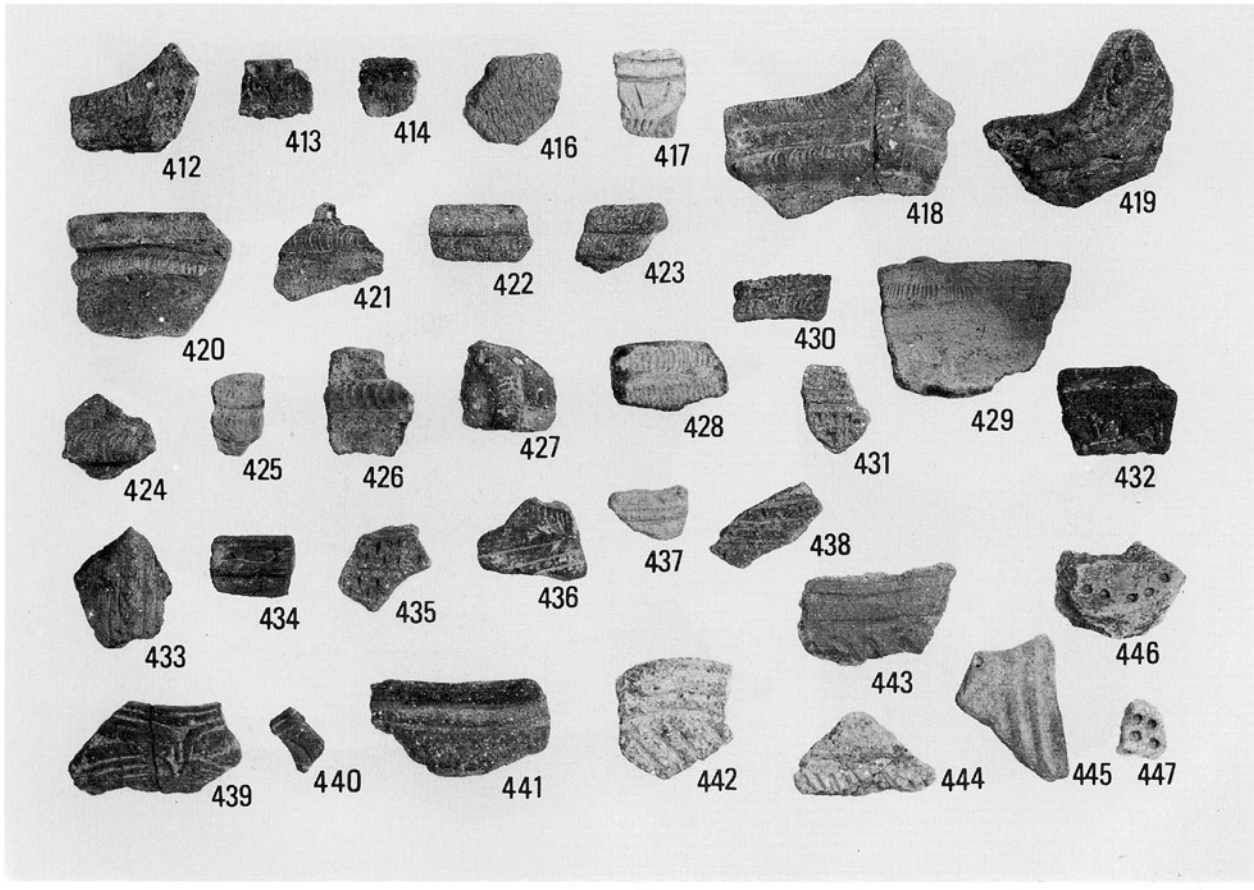
出土遺物

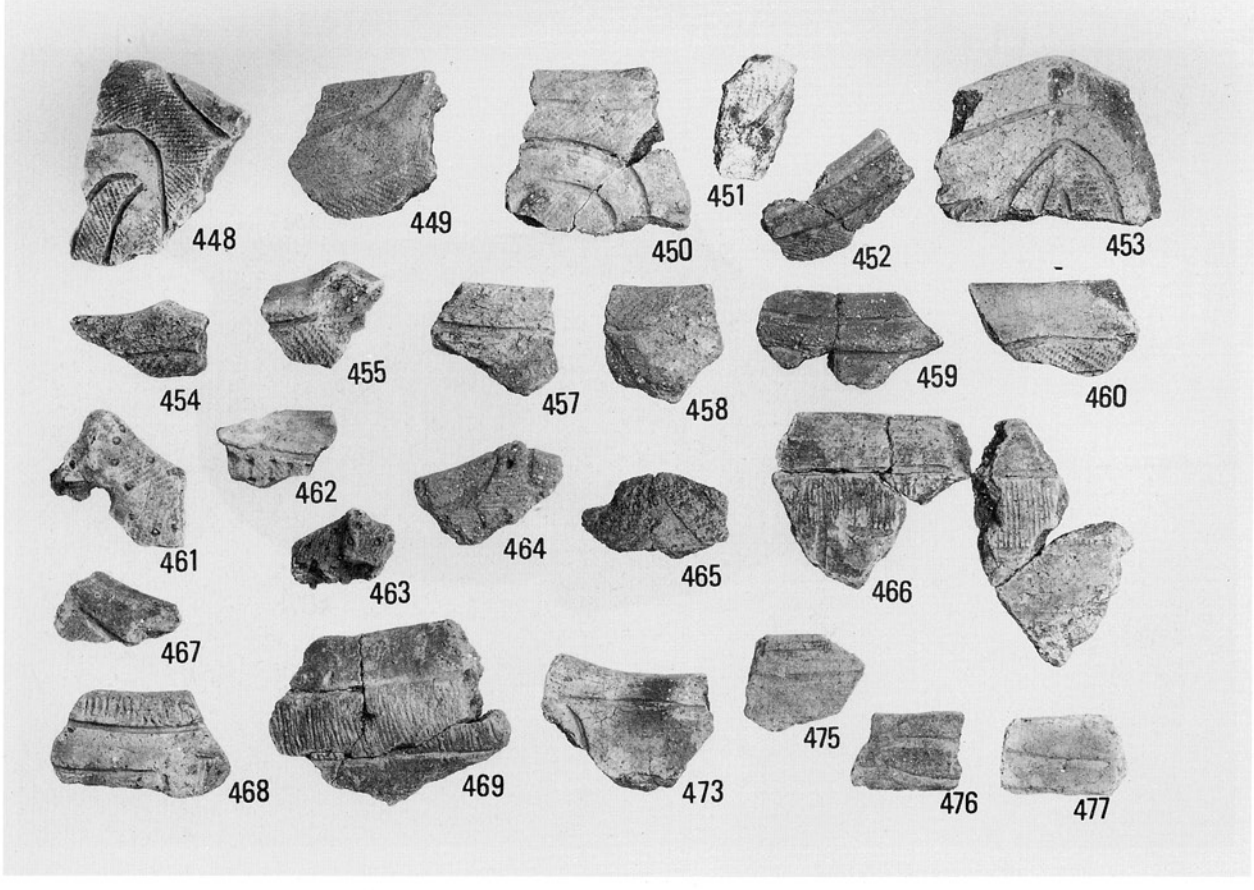




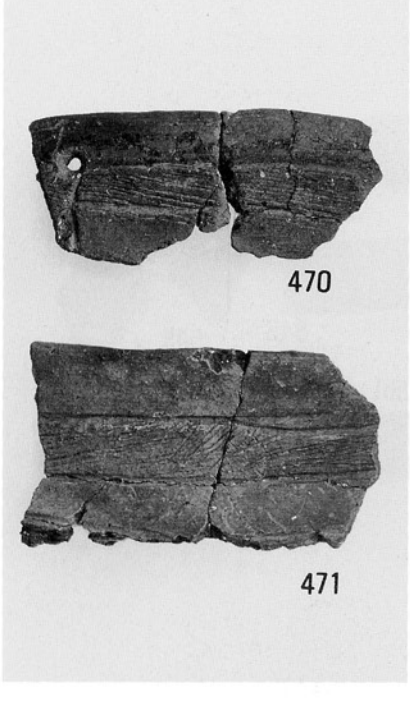
出土遺物

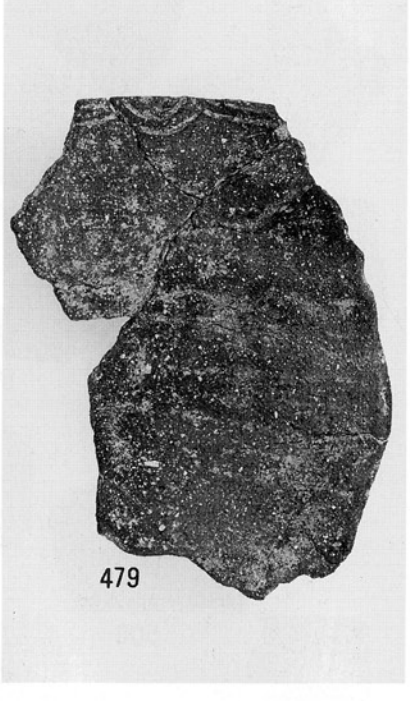
P L 51.


412
413
414
416
417
418
419
420
421
422
423
430
429
424
425
426
427
428
431
432
433
434
435
436
437
438
443
446
439
440
441
442
444
445
447


448
449
450
451
452
453
454
455
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
473
475
476
477

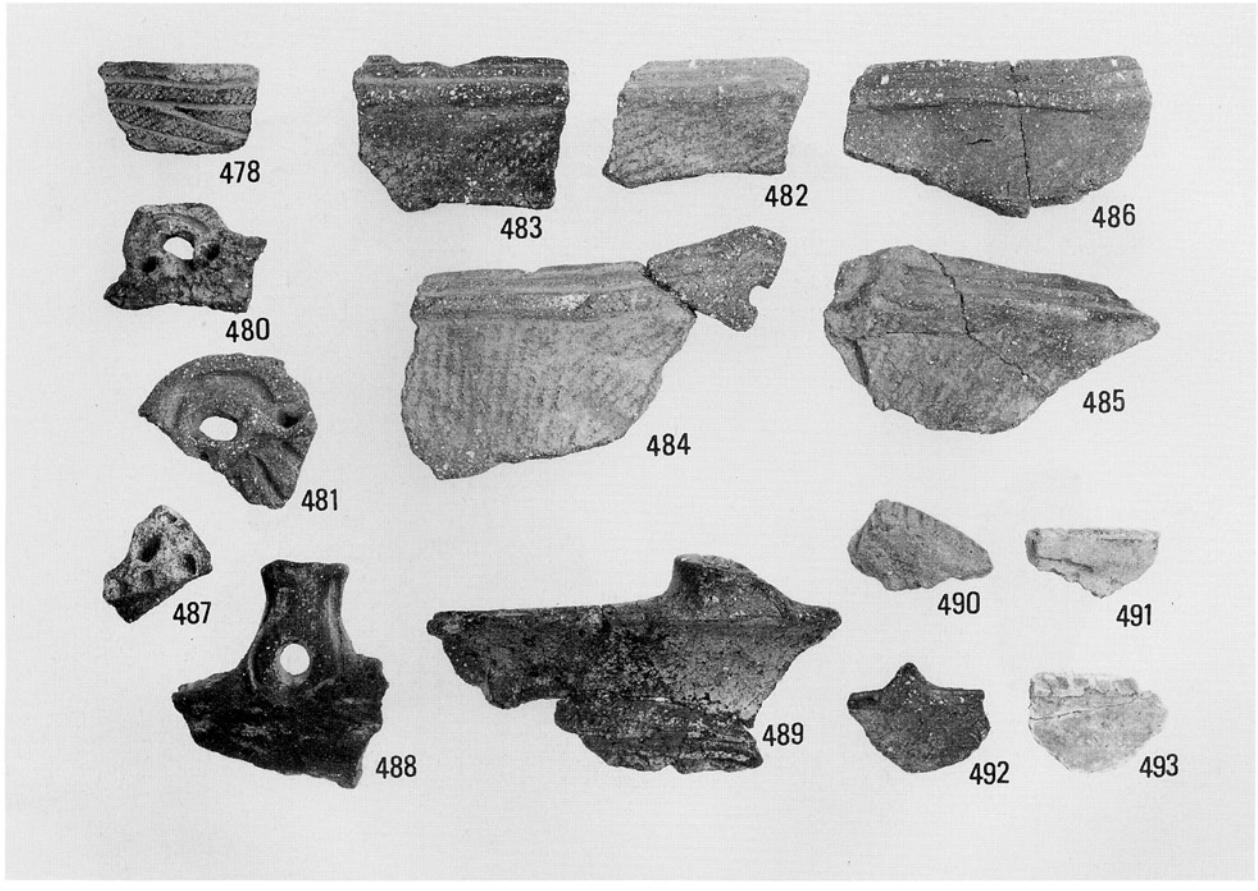
出土遺物

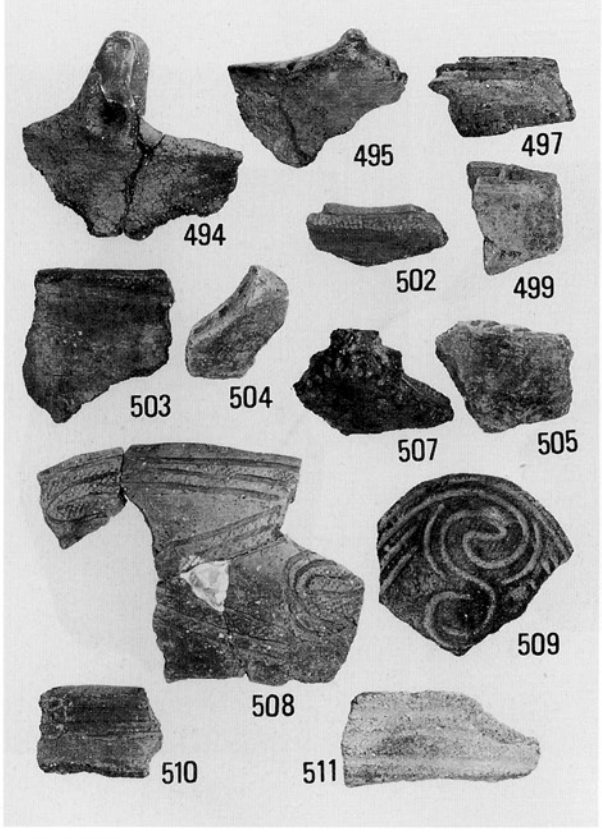


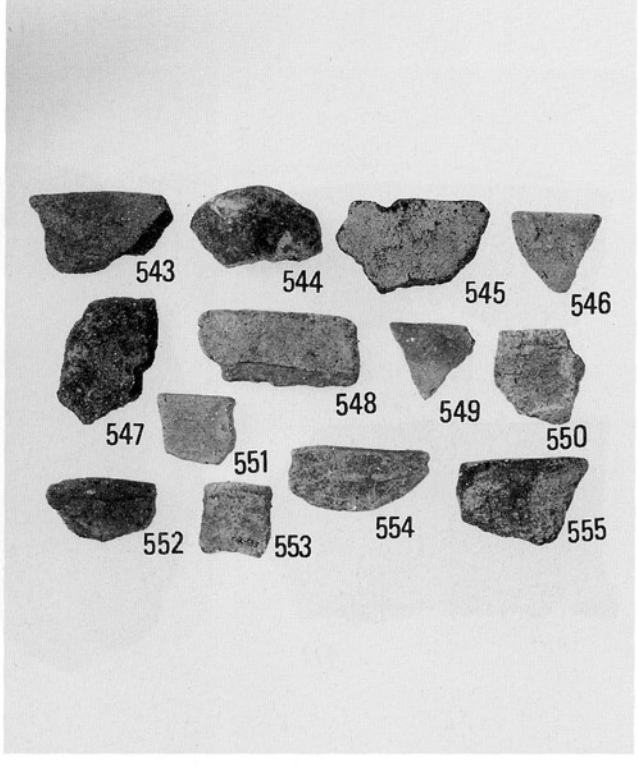


出土遺物

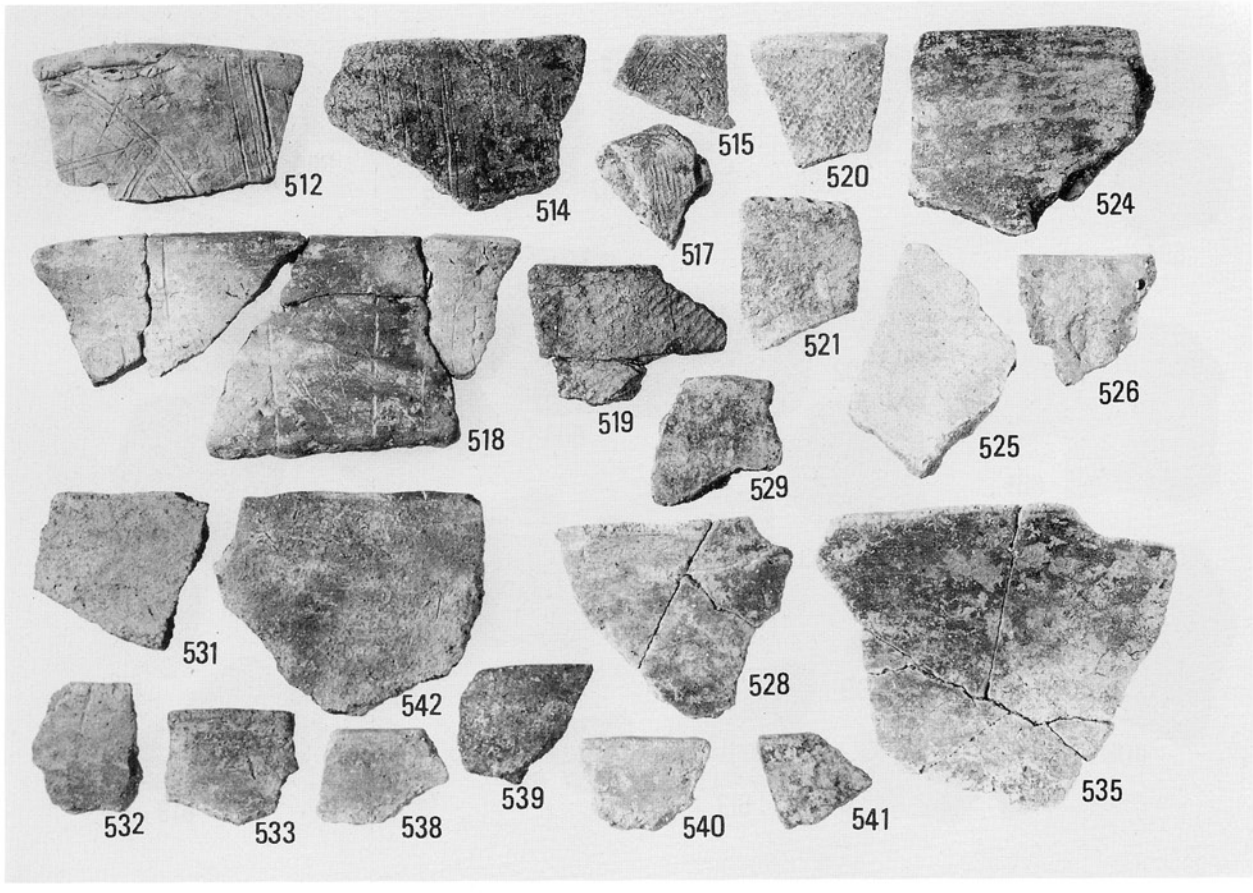
P L 53.

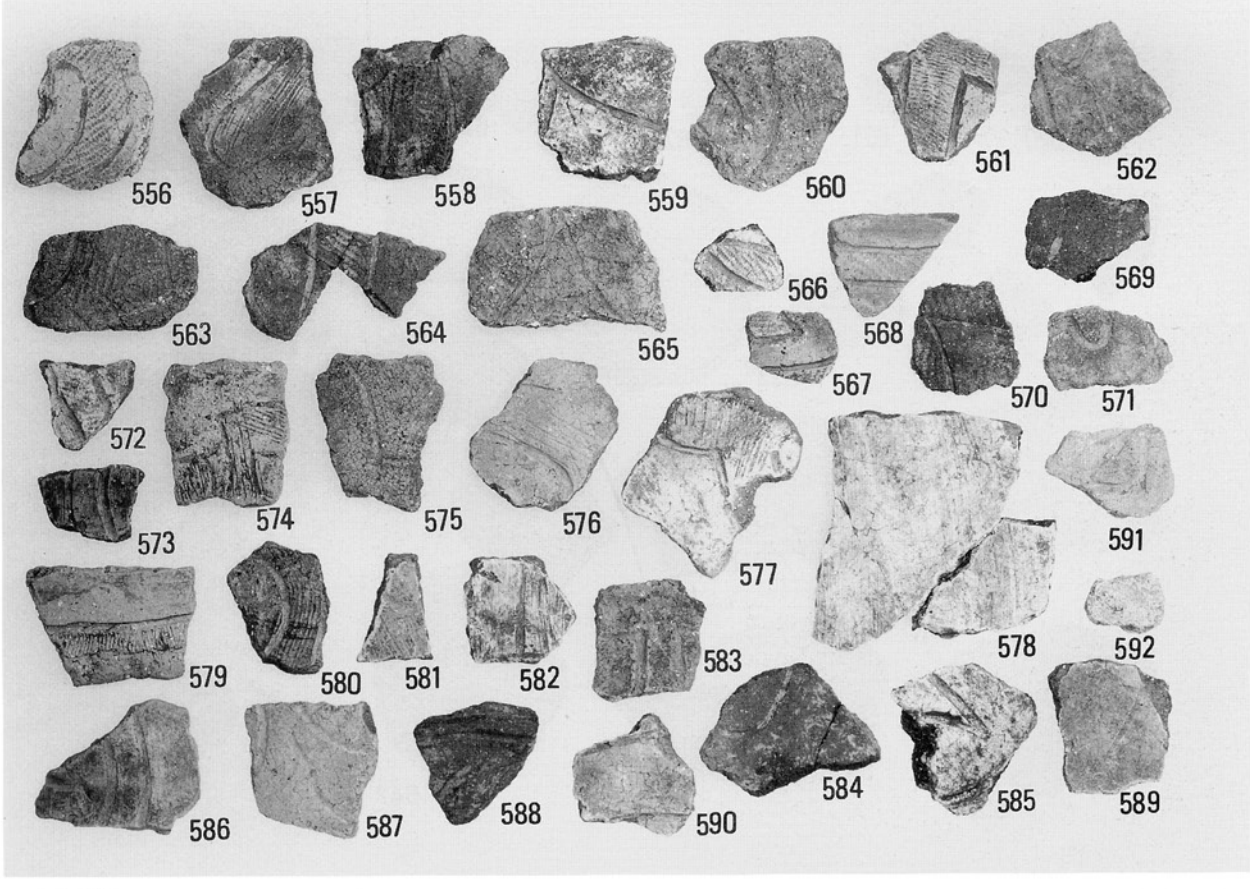

478
483
482
486
480
484
485
481
487
490
491
489
488
492
493


495
497
494
502
499
503
504
507
505
509
508
510
511


543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555

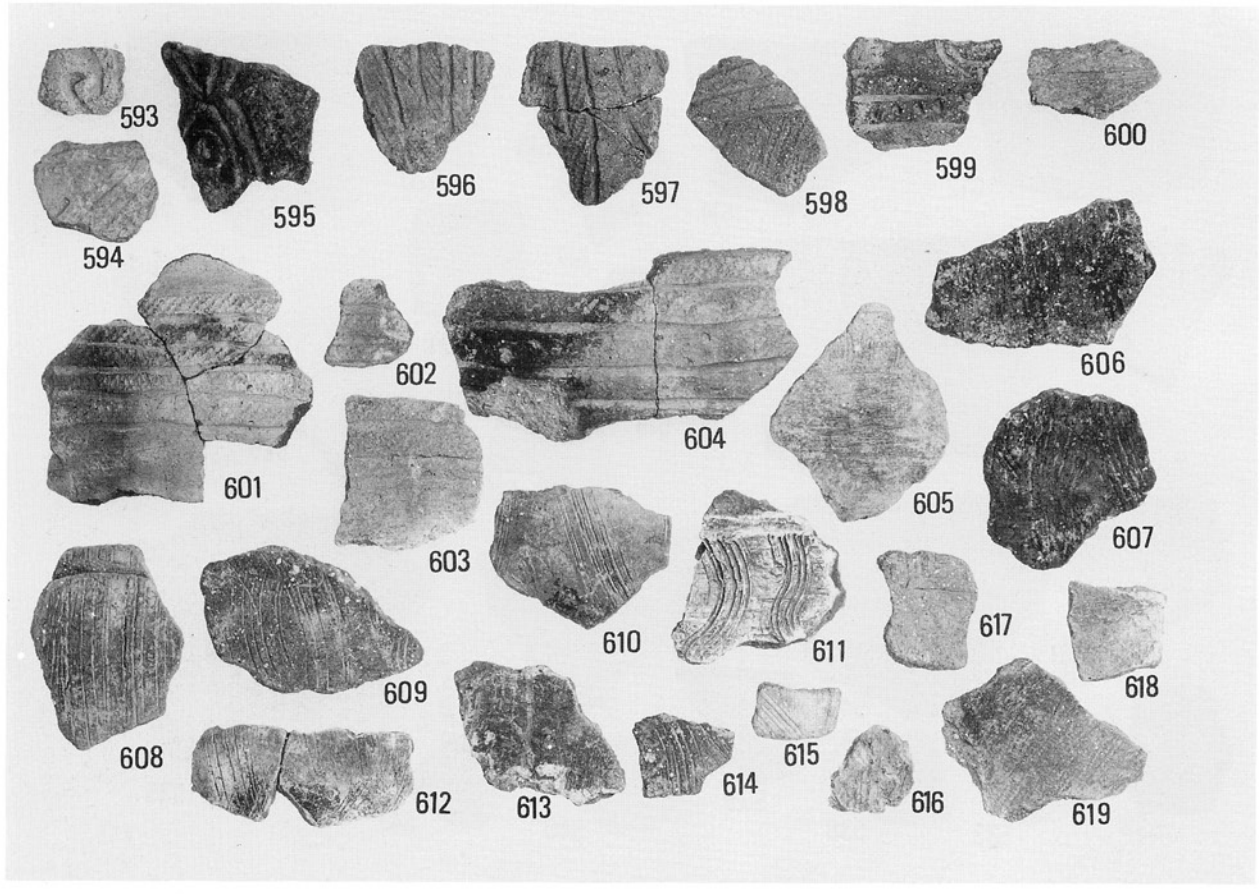
出土遺物

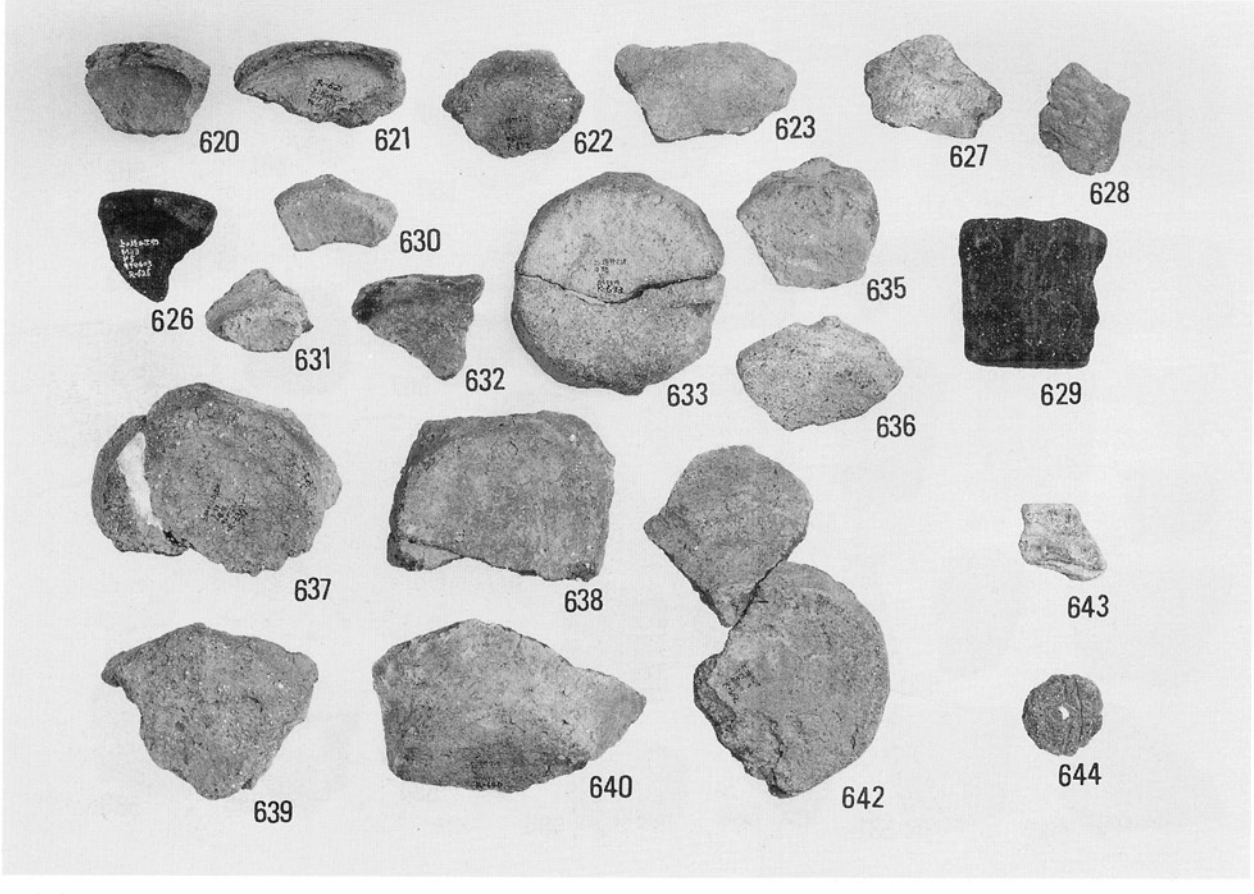

512
514
515
517
520
524
518
519
521
526
525
529
531
542
528
535
532
533
538
539
540
541


556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
568
569
567
570
571
572
573
574
575
576
577
591
578
592
579
580
581
582
583
584
585
589
586
587
588
590

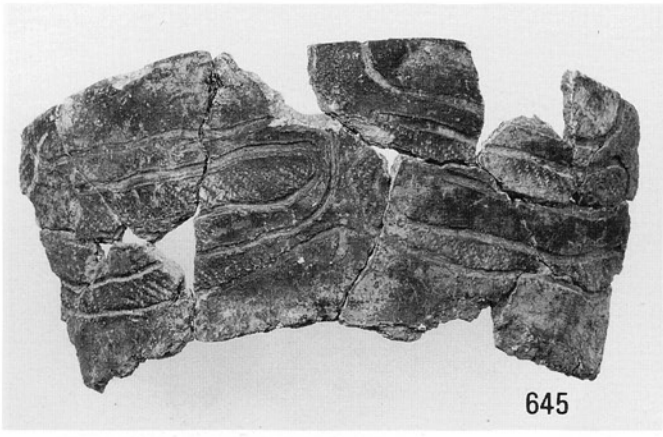
出土遺物

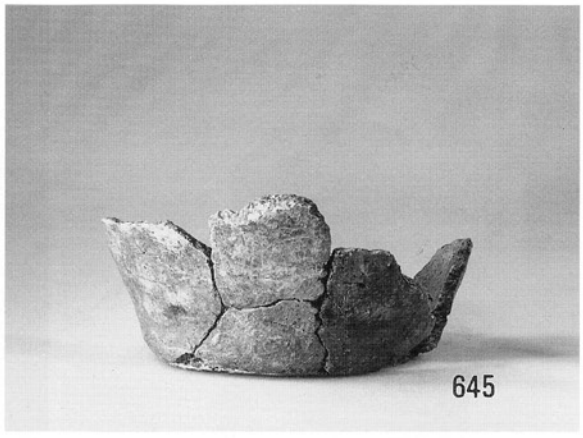
P L 55.

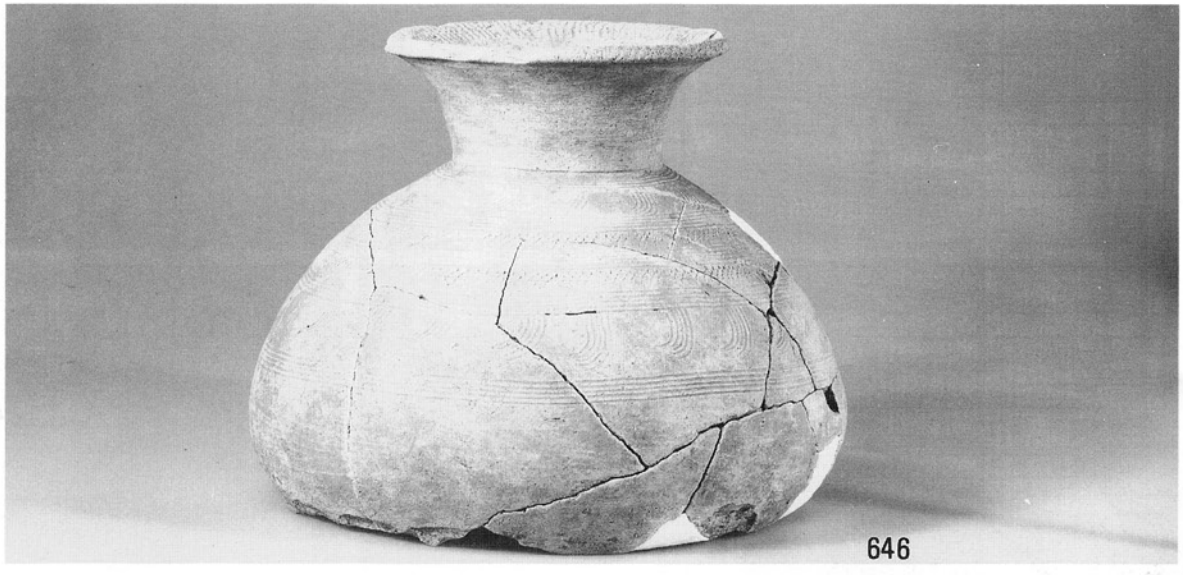

593
595
596
597
598
599
600
594
602
604
606
601
605
607
603
610
611
617
618
608
609
615
614
616
619
612
613

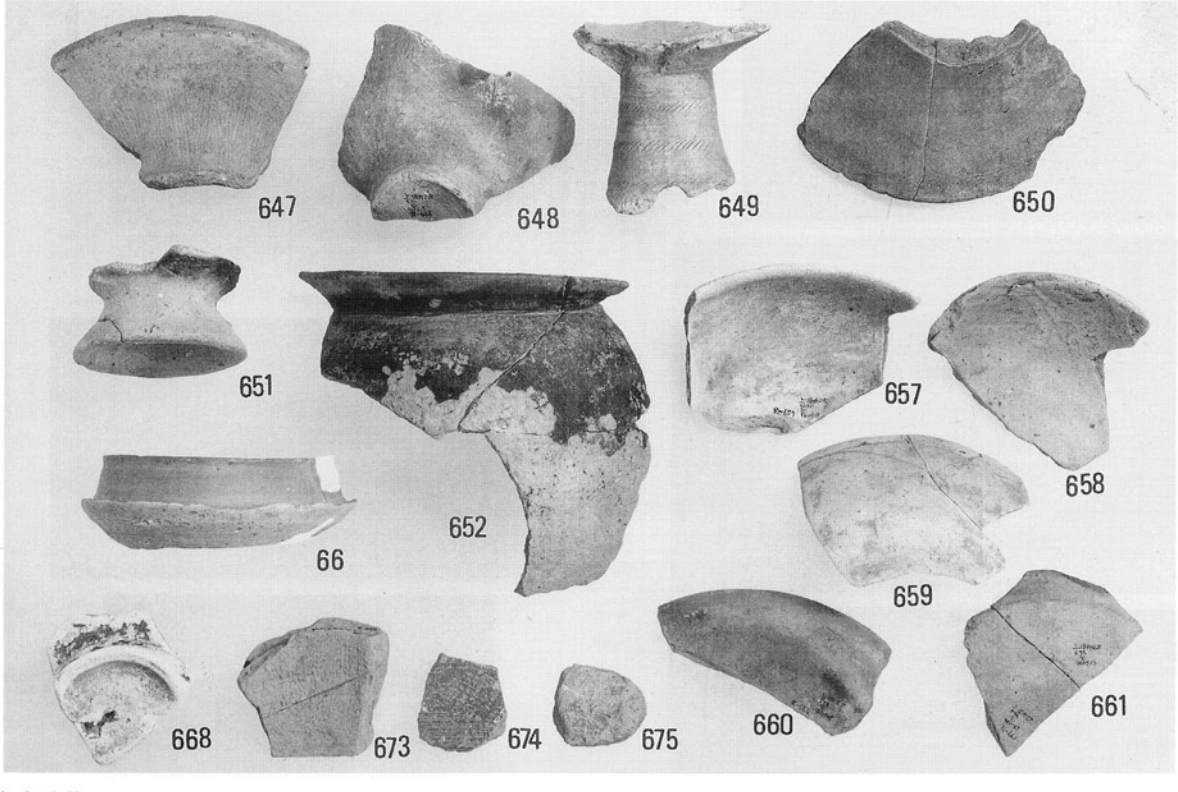

620
621
622
623
627
628
630
626
635
631
632
633
629
636
637
638
643
639
640
642
644

出土遺物


645

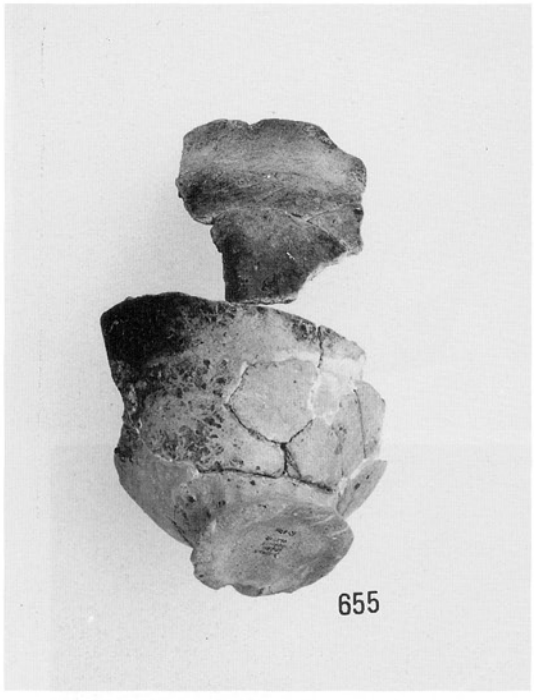

645

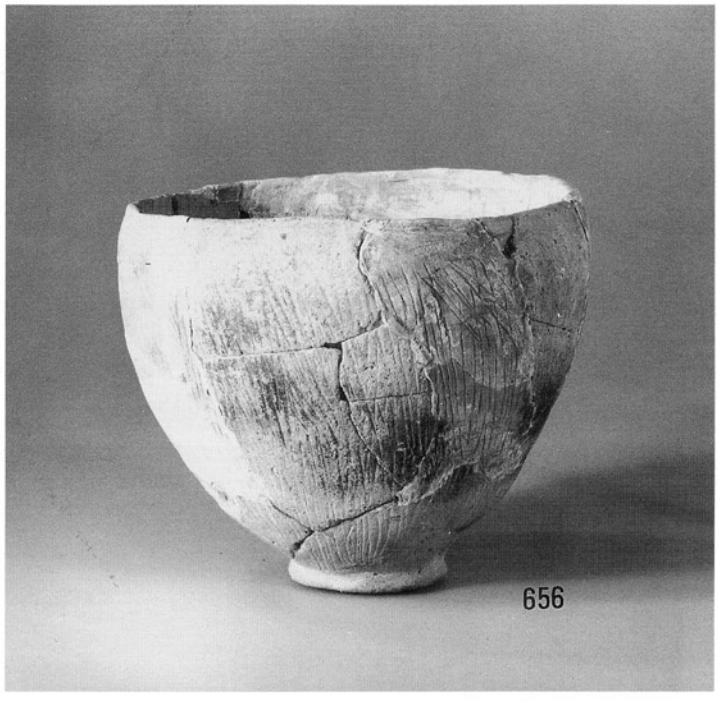

646

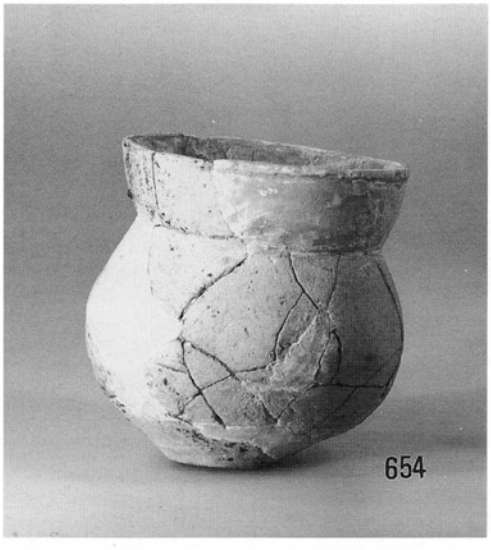

647
648
649
650
651
652
66
657
658
659
660
661
668
673
674
675

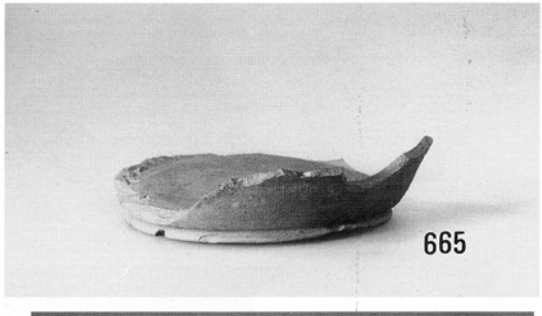
出土遺物

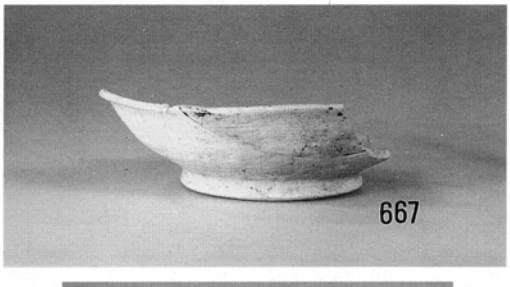
P L 57.

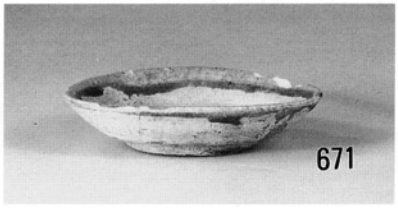






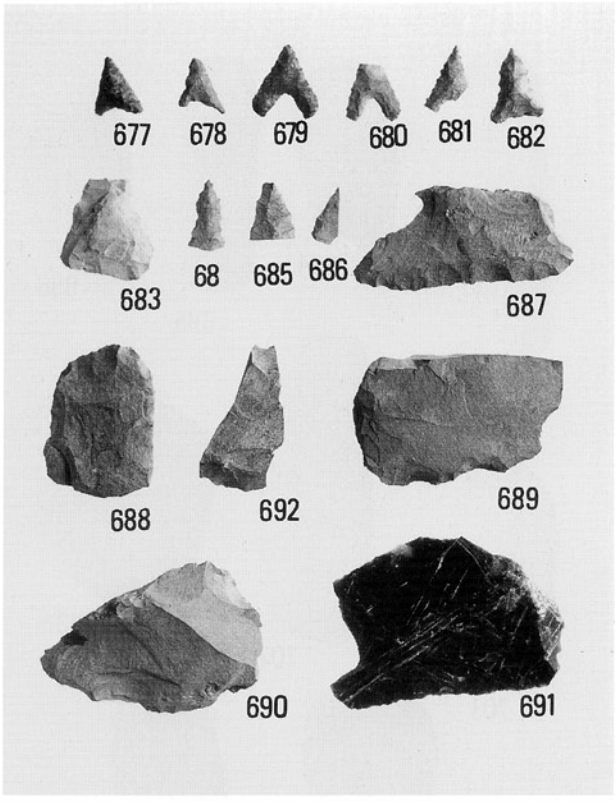


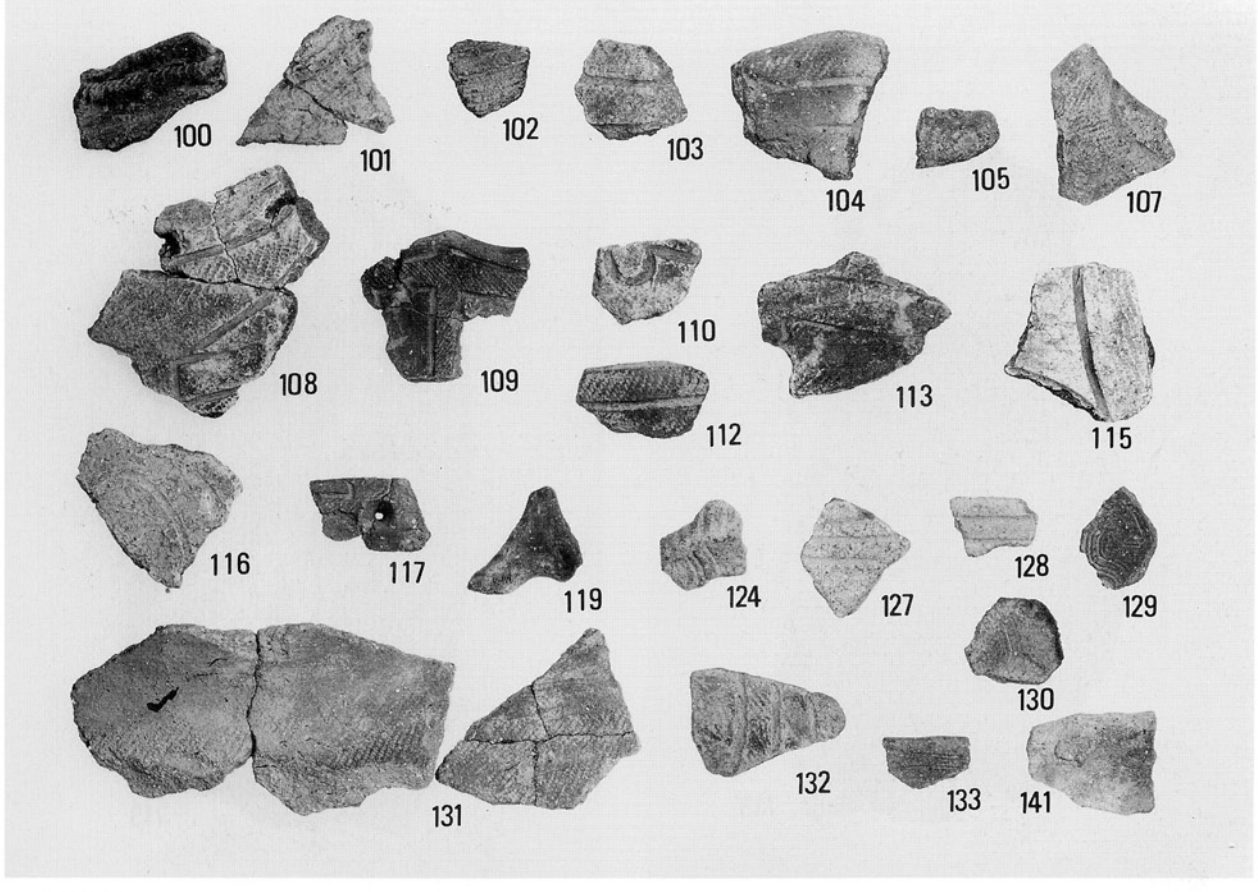




出土遺物

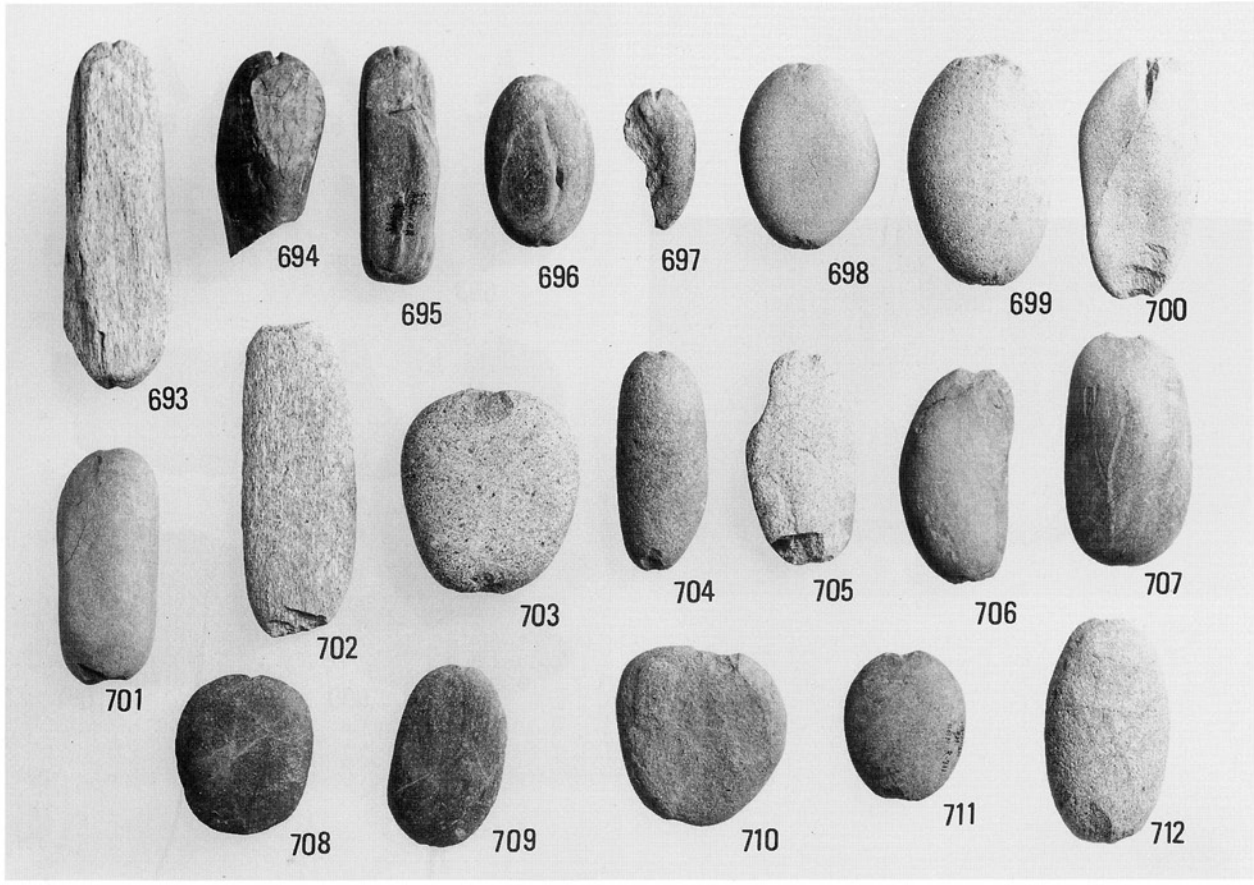
672


677
678
679
680
681
682
683
68
685
686
687
688
692
689
690
691

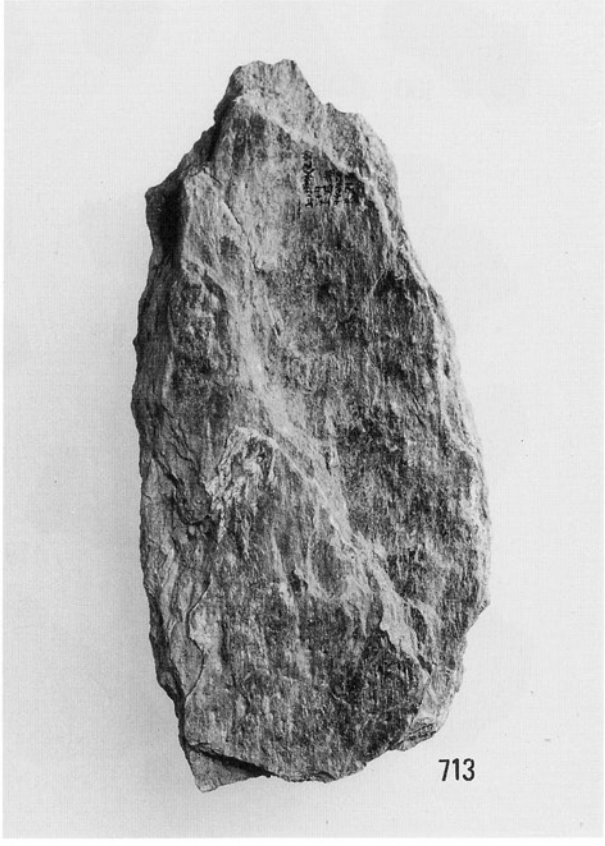

100
101
102
103
104
105
107
108
109
110
112
113
115
116
117
119
124
127
128
129
130
131
132
133
141

出土遺物

P L 59.


693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712

713


713

出土遺物

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
1	縄文土器 深鉢	SK1	口径:(27.0)	◦口縁端部内折、内外面ミガキ	密	良	外:灰褐(7.5YR4/2) 内:褐(7.5YR4/3)	口縁部1/3存		072-01
2	縄文土器 深鉢	SK1	口径:(31.0)	◦口縁端部内削ぎ状、筒状突起 ◦体部外面巻貝条痕	やや粗	良	外:にぶい赤褐(5YR4/3) 内:橙(5YR6/6)	口縁~体部1/3存		073-01
3	縄文土器 深鉢	SK1	口径:(27.0)	◦口縁部内外面ミガキ ◦体部巻貝条痕のちミガキ	密	良	外:暗赤褐(5YR3/4) 内:にぶい褐(7.5YR5/3)	口縁~体部1/3存	外面スス付着	071-01
4	縄文土器 深鉢	SK1		◦沈線による帯状文。無文帯と縄文(LR)帯 ◦無文部はミガキ、内面ミガキ	密	やや不良	外:にぶい黄橙(10YR6/3) 内:にぶい黄褐(10YR5/3)	体部小片		066-01
5	縄文土器 深鉢	SK1		◦沈線による帯状文。無文帯と縄文(RL)帯 ◦無文部はミガキ、内面ミガキ	やや密	やや良	外:にぶい黄褐(10YR5/3) 内:にぶい黄褐(10YR5/3)	体部細片		066-08
6	縄文土器 深鉢	SK1		◦沈線による帯状文。無文帯と条線充填の文様帯 ◦無文帯はミガキ、内面ミガキ	やや密	良	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	体部小片		066-02
7	縄文土器 深鉢	SK1		◦沈線による帯状文。無文帯と縄文(RL)帯 ◦内面ナデ	密	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	体部小片		066-12
8	縄文土器 深鉢	SK1		同上	密	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:にぶい黄褐(10YR4/3)	体部小片	7と同一個体	066-11
9	縄文土器 深鉢	SK1		◦沈線による帯状文。無文帯と縄文(?)帯 ◦無文部はミガキ、内面ミガキ	やや粗	良	外:橙(5YR6/6) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	体部小片		066-03
10	縄文土器 深鉢	SK1		◦沈線による帯状文。無文帯と縄文帯 ◦無文帯はミガキ、縄文は撚糸文か、内面ミガキ	密	良	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:にぶい褐(7.5YR5/3)	体部細片	外面に朱彩	066-05
11	縄文土器 深鉢	SK1		◦沈線による帯状文 ◦内外面粗いミガキ	やや密	良	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:にぶい橙(7.5YR7/3)	口縁部細片		066-09
12	縄文土器 深鉢	SK1		◦口縁部面取り、沈線文	粗	やや良	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部細片		066-07
13	縄文土器 深鉢	SK1		◦口縁部段状に肥厚、沈線文に刺突文	やや粗	やや良	外:にぶい赤褐(5YR5/3) 内:にぶい橙(5YR6/4)	口縁部細片		066-10
14	縄文土器 深鉢	SK1		◦口縁部L字状に肥厚、沈線文	密	良	外:橙(7.5YR7/6) 内:橙(7.5YR6/6)	口縁部細片		066-16
15	縄文土器 深鉢	SK1		◦波状口縁、口縁端面に沈線、外面に垂下平行沈線	やや粗	やや良	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部細片		066-17
16	縄文土器 深鉢	SK1		◦波状口縁、口縁部内面に隆帯 ◦口縁部外面やや下に縄文(RL)	やや粗	良	外:にぶい黄橙(10YR6/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部小片		066-14
17	縄文土器 深鉢	SK1		◦波状口縁、口縁部肥厚、端部に面もつ ◦外面条痕、内面ナデ	やや粗	やや不良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁部小片		066-15
18	縄文土器 深鉢	SK1		◦波状口縁、口縁部内側へ肥厚、端面に沈線、刺突	やや粗	良	外:灰褐(7.5YR4/2) 内:にぶい赤褐(5YR4/3)	口縁部小片		066-04
19	縄文土器 深鉢	SK1		◦外面に撚糸文 ◦内面ヨコナデ	やや密	良	外:明赤褐(5YR5/6) 内:にぶい赤褐(2.5YR4/4)	体部小片		066-06
20	縄文土器 深鉢	SK1		◦底部外面ていねいなナデ	やや粗	良	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	底部1/5存		066-13
21	縄文土器 深鉢	SX2	底径10.8	◦底部に直径5.6cmの穿孔(焼成後) ◦内外面ナデ	やや密	やや良	外:にぶい黄褐(10YR5/3) 内:にぶい黄褐(10YR5/3)	底部完存 体部1/2存	外面にスス付着	029-01
22	縄文土器 深鉢	SK50		◦沈線文	やや粗	良	外:橙(5YR6/6) 内:橙(7.5YR6/6)	口縁部小片	磨耗	141-03
23	縄文土器 深鉢	SK50		◦沈線文	やや粗	良	外:橙(5YR6/6) 内:橙(7.5YR6/6)	体部小片	22と同一固体	141-04
24	縄文土器 深鉢	SK50		◦沈線文	やや粗	不良	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)	体部細片		141-08
25	縄文土器 深鉢	SK50		◦沈線文	やや密	やや不良	外:鈍い褐(7.5YR5/4) 内:にぶい褐(7.5YR5/4)	体部細片		141-09

第10表　遺物観察表(1)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
26	広口壺	SX3 南辺溝	口径：11.8 体部最大径：25.4 残存高：24.0	◦外面雑なハケメ ◦内面体部上半ナデ 下半ハケメ	やや粗	やや不良	浅黄橙（10YR8/3）	◦口縁部は1/2欠損 ◦体部はほぼ完形 ◦底部欠損	◦底部欠損は人為的か？ ◦体部下半にスス付着	091-01
27	広口壺	SX3 南辺溝		◦ミガキ調整が主 ◦外面口縁端面のアゴ部はヨコナデ	やや密 0.5～1mm 大の砂粒多い	良	外面：にぶい黄橙（10YR7/3） 内面：にぶい橙（5YR7/4）	◦口頸部のみ 5×4Cmの小片	◦あえて口径を確定するなら 18cm前後	089-03
28	広口壺	SX3 北辺溝	頸基部径（10.4）	◦体部肩部に横線文 ◦頸基部に刻みのある突帯がはりつけられている	やや粗 1~2mm大の砂粒含む	やや良	橙（5YR7/6） 外表面に焼成時の黒色くすみあり	◦頸基部のみ 1/3ほどの小片	風化激しい	090-03
29	広口壺	SX3 北辺溝	口径：（18.6）	◦表面ミガキ 外面は縦方向 内面は横方向 ◦口縁外側の面の下（あごの下）はヨコナデ	密ただし、断面には1mm大の砂粒が顔を見せている	良	外面：橙（5YR7/6） 内面：浅黄橙（7.5YR8/4）	◦口頸部のみ7× 5.5cmほどの小片		090-04
30	広口壺	SX3 北辺溝	口径：（10.5）	◦体部外面ミガキ（横方向、斜め方向混在）	やや粗0.5~1mmの砂粒多く含む3mm以上の礫も少し含まれる	良	外面：橙（7.5YR7/6） ＋灰褐（7.5YR5/2） 内面：にぶい橙（5YR7/4）	◦底部1/3強存	◦底に籾殻痕 ◦体部器面に朱が少量 ◦黒斑あり	089-01
31	高杯	SX3 北辺溝	口径：19.8 高：15.5 脚基部径：3.0 脚裾径：10.1 脚高：7.5	◦口縁端部ヨコナデ、内側に5mm幅の斜面をつくる ◦ソケット式の脚、杯内面底部に粘土板を貼って整え脚と杯の接合を終了するようである ◦杯内外面及び脚外面ミガキ。脚基部はミガキの上から横描線 ◦脚内面ヨコナデ。基部はナデ、指あとはっきり ◦透孔3か所	やや密	やや良	杯内面：にぶい黄橙（10YR7/4） 外面：にぶい黄橙（10YR6/3） くすみあり	◦脚部1/6ほど欠 杯部はほぼ完形	表面に朱の痕跡 外面及び杯内面に朱が点状に残る等杯内面に多く残る	088-01
32	高杯	SX3 南辺溝	脚基部径：3.8	◦ソケット状の脚基部 ◦外面：ミガキのあと1段に2段の横描横線文 ◦内面：オサエ及びナデ	やや密1mm弱の砂粒少し含	やや良	淡黄（2.5Y8/3）	◦脚部上半のみ	◦円孔の数は不明	090-02
33	高杯	SX3 溝南東コーナー	脚基部径：4.0	◦脚外面：たて方向のミガキあと横描横線文2段 ◦内面：ナデ。しぼり痕。	やや密	やや不良	浅黄橙（7.5YR8/4）	◦脚部上半		090-01
34	受口甕	SX3 東辺溝	口径：17?	◦ヨコナデ	やや粗0.5mm 大の砂粒多い	良	外面：灰褐（7.5YR4/2） 内面：にぶい橙（7.5YR7/4）	口縁部のみ 6×3cmの小片	◦外面一部にスス付着	090-05
35	手焙形土器	SX3 北辺溝		◦体部最大径の部分にキザミのはいった突帯をはりつけ ◦体部内面下半に横方向の工具痕、ミガキ？ハケメ？	やや粗1mm 大の砂粒多い 2mm大の小石もかなりみられる	やや良	外面：橙（7.5YR7/6） 内面：灰褐（7.5YR6/2） ＋黒（7.5YR1.7/1）	◦体部11×5cm の破片その他同一個体と思われる小片4		089-02
36	縄文土器 深鉢	SX4		◦口縁部内外面ミガキ ◦端部は丸みをもつ	密	良		口縁部細片		022-01
37	弥生土器 壺	SX4		◦櫛描横線と波状文	やや密	良		頸部細片		022-02
38	広口壺	Pit.64	口径：（13.4） 高：（22.5） 底径：（6.2）	◦口縁部ヨコナデ ◦外面は全体的にハケメだが、肩部以下は横位のミガキもなされる ◦内面はハケメ後ナデか	密	やや良	にぶい黄橙（10YR7/4） ~橙（5YR7/6）	2/3存	◦底部穿孔か ◦体部外面にスス付着	070-02
39	台付甕	Pit.65	脚部径：（10.7）	◦外面ハケメ後、縦位のミガキ ◦内面ハケメ後ナデ ◦脚部端部ヨコナデ、内面ナデ	密	良	淡黄（2.5Y8/3）	1/2存但、脚部はほぼ完形	◦肩部の一ケ所に6.2×5.0cmの窓をもつ	049-08
40	土師器 甕	SH10	口径：（13.0） 高：（14.45）	◦口縁端部つまみ上げ ◦口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ・内面ハケメ後ヘラ削り	やや密	良	浅黄橙（7.5YR8/3）	口縁~体部1/4存	◦体部外面にスス付着 ◦体部内外面とも指オサエ痕あり	001-03
41	土師器 甕	SH10	口径：（18.0） 高：（9.5）	◦口縁部つまみ上げ ◦口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエナデ後ハケメ体部内面ヘラ削り	密	良	にぶい黄橙（10YR7/3）	口縁~体部1/4存	◦頸部・底部付近外面にスス付着 ◦体部外面に剥離痕あり	001-02
42	土師器 甕	SH10	口径：（16.0）	◦口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	密	良	外：灰黄褐（10YR6/2） 内：浅黄橙（10YR8/3）	6.0×4.0cmの小片		002-01
43	土師器 甕	SH10	口径：（19.8）	◦口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面上部ナデ・下部ヘラ削りか	やや粗	良	浅黄橙（10YR8/3）	口縁~体部1/8存	◦頸部内面にスス付着	001-04
44	土師器 甕	SH10	口径：（22.0）	◦口縁部ヨコナデ、頸部ナデ	やや粗	良	浅黄橙（10YR8/4）	口縁~頸部1/6存		002-02
45	製塩土器	SH10		◦外面指オサエ後ナデ、内面ヘラ状工具による調整か	粗	やや良	橙（5YR7/6）	6.5×5.5cmの小片	◦全体的に摩滅激しい ◦体部外面小石（1.0×0.5cm大）含む	002-05
46	製塩土器	SH10		◦内・外面ともナデか	粗	やや良	橙（7.5YR7/6）	3.0×3.0cmの小片	◦全体的に摩滅激しい	002-06
47	土錘	SH10	長径：3.4 短径：1.3	◦指で成形後、穿孔・ナデ	密	良	灰黄褐（10YR5/2）	ほぼ完形		001-05
48	縄文土器 深鉢	SH10		◦波状口縁頂部に筒状突起 ◦外面に沈線および条線、内面ナデ	やや密	良	外：にぶい赤褐（5YR5/4） 内：灰褐（5YR4/2）	口縁部のみ 3.7×3.2cm片		002-004
49	縄文土器 鉢	SH10		◦頸部に沈線横走、以下縄文（RL）	やや密	やや良	にぶい黄橙（10YR7/4）	口縁部のみ 3.7×3.1cm片		002-03
50	土師器 杯	SH12	口径：（12.4）	◦口縁部は指オサエにより、やや外反気味 ◦口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	やや不良	橙（7.5YR7/6）	4.0×4.0cmの小片		016-03

第11表　遺物観察表(2)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
51	土師器 杯	SH12	口径：(13.1) 高：(3.1)	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや粗	やや良	灰白 (2.5Y8/2)	1 / 2 存	・口縁部にスス付着 ・粘土巻き上げ痕あり	016-01
52	土師器 杯	SH12	口径：(15.6)	・口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	橙 (5YR6/6)	5.5×2.0cmの小片		016-05
53	土師器 甕	SH12	口径：(15.4)	・口縁部ヨコナデ	やや密	良	灰白 (10YR8/2)	口縁部のみ1/6存	・内・外面ともスス(?)付着	016-04
54	縄文土器 鉢？	SH12	口径：(9.8)	・口縁端部～口縁内面はヨコナデ ・口縁外面は、縄文(LR) ・体部外面ミガキ、内面は指オサエ後ナデ	密	良	黒褐 (2.5Y3/2)	口縁～体部1/6存		016-06
55	土師器 杯	SH11	口径：(12.2) 高：(4.25)	・口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削りのちナデ ・強いヨコナデにより口縁部はやや外反	密	良	褐灰 (10YR4/1)	4.0×4.3cmの小片	・粘土巻き上げ痕あり	003-06
56	土師器 皿	SH11	口径：(15.3) 高：2.05	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	密	良	橙 (5YR7/6)	1 / 3 存		004-06
57	土師器 皿	SH11	口径：(14.8) 高：2.55	同上	密	やや不良	橙 (7.5YR8/6)	3 / 5 存		004-07
58	土師器 皿	SH11	口径：(16.0) 高：(2.95)	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラ削り後ナデ	密	やや不良	浅黄橙 (10YR8/4)	1 / 6 存	・底部外面にスス付着	003-05
59	土師器 皿	SH11	口径：(16.0) 高：(2.9)	・体部から口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がる ・口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラ削り後ナデ	密	良	橙 (7.5YR7/6)	4.5×4.5cmの小片	・底部内面に工具痕(?)あり	003-04
60	土師器 甕	SH11	口径：(13.0)	・口縁部ヨコナデ、体部はハケメ	やや粗	やや良	にぶい橙 (7.5YR7/3)	口縁～体部1/4存	・頸部内面にスス付着か	003-03
61	土師器 甕	SH11	口径：(18.0)	同上	やや粗	やや不良	浅黄橙 (10YR8/3)	口縁～体部1/4存	・体部内面にスス付着	003-01
62	土師器 甕	SH11	口径：(27.9)	・口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、体部内面ヘラ削り後ナデ	やや粗	良	褐灰 (10YR4/1)	口縁～体部1/8存	・体部内面にスス付着か	003-02
63	土師器 受口状口縁甕	SH11	口径：(11.4)	・口縁端部ヨコナデ、口縁部ナデ	やや粗	良	浅黄橙 (10YR6/3)	4.0×2.0cmの小片		004-02
64	壺	SH11	口径：(11.0)	・口縁部ヨコナデ、口縁部内面ハケメ、内面ナデ	やや密	やや良	浅黄 (2.5Y7/3)	口縁部のみ1/6存		004-05
65	壺	SH11	口径：(16.0)	・口縁端部ヨコナデ、口縁部ヘラミガキ	密	良	外：浅黄 (2.5Y7/3) 内：にぶい黄橙	4.0×4.3cmの小片	・現状では口縁部に穿孔(焼成前)が1ケ所あり	004-04
66	甕	SH11	口径：(16.6)	・口縁端部～口縁部内面ヨコナデ、外面ハケメ ・体部ハケメ	やや密	良	にぶい黄橙 (10YR7/2)	口縁～体部1/10存		004-01
67	土師器 杯	SX13	口径：(10.4) 高：3.8	・体部から口縁部は、ヨコナデにより外反 ・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや粗	良	淡黄 (2.5Y8/3)	1 / 4 存	・底部内面の一部は黒変している	015-02
68	土師器 杯	SX13	口径：11.8 高：4.1	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや密	良	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：淡黄 (2.5Y8/3)	完形	・内面は全体にスス付着 ・底部内面にヘラ状工具痕か	015-01
69	土師器 甕	SX13	口径：(14.8)	・口縁部の最先端は、ややつまみ上げられた格好 ・口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	灰白 (10YR8/2)	口縁～体部1/5存	・頸部内面に工具痕あり	015-03
70	土師器 杯	SD7	口径：(13.0) 高：(3.9)	・口縁部ヨコナデ、体部下半部分サエのまま・内面ナデ、底部ナデ	密	良	浅黄橙 (10YR8/4) 明赤褐 (5YR5/6)	1 / 2 存		133-01
71	土師器 甕	SD7	口径：(13.6)	・口縁部ヨコナデ、頸部～体部ナデ	密	良	外：灰黄褐 (10YR6/2) 内：灰白 (2.5Y8/2)	口縁～体部1/4存	・体部外面にスス付着 ・全体的にやや摩滅	133-02
72	土師器 甕	SD7	口径：(16.4)	・口縁部ヨコナデ、ハケメ、頸部内面ハケメ、内面ナデ、体部ハケメ	密	やや良	外：にぶい橙 (5YR7/4) 内：にぶい褐 (7.5YR5/3)	口縁～体部1/6存	・全体的に摩滅	133-05
73	土師器 甕	SD7	口径：(23.6)	・口縁部ヨコナデ、頸部内面ハケメ、内面ハケメ後ナデ	やや粗	やや不良	外：灰白 (10YR8/2)	口縁～頸部1/8存	・全体的に摩滅激しく調整不明瞭	133-04
74	土師器 甕	SD7	口径：(22.4)	・口縁端部はつまみ上げられ、外反した格好 ・口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ、体部外面ハケメ・内面ナデ	やや粗	やや不良	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：淡黄 (2.5Y8/2)	口縁～体部1/6存	・全体的に摩滅激しい ・体部外面にヘラ描文(?)あり	133-03
75	土師器 甕	SD7	口径：(29.8)	・口縁部ヨコナデ、口縁～頸部ナデ	やや密	やや良	外：橙 (5YR7/6) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)	口縁～頸部1/8存	・全体的に摩滅激しい ・口縁部内面にヘラ状工具痕あり	134-01

第12表　遺物観察表(3)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
76	土師器甑	SD7	口径:(21.4)	◦口縁端部ヨコナデ、体部ハケメ	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁~体部1/6存	◦体部外面にスス付着 ◦体部外面に指圧痕あり	134-02
77	須恵器高杯	SD7	裾部径:(7.0)	◦脚部中央に、一条の沈線が入る ◦脚部~裾部ロクロナデ、裾部端部ヨコナデ	やや粗	良	灰白(5Y7/1)~灰(5Y6/1)	脚部のみ完形 但、裾部端部は1/4存		133-06
78	土師器甕	SD8	口径:(23.2)	◦体部から口縁部は大きく外反 ◦口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエ後ハケメ、内面ナデ	やや密	やや良	浅黄橙(7.5YR8/6)	口縁~体部1/8存		010-03
79	土師器甕	SD8	口径:(11.3)	◦口縁部は、垂直につまみ上げられた格好 ◦口縁端部~口縁部外面ヨコナデ、内面ハケメ ◦体部外面ハケメ、内面ナデ	やや密	やや良	浅黄橙(10YR8/4)	口縁~体部1/3存	◦口縁部内面にスス付着	010-01
80	土師器甕	SD8	口径:(16.4)	◦口縁端部ヨコナデ、口縁~体部ハケメ	粗	やや良	外:橙(7.5YR7/6) 内:にぶい橙(10YR7/3)	口縁~体部1/6存 但、口縁部は1/3欠	◦外面は摩滅進む ◦口縁部内面の一部黒変している	010-02
81	須恵器杯身	SD8	口径:(10.6)	◦口縁部ロクロナデ	密	良	灰(5Y6/1)	口縁部のみ1/6存		010-06
82	縄文土器深鉢	SD8		◦口縁部内面ミガキ	やや粗	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	口縁部のみ5.0×5.0cmの小片	◦現状では外面に沈線が三条入る	011-02
83	縄文土器深鉢	SD8		◦口縁部内面ナデ	やや粗	やや良	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:橙(7.5YR7/6)	6.5×3.5cmの小片	◦現状では外面に沈線文が二条入る	011-04
84	縄文土器深鉢	SD8		◦口縁部内・外面ともミガキ	やや密	良	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ5.5×3.5cmの小片		011-01
85	縄文土器深鉢	SD8		◦口縁部内・外面ともミガキ	やや密	良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部のみ4.5×2.3cmの小片	◦現状では外面に沈線文が一条入る	011-03
86	土師器台付甕	SD8		◦底部内・外面ともハケメ	やや粗	やや良	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:オリーブ黒(5Y3/1)	底部のみ2/3存		010-05
87	土師器高杯	SD8	裾部径:(12.8)	◦脚部~裾部外面ミガキ、内面ナデか。但、ミガキ痕残る ◦裾部端部ヨコナデ	やや粗	やや良	浅黄(2.5Y8/4)	脚部~裾部1/4存	◦現状では脚部に穿孔が一ヵ所あり ◦内面は摩滅により調整不明瞭	010-04
88	土師器杯	Pit66	口径:12.55 高:4.1	◦口縁端部はヨコナデにより外反 ◦口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ	やや密	やや良	灰白(10YR8/1)~灰黄褐(10YR6/2)	ほぼ完形	◦体部外面に巻き上げ痕がわずかに残る ◦内・外面ともスス付着	017-01
89	土師器杯	Pit66	口径:12.2 高:4.2	◦口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ	やや密	やや良	灰白(7.5YR8/2)~浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁部1/5のみ欠	◦内・外面ともスス付着 ◦体部内面にヘラ状工具痕あり	017-02
90	土師器杯	Pit66	口径:13.0 高:2.6	同上	密	良	橙(5YR7/6)~明赤褐(5YR5/6)	口縁~体部1/6のみ欠		017-03
91	土師器杯	Pit66	口径:20.1	◦口縁部~体部ヨコナデ	密	不良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁~体部のみ1/8存	◦全体的に摩滅進む	017-04
92	土師器杯	Pit67	口径:13.0 高:3.3	◦口縁部~体部ヨコナデ、底部乱ナデ	やや密	やや不良	灰白(2.5Y8/2)	ほぼ完形	◦口縁部に歪みあり	030-02
93	土師器甕	Pit67	口径:13.8 高:18.7	◦口縁部横ナデ、頸部指オサエのまま ◦体部外面は全体的にハケメ、その後、上部はナデ、下部はヘラケズリ ◦体部内面はヨコナデ ◦底部は指オサエ・乱ナデ	やや密	やや不良	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	◦体部~底部面にかけてスス付着	030-01
94	土師器椀	SD14	底径:4.8	◦体部外面ヨコナデ、内面ナデ ◦底部ヘラ削り後ナデ、内面ナデ	やや密	やや良	橙(5YR7/6)	底部完形 但、体部は3/4存	◦底部外面に木葉痕あり	025-07
95	土師器椀	SD14	口径:(13.0) 高:(4.75)	◦口縁端部はヨコナデにより外反 ◦口縁部ヨコナデ、体部~底部指オサエ後ナデ	密	良	橙(2.5YR6/8)	1/3存		028-05
96	土師器皿	SD14	口径:(14.6) 高:(2.25)	◦口縁部ヨコナデ、体部~底部指オサエ後ナデ	やや密	やや不良	灰白(10YR8/2)	1/6存		028-04
97	土師器甕	SD14	口径:(21.5)	◦体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ◦口縁端部の最先端は、垂直につまみ上げられた格好、端部外面はヨコナデにより窪む ◦口縁端部ヨコナデ、口縁部ナデ、体部ハケメ	密	やや良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁~体部1/10存		028-02
98	製塩土器	SD14		◦口縁部指オサエ後ナデ	やや密	やや良	にぶい橙(5YR7/4)	口縁部のみ5.0×4.5cmの小片	◦外面の一部は白く変色 ◦断面に粘土接合痕	025-06
99	製塩土器	SD14	口径:(17.2) 高:(5.4)	◦口縁部~体部指オサエ後ナデ	やや密	やや良	外:橙(5YR7/4) 内:橙(7.5YR7/6)	口縁~体部のみ	◦口縁部に粘土接合痕あり	025-05
100	縄文土器深鉢	SD14		◦外面に隆帯文・連続C字状爪形文	やや粗	やや良	外:にぶい褐(7.5YR5/4) 内:橙(7.5YR6/6)	口縁部のみ6.5×3.5cmの小片		024-09

第13表　遺物観察表(4)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
101	縄文土器 深鉢	SD14		・隆帯上に連続C字状爪形文 隆帯の両端に沈線文	粗	やや良	外:にぶい橙(7.5YR7/3) 内:浅黄橙(10YR8/4)	口縁部のみ7.2 ×5.0cmの小片		024-11
102	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線、刻み	やや密	やや良	にぶい橙(7.5YR7/4)	3.2×3.2cmの小片		024-14
103	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文(LR)	やや密	やや良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部のみ4.5 ×3.8cmの小片		026-06
104	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文(LR)	やや密	やや良	外:黄灰(2.5Y5/1) 内:浅黄橙(10YR8/4)	口縁~体部6.5 ×6.1cmの小片		026-03
105	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に縄文(LR)円形竹管文	やや粗	やや良	灰黄褐(10YR5/2)	口縁部のみ3.2 ×2.5cmの小片		024-08
106	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや密	やや良	灰黄褐(10YR4/2)	口縁部のみ4.0 ×2.0cmの小片		024-05
107	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文(LR)	やや密	やや良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部のみ6.5 ×5.0cmの小片		026-04
108	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文(LR)	やや密	やや不良	灰白(2.5Y8/2)	口縁~体部10.5 ×10.0cmの小片		026-01
109	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文(RL)	密	良	黄灰(2.5Y5/1)	口縁部のみ6.8 ×6.5cmの小片		026-02
110	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文(LR?)	粗	やや良	灰白(10YR8/3)	4.2×3.0cmの小片		027-05
111	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文(LR?)	やや密	良	外:黄灰(2.5Y6/1) 内:浅黄橙(10YR8/3)	5.3×2.7cmの小片		024-15
112	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文(LR) ・外面にスス付着か	密	良	外:褐灰(10YR5/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	5.5×3.1cmの小片		027-03
113	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文(LR) ・外面にスス付着か	やや粗	良	にぶい橙(7.5YR7/4) 内:灰褐(7.5YR5/2)	7.7×6.0cmの小片		027-11
114	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文(LR)	やや密	良	外:浅黄(2.5Y7/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	5.8×6.0cmの小片		024-12
115	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文・縄文(LR)	やや密	良	淡黄(2.5Y8/3)	6.5×6.0cmの小片		027-04
116	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや粗	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	7.0×5.5cmの小片		027-10
117	縄文土器 深鉢	SD14		・現状では穿孔が一ヵ所あり ・外面に沈線文、縄文(LR)	やや密	良	にぶい褐(7.5YR6/3)	口縁部のみ5.0 ×3.0cmの小片		026-05
118	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文、縄文(LR) ・口縁端部端部外面に短沈線	密	良	灰黄褐(10YR5/2)	口縁部のみ4.0 ×3.0cmの小片		026-10
119	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁端部に沈線文、キザミ ・口縁部内面に沈線文	密	良	外:灰(5Y4/1) 内:浅黄(2.5Y7/3)	口縁部のみ5.0 ×3.5cmの小片		024-10
120	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや粗	良	灰黄褐(10YR6/2)	口縁部のみ3.3 ×3.5cmの小片		026-16
121	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁部外面に沈線文? ・口縁端部拡張、ややくぼむ	やや粗	やや良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ4.2 ×2.0cmの小片		026-17
122	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや密	良	にぶい黄橙(10YR7/3~6/3)	口縁部のみ2.5 ×2.0cmの小片		026-14
123	縄文土器 深鉢	SD14		・外面に沈線文	やや粗	やや良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ4.4 ×2.6cmの小片		026-13
124	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁端部にキザミ、口縁部外面に条線文	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部のみ3.8 ×3.1cmの小片		026-11
125	縄文土器 深鉢	SD14		・口縁端部にキザミ	密	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ2.5 ×2.9cmの小片		026-07

第14表　遺物観察表(5)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
126	縄文土器 深鉢	SD14		◦口縁端部に刺突文	やや密	やや良	外:橙(7.5YR7/6) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部のみ4.4 ×3.0cmの小片		026-09
127	縄文土器 深鉢	SD14		◦外面に沈線文・縄文(RL)	やや粗	やや良	にぶい黄橙(10YR7/3)	4.3×4.8cmの小片		027-06
128	縄文土器 深鉢	SD14		◦外面に沈線文・縄文(RL)	やや密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	3.5×2.3cmの小片		027-08
129	縄文土器 深鉢	SD14		◦外面に条線文	やや密	良	外:褐灰(10YR4/1) 内:にぶい黄橙(10YR6/4)	3.0×4.0cmの小片		027-02
130	縄文土器 深鉢	SD14		◦外面に条線文	密	良	にぶい橙(7.5YR6/4)	3.8×3.8cmの小片		027-01
131	縄文土器 鉢	SD14		◦体部外面に縄文(LR)	やや密	やや良	外:黄灰(2.5Y6/1) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)	15.2×7.6cm 8.2×7.4cm		027-12
132	縄文土器 深鉢	SD14		◦外面に沈線文・縄文(LR) ◦全体的にやや摩滅	密	やや不良	橙(7.5YR7/6)	6.5×4.5cmの小片		027-07
133	縄文土器 深鉢	SD14		◦外面に櫛状工具による条線	やや密	やや良	外:褐灰(10YR5/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ3.5 ×2.0cmの小片		026-19
134	縄文土器 深鉢	SD14		◦口縁部内外面ミガキ ◦無文	やや粗	やや良	外:黄灰(2.5Y5/1) 内:灰黄(2.5Y6/2)	口縁部のみ4.2 ×1.8cmの小片		026-18
135	縄文土器 深鉢	SD14		同上	やや密	良	灰黄褐(10YR5/2)	口縁部のみ3.6 ×2.4cmの小片		024-02
136	縄文土器 深鉢	SD14		同上 ◦外面にスス付着か	やや粗	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部のみ4.0 ×2.5cmの小片		026-15
137	縄文土器 深鉢	SD14		◦口縁部内外面ミガキ ◦無文	やや密	良	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ3.0 ×2.9cmの小片		024-03
138	縄文土器 深鉢	SD14		同上	やや密	やや良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁~体部5.5 ×4.0cmの小片		026-12
139	縄文土器 深鉢	SD14		同上	やや密	良	にぶい橙(10YR7/3)	口縁部のみ2.8 ×3.2cmの小片		024-01
140	縄文土器 深鉢	SD14		同上	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ3.8 ×3.5cmの小片		026-08
141	縄文土器 深鉢	SD14		同上	やや密	やや良	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ5.0 ×4.0cmの小片		024-06
142	縄文土器 深鉢	SD14		◦外面に刺突文? ◦全体的に摩滅激しい	やや粗	やや不良	明黄褐(10YR7/6)	口縁部のみ5.0 ×4.0cmの小片		024-07
143	縄文土器 深鉢	SD14			やや粗	やや良	橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ3.0 ×2.9cmの小片		024-04
144	縄文土器 深鉢	SD14	底径:(6.8)		やや粗	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:灰黄(2.5Y6/2)	底部のみ1/5存		028-10
145	弥生土器 高杯	SD14	口径:(11.0)	◦口縁~体部内・外面ともミガキ	密	良	外:橙(7.5YR7/6) 内:浅黄橙(10YR8/4)	口縁~体部1/4存 但、口縁部は極一部存	◦体部内面の一部黒変	028-06
146	土師器 台付甕	SD14	脚部径:(7.0)	◦底部外面ヨコナデ、内面ハケメ ◦脚部外面ミガキ、内面ハケメ ◦脚部端部ヨコナデ	密	良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:褐灰(10YR4/1)	底部~脚部1/2存		028-09
147	弥生土器 甕	SD14	底径:(3.0)	◦底部外面ミガキ、内面ナデ	密	良	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:淡黄(2.5Y8/3)	底部のみ1/2存		028-07
148	弥生土器 壺	SD14	底径:(3.6)	◦底部内・外面ともナデ	やや密	良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:黄灰(2.5Y6/1)	底部のみ完形		028-08
149	弥生土器 甕	SD14	底径:(5.3)	◦体部外面タタキ、内面ナデ ◦底部圓面指オサエ後ナデ、内・外面ともナデ	やや密	良	浅黄橙(10YR8/3) 黄灰(2.5Y6/1)	底部完形 但、体部の一部存	底部外面の一部は黒変している	027-13
150	弥生土器 壺	SD14	底径:(4.5)	◦体部内・外面ともミガキ ◦底部外面ナデ、内面ミガキ	密	良	外:橙(5YR7/6) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	底部完形 但、体部は1/2存		027-14

第15表　遺物観察表(6)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
151	土師器 甕？	SD14	口径：(20.8)	・口縁部~頸部外面ヨコ方向のナデ、頸部内面ナデ	密	良	外：灰白(10YR8/1) 内：(2.5Y8/2)	口縁~頸部1/4存	・頸部内面に工具痕か	025-02 028-01
152	土師器 杯	SD15	口径：(11.6) 高：3.15	・口縁端部ヨコナデ、口縁部~底部ナデ ・口縁端部内面に、沈線が一条入る	密	やや良	浅黄橙(10YR8/3)	2／5存		006-06
153	土師器 杯	SD15	口径：(13.9)	・口縁端部ヨコナデ、口縁部~体部ナデ	密	やや良	外：淡橙(5YR8/4) 内：灰白(10YR8/2)	口縁~体部1/6存		006-07
154	土師器 杯	SD15	口径：(9.9)	・口縁部ヨコナデ、体部~底部ナデ ・口縁端部はヨコナデにより外反	密	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	1／6存	・底部外面に指オサエ痕あり	006-08
155	黒色土器 椀	SD15	口径：(13.4)	・口縁端部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ハケメ後ミガキ	密	良	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：灰(N4/0)	口縁~体部1/6存	・内面は部分的にミガキ	005-06
156	土師器 甕	SD15	口径：(15.5)	・口縁端部は折り返しヨコナデ ・頸部外面ハケメ、内面ヨコナデ	やや粗	やや良	灰黄(2.5Y7/2)	口縁~頸部1/5存		005-02
157	土師器 甕	SD15	口径：(15.2)	・口縁端部は折り返しヨコナデ ・頸部外面ヨコナデ、内面ハケメ	やや粗	良	灰白(2.5Y8/2)	口縁~頸部1/5存	・頸部外面にスス付着	005-01
158	土師器 甕	SD15	口径：(15.4)	・口縁端部は折り返しヨコナデ ・頸部外面ハケメ、内面一方向のナデ	粗	やや良	外：黒褐(7.5YR3/1) 内：淡黄(2.5Y8/3)	口縁~頸部1/6存	・口縁部外面の全体にスス付着 ・口縁部外面に指オサエ痕	005-04
159	土師器 甕	SD15	口径：(27.4)	・口縁部は折り返しヨコナデ ・口縁部外面ハケメ、内面ヨコナデ	やや密	やや良	外：褐灰(10YR4/1) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁部のみ1/8存	口縁部外面の全体にスス付着	005-03
160	灰釉陶器 椀	SD15	口径：(13.8)	・口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	密	良	灰白5Y(7／1)	口縁~体部1/4存	釉のつけがけ	005-05
161	縄文土器 深鉢	SD15		・口縁部外面に半截竹管文(C字)	やや粗	良	にぶい黄褐(10YR4/3)	口縁部のみ3.0 ×3.0cm の小片		007-05
162	縄文土器 深鉢	SD15		・口縁部外面に沈線文、条線	やや粗	やや良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ4.0 ×3.5cmの小片		007-01
163	縄文土器 深鉢	SD15		・口縁部外面に沈線文、条線	密	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ3.0 ×3.1cmの小片		007-03
164	縄文土器 深鉢	SD15		・口縁部外面に縄文	やや粗	やや不良	橙(7.5YR6/6)	口縁部のみ3.0 ×2.8cmの小片		007-11
165	縄文土器 深鉢	SD15		・口縁部外面に条線	やや粗	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ4.5 ×3.2cmの小片		007-04
166	縄文土器 深鉢	SD15		・口縁部外面に条線	やや粗	やや良	外：灰黄(2.5Y6/2) 内：にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ4.3 ×4.0cmの小片		007-02
167	縄文土器 深鉢	SD15		・外面に沈線文・条線	やや粗	やや	灰白(10YR8/2)	9.0×9.2cmの破片		007-09
168	縄文土器 深鉢	SD15		・外面に沈線文	密	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	底部のみ4.8 ×2.0cmの小片		007-12
169	縄文土器 深鉢	SD15		・外面に条線	粗	不良	外：灰黄褐(10YR4/2) 内：にぶい黄褐(10YR5/3)	7.8×8.0cmの破片		007-10
170	縄文土器 深鉢	SD15		・外面に櫛状工具による条線	粗	やや不良	にぶい黄褐(10YR6/3)	3.8×3.9cmの小片		007-06
171	縄文土器 深鉢	SD15		・外面に櫛状工具による条線	やや粗	やや良	橙(7.5YR6/6)	4.7×4.0cmの小片		007-07
172	縄文土器 深鉢	SD15		・外面に条線	やや粗	やや良	灰黄褐(10YR5/2)	4.0×6.9cmの小片		007-08
173	弥生土器 高杯	SD15	口径：(27.0)	・口縁端部ヨコナデ、口縁部内・外面ミガキ	密	良	外：暗灰(N3/0) 内：浅黄橙(10YR8/3)	口縁部のみ1/10存		005-07
174	弥生土器 高杯	SD15	口径：(14.6)	・口縁部~体部ミガキ後ヨコナデ	密	良	浅黄(2.5Y8/3)	口縁~底部1/3存	・底部内面に工具痕 ・体部外面の一部黒変	006-01
175	弥生土器 高杯	SD15	脚径：(19.2)	・脚部外面は全体的にハケメ後ミガキ但、穿孔周辺は横撫文 ・脚部内面はハケメ、裾部端部はヨコナデ	やや粗	良	浅黄(2.5Y8/3)	裾部のみ1/6存	・現状では穿孔が一カ所	006-02

第16表　遺物観察表(7)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
176	弥生土器 壺	SD15		・頸部外面は櫛描文、刺突文、体部外面ミガキ	密	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/4)	頸部~体部5cm大2片	・やや磨滅進む	006-05
177	弥生土器 台付甕	SD15	脚径:(3.5)	・底部ミガキ、脚部ナデ	密	良	淡黄(2.5Y8/3)	脚部完形底部/6存	・脚部外面に指オサエ痕	006-03
178	弥生土器 小型鉢	SD15		・口縁部外面波状文、体部ミガキ ・体部外面に逆U字形把手を2ケ所はりつけ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁~体部4.0×4.3cmの小片		006-04
179	弥生土器 直口壺	SD15	口径:(12.5)	・口縁端部外面櫛描文・内面ナデ、口縁部ミガキ ・頸部外面櫛描文・内面ミガキ ・体部外面ミガキ、内面ナデ	やや粗	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	頸部~体部完形 口縁1/4存	・外面の一部は黒変する	006-09
180	土師器 杯	SB20	口径:(14.1) 高:2.7	・口縁部~体部ヨコナデ、底部一方方向のナデ ・口縁端部内面はヨコナデにより、少し窪む	密	やや不良	外:淡黄(2.5Y8/4) 内:橙(5YR7/6)	1/2存		001-01
181	土師器 杯	SB20	口径:(15.2) 高:2.8	・口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ ・口縁部はヨコナデにより外反	密	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/6)	1/6存		087-01
182	ロクロ 土師器皿	SB20	口径:(15.0) 高:2.5	・口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ、底部ナデ	やや密	やや良	橙(5YR7/8)	1/6存		087-02
183	土師器 甕	SB20	口径:(18.4)	・口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	やや密	やや不良	橙(2.5YR7/6)	口縁~体部/10存		087-04
184	土師器 甕	SB20	口径:(28.8)	・口縁部~頸部内面ヨコナデ、頸部内面ハケメ後ナデ ・体部外面指オサエ後ハケメ、内面ハケメ	密	良	橙(5YR6/8)	口縁~体部/10存		041-02
185	土師器 椀	SB21	口径:(16.0)	・口縁部ヨコナデ、体部ナデ ・口縁端部面取りか	やや粗	やや不良	外:褐灰(7.5YR4/1) 内:浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁~体部1/3存	・外面は炭化・スス付着	035-08
186	土師器 杯	SB21	口径:(11.4)	・口縁部~体部ヨコナデ、底部ナデ ・口縁部外面はヨコナデにより、窪む	やや粗	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/3存		036-04
187	土師器 皿	SB21	口径:(14.6)	・口縁部ヨコナデ、体部指オサエ後ナデ、底部ナデ	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	1/3存	・底部外面に工具痕か	035-01
188	土師器 小皿	SB21	口径:(9.0)	・口縁端部ヨコナデ、口縁部~体部ナデ	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	口縁~体部1/6存		035-06
189	ロクロ 土師器皿	SB21	底径:6.1	・底部外面回転糸切り、内面ロクロナデ	やや粗	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	底部のみ完形		035-07
190	土師器 甕	SB21	口径:(18.2)	・口縁端部はほぼ水平に折り返しヨコナデ ・頸部外面ヨコナデ、内面ナデ	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/2) 黒褐(7.5YR3/1)	口縁~頸部1/6存	外面に広くスス付着	035-02
191	土師器 甕	SB21	口径:(19.6)	・口縁部~頸部ヨコナデ、体部内面ナデ・内面ハケメ	粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	口縁~体部1/4存	・口縁部外面にスス付着	036-01
192	山茶椀	SB21	口径:(17.4) 高台径:(7.9) 高:(5.9)	・口縁~体部ロクロナデ、底部外面回転糸切り後高台はりつけ、内面ロクロナデ ・口縁部は外反	やや密	良	灰白(5Y7/1)	1/3存	・内面に部分的に自然釉付着 ・高台にモミガラ痕	033-02
193	山茶椀	SB21	口径:(16.3) 高台径:(7.8) 高:(5.2)	同上	やや密	良	灰白(2.5Y8/1)	1/3存 但、底部は完形	・口縁部~体部自然釉・スス付着 底部内面は研磨か	033-01
194	ロクロ 土師器椀	SB21	底径:(6.9)	・体部~底部内面ロクロナデ、底部外面回転糸切り後高台はりつけ	密	やや不良	灰白(7.5YR8/1)	底部のみ完形	・底部内面は黒変 ・体部内面スス付着	033-03
195	土師器 小皿	SB23	口径:(9.7) 高:1.4	・口縁部~底部内面ヨコナデ、外面指オサエ	やや粗	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	1/2存		038-04
196	台付甕	SB24	脚径:(5.1)	・底部外面タタキ、内面ハケメ ・脚部外面指オサエ後ナデ、内面ケズリ	やや粗	やや良	外:淡黄(2.5Y8/3) 内:灰白(10YR7/1)	底部のみ完形		038-02
197	土師器 甕	SB28	口径:(21.2)	・口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ	やや密	良	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:灰白(10YR5/2)	口縁~体部1/6存	・頸部内外面ともスス付着	036-07
198	山茶椀	SB33	口径:(15.6) 高台径:(6.9) 高:(5.1)	・口縁部~底部内面ロクロナデ、底部外面ナデ、高台はりつけ ・口縁部は外反	やや粗	良	灰白(2.5Y8/1)	1/6存	・高台にモミガラ痕	036-08
199	ロクロ 土師器椀	SZ17	口径:15.3 高台径:7.2 高:5.2	・全体的にロクロナデ。但、内面はその後ナデか ・底部外面静止糸切り後、高台はりつけ	粗	不良	灰白(2.5Y8/2)	口縁部1/2欠	・口縁部の一部は強いヨコナデにより折り込み気味	008-01
200	ロクロ 土師器小皿	SZ17	口径:(9.1) 高:(1.5)	・ロクロナデ、底部外面回転糸切り後ナデ	やや粗	やや良	浅黄橙(7.5YR8/4)	3/4存		008-05

第17表　遺物観察表(8)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
201	土師器 鍋	SZ17	口径:(30.6)	・口縁部折り返しヨコナデ ・体部外面ナデ、内面ハケメ。	やや粗	やや良	灰白(10YR7/1)	口縁～体部 1/4存	頚部内・外面ともスス付着	009-01
202	山茶椀	SZ17	口径:(16.0) 高台径:(8.2) 高:(4.7)	・ロクロナデ、底部外面回転糸切り後ナデ、高台はりつけ	やや粗	良	灰白(5Y7/1)	1/3存	口縁部内面に自然釉付着	008-03
203	山茶椀	SZ17	口径:(16.5) 高台径:(8.4) 高:(5.2)	同上	密	良	灰白(5Y8/1)	1/3存	口縁部～体部内面に自然釉付着	008-02
204	小椀	SZ17	口径:(10.0) 高台径:(4.3) 高:(3.0)	同上	密	良	外:灰白(2.5Y8/2) 内:浅黄(5Y7/3)	3/4存	内面全体に自然釉付着	008-04
205	陶器 甕	SZ17		・体部内・外面ともナデ	密	良	灰褐(7.5YR6/2)	体部片 20×14cm大	体部外面に広く自然釉付着、常滑産	008-06
206	陶器 甕	SZ17		・体部内・外面ともナデ、但、外面の一部タタキ痕	密	良	灰褐(7.5YR6/2)	体部片 21×12cm大	常滑産	009-02
207	土師器 鍋	Pit 68	口径:18.0 高:10.9	・口縁部折り返しナデ ・体部～底部指オサエ後ナデ	やや密	良	外:黒(10YR2/1) 内:灰白(10YR8/2)	口縁部1/4欠	外面全体にスス付着	031-02
208	土師器 小皿	SD40	口径:(10.4) 高:(1.6)	・口縁部～底部内面ヨコナデ、外面ナデ	やや密	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/6存	全体的に魔滅進む	023-01
209	山皿	SD40	口径:8.2 高:2.2	・ロクロナデ、但、口縁端部ヨコナデ ・底部外面回転糸切り	密	良	外:灰白(2.5Y8/1) 内:浅黄(5Y7/3)	口縁部1/6欠	内面全体に自然釉釉の固まり付着	023-02
210	山茶椀	SD40	口径:(16.4) 高台径:(8.1) 高:(5.0)	・ロクロナデ ・底部外面回転糸切り後、高台はりつけ	密	良	灰白(5Y7/2)	1/3存	高台に歪みあり	023-03
211	平瓦片	SD40		・凸面はヘラケズリ、凹面は布目痕	密	良	灰白(5Y8/1)	12.0×11.0cmの破片		023-06
212	弥生土器 高杯	SD40	口径:(12.3)	・口径端部ヨコナデ、口縁部～体部ミガキ	密	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁～体部 1/6存	体部外面の一部黒変する	023-05
213	土師器 小皿	SD41	口径:(7.8) 高:1.3	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエのまま	やや粗	良	外:明褐灰(7.5Y7/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	1/4存		116-08
214	土師器 皿	SD41	口径:(13.6) 高:2.5	同上	やや粗	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4存		116-07
215	土師器 皿	SD41	口径:(16.8) 高:2.9	同上	やや密	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/4存		116-06
216	ロクロ土師器 皿	SD41	底径:5.1	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや密	良	浅黄橙(10YR8/3)	底部のみ完形		116-04
217	ロクロ土師器 椀	SD41	高台径:7.1	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	やや良	灰白(10YR8/2)	底部のみ完形	内・外面とも磨滅激しい	116-03
218	ロクロ土師器 椀	SD41	高台径:6.1	同上	密	やや良	淡橙(5YR8/3)～淡黄(2.5Y8/3)	底部のみ完形	内面は黒変している	116-01
219	土師器 鍋	SD41	口径:(19.2)	・口縁端部折り返し、ヨコナデ、内面ハケメ調整後ナデか	やや粗	良	褐灰(7.5YR4/1)	口縁部 1/4のみ存	外面全体にスス付着	117-02
220	土師器 鍋	SD41	口径:(22.9)	・口縁端部折り返し、ヨコナデ、内面ハケメ調整、外面指オサエのままか	やや粗	良	橙(2.5YR6/6)	口縁～体部 1/4のみ存	内・外面ともに磨滅激しい	117-03
221	土師器 鍋	SD41	口径:(27.0)	同上	粗	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁～体部 1/8のみ存	内・外面ともに磨滅激しい	117-01
222	山皿	SD41	口径:(8.5) 高台径:(3.4) 高:2.55	・ロクロナデ、底部切り離し後ナデ	密	良	灰白(2.5Y8/1)	1/3存		115-07
223	山茶椀	SD41	口径:(15.8) 高台径:(7.0) 高:5.5	・ロクロナデ、底部回転糸切り後高台はり付け	密	良	灰白(2.5Y8/1)	1/2存 (但、口縁部は1/3のみ存)		115-02
224	山茶椀	SD41	口径:(16.9) 高台径:(7.8) 高:6.0	・ロクロナデ、底部切り離し後ナデ高台はりつけ	やや密	良	灰白(10YR7/1)	1/6存 (但、底部1/2存)	内面全体にスス付着	114-02
225	山茶椀	SD41	口径:(16.9) 高台径:(7.2) 高:5.5	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	灰白(2.5Y8/1)	1/2存 (但、口縁部1/6存)	・内面にスス付着 ・高台に、モミガラ痕	115-01

第18表　遺物観察表(9)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
226	山茶椀	SD41	口径：(15.8) 高台径：(7.3) 高　：5.4	・ロクロナデ、底部切り離し後ナデ高台はりつけ	やや粗	良	灰白(2.5Y8/1)	1/2 存 (但、口縁部1/10)		115-04
227	山茶椀	SD41	口径：16.7 高台径：7.3 高　：5.45	・ロクロナデ、底部回転糸切り後ナデ、高台はりつけ、底部内面一方向ナデ	やや密	良	灰白（N7/0）	口縁部ごく一部のみ欠	・口縁部に灰釉つけがけ ・高台にモミガラ痕か ・底部内面に重ね焼きの粘土残る	118-01
228	山茶椀	SD41	口径：(16.2) 高台径：7.2 高　：6.1	・ロクロナデ、底部ヘラ切り後、高台はりつけ底部内面ナデ	やや密	良	灰白(2.5Y8/1)	1/2 存 (但、底部完形)	・高台にモミガラ痕あり ・体部外面に、ヘラ状工具痕あり	114-01
229	山茶椀	SD41	高台径：8.0	・ロクロナデ、底部回転糸切り後高台はりつけ	やや密	良	灰白(2.5Y8/1)	底部のみ1/2存	・内面に自然釉付着 ・底部内面に重ね焼きの粘土残る	114-04
230	山茶椀	SD41	高台径：6.3	・ロクロナデ、底部切り離し後ナデ、高台はりつけ、体部外面ヘラケズリ後ナデ	やや粗	良	灰白（N7/0）	底部のみ完形	・内面に自然釉付着 ・高台にモミガラ痕あり	115-05
231	山茶椀	SD41	高台径：6.6	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	灰白(2.5Y8/1)	底部のみ完形	・内面に自然釉、外面に釉垂れ ・高台にモミガラ痕あり ・底部内面に重ね焼きの粘土残る	114-03
232	山茶椀	SD41	高台径：(7.5)	・内面ロクロナデ、外面ロクロケズリ底部切り離し後高台はりつけ	やや粗	良	灰白(2.5Y8/1)	1/4 存	・内面に自然釉付着 ・高台にモミガラ痕あり	115-06
233	山茶椀	SD41	高台径：(8.1)	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	灰白(2.5Y8/1)	底部のみ1/2存		115-03
234	山茶椀	SD41	高台径：(6.8)	・ロクロナデ、底部切り離し後、高台はりつけ、外面ナデ	やや粗	良	灰白（N7/0）	底部のみ完形	・高台にモミガラ痕か ・内面に自然釉付着	114-05
235	山茶椀	SD41	高台径：(6.5)	・ロクロナデ、底部切り離し後、高台はりつけ	やや密	良	灰白(2.5Y8/1)	底部のみ1/2存		116-02
236	捏鉢	SD41	高台径：(11.5)	・ロクロナデ、底部切り離し後、高台はりつけ ・外面軽いケズリ	やや粗	良	灰白(2.5Y8/1)	底部～体部のみ1/3存	・内面にスス付着か	116-05
237	土師器鍋	SE42	口径：(23.0) 高：(15.2)	・口縁端部は、1.2cm折り返しヨコナデ ・体部～底部外面ケズリ、内面ヘラ状工具によるナデか	やや粗	良	黄灰(2.5Y4/1)	口縁部1/4存 体部～底部3/4存	・外面は全体的にスス・炭化物付着により調整不明瞭	096-01
238	土師器鍋	SE42	口径：(31.8) 高：(24.7)	・口縁端部は、1.0cm折り返しヨコナデ ・体部外面ナデ・内面上部ナデ・下部ヘラ削り	やや粗	良	淡黄(2.5Y8/3)～黒褐(2.5Y3/1)	ほぼ完形	同上	095-01
239	山茶椀	SE42	口径：15.4 高台径：6.3 高　：5.3	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ、ナデ ・口縁部は外反	密	良	灰白（N8/0）	完形	・口縁内面・体部外面の一部に、スス状の付着物あり	092-01
240	山茶椀	SE42	口径：15.9 高台径：7.1 高　：5.8	同上	密	良	灰白（N8/0）	完形	・内・外面ともスス状の付着物あり ・口縁端部に自然釉付着 ・高台にモミガラ痕	092-02
241	山茶椀	SE42	高台径：6.6	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ、ナデ	密	良	灰白（N8/0）	底部のみ完形		096-02
242	山茶椀	SE42	口径：15.3 高台径：5.7 高　：5.6	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ、ナデ ・口縁部は外反	密	良	灰白（N8/0）	完形		092-03
243	櫛	SE42	残存部 長：5.5 幅：3.3 厚：0.7	・白木に0.5mm弱幅で挽歯 ・毛引きまで完全には挽いていない ・最終的に表面を磨く	—	—	にぶい黄褐(10YR5/4)	1/4 存か	・材質はマンサク科イスノキ ・残存する歯は66本	093-01
244	枡	SE42	内法：14.8×14.6×4.5=972.4 側板厚：0.7～0.8 底板厚：0.4	・4枚の板を合欠状に組み合わせて枠をつくり、底部を打ちつけて容器とする ・長さ1.5～2.5cmほどの木釘使用	—	—	浅黄(2.5Y7/3)	ほぼ完形	2側面に線刻あり	094-01
245	土師器皿	SE43	口径：(14.5) 高　：(2.3)	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエのまま	やや粗	良	淡黄(2.5Y8/4)	1/10 存		101-06
246	山皿	SE44	口径：8.1 高　：2.3	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、ヘラ状工具で調整か	やや密	良	灰白（5Y8/1）	完形	・口縁部に自然釉付着 ・口縁部内面に粘土カス付着	101-04
247	ロクロ土師器小皿	SE45	口径：8.6 高　：1.6 底部：4.7	・ロクロナデ ・口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り	密	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	2/3 存		101-05
248	土師器小皿	SE46 埋土	口径：(9) 高　：1.2	・口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエのまま	密	良	内：浅黄橙(7.5YR8/4) 外：浅黄橙(7.5YR8/5)	1/6 存	口縁端部外面に、幅の狭い面をもつ	099-02
249	土師器小皿	SE46 埋土	口径：(8.3) 高　：1.0	同上	やや密	やや良	灰白(2.5Y8/1)	1/2 存	口縁歪みやや大	099-01
250	土師器小皿	SE46 埋土	口径：(8.7) 高　：1.6	・口縁端部ヨコナデ、外面指オサエにまま ・内面は、工具（ヘラ状）を使って整形したあとナデか？	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2 存		098-05

第19表　遺物観察表(10)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
251	土師器 皿	SE46 埋土	口径:(18.8) 高:2.5	・口縁端部ヨコナデ、内面ナデ ・外面指オサエ後軽いナデ	密	やや良	内:にぶい橙(7.5YR7/3) 外:浅黄橙(7.5YR8/3)	1/6 存	内面に、黒色の炭化物が付着 焼成時に着いたものなのか、使用中に着いたものなのかは不明	098-06
252	ロクロ土師器 皿	SE46 埋土	底径:5.5	・体部回転ナデ ・回転糸切り	密	やや良	褐灰(10YR5/1)	底部のみ存	内面一面に黒色の付着物	098-03
253	土師器 鍋	SE46 埋土	口径:(18.8)	・口縁端部折り返し、ヨコナデ ・口縁部と体部の境は指オサエ ・体部肩部内面にハケメがわずかに残る	密 0.5mm大の砂粒少量含む	良	内:淡黄(2.5Y8/3) 外:にぶい黄橙(10YR7/4)	9×5cmの小片		098-04
254	山皿	SE46 埋土	口径:7.6 高:2.3	・水挽き成形・回転糸切り ・口縁端部を若干外反させる ・底部1/2を、段をつけて疑高台状にする	密	堅	内:灰白(2.5Y8/1) 外:付着鉄分の錆の色 明黄褐(10YR6/6)	完形	外面全面に埋土中の鉄分付着	099-04
255	山皿	SE46 埋土	口径:8.6 高:2.8	・水挽き成形、口縁端部のみヨコナデ ・底部疑高台状 ・回転糸切り	密	堅	内:自然釉 オリーブ黄(7.5Y6/3) 外:灰白(7.5Y8/1)	完形	内面は、ほぼ全面に自然釉	099-05
256	山茶碗	SE46 埋土	口径:(15.2) 高:5.5	・水挽き成形・貼付高台 ・口縁端部やや外反 ・輪花あり・回転糸切り	密	堅	内:灰(5Y6/1) 外:灰白(5Y7/1)	2/3 存	・輪花は、現状では2ヵ所見られる ・内面に軽く自然釉	099-03
257	山茶碗	SE46 埋土	高台径:7.2	・水挽き成形 ・回転糸切り ・貼付高台	密	堅	灰白(2.5Y8/1)	底部のみ2/3 存	内面に自然釉と重ね焼きの痕跡	098-01
258	山茶碗	SE46 埋土	高台径:6.3	・水挽き成形 ・回転糸切り ・貼付高台・幅広の高台	密 1mm弱の砂粒ごく少量含む	堅	灰白(2.5Y7/1)	底部のみ存	内面に自然釉	098-02
259	瓦器 椀	SE46 埋土		・内面細かいミガキ外面やや雑なミガキ ・口縁端部内面に弱い沈線	密	良	灰(N5)	4×3cmの小片		098-07
260	曲物	SE46 底		・一枚の薄板に幅1cmほどの間隔で切り込みを入れ、円筒形に丸めて桜の皮で留め、3本のタガを入れて補強する				完形 ただし発掘時に重機により一部破損		097-01
261	ロクロ土師器 皿	SE47	口径:(15.0) 高:3.3 底径:6.5	・ロクロナデ ・口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	2/3 存	体部外面の一部にスス付着か	100-01
262	ロクロ土師器 皿	SE47	底径:(7.2)	同上	密	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	底部のみ完形	内面は黒変している	100-03
263	ロクロ土師器 椀	SE47	高台径:(8.0)	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	密	良	灰白(2.5Y8/1~8/2)	底部のみ 2/3存		100-02
264	ロクロ土師器 椀	SE47	口径:(15.8)	・ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	密	良	淡黄(2.5Y8/3)	口縁~体部のみ1/6存	底部付近に、はりつけ痕あり	101-01
265	山茶椀	SE47	口径:(14.6) 高台径:(6.6) 高:5.6	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	密	良	灰白(N8/0) ~ 黒(2.5Y2/1)	1/2 存	・現状では輪花は1ヵ所 ・内・外面とも釉垂れあり ・内・外面とも、全面にスス付着	100-04
266	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.7 高:1.5	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエのまま	やや粗	良	浅黄橙(10YR8.4)	3/4 存		110-08
267	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.8 高:1.5	同上	やや密	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2 存		110-12
268	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.35 高:1.5	同上	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	3/4 存		110-04
269	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.5 高:1.4	同上	密	良	灰白(10YR8/2)	口縁部一部欠	・体部に焼成後穿孔あり ・口縁に油煙痕	103-03
270	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:9.1 高:1.4	同上	密	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁部1/3のみ欠		112-04
271	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.7 高:1.7	同上	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部1/4のみ欠		110-01
272	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:9.0 高:1.5	同上	やや密	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/2 存		110-09
273	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.95 高:2.0	同上	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	7/8 存		102-05
274	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.6 高:1.8	同上	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	完形		102-01
275	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.4 高:1.5	同上	やや粗	良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部一部欠		110-06

第20表　遺物観察表(11)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
276	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.65 高 :1.4	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエのまま	やや密	良	浅黄橙 (10YR8/3)	2/3 存		110-07
227	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.3 高 :1.6	同上	やや密	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	完形		103-01
278	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:(8.9) 高 :1.3	同上	密	良	浅黄橙 (10YR8/3)	口縁部一部欠	歪み大きい	102-08
279	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:(8.15) 高 :1.4	同上	やや粗	良	灰白(10YR8/2)	口縁部一部欠	内外面とも磨滅激しい	102-03
280	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.7 高 :1.3	同上	密	良	外:淡橙(5YR8/3) 内:灰白(10YR8/2)	完形	・底部外面約1/4の範囲にハケメ状の痕跡あり ・歪み大きい	112-03
281	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:(8.5) 高 :1.55	同上	やや密	良	浅黄橙 (10YR8/3)	3/4 存		102-07
282	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:7.5 高 :1.5	同上	やや粗	良	灰白(7.5YR8/1)	完形	口縁に油煙痕	104-01
283	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.0 高 :1.5	同上	やや粗	やや良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	完形		112-05
284	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.2 高 :1.4	同上	密	良	浅黄橙 (10YR8/4)	口縁部一部欠		110-02
285	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.15 高 :1.8	同上	密	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	口縁部一部欠	口縁部に歪みあり	110-03
286	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:7.2 高 :1.55	同上	密	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	口縁部1/5欠	全体的に歪みあり	110-11
287	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:(8.5) 高 :(1.8)	同上	密	良	浅黄橙(10YR8/3) ～ 浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁部/5 底部中央 欠	内外面とも磨滅進む	110-14
288	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:7.8 高 :1.7	同上	密	良	淡黄(2.5YR8/3) ～ 浅黄橙(10YR8/3)	完形	歪み大きい	103-02
289	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.4 高 :1.8	同上	やや密	良	灰白(10YR8/2) ～ にぶい橙(5YR7/4)	完形		102-04
290	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.4 高 :1.5	同上	やや粗	良	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:黒褐(10YR3/1)	口縁部1/4欠	内面全体、口縁部外面は黒変している	102-02
291	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:7.9 高 :1.4	同上	やや粗	良	浅黄橙(10YR8/3) ～ にぶい橙(7.5YR7/4)	底部一部欠		102-06
292	土師器 小皿	SK48 埋土	口径:8.8 高 :1.45	同上	密	やや良	浅黄橙 (10YR8/3)	1/2 存	内・外面ともに磨滅進む	110-10
293	土師器 皿	SK48 埋土	口径:14.5 高 :2.9	同上	やや密	良	灰黄褐 (10YR6/2)	口縁部1/3欠	内・外面ともに一部にスス付着	106-5
294	土師器 皿	SK48 埋土	口径:15.1 高 :3.4	同上	密	良	灰黄(2.5Y7/2)	完形	内面にススス付着	104-2
295	土師器 皿	SK48 埋土	口径:15.0 高 :3.0	同上	やや粗	良	にぶい橙(7.5YR7/4)～橙(7.5YR7/6) 内:にぶい橙(10YR7/3)	口縁部の一部欠	内・外面にかけてスス付着	112-01
296	土師器 皿	SK48 埋土	口径:14.9 高 :2.8	同上	密	良	浅黄橙 (10YR8/3)	体部一部欠		104-04
297	土師器 皿	SK48 埋土	口径:14.85 高 :3.75	同上	密	良	浅黄橙 (10YR8/3)	口縁部・底部一部欠		106-01
298	土師器 皿	SK48 埋土	口径:15.2 高 :3.25	同上	密	良	灰白(10YR8/2)～黄灰(2.5Y5/1) 内:褐灰(10YR6/1)	口縁部一部欠		112-02
299	土師器 皿	SK48 埋土	口径:15.4 高 :2.7	同上	密	良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	口縁部1/5欠	内・外面ともに剥離痕あり	106-02
300	土師器 皿	SK48 埋土	口径:14.55 高 :3.1	同上	密	良	外:浅黄橙(7.5YR8/4) 内:浅黄橙(10YR8/3)	底部一部欠		106-03

第21表　遺物観察表(12)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	整理番号
301	土師器 皿	SK48 埋土	口径:15.1 高 :2.5	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエのまま	やや粗	良	外:黄灰(2.5Y4/1) 内:浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 一部欠	外面全体にスス付着	104-03
302	土師器 皿	SK48 埋土	口径:(14.0) 高 :2.5	同 上	やや粗	良	浅黄橙 (10YR8/3)	口縁～体部 1/10欠		106-04
303	ロクロ土師器 皿	SK48 埋土	底径:3.4	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	浅黄橙 (10YR8/3)	底部のみ 3/4 存		111-02
304	ロクロ土師器 小皿	SK48 埋土	口径:(8.0) 高 :1.8 底径:3.4	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、ヘラ状工具で調整か	粗	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1/5 存		111-03
305	ロクロ土師器 皿	SK48 埋土	口径:14.8 高 :3.45 底径:6.7	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	橙(5YR7/6)	口縁部1/8欠	内面にスス付着	104-05
306	ロクロ土師器 皿	SK48 埋土	口径:(14.4) 高 :3.4 底径:6.4	同 上	やや密	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	底部は完形 口縁部一部存		112-06
307	ロクロ土師器 椀	SK48 埋土	高台径:(7.75)	・ロクロナデ、底部回転糸切り	粗	良	淡黄(2.5Y8/3)	底部1/2存		111-05
308	ロクロ土師器	SK48 埋土	高台径:7.1	・ロクロナデ、底部回転糸切り後ナデ	粗	良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	底部ほぼ完存		111-07
309	土師器 鍋	SK48 埋土	口径:16.7 高:(9.6)	・口縁端部折り返しヨコナデ、内面指オサエ後、軽いナデ、外面体部指オサエのまま外面底部軽いヘラケズリ	粗	良	灰黄褐 (10YR5/2)	1/3 存	・外面にスス付着 ・外面に炭化物付着	107-01
310	土師器 鍋	SK48 埋土	口径:25.5	・口縁端部折り返しヨコナデ、外面体部指オサエ後ナデ(但、下部は軽いケズリか)	やや粗	良	外:暗褐(10YR3/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	1/3 存	外面全体にスス付着	107-02
311	土師器 鍋	SK48 埋土	口径:(34.0)	・口縁端部折り返しヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ハケメ調整	やや粗	良	にぶい黄橙 (10YR6/3)	口縁～体部 3/4 存	内・外面ともに部分的にスス付着	108-01
312	ミニチュア 鍋	SK48 埋土	口径:7.9	・口縁端部折り返しヨコナデ、体部内・外面ナデ(但、内面にうすくハケメ残る)	やや粗	良	灰白(10YR8/2) ～ にぶい黄褐(10YR5/3)	口縁～体部 3/4 存	内・外面ともに部分的にスス付着	103-04
313	山 皿	SK48 埋土	口径:8.3 高 :2.4	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや密	良	灰白(7.5Y7/1)	口縁部一部欠	口縁部内面に自然釉付着	113-02
314	山茶椀	SK48 埋土	口径:15.9 高台径:7.35 高 :6.1	同 上	密	良	灰白(N8/0)	口縁部1/3欠	・口縁部に指つまみ痕あり ・底部外面に工具痕あり ・体部外面にスス付着	113-04
315	山茶椀	SK48 埋土	口径:16.3 高台径:6.9 高 :5.8	同 上	やや密	良	灰白(N8/0)	口縁部1/4欠	体部外面にスス付着	113-03
316	山茶椀転用硯	SK48 埋土	口径:9.2 高台径:7.3 高 :2.1	同 上	密	良	外:灰白(7.5Y7/1) 内:灰白(N8/0)～灰(N6/0)	1/4 存		113-01
317	土師器 皿	SK49	口径:14.8 高 :2.5	・口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエ後ナデか	密	良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	1/2 存	体部外面に粘土のつなぎ痕あり	100-05
318	ロクロ土師器 椀	SK49	高台径:(6.2)	・クロクナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	良	浅黄(2.5Y8/3)	底部1/2存		101-03
319	山茶椀	SK49	高台径:(8.0)	・クロクナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	良	灰白(5Y8/1)	底部のみ1/3存		100-06
320	山茶椀	SK49	高台径:(6.4)	・クロクナデ、底部回転糸切り後、ヘラ状工具で調整か	やや粗	良	外:灰白(5Y8/1) 内:灰 (5Y5/1)	底部のみ1/2存	内面に全体的にスス付着	101-02
321	土師器 皿	2次 P31 P12	口径:(9.6)	・口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや粗	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	1/3 存	全体的に磨滅進む	035-03
322	土師器 甕	2次 P31 P12		・口縁部ヨコナデ、体部ハケメ後ナデか	やや粗	やや良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	7.5×4.5cm の小片	全体的に磨滅進む	035-04
323	土師器 皿	2次 Q34 P10	口径:10.8 高 :1.85	・口縁端部面取り、口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや粗	やや良	浅黄橙 (10YR8/4)	2/3 存	口縁の一部黒変している	034-08
324	土師器 甕	2次 Q34 P10	口径:(13.6)	・口縁端部外面は、強いヨコナデにより凹線走る ・口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや密	やや良	灰白(10YR8/2)	口縁～体部 1/5 存		034-07
325	土師器 小皿	2次 Q30 P8	口径:7.8 高 :1.3	・口縁端部外面は、強いヨコナデにより凹線走る ・口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや密	やや不良	灰白(10YR8/2)	完 形		017-05

第22表 遺物観察表(13)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
326	土師器 小皿	2次 O30 P8	口径：8.3 高：1.3	◦口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや密	やや不良	浅黄橙(10YR8/4)	完形	◦内面に油煙痕付着	017-06
327	土師器 小皿	2次 R24 P9	口径：9.1 高：1.75	同上	やや粗	やや不良	灰黄(2.5Y7/2)	口縁部のみごく一部欠	◦底部外面に粘土接合痕あり	017-07
328	土師器 小皿	2次 R24 P9	口径：9.8 高：2.1	◦口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエのまま、内面ナデ、底部ナデ	やや密	やや良	にぶい橙(2.5YR6/3)	完形	◦全体的に磨滅進む	040-04
329	土師器 皿	2次 Q31 P18	口径：(10.9) 高：(2.4)	◦口縁部ヨコナデ、体部～底部外面指オサエのまま、内面指オサエ後ナデ	やや粗	やや良	浅黄橙(7.5YR8/3)	3／4存	◦底部外面にヘラ状工具痕あり	033-04
330	ロクロ土師器 皿	2次 P31 P8	口径：(14.6)	◦口縁～体部ロクロナデ	密	やや良	浅黄橙(7.5YR8/6)	1／5存		036-02
331	土師器 皿	2次 P29 P4	口径：(15.0)	◦口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ	やや密	やや良	灰白(10YR8/1)	1／3存		036-06
332	土師器 皿	2次 S32 P1	口径：(15.5)	◦口縁部ヨコナデ、体部ナデ ◦口縁部・体部間には強いヨコナデ	やや密	良	橙(7.5YR7/6)	6.3×3.5cmの小片		036-05
333	土師器 皿	2次 P30 P12	口径：(14.5)	◦口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	1／6存		036-03
334	黒色土器 椀	2次 P31 P12	口径：(14.0) 高台径：(6.8) 高：(5.2)	◦口縁部ヨコナデ、体部ミガキ ◦高台はりつけ ◦内面燻す	やや粗	良	外：灰白(10YR8/1) 内：黒(N2/0)	口縁～体部1/6存 高台1/3存	◦内面に工具のあたり傷あり	035-05
335	ロクロ土師器 小皿	2次 P32 P7	口径：9.2 高：2.3 底径：5.3	◦ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部一部欠	◦1.5cm大の小石含む	017-08
336	ロクロ土師器 皿	2次 Q34 P7	口径：(16.0) 高：4.0 底径：(6.6)	同上	やや粗	良	灰白(2.5Y8/2)	1／3存	◦内面にスス付着か	044-02
337	土師器 甕	2次 S31 P6	口径：(34.2)	◦体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ◦口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内部板ナデ・一部ハケメ	やや密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	8.0×8.0cmの小片		041-01
338	土師器 甕	2次 Q34 P14	口径：(28.6)	◦体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ◦口縁部ヨコナデ、口縁・体部間ハケメ後ヨコナデ、体部外面指オサエ後ハケメ、内面ハケメ	密	良	橙(5YR6/8)	口縁～体部1/8存		040-05
339	土師器 甕	2次 Q34 P7	口径：(24.0)	◦体部から口縁が「く」字状に屈曲して開く ◦口縁端部折り返し部は、水平・内側方向へ1cm折り返し ◦口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ	やや粗	やや良	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 内：黄橙(10YR8/6)	口縁～体部1/10存	◦頸部内面にスス付	034-05
340	土師器 甕	2次 S31 P2	口径：(20.0)	◦口縁部ヨコナデ、体部外面上部指オサエ後ナデ、下部ナデ、体部内面板ナデか	やや粗	やや不良	淡橙(5YR8/4)	口縁～体部1/5存	◦体部内面にヘラ状工具痕あり	034-06
341	土師器 甕	2次 P31 P5	口径：(23.7)	◦口縁端部折り返し部は、1.1cm幅でヨコナデ ◦口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、内面板ナデ ◦頸部外面に強いヨコナデ	やや粗	やや良	浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁～体部1/8存	◦外面にスス付着 ◦体部外面に工具痕(?)あり	044-01
342	土師器 甕	2次 P32 P3	口径：(18.3)	◦口縁端部折り返し部は、1.0cm幅でヨコナデ ◦口縁ぶヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ、体部(底部近く)ナデ後ヘラ削り	やや粗	やや不良	外：灰白(7.5YR8/1) 内：灰白(10YR8/2)	口縁～体部1/2存	◦内・外面ともスス付着(外面には炭化物も付着)	037-01
343	土師器 甕	2次 M33 P6	口径：(29.2)	◦口縁端部折り返し部は、1.4cm幅であり、その先端は小さくつまみ上げられた格好でヨコナデ ◦口縁部ヨコナデ、体部外面クシメ、内面板ナデか	やや密	良	外：褐灰(7.5YR4/1) 内：灰白(10YR8/2)	口縁部1/8存～体部極一部存	◦外面全体にスス付着 ◦全体的に非常に薄手	039-01
344	山茶椀	2次 S33 P1	高台径：(6.0)	◦ロクロナデ、底部回転糸切り後、ヘラ状工具で調整か ◦高台はりつけ	密	良	にぶい黄橙(10YR7/2)	底部のみ完形 体部一部存	◦体部内面自然釉、外面釉垂れ痕あり ◦高台にモミガラ痕あり	040-02
345	山茶椀	2次 P32 P3	口径：16.2 高台径：8.4 高：4.6	◦ロクロナデ、底部回転糸切り ◦高台はりつけ	密	良	にぶい黄橙(10YR7/2)	口縁部1/5のみ欠	◦口縁部内面に自然釉付着 ◦高台にモミガラ痕あり ◦口縁部に歪みあり	040-01
346	製塩土器	2次 P33 P13		◦外面指オサエのまま、内面ヘラ状工具で調整か	粗	良	外：橙(2.5YR6/6) 内：橙(5YR7/6)	小片		049-01
347	土錘	2次 R34 P9	長径：3.55 短径：1.5	◦指による成形後、穿孔・ナデ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	穿孔部付近ごく一部欠		049-02
348	球状土製品	2次 Q31 P17	直径：2.2	◦指による成形後、ナデか	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	完形		049-03
349	土師器 小皿	Pit 70	口径：9.2 高：1.6	◦口縁端部面取り、口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	外：灰白(10YR8/2) 内：灰白(2.5Y8/2)	4／5存		032-04
350	土師器 小皿	Pit 70	口径：(8.8) 高：1.6	◦口縁端部面取り、口縁部ヨコナデ、体部ナデ	やや密	良	淡黄(2.5Y8/3)	1／3存	◦口縁内面に油煙か	032-06

第23表　遺物観察表(14)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
351	土師器 小皿	Pit 70	口径：8.6 高：2.1	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや密	良	外：灰白(10YR8/1) 内：灰白(10YR8/1)	口縁部1/2のみ欠	・内面黒変する ・内面にヘラ状工具痕(?)あり	018-08
352	土師器 小皿	Pit 70	口径：8.7 高：1.8	・口縁部ヨコナデ、体部～底部部外面ナデ、内面一方向ナデ	やや密	良	灰白(2.5Y8/2)	4/5存		032-05
353	土師器 小皿	Pit 70	口径：9.2 高け1.7	・口縁端部面取り、口縁部外面指オサエ後ナデ ・体部～底部ナデ	やや粗	良	にぶい黄橙(10YR7/3)～橙(2.5YR7/8)	口縁部一部欠	・口縁部に油煙か ・内面にヘラ状工具痕(?)か	032-01
354	土師器 小皿	Pit 70	口径：9.5 高：1.85	・口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ、底部ナデ	やや密	良	外：淡赤橙(2.5YR7/4) 内：橙(5YR7/6)	口縁～体部一部欠	・口縁部2ヶ所に油煙痕	032-03
355	土師器 小皿	Pit 70	口径：9.3 高：1.8	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや密	良	外：灰白(2.5Y8/2) 内：灰白(5Y8/2)	完形		018-07
356	土師器 小皿	Pit 70	口径：9.8 高：1.9	同上	やや密	良	外：灰白(7.5YR8/2) 内：灰白(10YR8/2)	口縁部一部欠		032-02
357	土師器 皿	Pit 70	口径：(14.6) 高：(3.3)	同上	やや密	良	外：褐灰(10YR5/1) 内：灰白(10YR8/2)	1/2存	・外面の広範囲にスス付着	018-04
358	土師器 皿	Pit 70	口径：(14.2)	・口縁部ヨコナデ、体部外面指オサエ後ナデ、内面ナデ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁～体部1/2存	・外面にスス付着	032-07
359	ロクロ土師器 小皿	Pit 70	口径：8.6 高：1.4 底径：4.4	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや密	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	4/5存	・体部外面にスス(?)付着	032-10
360	ロクロ土師器 小皿	Pit 70	口径：9.3 高：1.6 底径：4.25	同上	やや密	やや不良	灰白(2.5Y8/2) より白い	1/2存 但し、底部はほぼ完形	・同一個体と考えられる破片口縁部には油煙痕(?)	034-01
361	ロクロ土師器 小皿	Pit 70	口径：(9.6) 高：1.55 底径：4.8	同上	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/1)	1/5存 但し、底部はほぼ完形	・口縁部は磨滅 ・体部・底部外面にはヒビ割れ ・底部内面に調整痕	034-02
362	ロクロ土師器 小皿	Pit 70	口径：(9.45) 高：1.5 底径：5.0	同上	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	1/5存 但し、底部はほぼ完形	・口縁部は磨滅	034-03
363	ロクロ土師器 小皿	Pit 70	口径：(8.9) 高：1.7 底径：4.7	同上	やや密	良	橙(5YR7/6)	1/2存 但し、底部はほぼ完形	・全体的に歪み大 ・口縁部内面に4mm大の小石含む	032-12
364	ロクロ土師器 小皿	Pit 70	口径：(9.8) 高：1.9 底径：4.4	・ロクロナデ、底部回転糸切り ・体部～口縁部にかけて、やや外反気味	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	2/3存	・胎土は非常に密	032-09
365	ロクロ土師器 小皿	Pit 70	口径：8.8 高：1.3 底径：4.85	同上	やや粗	やや不良	橙(5YR7/6)～淡黄(2.5Y8/3)	2/3存	・全体にもろく、調整が甘い	032-11
366	ロクロ土師器 小皿	Pit 70	口径：9.4 高：1.9 底径：5.9	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	3/4存	・底部外面に糸切り時にできた、粘土塊(1.3cm大小石含む)が付着	018-06
367	土師器 皿	Pit 70	口径：(15.4) 高：3.9 底径：5.3	・ロクロナデ、底部回転糸切り ・体部～口縁部にかけて、やや外反気味	やや粗	良	浅黄橙(10YR8/4)	1/3存 但し、底部はほぼ完形	・全体的に磨滅が激しく、調整不明瞭	032-08
368	土師器 皿	Pit 70	底径：5.85	・ロクロナデ、底部回転糸切り	やや粗	良	浅黄橙(10YR8/4)	底部～体部ほぼ完形		018-05
369	土師器 椀	Pit 70	高台径：7.15	・ロクロナデ、底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	不良	灰白(10YR8/2)	底部のみほぼ完形	・全体的に磨滅激しく、調整は不明瞭 ・高台に、5mm大の小石含む	034-04
370	土師器 小皿	SX53 底面	口径：8.0 高：2.4	・内面ナデ、外面指オサエのまま ・特に口縁端部を調整しようとはしていない	密	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	ほぼ完形		119-04
371	土師器 小皿	SX53 底面	口径：8.0 高：2.5	・表面風化の為、調整等はっきりしないが、外底面は指オサエのままのようである	密	やや良	内：黒褐(2.5Y3/1) 外：灰黄(2.5Y7/2)～黄灰(2.5Y4/1)	ほぼ完形		119-05
372	土師器 小皿	SZ55 集石部	口径：(6.9) 高：1.7	・内面ナデ、外面指オサエのまま。口縁端部は、やや波打ったまま	密	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/5存		120-04
373	土師器 小皿	SZ55 集石部	口径：(7.5) 高：1.6	同上	密	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4存		119-03
374	土師器 小皿	SZ55 集石部	口径：7.7 高：1.8	同上	密	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	・口縁部内面に、ヘラ状工具当たったような痕跡あり	120-05
375	土師器 小皿	SZ55 集石部	口径：7.6 高：2.0	同上	密	良	内：にぶい黄橙(10YR7/3) 黒褐(10YR3/2)黒色の炭化物 外：淡黄(2.5Y8/3)	3/4存		120-03

第24表　遺物観察表(15)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成型・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
376	土師器 小皿	SZ55 集石部	口径:(11.0) 高:1.4	・口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエのまま	密	良	灰白(10YR8/2)	口縁と底部の一部のみ1/5存		120-02
377	土師器 鍋	SZ55 集石部	口径:(32.0)	・体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ・口縁端部を上方に1cm折り曲げ、受口状の口縁を形づくる ・口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目内面軽いハケ目後ナデ	密	良	内:にぶい黄橙(10YR7/3) 外:口縁部淡橙(5YR8/3) 体部浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁部1/5存	・体部外面全体に煤状の黒色炭化物付着	122-01
378	土師器 鍋	SZ55 集石部	口径:31.8	・体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開き、端部近くから少しだけ外反気味になる ・口縁端部の折り返しは、断面が正三角形に近い	やや密 1mm大の砂粒少量含まれる	やや良	内:灰白(2.5Y8/2)~淡黄(2.5Y8/4) 外:灰白(10YR8/2)	口縁部はほぼ全径あり底部は欠損	・体部外面全体に煤状の黒色炭化物付着。特に最大径より下は厚く付着	123-01
379	土師器 鍋	SZ55 集石部	口径:(32.6)	・体部から口縁部が「く」字状に屈曲して直線的に開く ・口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ	密	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁から体部上半のみ1/8存	・外面に煤(黒色炭化物)の付着多い	121-02
380	土師器 鍋	SZ55 集石部	口径:(33.8)	・体部から、口縁部が「く」字状に屈曲して開く ・口縁端部の折り返し突起部は、上方を向く ・口縁外面には、凹凸(指オサエ痕)が目立つが、口縁部は内外面ともヨコナデ ・体部外面ハケメ、内面ナデ	密	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁1/6存 体部上半1/8存	・外面に煤	121-01
381	土師器 鍋	WZ55 集石部	口径:(33.2)	・体部から、口不監部が「く」字状に屈曲して開く ・口縁部は、先半分に強いヨコナデがみられ、若干外反する ・口縁端部の折り返し突起部は、ヨコナデにより外面が少し窪んで内傾する ・口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁~体部の1/6存	・外面に煤	122-02
382	土師器 鍋	SZ55	口径:(27.4)	・体部から、短い口縁がそのまま外に開く ・体部は、口縁下に段を持ち、そのまま下方にのびる様相 ・口縁端部の折り返し突起部は、ヨコナデにより、外面がわずかに窪んで内傾する ・口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	密	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	16×7cmの小片	・外面に煤	120-01
383	土師器 羽釜	SZ55 集石部	口径:(34.4) 鍔径:(45.8)	・口縁端部は2cmほど折り返しヨコナデ ・口縁から5.5cm下に、ほぼ水平に鍔 ・鍔端部は、ヨコナデにより少しつまみ上げられたような格好 ・口縁・鍔部ヨコナデ、体部外面ハケメ	やや密 0.5~1mm大の砂粒目立つ 4mm大の小石も見られる	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	口縁~鍔直下まで1/10存	・鍔直下にスス付着	122-03
384	土師器 土錘	SZ55 集石部	全長:(3.7) 最大幅:(1.1) 穴径:(0.3~0.4) 重さ:3.06g	・表面磨耗 ・穴の壁に、植物の茎の表面のような繊維系の跡あり	やや密 0.5mm以下の砂粒少量	良	浅黄橙(10YR8/4)	両端部若干欠損		119-01
385	山茶椀	SZ55 集石部	高台径:(8.0)	・ロクロ水挽成形 ・断面逆台形の高台を貼り付け。貼り付けの為のヨコナデは軽く、高台の粘土をほとんど引きのばしてはいない	やや密	やや堅	灰白(2.5Y8/2)	底部のみ1/3存	・見込み部は、スベスベしている	119-02
386	緑釉小皿	SZ55 集石部	口径:9.7 高:2.2	・ロクロ水挽き、回転糸切り ・見込み部はナデか? ・口縁部に施釉。特に内側は幅0.7~1.2cmの帯状に灰釉	やや密 1mm大の礫少し目立つ	堅	淡黄(2.5Y8/3) 釉 灰オリーブ(7.5Y5/3)	口縁部1/4のみ欠		120-07
387	緑釉小皿	SZ55 集石部	口径:9.6 高:2.1	・ロクロ水挽き、回転糸切り ・見込み部はナデか? ・口縁部に施釉。特に内側は、幅1~1.5cmの帯状に灰釉	やや密	堅	淡黄(2.5Y8/3) 釉 灰オリーブ(7.5Y5/3)	口縁部1/3のみ欠		120-08
388	緑釉陶器 椀	SZ55 集石部	高台径:(8.0)	・見込み部や底部外面に、円形にナデた痕跡が見られる ・削り出し高台	密	堅	素地 浅黄橙(10YR8/3) 釉 暗黄緑色(土色帖に該当色なし)	底部5.5×4cmの小片		120-06
389	土師器 小皿	SZ55	口径:8.2 高:1.8	・口縁部ヨコナデ、体部~底部外面指オサエのまま、内面ナデ	密	良	灰白(10YR8/2)	3/4存		124-01
390	土師器 小皿	SZ55	口径:(10.7)	同上	密	良	灰白(10YR8/2)	1/4		124-03
391	土師器 鍋	SZ55	口径:(25.0)	・体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開き、端部近くから少しだけ外反気味になる ・口縁端部の折り返し突起部は、最先端がつまみ上げられた格好になり、外面は少し窪む ・口縁端部ヨコナデ、口縁部外面端目オサエ後ナデ、体部外面ハケメ ・内面は全体的に指オサエ後ナデ	密	良	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁~体部1/8存	・外面にスス付着	124-05
392	土師器 鍋	SZ55	口径:(30.0)	・体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ・口縁端部は、8mmほど折り曲げ、内傾させた上、最先端はやや上方を向く ・口縁端部ヨコナデ、口縁部外面指オサエ後ナデ、頸部外面ヨコナデ、体部外面ハケメ ・内面は全体的に指オサエ後ナデ	密	良	外:灰褐(7.5YR5/2) 内:灰白(10YR8/2)	口縁~体部1/8存	・外面にスス付着	124-04
393	土師器 鍋	SZ55	口径:(33.2)	・体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ・口縁端部は8cmほど折り曲げ、内傾させた上、最先端はつまみ上げられた格好になる ・口縁端部ヨコナデ、口縁部外面指オサエ後ナデ、体部外面ハケメ、底部外面ヘラケズリ ・内面は全体的にナデ	密	良	外:灰褐(7.5YR6/2) 内:(2.5Y8/3)	1/6存	・外面にスス付着	125-01
394	土師器 鍋	SZ55	口径:(22.0)	・ほぼ垂直な体部から、口縁ぶは屈曲して開く ・口縁端部はヨコナデにより内彎する ・口縁端部はヨコナデ、体部外面ハケメ、内面指オサエ後ナデ	密	良	外:灰褐(10YR6/2) 内:灰白(10YR8/2)	口縁~体部1/6存	・外面にスス付着	124-06

第25表　遺物観察表(16)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
395	土師器 鍋	SD56	口径:(29.9)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲し、端部はやや内彎する ○口縁端部の折り返し突起部は、ヨコナデにより、外面がわずかに窪む ○口縁端部ヨコナデ、口縁部外面に凹凸(指オサエ痕)が目立つが、内・外面ともヨコナデ ○体部外面ハケメ、内面ナデ	密	良	浅黄橙(7.5YR8/4~8/6)	口縁~体部のみ1/2存	○外面にスス付着	135-01
396	土師器 鍋	SD56	口径:(24.4)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ○口縁部は、先半分に強いヨコナデが見られ、若干外反する ○口縁端部の折り返し突起部はヨコナデにより、外面がすこし窪んで内傾する ○口縁部ヨコナデ、体部外面上部ハケメ、下部ヘラケズリ、体部内面ナデ	密	良	外:灰黄褐(10YR5/2~4/2) 内:浅黄(2.5Y8/3~7/3)	口縁部~体部のみ1/2存	○外面にスス付着	135-02
397	土師器 鍋	SD56	口径:(29.8)	○口縁端部の折り返し突起部はヨコナデにより、最先端が、小さくつまみ上げられた格好になる ○体部から短い口縁がそのまま、やや外へ開く ○体部は、口縁下に段を持ち、そのまま垂直方向に下へのびる ○口縁部ヨコナデ、体部ナデか	密	良	外:にぶい褐(7.5YR6/3~5/3) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁~体部のみ1/4存	○外面にスス付着	136-01
398	土師器 羽釜	SD56	口径:(24.4)	○口縁端部は水平方向に短く折り返しヨコナデ ○口縁から2.0cm下にほぼ水平に鍔 ○鍔端部はほとんど水平 ○口縁端部ヨコナデ、口縁未調整、鍔ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ	密	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁~体部鍔部のみ1/4存	○鍔の裏面のみ黒変している	137-01
399	土師器 羽釜	SD56	口径:(30.0)	○口縁端部は6mmほど折り返しナデ ○口縁から2.0cm下にほぼ水平に鍔 ○鍔端部はヨコナデにより、若干つまみ上げられたような格好 ○口縁・鍔部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面指オサエ後ナデ	密	良	外:灰白(7.5YR8/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁~体部鍔部のみ1/3存	○外面にスス付着	137-02
400	土師器 鍋	SD57	口径:(29.8)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ○口縁端部はヨコナデによって内彎 ○口縁端部ヨコナデ、口縁部ナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ	やや密	良	灰褐(7.5YR6/2)	口縁~体部1/10存	○外面にスス付着 ○外面に剥離多い	131-01
401	土師器 鍋	SD57	口径:(28.4)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ○口縁端部から8mm下内面に、5mm幅の帯状の段をもつ ○口縁端部はヨコナデにより内彎する ○口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ	やや粗	良	外:灰白(7.5YR8/2) 打ち:灰白(10YR8/2)	口縁~体部肩部1/10存	○外面にスス付着	132-01
402	土師器 羽釜	SD57	口径:(19.8)	○口縁端部は1cmほど折り返しヨコナデ ○口縁から2cm下に、斜め上方向の鍔 ○鍔端部はヨコナデによって、少しつまみ上げられた形になる ○口縁・鍔部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面指オサエのまま	やや密	良	外:淡黄(2.5Y8/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/2)	口縁~体部肩部1/8存	○外面にスス付着	132-01
403	土師器 羽釜	SD57	口径:(26.8)	○口縁端部は7mmほど、ほぼ水平方向に折り返しヨコナデ ○口縁から2cm下に、ほぼ水平に鍔 ○鍔端部はほとんど水平 ○口縁・鍔各端部ヨコナデ、口縁内面指オサエのまま、体部外面ハケメ、内面ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁~体部肩部1/6存		132-03
404	土師器 羽釜	SD57	口径:(19.6)	○口縁端部は5mmほど、ほぼ水平方向に折り返しヨコナデ ○口縁から1.8cm下に、斜め上方向の鍔 ○鍔端部はほとんど水平 ○口縁・鍔部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ナデ	やや密	良	外:褐灰(7.5YR6/1) 内:灰白(7.5YR8/1)	口縁~体部1/4存	○体部外面は摩滅進む	132-02
405	土師器 鍋	SD58	口径:(21.0)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開き、端部は内彎する ○口縁端部の折り返し突起部は、ヨコナデにより外面がわずかに窪む ○口縁端部はヨコナデ、口縁部指オサエ後ナデ、体部外面上部指オサエ後ハケメ、下部ヘラ削り後ハケメ、体部内面指オサエ後ナデ	密	良	外:灰褐(7.5YR5/2) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁~体部1/3存	○体部外面にスス付着	126-01
406	土師器 鍋	SD58	口径:(27.0)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ○口縁端部の折り返し突起部は、ヨコナデにより、外面が少し窪んで内傾する ○口縁端部ヨコナデ、口縁部指オサエ後ナデ、体部外面上部ハケメ、下部ヘラ削り、体部内面指オサエ後ナデ	密	良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:淡黄(2.5Y8/3)	口縁~体部3/4存	○外面にスス・炭化物付着	130-01
407	土師器 鍋	SD58	口径:(33.0)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ○口縁端部の折り返し突起部は、小さくつまみ上げられる格好となっており、ヨコナデにより、端部外面に窪み、端部内面には一条の沈線がまる ○口縁端部ヨコナデ、口縁部指オサエ後ナデ、体部外面上部ハケメ、下部ヘラ削り、体部内面指オサエ後ナデ	密	良	外:褐灰(7.5YR4/1) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁~体部1/4存	○体部外面にスス付着	129-01
408	土師器 鍋	SD58	口径:(33.0)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ○口縁端部の折り返し突起部は、ヨコナデにより外面がわずかに窪み、内彎する ○口縁端部ヨコナデ、口縁部指オサエ後ナデ、体部外面ハケメ、内面指オサエ後ナデ	密	良	外:にぶい褐(7.5YR5/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	口縁~体部肩部1/3存	○外面全体にスス付着 ○体部外面に指オサエ痕目立つ	128-02
409	土師器 鍋	SD58	口径:(32.4)	○体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く ○口縁端部の折り返し突起部は、ヨコナデにより、一旦折り返した後、更に先端を折り返している ○口縁端部先端は、ほぼ水平に内側へ向く ○口縁端部ヨコナデ、口縁部指オサエ後ナデ、体部外面ハケメ、内面指オサエ後ナデ	やや密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁~体部肩部1/4存		126-02
410	土師器 鍋	SD58	口径:(13.2)	○口縁端部は5mmほど、斜め下方向に折り返してある ○口縁部は肩部へ向けて広がる格好になっている ○口縁端部ヨコナデ、口縁部指オサエ後ナデ、体部外面ハケメ、内面指オサエ後ナデ	密	良	外:にぶい黄橙(10YR6/3) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口~体部肩部1/3存	○外面全体にスス・炭化物付着 ○弱干、磨滅がみとめられる	128-01

第26表　遺物観察表(17)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
411	土師器 羽釜	SD58	口径:(32.6)	◦口縁端部は1.5cmほど、折り返しヨコナデ ◦口縁から4.4cm下に、ほぼ水平方向の鍔 ◦鍔端部は、少しつまみ上げられたような格好 ◦口縁端部ヨコナデ、口縁部外面指オサエのまま、内面ナデ、鍔ヨコナデ、鍔取付部の内面指オサエのまま、体部外面ハケメ、内面ナデ	やや密	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁～鍔直下ごく一部のみ欠		127-01
412	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面には刺突文、縄文。内面には縄文	やや密	やや良	灰褐(7.5YR4/2)	口縁部のみ 5.0×3.0cm片		057-14
413	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面には刺突文、連続C字状爪形文	やや密	やや良	外:褐灰(7.5YR4/1) 内:にぶい橙(7.5YR7/3)	口縁部のみ 2.0×2.5cm片		045-04
414	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面には沈線文・キザミ・隆帯上に押し引き ◦内面には縄文	やや粗	やや良	外:褐灰(7.5YR5/1) 内:にぶい橙(7.5YR7/3)	2.5×2.4cm片		042-07
415	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面には燃糸文	やや粗	やや良	外:にぶい赤褐(5YR5/4) 内:橙(5YR6/6)	2.4×2.1cm		014-07
416	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面には縄文	粗	やや良	外:鈍い褐(7.5YR6/3) 内:橙(2.5YR6/6)	3.7×4.0cm片		042-04
417	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面、内面にキザミ ◦外面には沈線文・刺突文	密	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁部のみ 2.9×3.5cm片		042-08
418	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部・外面隆帯上にC字状爪形文 ◦隆帯の両端には沈線文 ◦口縁部内面には折り返しの様な段あり	やや密	やや良	明褐(7.5YR5/6)	口縁部のみ 9.1×7.0cm片		061-12
419	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部・外面隆帯上に連続C字状爪形文 ◦口縁・隆帯間には、爪形文	粗	やや良	外:褐灰(7.5YR5/1) 内:にぶい褐(7.5YR6/3)	口縁部のみ 7.6×6.2cm片		061-04
420	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部・外面隆帯上に連続C字状爪形文 ◦口縁・隆帯間には深い沈線が入る	やや粗	やや良	にぶい褐(7.5YR6/3)	口縁部のみ 6.5×5.0cm片		061-03
421	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面の器厚部に2本の沈線をめぐらし、その間に連続C字状爪形文	やや粗	やや良	灰褐(7.5YR5/2)	口縁部のみ 4.3×4.0cm片		057-03
422	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁部外面に、沈線・連続C字状爪形文	粗	不良	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:橙(7.5YR6/6)	口縁部のみ 4.0×2.3cm片	◦全体的に磨滅進む	053-06
423	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部・外面隆帯上に連続C字状爪形文 ◦隆帯の両端には沈線	粗	やや良	橙(7.5YR6/6)	口縁部のみ 3.8×2.9cm片		068-17
424	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面隆帯上に連続C字状爪形文	やや密	良	外:明赤褐(2.5YR5/6) 内:明赤褐(2.5YR5/6)	3.6×3.5cm片		086-03
425	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面隆帯上に連続C字状爪形文 ◦隆帯の両端に沈線	密	不良	褐灰(7.5YR4/1)	口縁部のみ 2.0×3.4cm片	◦口縁端部は磨滅激しく調整は不明瞭	045-03
426	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面隆帯上に連続C字状爪形文 ◦隆帯の上端に沈線	密	良	外:灰褐(5YR4/2) 内:橙(2.5YR6/6)	3.5×4.5cm片	◦内面に損傷による凹凸多い	054-04
427	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面の二本の隆帯はぶつかる形 ◦隆帯上に連続C字状爪形文	粗	不良	にぶい橙(7.5YR5/3)	3.4×3.9cm片	◦全体的に磨滅進む	059-01
428	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面にキャタピラー文	やや密	良	外:にぶい橙(7.5YR7/3) 内:橙(5YR7/6)	口縁部のみ 4.6×2.8cm片		055-05
429	縄文土器 深鉢	包含層		◦内面にキャタピラー文	密	良	外:褐灰(7.5YR4/1) 内:にぶい橙(7.5YR6/4)	7.6×5.8cm片		086-05
430	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部・口縁部外面に連続C字状爪形文	密	良	褐灰(7.5YR4/1)	口縁部のみ 3.9×1.9cm片		055-14
431	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部に縄文、口縁部外面に平行沈線・三角形の沈刻	粗	不良	灰黄褐(10YR6/2)	口縁部のみ 2.6×3.7cm片		059-09
432	縄文土器 浅鉢	包含層		◦口縁端部内面に二連続C字状爪形文 ◦口縁部内面に沈線・三角形の沈刻	やや密	良	外:にぶい褐(5YR5/3) 内:暗赤褐(5YR3/2)	口縁部のみ 4.6×3.7cm片		042-01
433	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部外面に連続C字状爪形文 ◦縦方向の隆帯の両端に沈線、刺突文か	やや粗	やや不良	橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ 3.9×5.0cm片	◦全体的にもろく剥離進む	045-02
434	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部・外面隆帯にキザミ ◦口縁端部と隆帯間に沈線・三角形の沈刻	密	良	灰褐(7.5YR4/2)	口縁部のみ 3.3×2.6cm片		042-06

第27表　遺物観察表(18)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
435	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面の平行沈線間に二段の連続刺突文	粗	やや不良	にぶい褐(7.5YR5/4)	3.6×3.5cm片		053-07
436	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面隆帯上に連続C字状爪形文 ◦隆帯下部に平行沈線	粗	不良	外:にぶい褐(7.5YR5/4) 内:橙(7.5YR6/8)	4.5×3.5cm片	◦全体的に磨滅激しい	054-10
437	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面隆帯上に連続C字状爪形文 ◦隆帯両端に沈線	やや密	やや良	灰白(10YR7/1)	3.2×2.1cm片		059-10
438	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面の沈線間に三角形の沈刻	やや粗	やや不良	橙(7.5YR6/6)	4.5×2.0cm片		068-03
439	縄文土器 鉢	包含層		◦口縁部は強く内折、内面は直角に面を作る ◦外面に、平行沈線による菱枠状の区画内に縄文・その中に三叉文を沈刻	やや密	良	暗褐(7.5YR3/4)	口縁部のみ 6.9×3.8cm片	◦440と同一個体	059-05
440	縄文土器 鉢	包含層		◦口縁部は強く内折、内面は直角に面を作る ◦外面に平行沈線	やや密	良	暗褐(7.5YR3/4)	口縁部のみ 1.5×2.4cm片	◦439と同一個体	042-05
441	縄文土器 鉢	包含層		◦体部に対し、口縁部は屈曲して開く ◦頸部外面に沈線	やや粗	良	灰黄褐(10YR4/2)	口縁～頸部 7.0×4.3cm片	◦外面は磨滅激しく調整不明瞭	141-05
442	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面に沈線 ◦沈線下部には縄文か	粗	不良	明褐(7.5YR5/6)	口縁部のみ 5.2×4.9cm片	◦全体的に非常に磨滅激しい	053-15
443	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面にほぼ平行の沈線、その下部に斜沈線	密	やや良	褐灰(10YR6/1)	6.8×3.7cm片		045-07
444	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部(肥厚部)直下にキザミ	やや粗	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ 5.6×3.5cm片		045-11
445	縄文土器 深鉢	包含層		◦富士山形を呈する山形口縁部の側面に縄文、外面に平行沈線	やや密	不良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ 4.0×6.0cm片	◦全体的に磨滅が非常に激しい	055-15
446	縄文土器 深鉢	包含層		◦肥厚部外面に刺突文	やや密	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/2) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	5.0×4.9cm片		045-01
447	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部外面に刺突文	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR7/2)	口縁部のみ 2.2×1.9cm片		045-05
448	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文	やや密	やや良	外:灰白(10YR8/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁～体部 6.0×8.6cm片		061-14
449	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部は内彎して肥厚する ◦外面は、沈線による曲線間に縄文	やや密	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:灰黄褐(10YR5/2)	口縁～体部 6.5×5.7cm片		061-05
450	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁部はミガキ ◦体部外面歯、沈線による曲線間に縄文	やや密	やや良	灰白(7.5YR8/2)	口縁～体部 7.3×6.8cm片		056-07
451	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや不良	灰白(10YR8/2)	口縁部のみ 2.8×5.3cm片		068-14
452	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部は内彎して肥厚する ◦外面歯、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや不良	明褐灰(7.5YR7/2)	口縁部のみ 6.2×3.6cm片		057-08
453	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁～体部 8.5×6.9cm片		053-01
454	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部は波状に隆起し、肥厚する ◦外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや良	淡橙(5YR8/4)	口縁部 5.3×3.3cm片		045-15
455	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部は波状に隆起し、肥厚する ◦外面は、沈線による曲線間に縄文	やや粗	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁部のみ 4.6×4.5cm片	◦隆起部外面は欠損	054-08
456	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線による曲線間に条線か	やや粗	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部のみ 3.7×3.6cm片	◦外面は磨滅進み、調整不明瞭	068-04
457	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線による曲線間に条線か	やや粗	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ 5.1×4.6cm片		055-09
458	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線による曲線間に縄文か	やや粗	やや良	にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部のみ 4.6×4.9cm片	◦外面中央は欠損	060-04
459	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線による曲線間に縄文か	やや粗	やや良	灰黄褐(10YR6/2)	口縁部のみ 7.4×4.0cm片		055-12

第28表　遺物観察表(19)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
460	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線による曲線間に縄文か	やや粗	やや良	橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ 6.7×4.0cm片		065-02
461	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は縄文帯に刺突文 ◦口縁部の波頂部外面は凸状	やや密	やや良	外:灰白(7.5YR8/2) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部のみ 5.4×5.6cm片	◦口縁部の波状隆起部直下に穿孔か	061-13
462	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁部は強く内彎する ◦外面は沈線間の縄文帯に刺突文	密	良	外:灰白(2.5Y8/1) 内:黄灰(2.5Y5/1)	口縁部のみ 4.7×3.2cm片		057-10
463	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は縄文帯に刺突文 ◦口縁部の波頂部外面は凸状	やや粗	やや良	外:褐灰(10YR5/1) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁部のみ 4.0×3.0cm片		055-10
464	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面~外面にかけて、沈線間に条線帯。波頂部上面にキザミ	やや粗	やや良	橙(5YR6/6)	口縁部のみ 5.9×4.3cm片		055-13
465	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線間の縄文帯	やや粗	やや良	にぶい橙(7.5YR7/3)	口縁部のみ 5.9×3.5cm片		068-18
466	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線間の条線帯	粗	やや良	橙(7.5YR7/6)	口縁~体部 8.0×7.3cm片		065-01
467	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線間の条線帯	粗	やや良	褐灰(10YR6/1)	口縁部のみ 4.5×3.0cm片		061-08
468	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線間の条線帯	やや粗	やや不良	黄橙(7.5YR8/8)	口縁部のみ 7.0×4.4cm片	◦全体的にやや磨滅	053-09
469	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線間の条線帯	やや密	やや良	外:褐灰(7.5YR6/1) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁~体部 9.5×7.3cm片		068-10
470	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線間の条線帯	やや密	良	にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部のみ 14.0×6.3cm片	◦口縁部に穿孔が一ヶ所あり	013-02
471	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線間に、櫛状工具による条線帯	やや密	良	外:灰黄褐(10YR6/2) 内:褐灰(10YR5/1)	口縁部のみ		062-01
472	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線による曲線間に条線 ◦口縁に6単位の波頂部をもつ	やや密	良	外:にぶい黄橙(10YR7/2) 内:褐灰(10YR5/1)	口縁~体部 24.0×16.0cm	◦内・外面とも部分的に黒変する	074-01
473	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面に沈線文	密	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ 6.2×5.9cm片	◦外面の一部黒変する	086-01
474	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面に沈線・条線	やや粗	不良	外:灰褐(7.5YR6/2) 内:淡橙(5YR8/4)	口縁部のみ 4.5×5.7cm片	◦全体的に磨滅激しく調整不明瞭	048-04
475	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面にほぼ平行する沈線	密	良	にぶい橙(5YR7/4)	口縁部のみ 4.7×4.0cm片		053-08
476	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面にほぼ平行する沈線	やや密	良	にぶい黄褐(10YR5/3)	口縁部のみ 3.4×3.2cm片		015-04
477	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面に沈線	やや粗	やや不良	外:にぶい黄褐(10YR5/3) 内:明黄褐(10YR7/6)	口縁部のみ 5.0×3.2cm片	◦全体的に磨滅激しい	015-05
478	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は沈線間に縄文帯	密	良	黄灰(2.5Y4/1)	口縁部のみ 6.4×3.8cm片		061-06
479	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は直交する3条の沈線間に縄文帯 ◦口縁部内面に平行沈線	粗	やや良	外:黒褐(7.5YR3/1) 内:暗褐(7.5YR3/4)	口縁~体部 22.0×16.0cm		142-01
480	縄文土器 深鉢	包含層		◦肥厚させて縁帯部を作り出した口縁部に2条の平行沈線 ◦波頂部円孔・それに沿う弧状沈線と刺突文	やや粗	やや良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ 6.7×5.5cm片	◦480~486は同一個体	061-09
481	縄文土器 深鉢	包含層		◦肥厚させて縁帯部を作り出した口縁部に2条の平行沈線 ◦波頂部円孔・それに沿う弧状沈線と刺突文	粗	やや良	明褐灰(7.5YR7/2)	口縁部のみ 7.0×6.8cm片	◦480~486は同一個体	058-04
482	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部内面は、直角に面をつくり、肥厚し、外面は2条の平行沈線 ◦口縁部外面は縄文	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部のみ 8.2×5.2cm片	◦480~486は同一個体	060-08
483	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部内面は、直角に面をつくり、肥厚し、外面は2条の平行沈線 ◦口縁部外面は縄文	やや粗	やや良	にぶい黄褐(10YR5/3)	口縁ぶのみ 8.5×6.4cm片	◦480~486は同一個体	060-06
484	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部内面は、なだらかに肥厚し、外面に2条の平行沈線 ◦波頂部円孔・それに沿う弧状沈線と刺突文 ◦口縁~体部外面は縄文	やや粗	やや良	外:にぶい黄橙(10YR6/3) 内:にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁~体部 15.0×11.0cm	◦480~486は同一個体	061-01 060-07

第29表　遺物観察表(20)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
485	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部内面は、なだらかに肥厚し、外面に2条の平行沈線 ◦波頂部円孔・それに沿う弧状沈線と刺突文 ◦口縁～体部外面は縄文	やや粗	やや良	にぶい褐(7.5YR5/3)	口縁～体部 12.3×7.6cm片	◦480～486は同一個体	060-05
486	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部内面は、やや段をもって肥厚し、外面に2条の平行沈線 ◦口縁部外面は縄文	やや粗	やや良	にぶい褐(7.5YR5/4)	口縁部のみ 12.0×6.5cm片	◦480～486は同一個体	060-02
487	縄文土器 深鉢	包含層		◦波頂部は肥厚し、中央付近に円孔を1ヶ所、内・外面とも刺突文	粗	不良	黄橙(10YR8/6)	口縁部のみ 4.2×4.2cm片		048-09
488	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁の山形突起部中央に円孔を1ヶ所、それに沿う沈線。突起上面はほぼ平らでナデ ◦口縁端部上面に刺突文、それに沿う弧状沈線。口縁部外面は沈線、内面は条線か	やや粗	良	外：黒褐(10YR3/1) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部のみ 8.4×9.5cm片		063-01
489	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁の山形突起部はC字状を呈し、内面側はブリッジ形をなす。上面に刺突文・キザミ。口縁端部上面に、沈線・刺突文 ◦口縁部外面に、ほぼ平行する沈線	粗	不良	外：黒褐(10YR3/2) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部のみ 16.4×9.0cm片	◦口縁部外面は磨滅	141-02
490	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部は強く内彎 ◦口縁端部外面は沈線・キザミ	やや密	やや良	灰黄褐(10YR5/2)	口縁部のみ 5.5×3.5cm片		055-16
491	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部の断面は逆三角形を呈する ◦口縁端部外面は沈線・キザミ	密	良	灰褐(7.5YR5/2)	口縁部のみ 5.0×3.1cm片		050-03
492	縄文土器 深鉢	包含層		◦波頂部の両側面に刺突文、口縁端部上面に沈線・キザミ	やや粗	やや良	褐(7.5YR4/3)	口縁部のみ 5.5×4.6cm片		058-01
493	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面に沈線・押圧	密	良	褐(7.5YR4/3)	口縁部のみ 5.4×4.0cm片		057-11
494	縄文土器 深鉢	包含層		◦波頂部はトンネル状を呈し、外面中央に刺突文	やや密	やや不良	外：褐灰(10YR4/1) 内：明赤褐(2.5YR5/6)	口縁部のみ 8.5×8.3cm片		086-06
495	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面は波頂部を中心に、両側に弧状沈線。波頂部内面中央に刺突文	密	良	灰黄褐(10YR6/2)	口縁ぶのみ 7.0×6.0cm片		050-02
496	縄文土器 深鉢	包含層		◦隆起部外面に刺突文、両側面に刺突文、それに沿う弧状沈線	粗	不良	外：灰黄褐(10YR6/2) 内：橙(5YR7/6)	2.8×3.2cm片	◦全体的に磨滅激しい	054-06
497	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部外面に2条の平行沈線、口縁部内面にも沈線	やや粗	やや不良	褐(7.5YR4/3)	口縁部のみ 5.9×3.1片		057-13
498	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面に沈線	やや密	やや良	灰白(10YR8/1～7/1)	口縁部のみ 3.9×2.4cm片		054-13
499	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部内面に、刺突文の両側に沈線 ◦外面はナデ	やや密	やや良	灰黄褐(10YR5/2)	口縁部のみ 4.1×4.7cm片		054-07
500	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁部外面に、沈線・ミガキか	やや密	やや良	浅黄橙(10YR8/4)	口縁部のみ 4.2×3.7cm片		086-02
501	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部外面に、沈線	やや粗	やや良	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁部のみ 4.8×3.8cm片		057-05
502	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面に沈線・外面に擬縄文	密	良	にぶい橙(5YR6/4)	口縁部のみ 5.5×2.7cm片		048-11
503	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面に沈線・外面に縄文	やや密	良	外：灰褐(7.5YR5/2) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ 5.8×6.5cm片		048-10
504	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面に刺突文	密	良	にぶい橙(5YR6/4)	口縁部のみ 5.0×4.2cm片		048-12
505	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁端部上面にキザミ、口縁部外面に一条の沈線	やや粗	やや良	外：褐灰(10YR4/1) 内：にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ 5.8×4.5cm片		054-02
506	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁部外面に、短沈線と沈線が平行する ◦口縁端部内面は、段をつくる	やや密	やや良	外：淡黄(2.5Y8/3) 内：灰黄褐(10YR4/2)	口縁部のみ 4.5×2.9cm片		054-09
507	縄文土器 深鉢	包含層		◦波頂部頂上に円筒状突起・その両側にこぶ状隆起を配する ◦口縁端部は上面に2条の平行沈線を施した後、波状に沿って外面にキザミ	やや粗	やや良	褐灰(10YR4/1)	口縁部のみ 6.2×4.8cm片		054-03
508	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、3条の平行沈線による曲線間に縄文帯	やや粗	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/3)	口縁～体部 13.2×10.0cm		058-02

第30表　遺物観察表(21)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
509	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	やや粗	良	にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部のみ 7.9×7.5cm片		061-10
510	縄文土器 注口土器	包含層		・口縁部外面は、4条のほぼ平行する沈線が沈刻に突き当たる文様。	やや粗	やや不良	にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部のみ 5.0×3.7cm片		062-02
511	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁部外面は、3条の平行凹線文。	粗	不良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ 8.0×4.0cm片	・全体的に磨滅激しい。	141-06
512	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、条線後、一部ナデ。 ・口縁部外面に粘土接合痕あり。	密	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部のみ 10.6×6.7cm片	・外面に指オサエ痕多い。	086-04
513	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、かすかに条線が残る。	粗	不良	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:灰黄(2.5Y7/2)	口縁部のみ 5.2×6.1cm片	・外面が特に磨滅激しく調整不明瞭。	059-07
514	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縦方向の細かい条線。	やや粗	やや不良	外:灰褐(7.5YR4/2) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁部のみ 10.5×7.2cm片		054-11
515	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、5条の平行条線による文様か。	やや密	やや良	灰黄褐(10YR5/2)	口縁部のみ 4.9×3.9cm片		057-02
516	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部外面は、細かい条線が横走し、口縁部外面は、やや幅広の条線が縦走する。	やや密	不良	外:橙(7.5YR7/6) 内:橙(7.5YR6/8)	口縁部のみ 6.5×5.5cm片	・全体的に磨滅が非常に激しい。	068-15
517	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部は、波状に沿った条線。 ・口縁外面は、縦方向の条線。	やや粗	不良	外:橙 (5YR7/6) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部のみ 4.7×5.0cm片	・全体的に磨滅が非常に激しい。	055-11
518	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縦方向のやや幅広な条線と、斜方向の細い条線。	やや粗	やや不良	外:黄灰(2.5Y4/1) 内:灰白(2.5Y7/1)	口縁部のみ 19.5×9.8cm片		018-01
519	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は縄文。	やや粗	やや良	外:にぶい褐(7.5YR6/3) 内:褐灰(7.5YR5/1)	口縁部のみ 8.0×5.7cm片		055-01
520	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は縄文。 ・口縁端部内面は、段をつくり肥厚する。	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部のみ 5.5×5.5cm片		051-05
521	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部上面に刺突文、口縁部外面に縄文か。	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR7/2)	口縁部のみ 4.8×6.2cm片	・外面は磨滅進む。	056-09
522	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部内面に沈線。	密	良	にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部のみ 5.0×4.6cm片		057-12
523	縄文土器 深鉢	包含層		・口縁端部内面に沈線。	粗	不良	橙(2.5YR7/6)	口縁部のみ 5.5×5.4cm片	・外面は剥離、内面は磨滅激しい。	051-04
524	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で無文。	やや密	やや良	外:灰褐(7.5YR4/2) 内:灰黄褐(10YR6/2)	口縁部のみ 9.8×8.5cm片		060-03
525	縄文土器 深鉢	包含層		・外面はナデ調整だが、条痕残る。	密	良	にぶい橙(7.5Y R7/4)	口縁部のみ 5.8×9.0cm片		056-08
526	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。 ・口縁部に焼成前穿孔。	密	良	橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ 5.5×5.3cm片		059-06
527	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや不良	外:灰黄(2.5Y6/2) 内:浅黄橙(10YR8/2)	口縁部のみ 8.6×5.1cm片	・外面は磨滅激しく調整不明瞭。	068-11
528	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや不良	外:橙(7.5YR6/6) 内:褐(7.5YR4/4)	口縁部のみ 16.0×7.8cm片	・報535と同一個体か。	051-14
529	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	外:褐灰(10YR5/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ 5.2×5.3cm片		054-15
530	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	粗	やや良	外:灰黄褐(10YR4/2) 内:橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ 6.0×5.6cm片	・全体的に磨滅激しい。	053-12
531	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR7/2)	口縁部のみ 6.9×6.4cm片		055-03
532	縄文土器 深鉢	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	外:褐灰(10YR6/1) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部のみ 4.3×5.4cm片		068-01
533	縄文土器	包含層		・ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	灰褐(7.5YR5/2)	口縁部のみ 5.3×4.6cm片		057-01

第31表　遺物観察表(22)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
534	縄文土器 深鉢	包含層		◦内・外面ともミガキで無文。	やや密	やや良	外:黒褐(7.5YR3/2) 内:にぶい赤褐(5YR4/3)	口縁部のみ 6.3×5.5cm片		052-01
535	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:橙(7.5YR6/6) 内:褐(7.5YR4/4)	口縁～体部 14.2×12.0cm片	◦報528と同一個体か。	058-03
536	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:褐灰(10YR5/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/2)	口縁部のみ 5.0×4.5cm片		057-07
537	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:灰褐(5YR4/2) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部のみ 5.0×4.3cm片		058-06
538	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面ナデ、内面ミガキで無文	やや密	良	にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部のみ 5.2×4.0cm片		051-07
539	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面ナデ、内面ミガキで無文	やや密	良	褐灰(7.5YR4/1)	口縁部のみ 5.4×5.0cm片		051-13
540	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面ナデ、内面ミガキで無文	やや密	良	にぶい黄(2.5Y6/3)	口縁部のみ 5.1×4.0cm片		053-13
541	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:黒褐(5YR4/1) 内:橙(5YR6/6)	口縁部のみ 3.9×4.0cm片		051-02
542	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや粗	やや不良	外:褐灰(10YR4/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ 12.6×9.2cm片		018-02
543	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	密	やや良	外:灰黄褐(10YR6/2) 内:にぶい褐(7.5YR6/3)	口縁部のみ 5.6×3.2cm片		055-02
544	縄文土器 深鉢	包含層		◦ミガキ調整で、無文。	やや密	やや良	灰褐(5YR4/2)	口縁ぶのみ 5.1×3.3cm片		051-11
545	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面ナデ、内面ミガキで、無文。	やや密	やや不良	灰黄褐(10YR6/2)	口縁部のみ 6.0×3.9cm片	◦口縁端部の一部は剥離。	068-08
546	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	橙(7.5YR7/6)	口縁部のみ 3.5×3.2cm片		051-09
547	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや密	やや良	外:褐灰(10YR4/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部のみ 3.9×5.2cm片		053-16
548	縄文土器 深鉢	包含層		◦ミガキ調整で、無文。	やや密	やや良	明褐灰(7.5YR7/2)	口縁部のみ 65×3.0cm片	◦外面下部は剥離。	051-12
549	縄文土器 深鉢	包含層		◦ミガキ調整で、無文。	密	良	にぶい褐(7.5YR6/3)	口縁部のみ 3.5×4.2cm片		068-05
550	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや粗	やや良	外:灰白(10YR7/1) 内:灰褐(5YR6/2)	口縁部のみ 3.6×3.9cm片		051-10
551	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。	やや密	良	にぶい橙(5YR7/4)	口縁部のみ 3.1×2.7cm片		068-06
552	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。 ◦口縁端部外面は、段をもち肥厚する。	やや粗	やや良	外:灰褐(5YR5/2) 内:にぶい褐(7.5YR5/3)	口縁部のみ 4.2×2.6cm片		053-10
553	縄文土器 深鉢	包含層		◦ナデ調整で、無文。 ◦口縁端部は、内側へ折り返す形。	やや粗	良	灰黄褐(10YR6/2)	口縁部のみ 2.7×3.0cm片		068-12
554	縄文土器 深鉢	包含層		◦ミガキ調整で、無文。	やや密	やや良	褐灰(7.5YR6/1)	口縁部のみ 5.5×2.5cm片		057-04
555	縄文土器 深鉢	包含層		◦口縁部外面はナデ、口縁端部～口縁部内面はミガキか。	やや粗	やや良	外:褐灰(7.5YR4/2) 内:灰褐(10YR8/2)	口縁部のみ 5.5×2.5cm片		057-09
556	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	粗	やや不良	外:浅黄橙(7.5YR8/4) 内:浅黄橙(10YR8/3)	体部のみ 5.5×6.1cm片		068-07
557	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に櫛状工具による条線文か。	粗	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	体部のみ 6.2×7.2cm片		055-08
558	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	粗	やや不良	外:灰褐(7.5YR5/2) 内:(10YR4/1)	体部のみ 6.2×5.5cm片	◦外面の一部剥離。	053-05

第32表　遺物観察表(23)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
559	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	粗	やや良	外:淡黄(2.5Y8/3) 内:暗灰黄(2.5Y5/2)	体部のみ 5.3×5.9cm片		053-11
560	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に条線帯か。	粗	不良	明黄褐(10YR7/6)	体部のみ 6.3×6.2cm片	◦全体的に非常に摩滅激しい。	059-04
561	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に縄文帯か。	やや密	やや良	灰白(10YR8/2)	体部のみ 4.8×5.1cm片		048-02
562	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文帯か。	やや密	やや良	灰黄(10YR6/2)	体部のみ 5.7×5.3cm片		051-06
563	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや粗	やや良	灰褐(7.5YR5/2)	体部のみ 7.0×4.4cm片	◦内面の一部黒変する。	048-07
564	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に縄文帯。	密	良	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:にぶい黄褐(10YR5/3)	体部のみ 7.5×5.4cm片		013-03
565	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	やや粗	やや良	にぶい黄橙(10YR7/3)	体部のみ 4.9×8.0cm片		054-05
566	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや粗	やや良	灰白(10YR8/2)	体部のみ 3.5×3.2cm片		045-13
567	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	良	にぶい黄橙(10YR7/2)	体部のみ 3.5×3.0cm片		045-12
568	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に縄文帯。	密	良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:灰褐(7.5YR6/2)	体部のみ 5.2×4.2cm片		055-04
569	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文帯。	やや密	良	外:にぶい赤褐(5YR5/3) 内:黒褐(2.5Y3/1)	体部のみ 4.8×3.6cm片		048-01
570	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや粗	やや不良	外:褐灰(5YR5/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/2)	体部のみ 4.4×4.7cm片		045-14
571	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	やや良	褐灰(7.5YR5/1)	体部のみ 5.0×3.3cm片		059-03
572	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に縄文帯。	やや密	やや良	外:浅黄橙(7.5YR8/3) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)	体部のみ 3.9×3.9片		045-06
573	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、2条の沈線による区画内に条線文。	やや密	やや良	灰黄褐(10YR6/2)	体部のみ 4.2×3.2cm片		045-09
574	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に櫛状工具による条線文か。	やや粗	やや不良	浅黄橙(10YR8/4)	体部のみ 5.0×5.7cm片	◦全体的に磨滅激しい。	055-07
575	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	やや良	にぶい橙(10YR7/4)	体部のみ 5.0×6.3cm片		054-16
576	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	やや良	橙(7.5YR7/6)	体部のみ 6.1×5.1cm片		059-08
577	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや粗	やや良	外:浅黄(2.5Y8/4) 内:灰黄(2.5Y6/2)	体部のみ 7.5×5.1cm片		053-14
578	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に条線文帯。	やや粗	やや良	浅黄橙(10YR8/3)	体部のみ 9.4×9.9cm片		053-02
579	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、横走する沈線下部に条線文。	やや粗	やや良	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	体部のみ 6.8×5.0cm片		042-09
580	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線に沿った条線文帯。	やや密	やや良	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	体部のみ 5.0×4.7cm片		053-17
581	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線下部に条線文。	やや密	やや良	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:褐灰(10YR6/1)	体部のみ 3.0×4.5cm片		048-05
582	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に条線文。	やや密	やや良	浅黄橙(10YR8/3)	体部のみ 4.5×4.2cm片	◦内面はほとんど剥離。	048-08
583	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線文。	粗	やや不良	橙(7.5YR6/6)	体部のみ 4.5×5.1cm片	◦外面は磨滅進む。	054-01

第33表　遺物観察表(24)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
584	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線文	やや密	やや良	外:褐灰(10YR4/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/2)	体部のみ 6.1×5.6cm片		048-06
585	縄文土器 注口土器	包含層		同上	やや粗	やや良	浅黄橙(10YR8/3)	体部のみ 6.0×6.0cm片		053-03
586	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR7/4)	体部のみ 6.5×5.5cm片		153-04
587	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:灰黄(2.5YR6/2)	体部のみ 5.2×5.6cm片		014-01
588	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面に沈線文	やや粗	やや良	にぶい赤褐(5YR5/4)	体部のみ 5.0×4.7cm片		045-10
589	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや粗	やや良	灰黄褐(10YR6/2)	体部のみ 4.9×5.5cm片		045-08
590	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや粗	やや良	にぶい橙(7.5YR7/4)	体部のみ 4.8×5.0cm片	内面の一部剥離	013-01
591	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/4)	体部のみ 5.0×3.6cm片	内面の一部剥離	048-03
592	縄文土器 深鉢	包含層		同上	粗	不良	浅黄橙(10YR8/4)	体部のみ 3.1×2.5cm片	全体的に磨滅激しい	014-05
593	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による曲線間に縄文帯	粗	やや不良	外:灰黄褐(10YR6/2) 内:浅橙(10YR8/3)	体部のみ 3.1×3.0cm片		050-06
594	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は3条の沈線の各々の両端に縄文か	密	良	にぶい黄橙(10YR6/3)	体部のみ 4.8×4.5cm片		053-18
595	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による区画内に縄文や、中央に凹部をもつ	やや粗	良	外:褐灰(10YR4/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/2)	体部のみ 5.9×7.1cm片	外面にスス付着か	061-11
596	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に斜方向の縄文	やや粗	やや良	にぶい褐(7.5YR5/3)	体部のみ 5.7×5.4cm片		048-13
597	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に縄文帯	やや粗	やや良	外:にぶい赤褐(5YR5/4) 内:灰褐(7.5YR5/2)	体部のみ 5.8×6.5cm片		054-14
598	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、3条の沈線下部に縄文	やや密	やや良	外:灰黄褐(10YR4/2) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	体部のみ 5.9×4.5cm片		051-03
599	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、3条の沈線による直線間に縄文・刺突文	やや粗	やや良	外:灰褐(7.5YR4/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	体部のみ 6.4×4.6cm片		061-02
600	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に縄文	やや密	やや良	灰褐(7.5YR5/2)	体部のみ 5.2×3.2cm片		050-04
601	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、6条の沈線による直線間に縄文帯	密	良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:灰黄褐(10YR6/2)	体部のみ 10.7×10.0cm片	外面の一部にスス付着	055-06 059-12 059-13
602	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に縄文帯	密	良	褐灰(10Y5/1)	体部のみ 3.4×3.6cm片		059-11
603	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	やや良	外:褐灰(10YR6/1) 内:灰白(10YR8/2)	体部のみ 5.6×5.3cm片		056-06
604	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、沈線による直線間に縄文帯 ◦外面上端はナデによる内彎	やや密	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:明褐灰(7.5YR7/2)	体部のみ 14.1×7.5cm片	外面の一部にスス付着	064-01
605	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、横方向の沈線3条により区画される。区画上段に縦方向の条線。区画下段に、横方向の条線、曲線が交差する格好の沈線文	やや粗	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	体部のみ 7.1×8.8cm片		058-05
606	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、縦方向の条線	やや粗	やや良	黒褐(7.5YR2/2)	体部のみ 9.3×5.8cm片		050-11
607	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、条線	やや粗	やや良	外:暗褐(7.5YR3/3) 内:灰黄褐(10YR5/2)	体部のみ 6.7×7.4cm片		050-09
608	縄文土器 深鉢	包含層		◦外面は、縦方向の条線	密	やや良	褐灰(5YR5/1)	体部のみ 6.1×8.4cm片	外面上部は一部欠損	059-02

第34表　遺物観察表(25)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
609	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縦方向に弧を描く格好の条線	粗	やや不良	外:灰黄褐(10YR4/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	体部のみ 8.5×6.3cm片		050-08
610	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縦方向にやや弧を描く格好の条線	密	良	外:褐灰(7.5YR5/1) 内:浅黄橙(7.5YR8/3)	体部のみ 7.1×5.7cm片		058-07
611	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、横方向の沈線・その下部に櫛状工具による曲線状の条線	やや粗	やや良	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	体部のみ 7.0×6.9cm片		061-07
612	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、条線	密	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/3)	体部のみ 8.9×4.1cm片	外面の一部にスス付着	058-08
613	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや密	やや良	外:黒褐(7.5YR3/1) 内:浅黄橙(10YR8/3)	体部のみ 6.9×5.7cm片	外面はやや磨滅気味	050-10
614	縄文土器 深鉢	包含層		同上	粗	やや良	灰黄褐(10YR4/2)	体部のみ 4.1×3.5cm片		051-01
615	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや粗	やや良	にぶい黄橙(10YR7/3)	体部のみ 3.4×4.0cm片		014-03
616	縄文土器 深鉢	包含層		同上	やや粗	やや良	外:黄灰(2.5Y6/1) 内:灰白(10YR8/2)	体部のみ 3.0×4.0cm片	外面に打ち欠き痕多い	068-09
617	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、ほぼ直角に交わる格好の3条の沈線	粗	やや良	灰黄(2.5Y6/2)	体部のみ 4.0×4.8cm片		050-01
618	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縄文か	やや密	やや良	外:にぶい黄橙(10YR7/2) 内:浅黄橙(10YR8/3)	体部のみ 4.0×4.1cm片		068-02
619	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は、縄文	やや粗	やや良	外:赤灰(2.5YR4/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/2)	体部のみ 8.3×6.6cm片		050-05
620	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ナデ、内面ミガキ	やや密	やや良	にぶい橙(7.5YR7/3)	底部のみ 4.5×3.0cm片		052-03
621	縄文土器 深鉢	包含層		・内外面ともナデ	やや粗	やや不良	外:にぶい橙(5YR7/3) 内:灰白(5YR8/1)	底部のみ 6.5×3.2cm片	全体的に磨滅進む	052-12
622	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ナデ・内面ミガキ	やや粗	やや良	灰褐(7.5YR6/2)	底部のみ 5.3×3.0cm片	内面は半分の部分が欠損	052-04
623	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ミガキ・内面ナデ	やや密	やや良	外:にぶい黄(2.6YR6/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	底部のみ 5.5×2.4cm片		013-04
624	縄文土器 深鉢	包含層		・外面ミガキ内面ナデ 外面の接地面はナデ	やや粗	やや不良	褐灰(5YR4/1)	底部のみ 3.0×2.0cm片	626・629と同一個体か	056-04
625	縄文土器 深鉢	包含層		・内・外面ともナデ	粗	不良	外:浅黄(2.5Y8/4) 内:黄灰(2.5Y4/1)	底部のみ 5.0×3.0cm片	全体的に磨滅・欠損が非常に激しい	068-19
626	縄文土器 深鉢	包含層		・内・外面ともナデ	やや密	やや不良	極暗赤褐(5YR2/3)	底部のみ 4.0×4.5cm片	624・629と同一個体か	052-02
627	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線直下に縄文,外面の接地面ナデ ・内面ナデ	やや粗	やや良	灰黄(2.5Y7/2)	底部のみ 4.0×1.5cm片		054-12
628	縄文土器 深鉢	包含層		・外面の接地面に網代痕あり ・内面はミガキ	やや密	やや良	橙(2.5YR6/6)	底部のみ 4.5×3.2cm片		051-08
629	縄文土器 深鉢	包含層		・外面は沈線内に結節縄文 ・内面、外面の接地面はナデ	やや密	やや不良	暗赤褐(5YR3/2)	底部のみ 4.5×2.6cm片	624・626と同一個体か	042-02
630	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(6.0)	・内・外面ともナデ	やや粗	やや不良	浅黄橙(10YR8/2)	底部のみ 1/4存	624・626と同一個体か	052-09
631	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(4.6)	・外面ミガキ、外面の接地面ナデ ・内面ナデ	やや粗	やや良	浅黄橙(10YR8/3)	底部のみ 1/4存		052-11
632	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(5.9)	・内・外面ともミガキ	やや粗	やや良	外:にぶい黄橙(10YR6/3) 内:褐灰(10YR5/1)	底部のみ 1/4存		052-10
633	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.2)	・内・外面ともナデ	やや粗	やや良	灰白(10YR8/1)	底部のみ ほぼ完形		052-07

第33表　遺物観察表(26)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
634	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.0)	◦内・外面ともナデ	粗	不良	外:にぶい黄橙(10YR7/2) 内:橙(5YR7/6)	底部のみ 1/4存		056-01
635	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.3)	◦内・外面ともナデ	やや粗	やや良	灰黄(2.5YR7/2)	底部のみ 1/4存		056-03
636	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.7)	◦内・外面ともナデ	粗	不良	浅黄橙(7.5YR8/4)	底部のみ 1/4存	全体的に磨滅激しい	056-02
637	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(7.1)	◦内・外面ともナデ	粗	不良	にぶい黄橙(10YR7/3)	底部のみ 2/3存	全体的に磨滅激しい	052-05
638	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(8.0)	◦内・外面ともナデ	やや粗	やや良	にぶい橙(7.5YR6/4)	底部のみ 2/3存		141-01
639	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(9.0)	◦内・外面ともナデ	やや粗	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/3)	底部のみ 1/3存		052-08
640	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(6.6)	◦内・外面ともナデ	やや粗	やや良	灰褐(7.5YR6/2)	底部のみ 1/2存		052-06
641	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(9.0)	◦外面ミガキ、外面の接地面ナデ ◦内面ナデ	やや密	やや良	外:灰白(2.5Y7/1) 内:黄灰(2.5Y6/1)	底部のみ 1/6存	内・外面とも欠損多い	018-03
642	縄文土器 深鉢	包含層	底径:(9.4)	◦内・外面ともナデ	やや密	やや良	にぶい黄橙(10YR7/4)	体部～底部 1/2存	全体的に磨滅進む	056-05
643	縄文土器 深鉢	包含層		◦全体的にナデ ◦口縁部外面に、突帯文	やや粗	やや良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部のみ 3.5×4.1cm片		141-07
644	縄文土器 土製円盤	包含層		◦外面にほぼ平行する沈線間にキザミ	やや粗	やや良	橙(5YR6/6)	3.1×3.3cm片	外面の中央に5mm大の小石含む。	042-03
645	縄文土器 深鉢	包含層	口径:(28.0)	◦口縁部外面は、沈線による曲線間に縄文。その後、部分的に擦り消し ◦体部外面ナデ、内面ヨコナデ ◦底部は、内・外面とも乱ナデ	やや密	やや良	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:浅黄橙(10YR8/3)	2/3存	口縁～頚部外面にスス付着	012-01
646	弥生土器 広口壷	包含層	口径:(13.6)	◦口縁部外面ナデ、内面櫛状工具による刺突文 ◦頚部～胴部外面、5条の直線文間に櫛描文、櫛状工具による刺突文。内面、指オサエナデ ◦胴部以下の外面ヘラミガキ、内面ナデ	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部ほぼ完形 体部3/4存		067-01
647	弥生土器 広口壷	包含層	口径:(16.0)	◦口縁端部ヨコナデ ◦口縁部外面ハケメ、内面ナデ	密	良	淡橙(5YR8/4)	口縁部のみ 1/5存		046-01
648	弥生土器 広口壷	包含層	底径:(3.8)	◦体部外面ハケメ、内面板ナデか ◦底部側面ヨコナデ、外面指オサエ	密	良	外:灰白(5Y8/1) 内:淡黄(2.5Y8/3)	体部～底部 1/2存		047-02
649	弥生土器 高杯	包含層		◦杯部内・外面ともミガキ ◦脚部外面ミガキのち沈線・櫛状工具による刺突文。内面指オサエ後ナデ	密	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	杯部(底部) 2/3存 脚部存	胸部に4ヶ所の穿孔あり	069-01
650	弥生土器 高杯	包含層	裾径:(14.5)	◦裾部外面ハケメ後ミガキ、内面ハケメ後ナデ裾部端部ヨコナデ	密	良	外:橙(5YR7/6) 内:橙(5YR6/8)	裾部 1/3存	裾部に1ヶ所の穿孔あり	069-02
651	弥生土器 台付甕	包含層	裾径:(6.6)	◦全体的にナデ	やや粗	やや良	灰白(10YR8/2)	胸部のみ 完形		038-01
652	弥生土器 台付甕	包含層	口径:(14.8)	◦口縁部外面ハケメ後ナデ、内面ヨコナデ ◦体部内・外面ともハケメ	やや密	やや不良	外:褐灰(10Y4/1) 内:灰黄(2.5YR4/2)	口縁～体部 1/3存	体部外面は広く剥離している	043-01
653	弥生土器 甕	包含層	底径:(3.6)	◦外面ハケメ、内面ハケメ	やや粗	やや不良	灰白(2.5Y8/1)	底部のみ 完形		038-03
654	土師器 甕	包含層	口径:(11.2) 高:12.7	◦全体的にハケメ後ミガキ	やや粗	やや不良	灰白(5Y7/1)	2/3存	◦全体的に磨滅激しく調整不明瞭 ◦体部外面の一部にスス付着か	069-03
655	土師器 甕	包含層	口径:(13.6) 底径:(6.3) 高:14.8	◦口縁部～体部外面ハケメ後ナデ、体部内面は磨滅のため調整不明瞭 ◦底部側面指オサエ後ナデ、底部外面ナデ	粗	不良	灰白(5Y7/2)	1/3存 但、底部は完形	◦体部外面に広くスス付着 ◦全体的に磨滅・剥離が激しい ◦底部は楕円形	069-04
656	土師器 鉢	包含層	口径:(17.4) 底径:(6.4) 高:15.5	◦口縁端部ヨコナデ ◦体部内・外面ともハケメ後ナデ ◦底部ナデ	やや密	やや良	外:灰白(10YR8/1) 内:灰白(5Y8/1)	1/3存 但、底部は完形	全体的に磨滅激しく調整不明瞭	070-01
657	土師器 椀	包含層	口径:(17.2)	◦口縁端部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/5存		046-04

第36表　遺物観察表(27)

番号	器種	出土位置	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	登録番号
658	土師器 杯	包含層	口径:(11.6) 高 :4.0	・口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	密	良	橙(5YR7/6)	1/3存	全体的に打ち欠き痕・剥離多い	039-03
659	土師器 杯	包含層	口径:(16.5) 高 :4.0	同上	密	やや良	外:淡橙(5YR8/4) 内:淡橙(5YR8/3)	1/6存	口縁部外面に粘土接合痕あり	046-03
660	土師器 皿	包含層	口径:(17.3) 高 :2.2	同上	密	やや良	橙(5YR7/8)	1/5存	底部内・外面ともスス付着	046-02
661	土師器 皿	包含層	口径:(16.8) 高 :2.6	同上	密	良	外:淡黄橙(7.5YR8/6) 内:橙(2.5YR7/8)	1/8存	口縁・底部内面にスス付着か	047-01
662	土師器 高杯	包含層	裾径:(9.0)	・杯部～脚部外面ハケメ、内面ナデ ・裾部端部ヨコナデ	密	良	橙(5YR7/8)	裾部のみほぼ完形	・脚部内面に粘土接合痕あり ・外面やや磨滅進む	134-04
663	土師器 高杯	包含層	裾径:(9.4)	・杯部外面ロクロナデ、内面ミガキ ・脚部外面ハケメ、内面指オサエ後ナデ ・裾部内・外面とも横方向のハケメ,端部ヨコナデ	密	良	浅黄橙(7.5YR8/4) 但、裾部内面の一部は明赤褐(2.5YR5/8)	杯部～底部1/3存	脚部内面のみ黒変する	134-03
664	須恵器 杯身	包含層	口径:(9.4)	・口縁～体部ロクロナデ	密	やや不良	褐灰(7.5YR6/1) ～ 灰白(10YR8/1)	杯部～体部1/3存		047-03
665	須恵器 杯	包含層	高台径:(11.0)	・体部外面ハケメ、内面ヘラケズリか ・底部外面ヘラ切り未調整,内面ヘラ状工具による乱方向のミガキ ・高台はりつけ	密	良	灰(N5/0)	底部ほぼ完形 体部1/3存		047-04
666	土師器 甕	包含層	口径:(15.5)	・口縁部ヨコナデ、体部ハケメ ・口縁端部は、内側へほぼ水平方向に折り返し端部上面には、沈線が一条めぐる	やや密	やや良	灰白(10YR8/2)	口縁～体部1/3存	口縁部外面にスス付着	139-01
667	灰釉陶器 椀	包含層	口径:(14.3) 底径:(6.8) 高 :(4.1)	・口縁～底部内面ロクロナデ、底部外面回転糸切り後高台はりつけ	やや密	良	灰白(5Y8/2)	1/3存 但、底部は完形	口縁～体部外面に灰釉つけがけか	139-03
668	緑釉陶器	包含層	高台径:(6.0)	・底部ロクロナデ後、外面に高台はりつけ	やや粗	不良	灰白(2.5YR8/2) 但、外面の一部はオリーブ灰(10YR4/1)	底部のみ1/4存	全体的に磨滅が非常に激しく、緑釉は外面にわずかに残る	017-09
669	山皿	包含層	口径:(9.8) 底径:(5.2) 高 :3.3	・口縁～底部内面ロクロナデ、底部外面回転糸切り後、高台はりつけ ・高台はりつけ部は、接合ナデ後ヘラケズリか	やや密	良	灰白(N8/1) 底部外面は部分的に赤橙(10R6/6)	1/6存 但、底部は完形	・底部外面に部分的に朱付着か ・高台にモミガラ痕 ・底部内面の一部に自然釉付着	038-05
670	山皿	包含層	口径:(8.5) 底径:(4.0) 高 :2.8	同上	やや粗	良	灰白(7.5Y8/1)	1/3存 但、底部は完形	・内面にうすく自然釉付着 ・底部内面に漆痕付着か ・高台にモミガラ痕	039-02
671	緑釉小皿	包含層	口径:(10.2) 底径:(4.1) 高 :(2.6)	・口縁～底部内面ロクロナデ、底部外面回転糸切り	やや密	やや良	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	口縁部に灰釉つけがけ	138-01
672	陶器 甕	包含層	口径:(26.0)	・口縁端部は外面に折り返し	やや粗	良	にぶい赤褐(5YR5/3)	口縁～体部1/3存	常滑産	139-02
673	平瓦片	包含層		・凸面はヘラケズリ、凹面は布目痕	密	不良	凸:浅黄橙(10YR8/3) 凹:灰黄(2.5Y7/2)	6.1×5.9cm片	全体的に磨滅非常に激しい	049-07
674	加工円盤	包含層		・外面はタタキ、内面は青海波文	密	良	外:紫灰(5P6/1) 内:灰白(N7/0)	3.5×4.2cm片	須恵器を転用	049-05
675	加工円盤	包含層		・内・外面ともナデ ・断面は部分的に研磨	やや密	やや良	外:灰褐(7.5YR6/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	3.2×3.9cm片	中世陶器甕の体部片を転用	049-06

〈注〉321～350については本報告書で新たに遺構番号は与えていないので、調査時のものを示す。

第37表　遺物観察表(28)

報告書抄録

ふりがな	うえのがいといせき
書名	上ノ垣外遺跡
副書名	一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	Ⅱ
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	123－2
編著者名	伊藤克幸、田村陽一、西村修久
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－03　三重県多気郡明和町竹川503番地　TEL 05965－2－1732
発行年月日	西暦　1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
上ノ垣外遺跡（うえのがいといせき）	三重県多気郡（みえけんたきぐん）大字荒蒔字上ノ垣外（おおあざあらまきあざうえのがいと）・大字相可字茶木ノ下（おおあざおうかあざちゃきのした）	22441	276	34° 29′ 36″	136° 33′ 15″	19900723～ 19900912 19930128～ 19930201 19930823～ 19940127 19940418～ 19940831	試掘68 試掘96 1,950 3,050 計5,146	一般国道42号松阪・多気バイパス建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
上ノ垣外遺跡	集落跡	縄文～室町	土坑 前方後方型周溝墓 方形周溝墓 竪穴住居 掘立柱建物 溝 井戸	縄文土器、石器、大珠 弥生土器 土師器、須恵器 灰釉陶器、緑釉陶器 山茶椀、中世陶器	縄文後期の大珠（硬玉？製）が出土 古墳前期（欠山式期）の前方後方型周溝墓を検出

平成8(1996)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年5月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　123－2

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅱ

上ノ垣外遺跡

1996年3月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　光出版印刷株式会社